伊良原ダム関係埋蔵文化財調査報告 － 2 －

伊　良　原　Ⅱ

上伊良原榎遺跡
上高屋台ノ原遺跡

福岡県文化財調査報告書　第229集

下　巻

上高屋台ノ原遺跡　第 1 次調査区全景

第 1 次調査　石敷路

本　文　目　次

（上巻）

Ⅰ　はじめに …… 1
1　調査に至る経緯 …… 1
2　調査の経過 …… 3
3　調査・整理関係者 …… 6

Ⅱ　位置と環境 …… 7
1　遺跡の地理的環境 …… 7
2　周辺の歴史的環境 …… 8

Ⅲ　調査の内容 …… 13
1　上伊良原榎遺跡 …… 13
1）遺跡の概要 …… 13
2）基本層序 …… 13
3）縄文時代の遺構と遺物 …… 27
4）中・近世の遺構と遺物 ……143
5）小結 ……227

（下巻）

2　上高屋台ノ原遺跡 ……251
1）遺跡の概要 ……251
2）基本層序 ……251
3）縄文時代の遺構と遺物 ……263
4）その他の時期の遺構と遺物 ……290
5）小結 ……316

Ⅳ　自然科学系の分析 ……321
1　上伊良原榎遺跡における自然科学分析 ……321

Ⅴ　おわりに ……341

図　版　目　次

巻頭図版1　1．上伊良原榎遺跡全景
2．上伊良原榎遺跡土層

巻頭図版2　1．刺突文土器
2．梅花流水双雀文鏡

巻頭図版3　1．上高屋台ノ原遺跡　第１次調査区全景
2．第１次調査　石敷路

図版 1　1．上伊良原榎遺跡上空から下流域を望む（南から）
2．上伊良原榎遺跡上空から東側を望む（西から）

図版 2　1．上伊良原中村地区全景（南から）
2．Ⅰ区全景（南から）

図版 3　1．Ⅰ区全景（北から）
2．Ⅰ区第Ⅰ文化層全景（上空から）

図版 4　1．Ⅱ区西側第Ⅰ文化層全景（南から）
2．Ⅰ区グリッド全景（南から）

図版 5　1．Ⅰ区北側グリッド全景（南から）
2．Ⅰ区東側グリッド全景（西から）

図版 6　1．Ⅲ区グリッド全景（上空から）
2．Ⅲ区北側グリッド全景（北から）

図版 7　1．Ⅲ区西側グリッド全景（東から）
2．Ⅲ区南側グリッド全景（北から）

図版 8　1．Ⅱ区全景（上空から）
2．Ⅱ区東側グリッド全景（西から）

図版 9　1．調査前全景（東から）
2．調査前全景（東から）
3．調査前全景（北から）

図版10　1．表土掘削風景（南から）
2．Ⅰ区南東壁際土層（西から）
3．Ⅰ区南壁際土層（北から）

図版11　1．Ⅱ区西壁際土層（東から）
2．Ⅱ区西壁際土層（東から）
3．Ⅰ区北東壁際土層（西から）

図版12　1．N－12Gr東壁土層（西から）
2．Ⅰ区東側第Ⅱ文化層（西から）
3．X－4Gr北壁土層（南から）

図版13　1．F－20Gr東壁土層（西から）
2．G－18Gr北壁土層（南から）

3．H－20Gr西壁土層（東から）
図版14　1．I－21Gr北壁土層（南から）
2．L－24Gr南壁土層（北から）
3．M－24Gr北壁土層（南から）
図版15　1．N－22Gr西壁土層（東から）
2．N－23Gr北壁土層（南から）
3．N－24Gr北壁土層（南から）
図版16　1．P－23Gr西壁土層（東から）
2．N－18Gr西壁土層（東から）
3．P－17Gr西壁土層（東から）
図版17　1．AW－13Gr西壁土層（東から）
2．AX－14Gr西壁土層（東から）
3．AX－18Gr西壁土層（東から）
図版18　1．BA－15Gr西壁土層（東から）
2．BA－15Gr西壁土層（東から）
3．調査区外トレンチ土層（東から）
図版19　1．O－12Gr№9土器出土状況（東から）
2．AA－6Gr石匙出土状況（西から）
3．N－22Grナイフ形石器出土状況（東から）
図版20　1．１号竪穴住居跡（南から）
2．１号竪穴住居跡（完掘後）（南から）
3．２号竪穴住居跡（南から）
図版21　1．２号竪穴住居跡（南東から）
2．３号竪穴住居跡（西から）
3．４号竪穴住居跡（東から）
図版22　1．１号集石（西から）
2．２号集石（東から）
3．32号土坑（西から）
図版23　1．33号土坑（南から）
2．34号土坑（西から）
3．35号土坑（南から）
図版24　1．36号土坑（南東から）
2．37号土坑（西から）
3．42号土坑（南東から）
図版25　1．43号土坑（北から）
2．44号土坑（西から）
3．45号土坑（北から）
図版26　1．46号土坑（東から）

2．47号土坑（東から）
3．48号土坑（西から）

図版27　1．49号土坑（西から）
2．50号土坑（西から）
3．51号土坑（東から）

図版28　1．53号土坑（北から）
2．57号土坑土層（南から）
3．57号土坑（北から）

図版29　1．58号土坑土層（西から）
2．58号土坑（北から）
3．59号土坑（東から）

図版30　1．76号土坑半截（東から）
2．76号土坑（東から）
3．76号土坑集石（東から）

図版31　1．１号掘立柱建物跡（西から）
2．２号掘立柱建物跡（上空から）
3．３号掘立柱建物跡（上空から）

図版32　1．４号掘立柱建物跡（北から）
2．５号掘立柱建物跡（西から）
3．６号掘立柱建物跡（北から）

図版33　1．15号土坑（西から）
2．26号土坑（西から）
3．31号土坑（南から）

図版34　1．62号土坑（東から）
2．64号土坑（東から）
3．65号土坑（東から）

図版35　1．66号土坑（南東から）
2．１号土坑（西から）
3．２号土坑（西から）

図版36　1．３号土坑（南から）
2．４・５号土坑（西から）
3．６号土坑（西から）

図版37　1．７号土坑（東から）
2．８号土坑（北から）
3．９号土坑（北から）

図版38　1．10号土坑（西から）
2．11号土坑（西から）
3．12・13・14号土坑（西から）

図版39　1．16号土坑（東から）
2．17号土坑（北から）
3．18号土坑（北から）
図版40　1．19号土坑（北から）
2．20号土坑（西から）
3．21号土坑（北から）
図版41　1．22号土坑（南から）
2．23号土坑（南から）
3．24号土坑（南東から）
図版42　1．25号土坑（東から）
2．29号土坑（西から）
3．30号土坑（東から）
図版43　1．38・41号土坑（北から）
2．38・41号土坑（西から）
3．39・40号土坑（西から）
図版44　1．52号土坑（西から）
2．54号土坑（西から）
3．55号土坑（西から）
図版45　1．56号土坑（西から）
2．60号土坑（東から）
3．61号土坑（西から）
図版46　1．63号土坑（東から）
2．67号土坑（東から）
3．68・74号土坑（南東から）
図版47　1．69号土坑（北から）
2．70号土坑（東から）
3．71号土坑（西から）
図版48　1．72・73号土坑（東から）
2．75号土坑（西から）
3．3号集石（北西から）
図版49　1．3号集石（北西から）
2．3号集石遺物出土状況（北東から）
3．石列（南から）
図版50　1．P361・P362（南から）
2．P875（北から）
3．焼土（北から）
図版51　縄文土器①
図版52　縄文土器②

図版53　縄文土器③
図版54　土製品・石器①
図版55　石器②
図版56　石器③
図版57　石器④
図版58　石器⑤
図版59　土坑出土土器
図版60　土坑・溝・３号集石出土土器
図版61　３号集石・ピット出土土器
図版62　ピット・遺構面・包含層出土土器
図版63　遺構面・包含層出土土器・土錘
図版64　石製品①
図版65　石製品②
図版66　鉄製品・銅製品・鉄滓
図版67　１．上高屋台ノ原遺跡遠景（東から）
２．上高屋台ノ原遺跡から祓川下流を望む（南から）
図版68　１．第１次調査区全景（東から）
２．東半部グリッド全景（北から）
図版69　１．Ｄ－13Gr西壁土層（東から）
２．Ｏ－8、Ｐ－7～9Gr（北から）
３．Ｐ－8Gr西壁土層（東から）
図版70　１．Ｓ－9～12、Ｔ－9～12Gr（北から）
２．Ｓ－12Gr西壁土層（東から）
３．Ｃ－13Gr遺物出土状況（西から）
図版71　１．Ｅ－13Gr遺物出土状況（西から）
２．Ｐ－8Gr遺物出土状況（東から）
３．Ｔ－10Gr遺物出土状況（東から）
図版72　１．11号土坑（北から）
２．12号土坑（南西から）
３．１号土坑（北から）
図版73　１．２号土坑（掘削前）（東から）
２．２号土坑（掘削後）（東から）
３．３号土坑（東から）
図版74　１．４号土坑（南から）
２．５号土坑（西から）
３．６号土坑（東から）
図版75　１．７号土坑（西から）

２．８号土坑（西から）
３．９号土坑（東から）
図版76　１．10号土坑（北から）
２．第１次調査石敷路中央付近（西から）
３．第１次調査石敷路東端（東から）
図版77　１．第２次調査石敷路遠景（南東から）
２．第２次調査石敷路と石垣（南から）
図版78　１．第２次調査石敷路①（東から）
２．第２次調査石敷路②（東から）
３．第２次調査石敷路③（東から）
図版79　１．第２次調査石敷路④（東から）
２．現道と旧道の分岐点（東から）
３．第２次調査石敷路⑤（西から）
図版80　１．第３次調査石敷路　中央付近（東から）
２．第３次調査石敷路　中央付近（東から）
３．第３次調査石敷路　西側（西から）
図版81　１．第３次調査石敷路　南側（南から）
２．第３次調査石敷路　Ａ－Ａ’付近（南から）
３．第３次調査石敷路　Ｂ－Ｂ’付近（東から）
図版82　縄文土器①
図版83　縄文土器②
図版84　石器・陶磁器・土師器

挿　図　目　次

（上巻）

第１図　みやこ町の位置 …… 7
第２図　周辺遺跡分布図（1/50,000）…… 9
第３図　上伊良原榎遺跡　周辺地形図（1/5,000）…… 11
第４図　上伊良原榎遺跡　調査区位置図（1/2,000）…… 12
第５図　上伊良原榎遺跡　グリッド配置図（1/800）…… 14
第６図　上伊良原榎遺跡　基本土層図（1/40）…… 15
第７図　上伊良原榎遺跡　土層図①（1/60）…… 16
第８図　上伊良原榎遺跡　土層図②（1/60）…… 17
第９図　上伊良原榎遺跡　土層図③（1/60）…… 19
第10図　上伊良原榎遺跡　土層図④（1/60）…… 20
第11図　上伊良原榎遺跡　土層図⑤（1/60）…… 22
第12図　上伊良原榎遺跡　土層図⑥（1/60）…… 23
第13図　上伊良原榎遺跡　土層図⑦（1/60）…… 24

第14図　上伊良原榎遺跡　土層図⑧（1/60）…… 25
第15図　上伊良原榎遺跡　土層図⑨（1/60）…… 26
第16図　第Ⅱ文化層グリッド配置図（1/1,000）…… 28
第17図　Ⅰ区第Ⅱ文化層遺構配置図（1/300）…… 29・30
第18図　Ⅱ区第Ⅱ文化層遺構配置図（1/300）…… 31
第19図　Ⅲ区第Ⅱ文化層遺構配置図（1/300）…… 32
第20図　第Ⅱ文化層　L－9～12、M－9～13Gr実測図（1/100）…… 33
第21図　第Ⅱ文化層　N－9～13、O－9～13Gr実測図（1/100）…… 34
第22図　O－12Gr　№130土器出土状態（1/10）…… 35
第23図　第Ⅱ文化層　P－9～13、Q－9～13Gr実測図（1/100）…… 36
第24図　第Ⅱ文化層　V－3～5、W－3～7Gr実測図（1/100）…… 37
第25図　第Ⅱ文化層　X－4～7、Y－4～7Gr実測図（1/100）…… 38
第26図　第Ⅱ文化層　Z－4～6、AA－4～6Gr実測図（1/100）…… 39
第27図　第Ⅱ文化層　Z－7～9、AA－7～9Gr実測図（1/100）…… 40
第28図　第Ⅱ文化層　T－15・16、U－15・16Gr実測図（1/100）…… 41
第29図　第Ⅱ文化層　V－15・16、W－15・16Gr実測図（1/100）…… 42
第30図　第Ⅱ文化層　X－15・16、Y－15・16Gr実測図（1/100）…… 42
第31図　第Ⅱ文化層　L－23・24、M－23～26Gr実測図（1/100）…… 43
第32図　第Ⅱ文化層　O－17・18、P－17・18、Q－17・18Gr実測図（1/100）…… 44
第33図　第Ⅱ文化層　N－23・24、O－23・24、P－23・24Gr実測図（1/100）…… 45
第34図　第Ⅱ文化層　AR－15・16、AS－15・16Gr実測図（1/100）…… 46
第35図　第Ⅱ文化層　AT－16・17、AU－14・16・17Gr実測図（1/100）…… 47
第36図　第Ⅱ文化層　AV－16～18、AW－14・15・17・18Gr実測図（1/100）…… 48
第37図　第Ⅱ文化層　AX－14～18、AY－15～18Gr実測図（1/100）…… 49
第38図　第Ⅱ文化層　AZ－14～18、BA－14～18Gr実測図（1/100）…… 50
第39図　第Ⅲ文化層グリッド配置図（1/1,000）…… 52
第40図　Ⅱ区第Ⅲ文化層遺構配置図（1/300）…… 54
第41図　第Ⅲ文化層　AR－15・16、AS－15・16Gr実測図（1/100）…… 54
第42図　第Ⅲ文化層　AT－15・16、AU－13～17Gr実測図（1/100）…… 55
第43図　第Ⅲ文化層　AV－13～16、AW－13～16Gr実測図（1/100）…… 56
第44図　第Ⅲ文化層　AV－17・18、AW－17・18Gr実測図（1/100）…… 57
第45図　第Ⅲ文化層　AX－13～16、AY－14～16Gr実測図（1/100）…… 58
第46図　第Ⅲ文化層　AX－17・18、AY－17・18Gr実測図（1/100）…… 59
第47図　第Ⅲ文化層　AZ－14～16、BA－14～17Gr実測図（1/100）…… 60
第48図　第Ⅳ文化層グリッド配置図（1/1,000）…… 61
第49図　Ⅰ区第Ⅳ文化層遺構配置図（1/300）…… 63・64
第50図　Ⅱ区第Ⅳ文化層遺構配置図（1/300）…… 65
第51図　Ⅲ区第Ⅳ文化層遺構配置図（1/300）…… 66

第52図　第Ⅳ文化層　Q－13～15Gr実測図（1/100）…… 67
第53図　第Ⅳ文化層　W－4～7、X－4～7Gr実測図（1/100）…… 68
第54図　第Ⅳ文化層　Y－4～7、Z－4～8Gr実測図（1/100）…… 69
第55図　第Ⅳ文化層　AA－4～8、AB－4～8Gr実測図（1/100）…… 70
第56図　第Ⅳ文化層　AA－9～13、AB－9～13Gr実測図（1/100）…… 71
第57図　第Ⅳ文化層　AC－9～13Gr実測図（1/100）…… 72
第58図　第Ⅳ文化層　AA－15、AB－15・16Gr実測図（1/100）…… 73
第59図　第Ⅳ文化層　F－17・18、G－16～18Gr実測図（1/100）…… 74
第60図　第Ⅳ文化層　F－19～22、G－19～22Gr実測図（1/100）…… 75
第61図　第Ⅳ文化層　H－17・18、I－17・18Gr実測図（1/100）…… 76
第62図　第Ⅳ文化層　H－19～22、I－19～22Gr実測図（1/100）…… 77
第63図　第Ⅳ文化層　J－18～21、K－18～21Gr実測図（1/100）…… 78
第64図　第Ⅳ文化層　L－19・20、M－18・19Gr実測図（1/100）…… 79
第65図　第Ⅳ文化層　N－17～19、O－16～19Gr実測図（1/100）…… 80
第66図　第Ⅳ文化層　P－16～18、Q－16～18Gr実測図（1/100）…… 81
第67図　第Ⅳ文化層　K－23・24、L－23・24Gr実測図（1/100）…… 82
第68図　第Ⅳ文化層　M－22～24、N－22～24Gr実測図（1/100）…… 83
第69図　第Ⅳ文化層　AT－14～16、AU－13～16Gr実測図（1/100）…… 85
第70図　第Ⅳ文化層　AT－22・23Gr実測図（1/100）…… 86
第71図　第Ⅳ文化層　AV－13～15、AW－13～15Gr実測図（1/100）…… 87
第72図　第Ⅳ文化層　AX－13～16、AY－13～16Gr実測図（1/100）…… 88
第73図　1・2号竪穴住居跡実測図（1/30）…… 90
第74図　3・4号竪穴住居跡実測図（1/30）…… 91
第75図　1・2号集石実測図（1/20）…… 93
第76図　32～34号土坑実測図（1/30）…… 95
第77図　35～37・42・43号土坑実測図（1/30）…… 97
第78図　44～48号土坑実測図（1/30）…… 98
第79図　49・50号土坑実測図（1/40）……100
第80図　51・53・59号土坑実測図（1/30）……101
第81図　57・58号土坑実測図（1/60）……102
第82図　76号土坑実測図（1/30）……103
第83図　縄文土器実測図①（1/3）……105
第84図　縄文土器実測図②（1/3）……106
第85図　縄文土器実測図③（1/3）……107
第86図　縄文土器実測図④（1/3）……108
第87図　縄文土器実測図⑤（1/3）……109
第88図　縄文土器実測図⑥（1/3）……110
第89図　縄文土器実測図⑦（1/3）……111

第90図　縄文土器実測図⑧（1/3）……112
第91図　縄文土器実測図⑨（1/3・1/4）……113
第92図　縄文土器実測図⑩（1/3）……114
第93図　縄文土器実測図⑪（1/3）……115
第94図　縄文土器実測図⑫（1/3）……116
第95図　縄文土器実測図⑬（1/3）……117
第96図　土製品実測図（1/3）……119
第97図　石器実測図①（2/3）……121
第98図　石器実測図②（2/3）……122
第99図　石器実測図③（2/3）……123
第100図　石器実測図④（2/3）……124
第101図　石器実測図⑤（2/3）……125
第102図　石器実測図⑥（2/3）……126
第103図　石器実測図⑦（2/3）……127
第104図　石器実測図⑧（2/3）……128
第105図　石器実測図⑨（2/3）……129
第106図　石器実測図⑩（2/3）……130
第107図　石器実測図⑪（2/3）……131
第108図　石器実測図⑫（2/3）……132
第109図　石器実測図⑬（2/3）……133
第110図　石器実測図⑭（2/3）……134
第111図　石器実測図⑮（2/3）……135
第112図　石器実測図⑯（2/3）……136
第113図　石器実測図⑰（1/2）……137
第114図　石器実測図⑱（1/2）……138
第115図　石器実測図⑲（1/3）……139
第116図　石器実測図⑳（1/3・1/6）……140
第117図　石器実測図㉑（1/6）……142
第118図　Ⅰ区遺構配置図（1/300）……145・146
第119図　Ⅱ区遺構配置図（1/300）……147・148
第120図　Ⅲ区遺構配置図（1/300）……149・150
第121図　1・2号掘立柱建物跡実測図（1/60）……151
第122図　4号掘立柱建物跡出土土器実測図（1/3）……152
第123図　3・4号掘立柱建物跡実測図（1/60）……153
第124図　5・6号掘立柱建物跡実測図（1/60）……154
第125図　15・26・31・64～66号土坑実測図（1/30）……156
第126図　15・62・64～66号土坑出土土器実測図（1/3）……157
第127図　62号土坑実測図（1/30）……158

第128図　1～4号土坑実測図（1/30）……161
第129図　3～6・9号土坑出土土器実測図（1/3）……162
第130図　5～7号土坑実測図（1/30）……163
第131図　8～11号土坑実測図（1/30）……165
第132図　12～14・16号土坑実測図（1/30）……166
第133図　12・14・19号土坑出土土器実測図（1/3）……168
第134図　17～21号土坑実測図（1/30）……169
第135図　22～25・27号土坑実測図（1/60、1/30）……171
第136図　22～25号土坑出土土器実測図（1/3）……172
第137図　28～30・38～40号土坑実測図（1/30）……173
第138図　40号土坑出土土器実測図（1/3）……174
第139図　41・52・54～56号土坑実測図（1/30）……175
第140図　60・61・63・67号土坑実測図（1/30）……177
第141図　60・61・68～70号土坑出土土器実測図（1/3）……178
第142図　68～70・74号土坑実測図（1/30）……180
第143図　71～73・75号土坑実測図（1/30）……181
第144図　1～6号溝断面図（1/20）……183
第145図　5・6号溝出土土器実測図（1/3）……184
第146図　3号集石実測図（1/40）……186
第147図　3号集石出土土器実測図①（1/3）……187
第148図　3号集石出土土器実測図②（1/4）……188
第149図　石列実測図（1/40）……188
第150図　ピット・焼土実測図（1/20）……190
第151図　ピット出土土器実測図①（1/3）……192
第152図　ピット出土土器実測図②（1/3）……193
第153図　ピット出土土器実測図③（1/3）……195
第154図　ピット出土土器実測図④（1/4）……196
第155図　ピット出土土器実測図⑤（1/3）……197
第156図　不整形ピット群断面土層図（1/40）……200
第157図　遺構面出土土器実測図（1/3）……201
第158図　包含層出土土器実測図（1/3）……203
第159図　包含層・表土中・排土中出土土器実測図（1/3）……206
第160図　土錘実測図①（1/2）……207
第161図　土錘実測図②（1/2）……208
第162図　石製品実測図①（1/1、1/3）……210
第163図　石製品実測図②（1/2、1/3）……212
第164図　石製品実測図③（1/2）……213
第165図　石製品実測図④（1/4）……214

第166図　石製品実測図⑤（1/4）……215
第167図　石製品実測図⑥（1/4）……216
第168図　石製品実測図⑦（1/4）……217
第169図　石製品実測図⑧（1/4）……218
第170図　鉄製品実測図①（1/1、1/2）……221
第171図　鉄製品実測図②（1/2）……222
第172図　鉄製品実測図③（1/2）……223
第173図　銅製品実測図（1/1）……225
第174図　鍛冶関連遺物実測図（1/2）……226
第175図　刺突文土器の出土例（1/6）……230
第176図　上伊良原榎遺跡出土土器・石器出土比率……232

（下巻）

第177図　上高屋台ノ原遺跡　周辺地形図①（1/5,000）……252
第178図　上高屋台ノ原遺跡　周辺地形図②（1/2,000）……253
第179図　上高屋台ノ原遺跡　基本土層図（1/40）……254
第180図　上高屋台ノ原遺跡　第１次調査区遺構配置図（1/300）……255・256
第181図　上高屋台ノ原遺跡　第２次調査区全体図（1/400）……257・258
第182図　上高屋台ノ原遺跡　第３次調査区全体図（1/300）……259
第183図　上高屋台ノ原遺跡　土層図①（1/60）……260
第184図　上高屋台ノ原遺跡　土層図②（1/60）……261
第185図　上高屋台ノ原遺跡　土層図③（1/60）……262
第186図　上高屋台ノ原遺跡　グリッド配置図（1/800）……263
第187図　上高屋台ノ原遺跡　第Ⅱ文化層遺構配置図（1/300）……264
第188図　第Ⅱ文化層　D－13・14Gr実測図（1/100）……265
第189図　第Ⅱ文化層　E－11～14、F－11～13Gr実測図（1/100）……266
第190図　第Ⅱ文化層　I－13・14、J－13Gr実測図（1/100）……267
第191図　第Ⅱ文化層　O－13、P－13Gr実測図（1/100）……268
第192図　第Ⅱ文化層　S－9～12、T－10～12Gr実測図（1/100）……269
第193図　第Ⅱ文化層　R－14、S－13・14、T－13Gr実測図（1/100）……270
第194図　上高屋台ノ原遺跡　第Ⅲ文化層遺構配置図（1/300）……272
第195図　第Ⅲ文化層　C－13・14、D－12～14Gr実測図（1/100）……273
第196図　第Ⅲ文化層　E－12～14、F－12・13Gr実測図（1/100）……274
第197図　第Ⅲ文化層　N－8、O－8Gr実測図（1/100）……275
第198図　第Ⅲ文化層　P－7～9、Q－8Gr実測図（1/100）……276
第199図　第Ⅳ文化層　P－8Gr実測図（1/100）……278
第200図　11・12号土坑実測図（1/30）……279
第201図　縄文土器実測図①（1/3）……280

第202図　縄文土器実測図②（1/3）……281
第203図　縄文土器実測図③（1/3）……282
第204図　縄文土器実測図④（1/3）……283
第205図　縄文土器実測図⑤（1/3）……284
第206図　縄文土器実測図⑥（1/3）……285
第207図　石器実測図①（2/3）……286
第208図　石器実測図②（1/2）……287
第209図　石器実測図③（1/2）……288
第210図　石器実測図④（1/2）……289
第211図　石製装身具実測図（1/1）……290
第212図　1～3号土坑実測図（1/40）……291
第213図　土器・陶磁器実測図（1/3）……292
第214図　4～7号土坑実測図（1/40）……294
第215図　砥石実測図（2/3）……295
第216図　8～10号土坑実測図（1/40）……296
第217図　1号溝断面土層図（1/20）……297
第218図　石敷路実測図①（1/60）……299
第219図　石敷路実測図②（1/60）……300
第220図　石敷路実測図③（1/60）……301
第221図　石敷路実測図④（1/60）……302
第222図　石敷路実測図⑤（1/60）……303
第223図　石敷路実測図⑥（1/60）……304
第224図　石敷路実測図⑦（1/60）……305
第225図　石敷路実測図⑧（1/60）……306
第226図　石敷路実測図⑨（1/60）……307
第227図　石敷路実測図⑩（1/60）……308
第228図　石敷路実測図⑪（1/60）……309
第229図　石敷路実測図⑫（1/60）……310
第230図　石敷路実測図⑬（1/60）……311
第231図　石敷路実測図⑭（1/60）……312
第232図　石敷路実測図⑮（1/60）……313
第233図　石敷路実測図⑯（1/60）……314
第234図　石敷路実測図⑰（1/60）……315
第235図　石敷路出土磁器実測図（1/3）……315
第236図　暦年較正結果　……324
第237図　テフラの岩石学的諸特性……329
第238図　上伊良原榎遺跡における植物珪酸体分析結果……339
付　図　上伊良原榎遺跡全体図（1/300）

表目次

（上巻）

第１表　上伊良原榎遺跡　中世墓一覧表 ……236
第２表　京築地域における中世墓出土和鏡一覧表 ……237
第３表　「弓削刀子」出土遺跡一覧表 ……238
第４表　上伊良原榎遺跡　グリッド別出土遺物点数一覧表 ……240～244
第５表　上伊良原榎遺跡出土縄文土器観察表 ……245・246
第６表　上伊良原榎遺跡出土石器観察表 ……247～249
第７表　上伊良原榎遺跡出土土製品観察表 ……250
第８表　上伊良原榎遺跡出土土錘観察表 ……250

（下巻）

第９表　上高屋台ノ原遺跡　グリッド別出土遺物点数一覧表 ……318
第10表　上高屋台ノ原遺跡出土縄文土器観察表 ……319
第11表　上高屋台ノ原遺跡出土石器観察表 ……320
第12表　放射性炭素年代測定結果 ……324
第13表　上伊良原榎遺跡におけるテフラ分析結果一覧表 ……328
第14表　上伊良原榎遺跡L－24Gr南壁における樹種同定結果 ……332
第15表　上伊良原榎遺跡における植物珪酸体分析結果 ……338

2　上高屋台ノ原遺跡

1）遺跡の概要（図版67～68、第177・178、180～182図）

上高屋台ノ原遺跡第1次調査区は、京都郡みやこ町犀川上高屋１－１、１－３、１－４、道010－１及び犀川下伊良原963に所在した遺跡である。祓川の左岸にあり、祓川に注ぐ蔵持川の開析作用によって形成された中位段丘面上に立地する。遺跡の標高は163mから190m。発掘調査前の地目は水田、山林、果樹園、里道。調査面積は3,490㎡である。

東側を流れる祓川との比高差は約30m、低位段丘面からの比高差は約25mあり、その間は急峻な崖面が形成される。この上高屋台ノ原遺跡がある一帯は地元では高座地区と呼ばれるが、この高座地区より北側には広大な平野部が広がっており、遺跡からはその平野部が一望できる立地にある。平野部から祓川の上流を望むと、ここから先は狭溢な谷が延々と続く谷地形の始まりの場所であり、高座地区は伊良原谷の入口とも言うべき場所である。

山岳信仰の山として古代から宗教活動が開始され、中世以降は彦山の勢力範囲に組み込まれて彦山六峰の一つとして繁栄し、盛時には九十六坊を数えたと言われる蔵持山修験道遺跡は、この高座地区の西側にある。近代以降は蔵持山への参詣道に蔵持川沿いの道が使われるようになり、現在でも蔵持山へのメインの登山ルートとして利用されている。

上高屋台ノ原遺跡は、斜面を開削して造られた里道部分と東西に延びる狭い平坦部からなり、標高は西側にある里道の西端で196m、東端で170m、平坦部は西側で175.5m、東端で164.8mを測る。里道では石敷が良好な状態で遺存していたため精査と図化作業を実施した。平坦部では、調査区の北半部で中世の遺構・遺物が確認されたため、面的に調査を行った。また中世の遺構面より下層で縄文時代早期の包含層が確認されたため、中世遺構面の調査終了後にグリッド調査による掘削作業を行った。

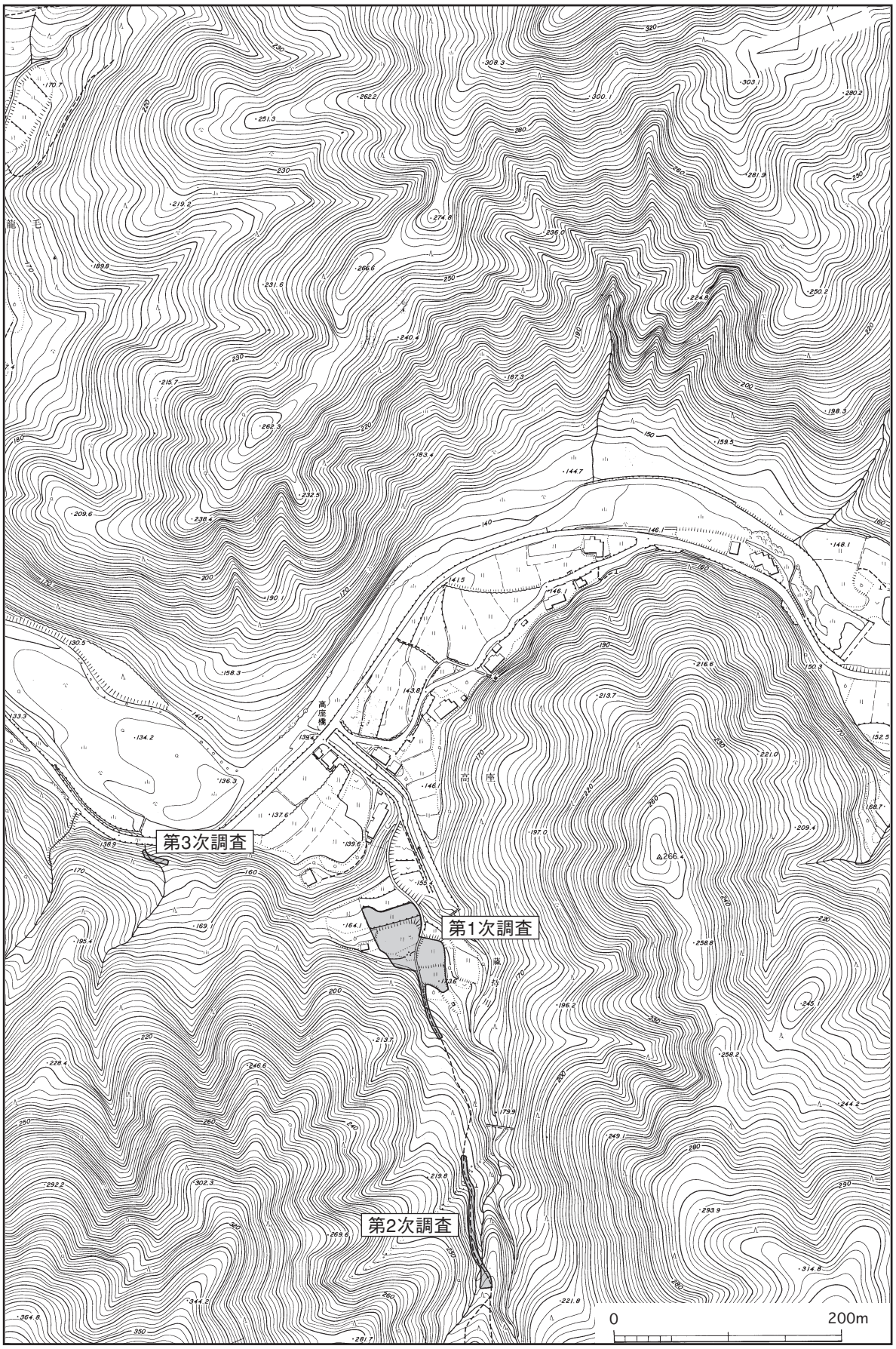
発掘調査によって確認した主な遺構は、縄文時代の土坑２基、古代・中世の土坑９基、溝１条、近世～近代の石敷路１条、石組土坑１基である。縄文時代の遺物は早期の押型文土器とこれに供伴する石器が大半を占めるが、早期初頭の粘土瘤のある刺突文土器や後期の土器も数点出土している。古代の遺物は須恵器・土師器が数点出土し、中世～近代では土師器・陶磁器等が出土した。

第２次調査は第１次調査区で確認した石敷路の西側延長部にあたり、長さ128.5mにわたって調査を行った。調査面積は190㎡。

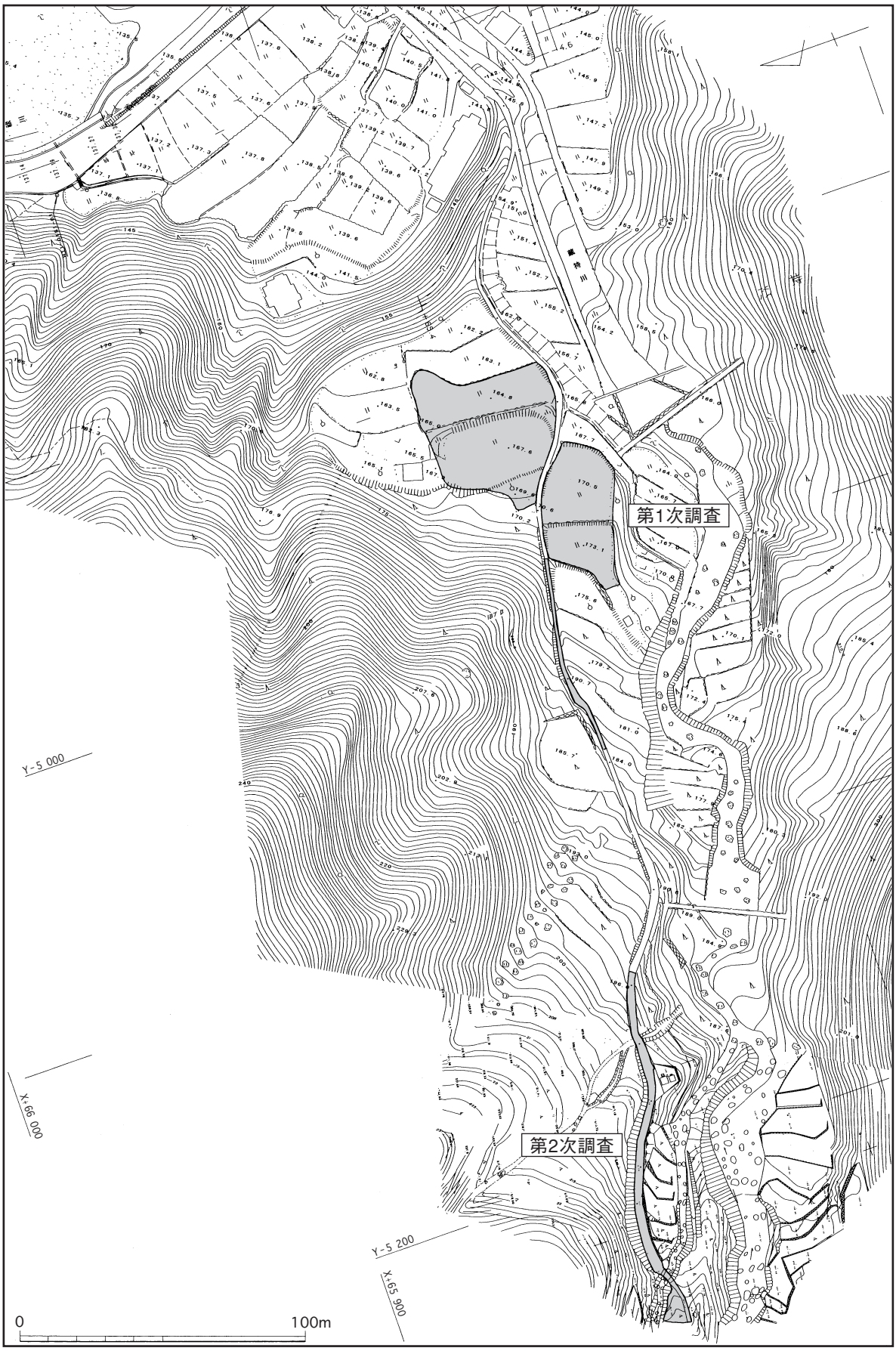
第３次調査はやはり第１・２次調査で確認した里道の続きで、東に下ったところにあたる。ここでは石敷の状況が良い長さ約50mの範囲の調査を行った。調査面積は75㎡。

2）基本層序（図版69、第179図）

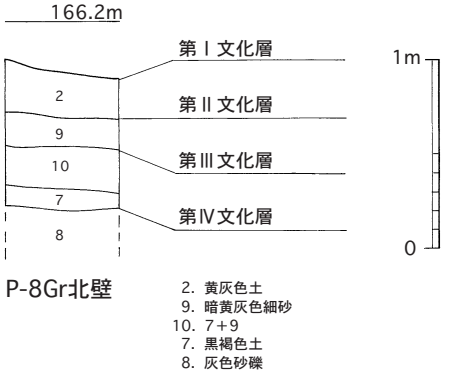
第179図は上高屋台ノ原遺跡のＰ－8Grの柱状土層図である。Ｐ－8Grは第１次調査区の中央東寄りに位置するグリッドで、ここの土層が当遺跡を代表する基本土層となる。既に表土掘削を終えた後の図であるため図示していないが、地表面には耕作土、その下層には水田床土があり、床土の下層に第２層黄灰色土が堆積する。第２層黄灰色土は肌理が非常に細かく、砂礫を含まず締まりの少ない土質である。この第２層は調査区全体にほぼ全域に及んでおり、古代・中世の遺構はこの層の上面で確認されたので、この第２層上面を第Ⅰ文化層として調査を行った。また、この第２層は過去の発掘調査で得られた火山灰分析の結果から、アカホヤ火山灰に由来する層であ



第177図　上高屋台ノ原遺跡　周辺地形図①（1/5,000）



第178図　上高屋台ノ原遺跡　周辺地形図②（1/2,000）



第179図　上高屋台ノ原遺跡　基本土層図（1/40）

ることが判明している。

調査区西側のD－13・14、E－11～14、F－11～13、I－13・14、J－13Grではこの黄灰色土層に遺物を包含していることを確認したため、第Ⅱ文化層として分層掘削を実施し、掘削後に遺構確認作業を行った。なおD－14Grでは第2層と異なる第1層明黄茶色土層や、第13層のように酸化した黄灰色土層が見られるが、基本的には第2層と同質と認識したため第Ⅱ文化層として扱った。調査区東側のR－14、S－9～14、T－10～13Grでも第2層から遺物が出土することを確認したため、掘削を行った。ここでは第2層の下層に第7層黒褐色土との混成土層である第6層が堆積していたが、これも第Ⅱ文化層として併せて掘削を行った。

第9層は暗黄灰色細砂層である。先のC－13・14、D－12・14、E－12～14、F－12～13Grでは第9層に遺物の包含を確認したため第Ⅲ文化層として分層掘削を実施し、掘削後に遺構確認作業を行った。また同様にN－8、O－8、P－7～9、Q－8Grでもこの第9層に遺物が含まれていることが判明したため、分層掘削を実施した。なお、調査区東側のR・S・Tの各Grではこの第9層の堆積は認められなかった。

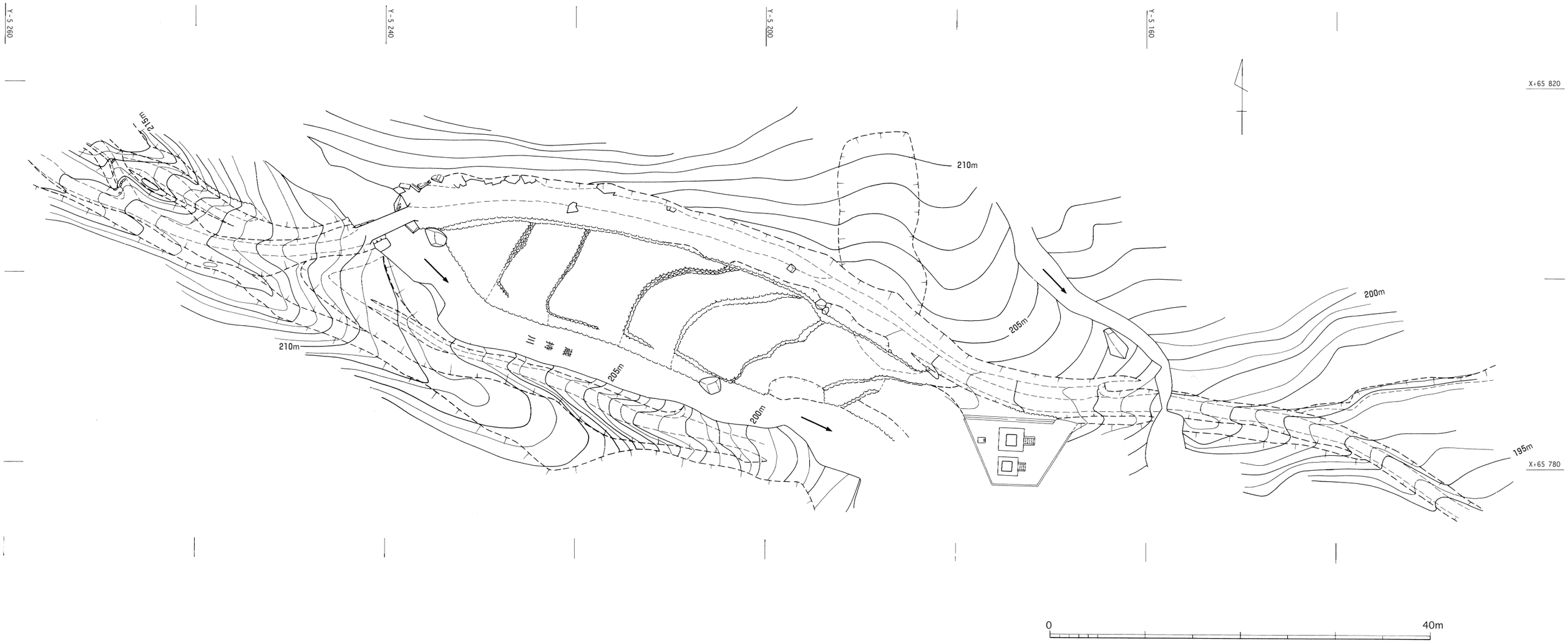
第9層黒褐色土は、土質自体は肌理が細かいが層中に粗砂粒や円礫を多量に含み堅く締まった層である。西側のD～Fの各グリッド付近には、この層の堆積は一部でしか見られなかったが、調査区中央から東側にかけては良好な堆積が認められ、特にP－8、S－12Grでは遺物の包含が確認されたために第Ⅳ文化層として掘削を行った。P－13Grでは第2層の下層に第3層明黒灰色土が見られるが、これは第7層の二次堆積土である。またS－12Grで確認された第6層は、第2層と第7層の混合による土層である。さらに第10層は上層の第9層と下層の第7層黒褐色土が混ざって堆積した土層であったが、あわせて第Ⅳ文化層として調査を行った。

第7層の下層には第8層灰色砂礫層の堆積がほぼ全体にわたって確認された。この第8層は砂礫を多量に含む非常に堅く締まった層である。西側のD～Fの各グリッド、P－8、S－12Grで、この層は無遺物層であることを確認した。また、I－13・14、O－13・P－13の各グリッドでは土層の堆積状況と遺物の有無を確認するために掘削を行ったが、遺物の出土はわずかな点数にとどまった。

第183図～第185図は縄文時代包含層の調査を行った各グリッドの土層図である。A－A’B－B’は調査区南西側に設定したグリッドの土層図である。上層にはアカホヤに由来する第1層明黄茶色土や第2層黄灰色土の堆積が場所によっては30～40cmの厚さで見られたため、第Ⅱ文化層として調査を行った。その下層には第9層暗黄灰色細砂が厚く堆積していたため、これを第Ⅲ文化層として調査を行った。ここではほんの一部しか第7層黒褐色土の堆積が見られなかったため、第Ⅳ文化層としての分層掘削は行っていない。

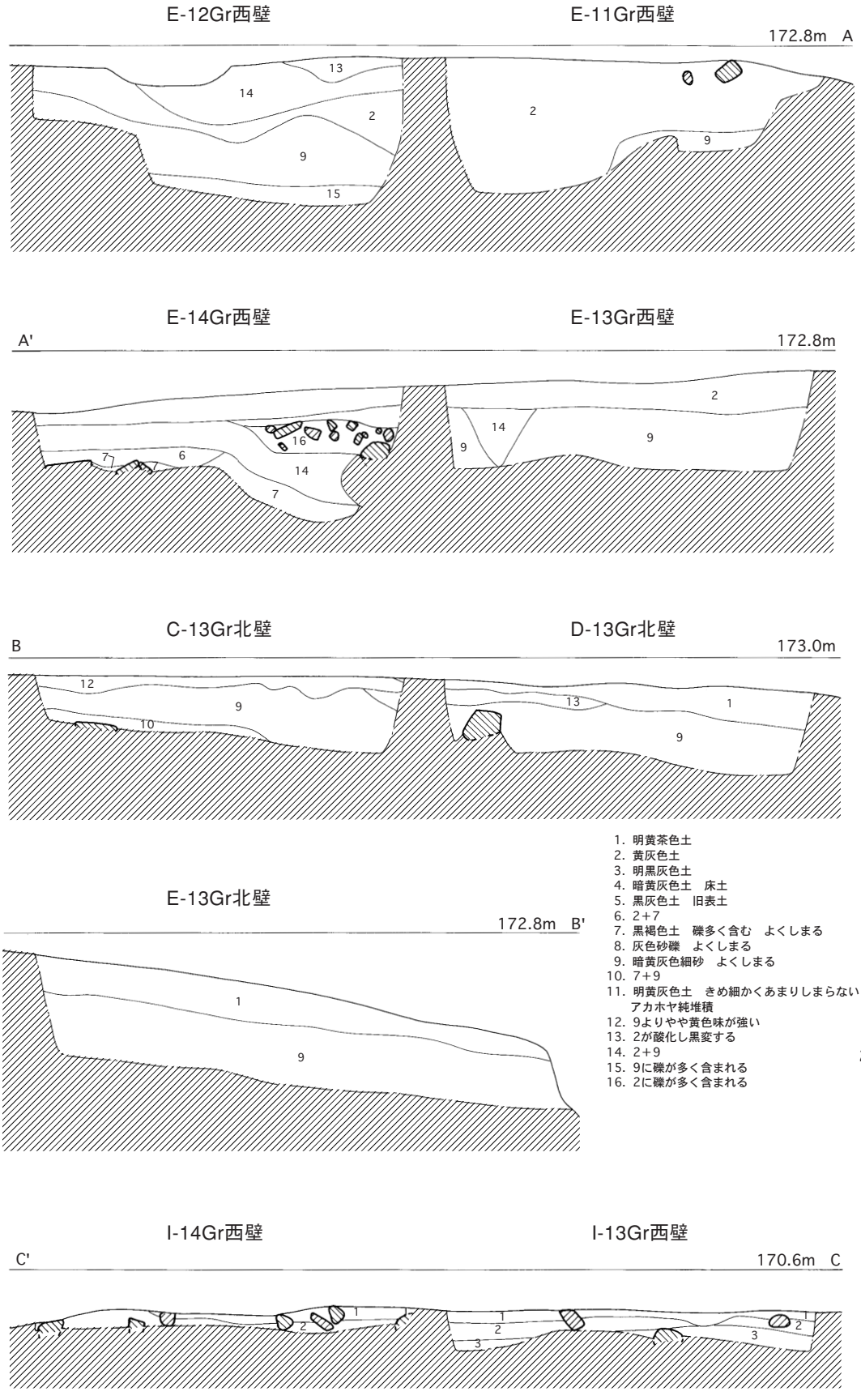
C－C’は調査区南側に設定したI－13・14Grの土層図である。この付近は平坦面を形成しており第1層や第2層の堆積が20cmほどの厚さで確認できたため掘削を行ったが、遺物はほとんど出土しなかった。

第180 図　上高屋台ノ原遺跡　第 1 次調査区遺構配置図（1/300）

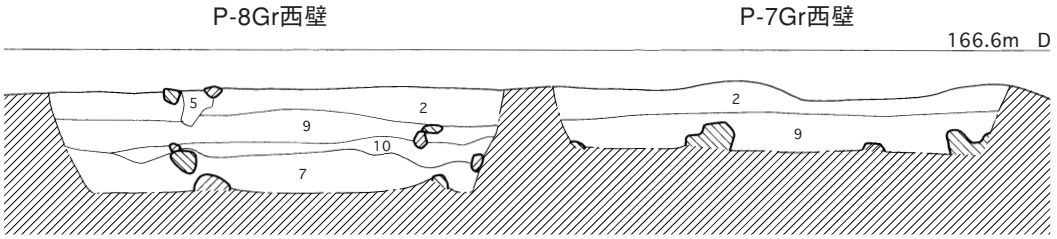


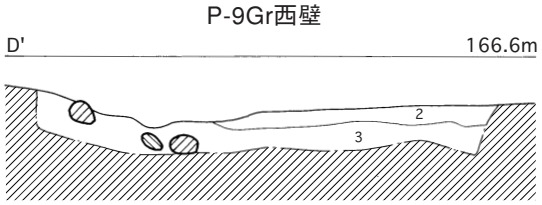
第181 図　上高屋台ノ原遺跡　第２次調査区全体図（1/400）

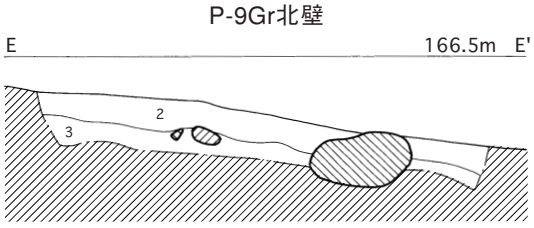
第182図　上高屋台ノ原遺跡　第3次調査区全体図（1/300）

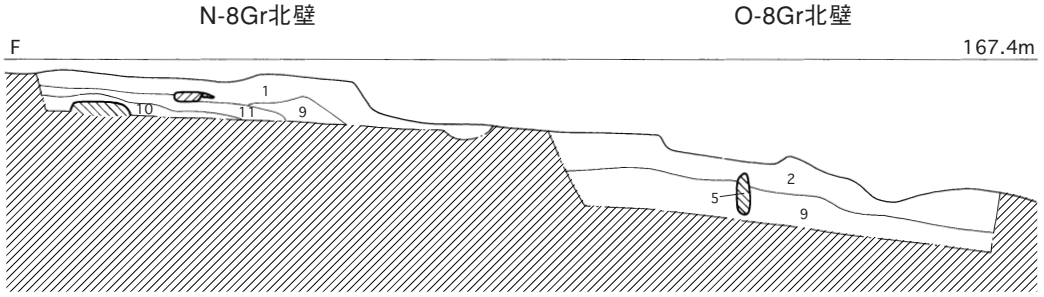


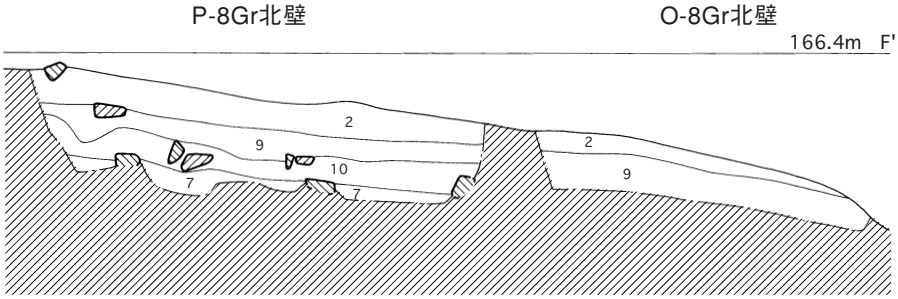
第183図　上高屋台ノ原遺跡　土層図①（1/60）



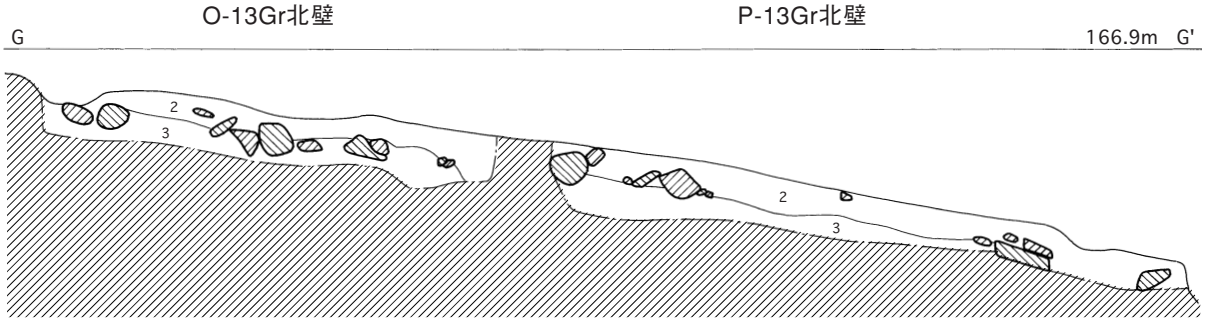


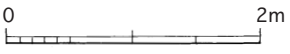




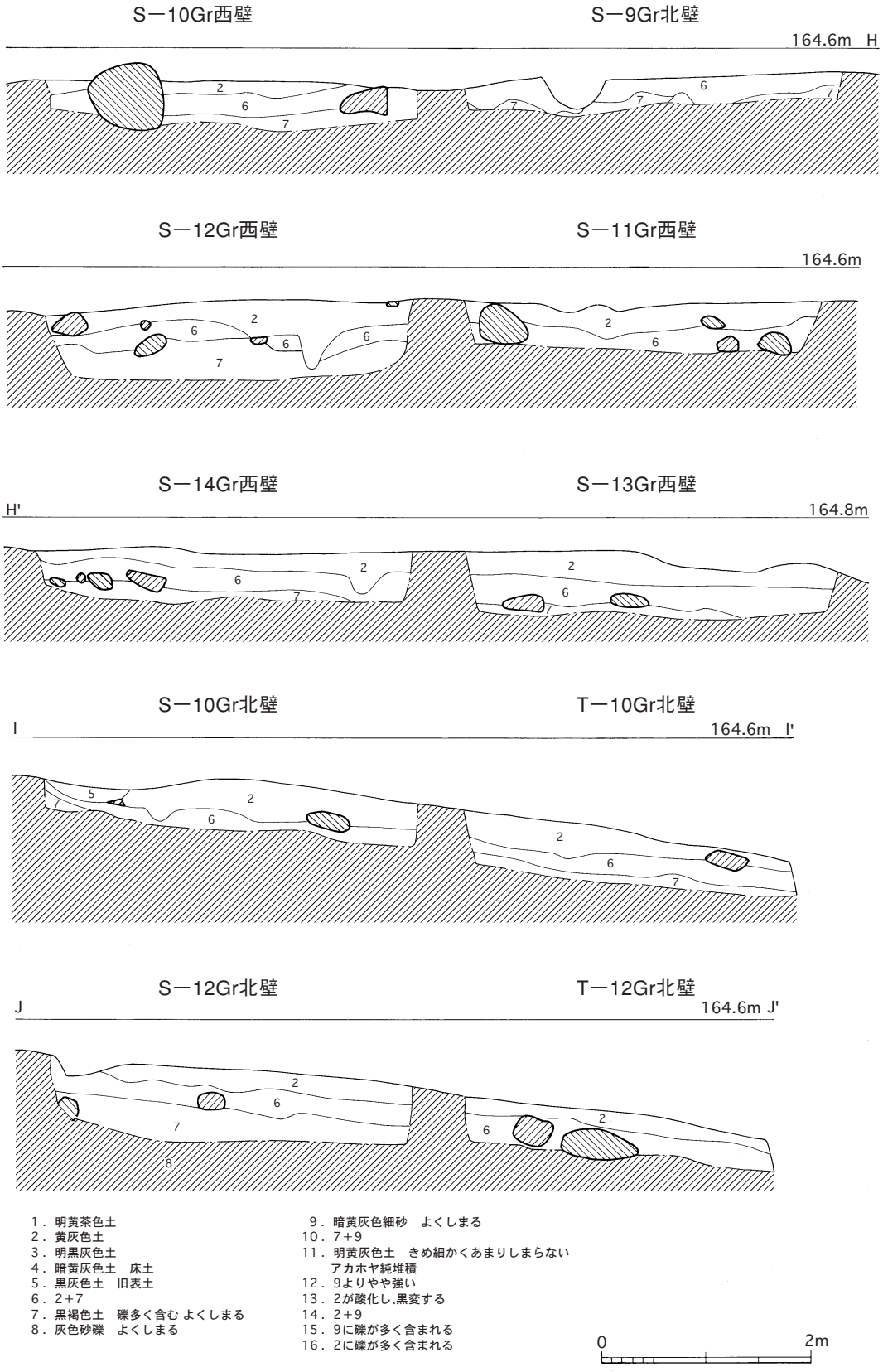


1. 明黄茶色土
2. 黄灰色土
3. 明黒灰色土
4. 暗黄灰色土　床土
5. 黒灰色土　旧表土
6. 2+7
7. 黒褐色土　礫多く含む　よくしまる
8. 灰色砂礫　よくしまる
9. 暗黄灰色細砂　よくしまる
10. 7+9
11. 明黄灰色土　きめ細かく
    あまりしまらない　アカホヤ純堆積
12. 9よりやや黄色味が強い
13. 2が酸化し黒変する
14. 2+9
15. 9に礫が多く含まれる
16. 2に礫が多く含まれる

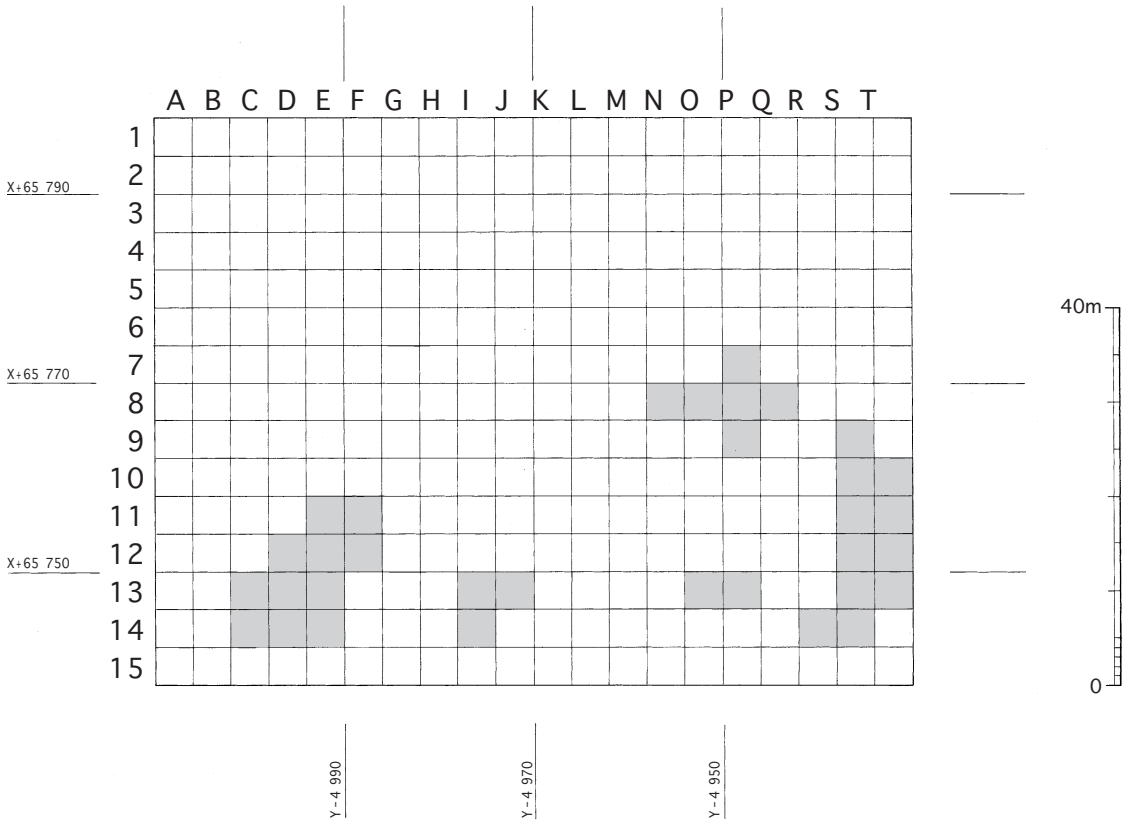




第184図　上高屋台ノ原遺跡　土層図②（1/60）



第185図　上高屋台ノ原遺跡　土層図③（1/60）



第186図　上高屋台ノ原遺跡　グリッド配置図（1/800）

D－D’、E－E’、F－F’は調査区北側に設定したグリッドの土層図である。この一帯では第2層黄灰色土の良好な堆積が認められたため、第Ⅱ文化層として調査を行った。その下層には第9層の堆積も確認されたため、第Ⅲ文化層として調査を行った。なお、P－8Grでは第Ⅳ文化層の調査も行った。

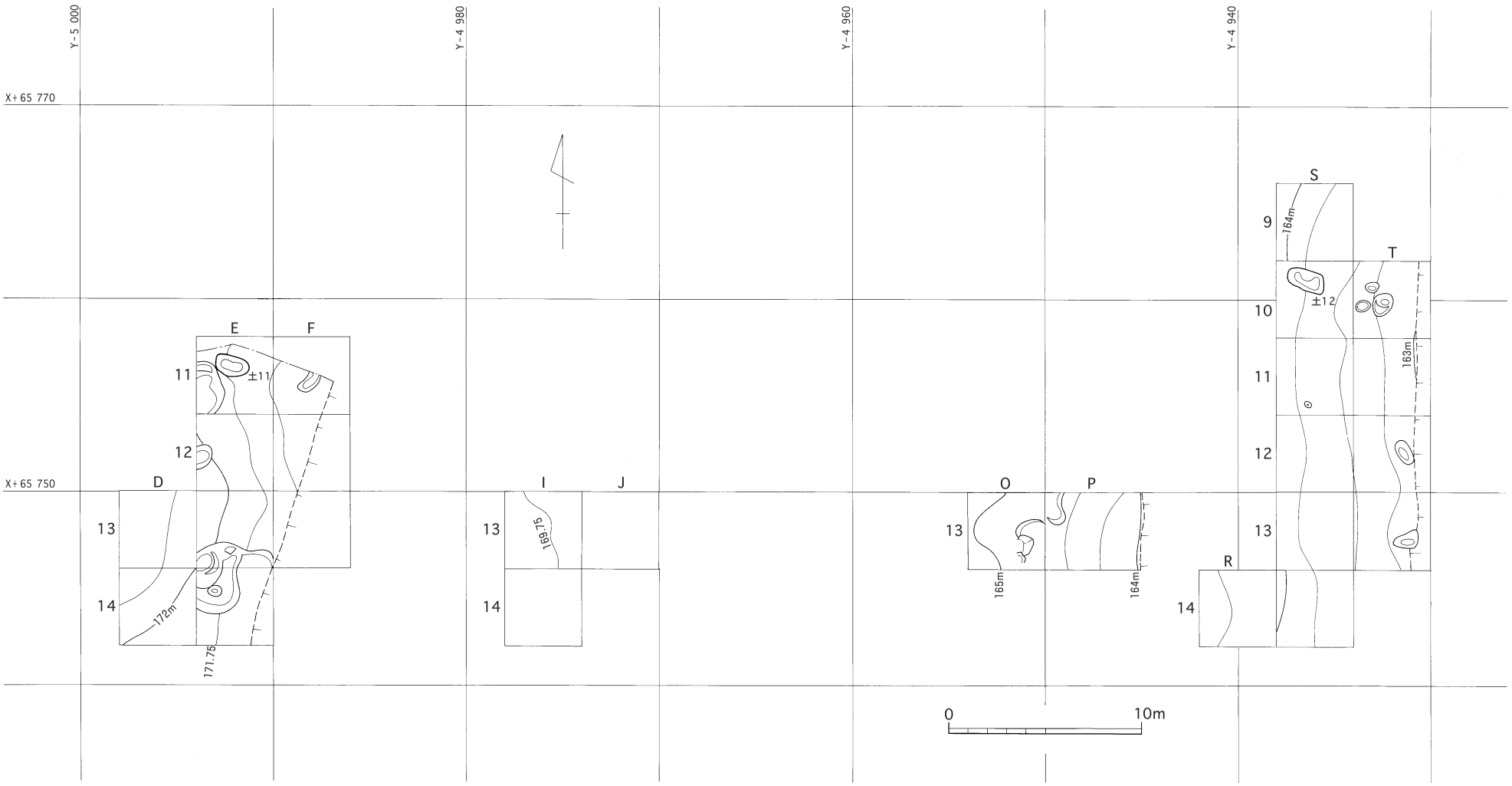
G－G’は調査区南側に設定したO－13、P－13Grの土層図である。この付近でも第2層黄灰色土の堆積が見られたため掘削を行ったが、遺物はほとんど出土しなかった。

H－H’、I－I’、J－J’は調査区東端に設定したグリッドの土層図である。この付近でもやはり第2層黄灰色土の堆積が認められたため第Ⅱ文化層として掘削を行った。その下層には第6層が堆積するが、これもあわせて第Ⅱ文化層として調査を行った。なおS－12Grでは下層の堆積状況や遺物の有無を確認するために第7層黒褐色土の掘削を行ったが、遺物は出土しなかった。

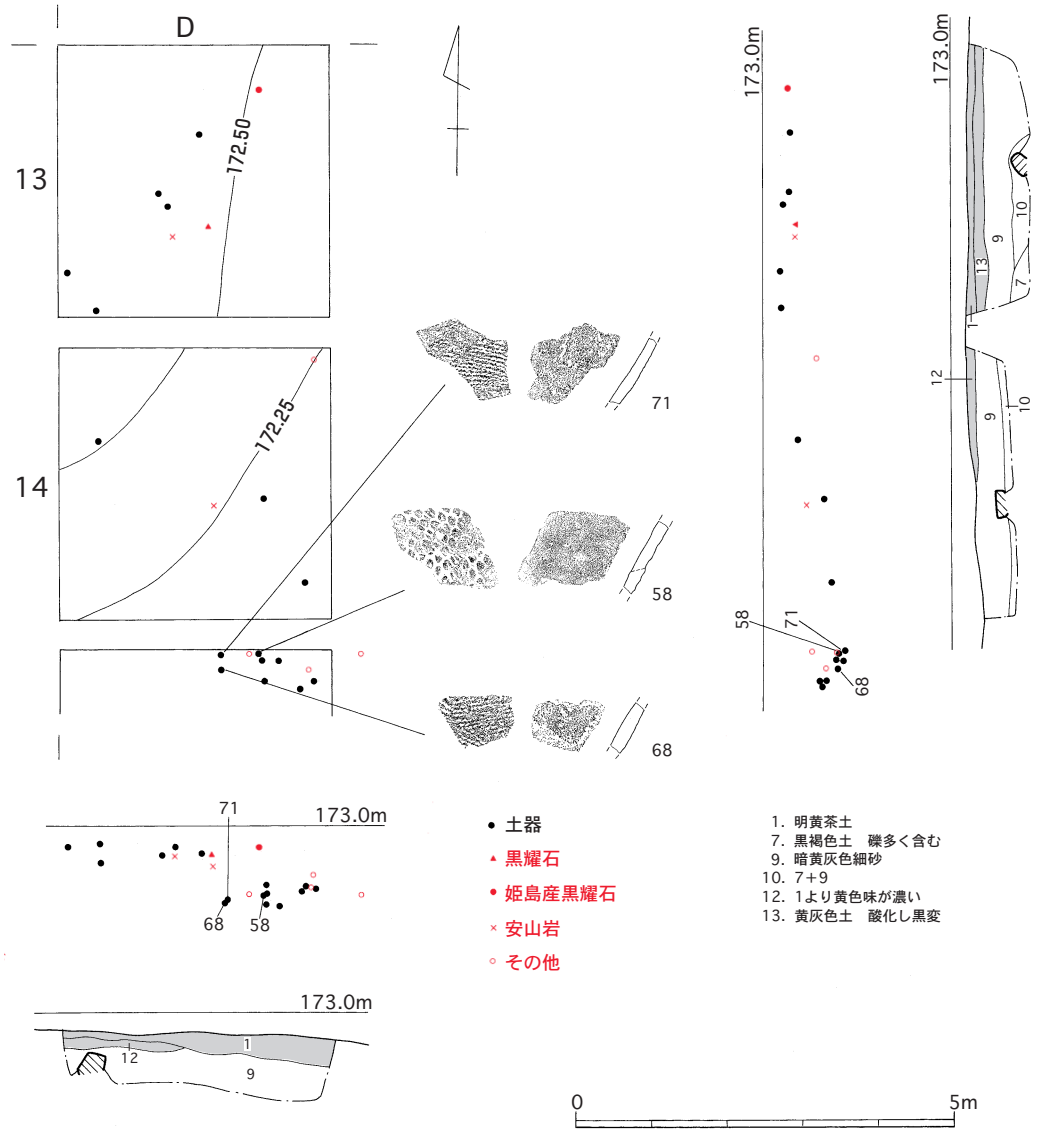
3）縄文時代の遺構と遺物

第Ⅱ文化層の調査（第187図）

調査区のほぼ全域に堆積する層で、上面は古代・中世の遺構面である。肌理が非常に細かく、砂礫



第187図　上高屋台ノ原遺跡　第Ⅱ文化層遺構配置図（1/300）



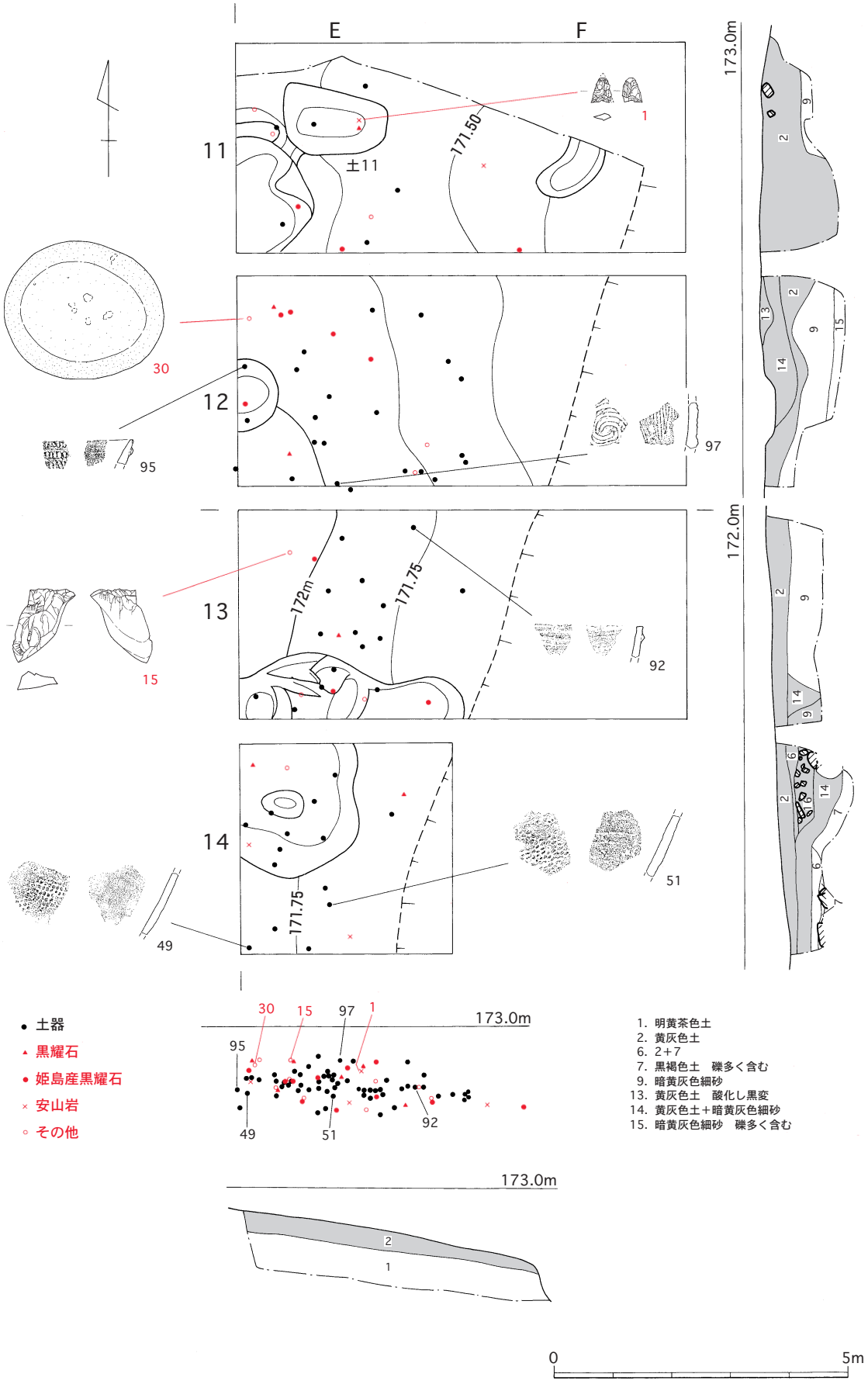
第188図　第Ⅱ文化層　D－13・14Gr実測図（1/100）

を含まず締まりの少ない土質である。過去の周辺遺跡での分析結果から、この層はアカホヤ火山灰に由来する層であることが判明している。

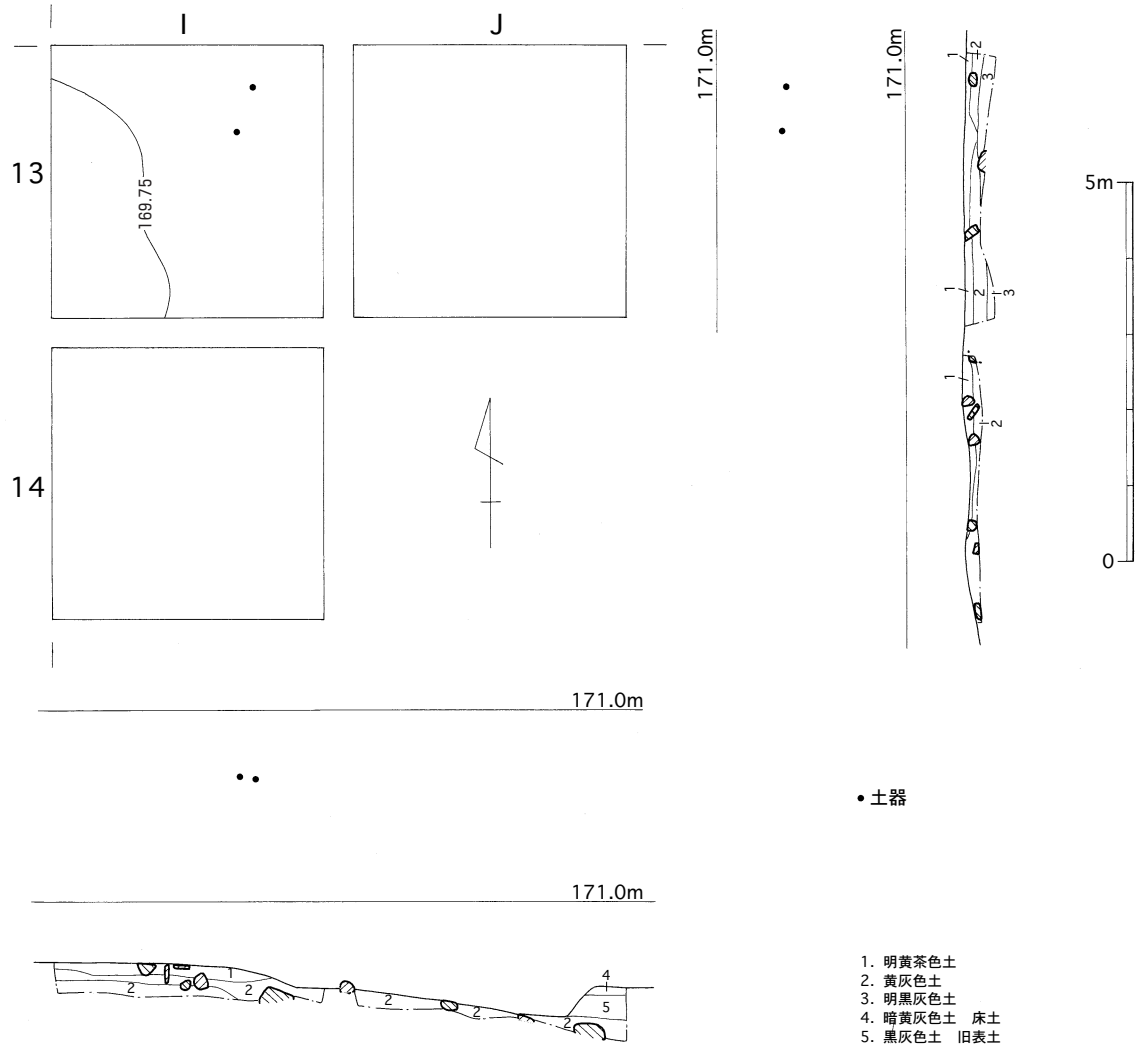
調査区西側のD－13・14、E－11～14、F－11～13、東側のR－14、S－9～14、T－10～13の各グリッドで遺物の包含が確認されたため、掘削を行った。またI－13・14、J－13、O－13、P－13Grでは土層堆積状況と遺物包含の有無を確認するために掘削を行った。

D－13・14Gr（図版69、第188図）

調査区西側に設定したグリッドである。掘削前はほぼ平坦であったが、後世の畑地造成の削平によりD－14Grの南西は黄灰色土層が見られない。D－13GrからD－14Gr北側にかけては、30cm前後の厚さで黄灰色土層が堆積する。色調が若干変化した第１層明黄茶色土が上層にあり、



第189図　第Ⅱ文化層　E－11～14、F－11～13Gr実測図（1/100）



第190図　第Ⅱ文化層　Ⅰ－13・14、J－13Gr実測図（1/100）

その下層に酸化が進み黒変を受けた第13層の黄灰色土がある。掘削後の地形は西から東へと緩やかに傾斜し、遺構は検出されなかった。

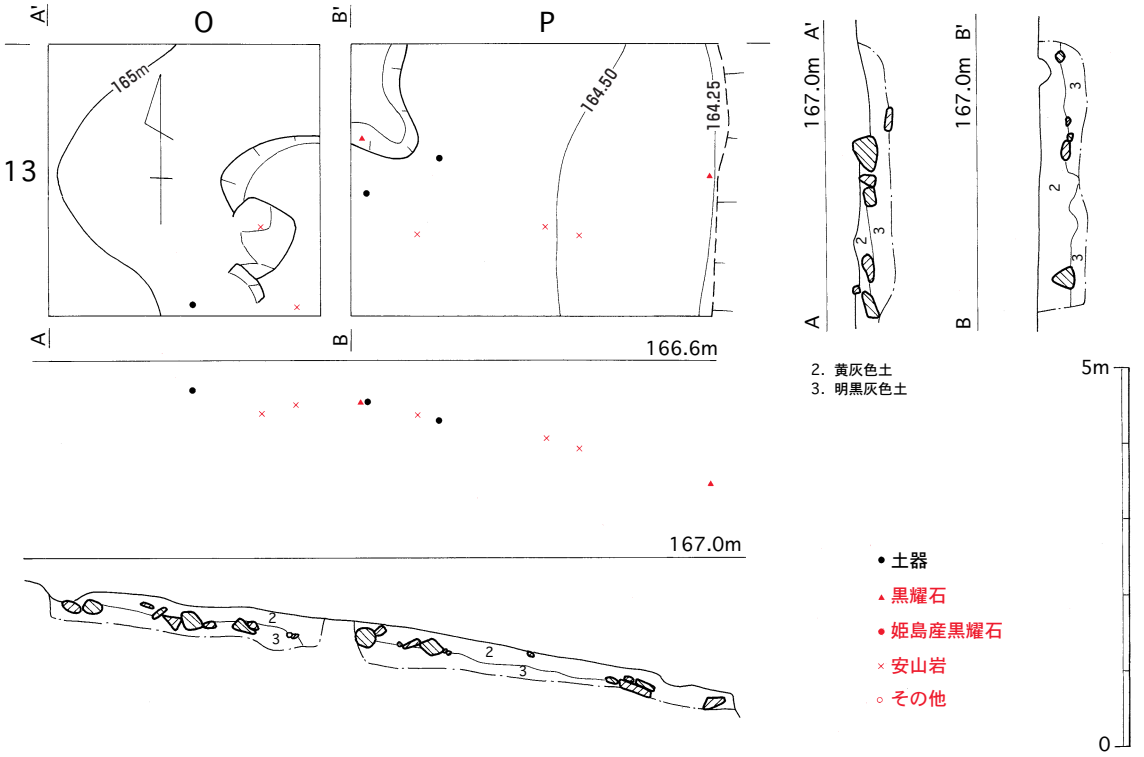
遺物は全体的に散漫に出土したが、南東隅部からは比較的まとまった数が出土している。土器は楕円押型文の他に撚糸文土器が出土し、他に珪化木チップが比較的多く出土している。

E－11～14、F－11～13Gr（第189図）

調査区西側に設定したグリッドである。掘削前の地形は西から東へと緩やかに傾斜する。第２層黄灰色土層の堆積が全体的に確認されたが、E－12Grでは風倒木による土層の撹乱が見られた。厚さは20cm前後で堆積する。

掘削後の地形も西から東に向けて傾斜しており、高低差は100cmを測る。E－11Grでは楕円形の土１基（11号土坑）を検出した。またE－11、E－13・14Grでは風倒木痕を確認した。

遺物は全域にわたって広く出土し、土器が最も多い。土器は押型文が多いが、他に後期の土器も同一層の上面から出土している。



第191図　第Ⅱ文化層　O－13、P－13Gr実測図（1/100）

I―13・14、J―13Gr（第190図）

調査区西半部に設定したグリッドである。掘削前の地形は西から東へと緩やかに傾斜する。第1層明黄茶色土と第2層黄灰色土の堆積が全面に確認できたため、下層の堆積状況と遺物の有無を確認するために掘削を行った。

第1層・第2層は厚さ20cm前後で堆積し、層中に円礫を多数含む。掘削後の地形はほぼ平坦である。遺物は土器小片が2点出土しただけである。

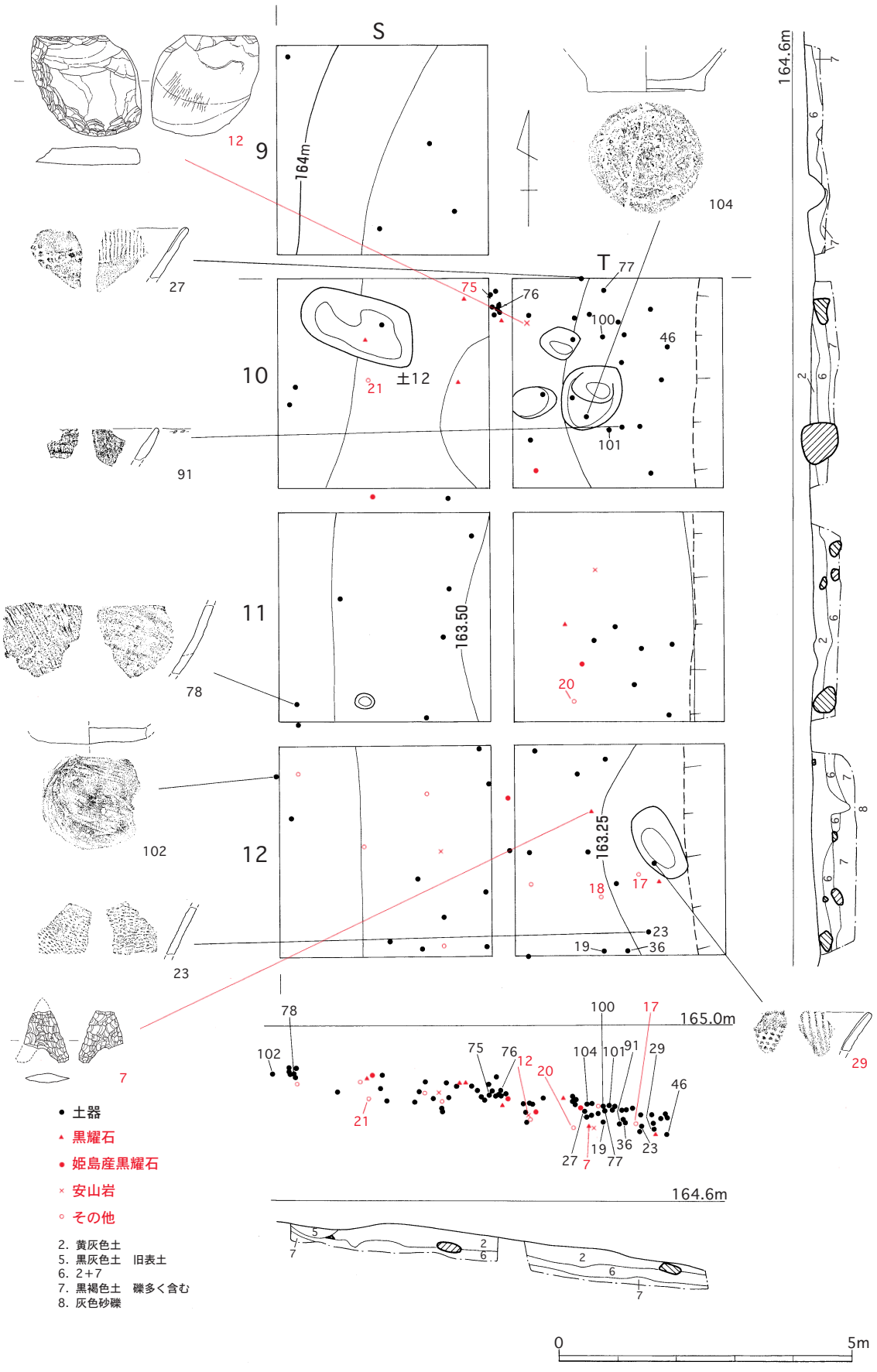
O―13、P―13Gr（第191図）

調査区南端に設定したグリッドである。掘削前の地形は西から東へと傾斜しており、高低差140cmを測る。第2層黄灰色土層の堆積が全面に確認できたため、下層の堆積状況と遺物の有無を確認するために掘削を行った。

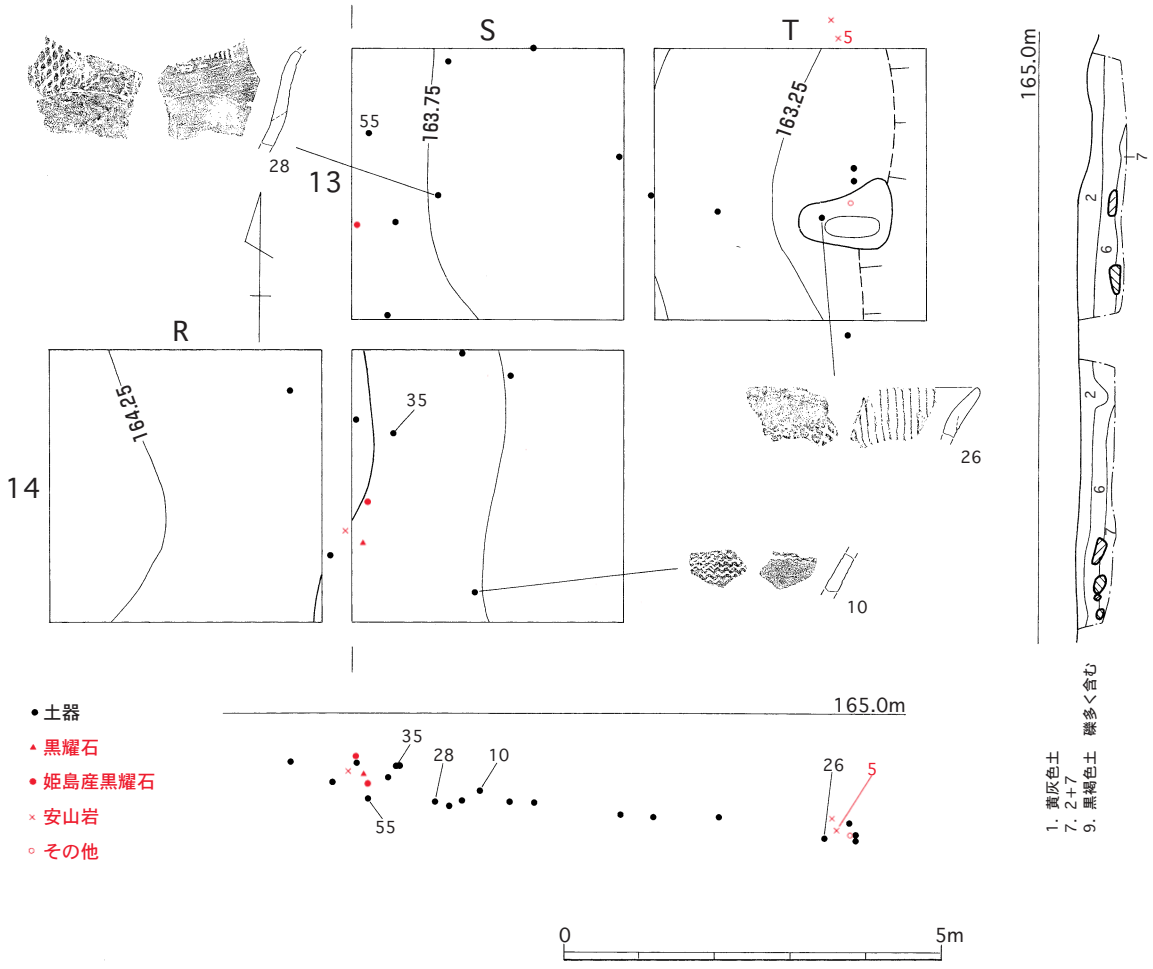
第2層は20～40cmの厚さで堆積しており、層中に円礫を含む。層中からは数点の遺物しか出土せず、また遺構も確認できなかったため、下層の第3層明黒灰色土もあわせて掘削を行った。図示した地形は第3層除去後の地形であるが、やはり西から東に傾斜しており、高低差は100cmを測る。第3層中からは遺物は出土しなかった。

S―9～12、T―10～12Gr（図版70、第192図）

調査区東側に設定したグリッドである。第2層黄灰色土が広く堆積し、また掘削前から既に上



第192図　第Ⅱ文化層　S－9～12、T－10～12Gr実測図（1/100）



第193図　第Ⅱ文化層　R－14、S－13・14、T－13Gr実測図（1/100）

面で遺物を確認していたため広範囲に掘削を行った箇所である。

掘削前の地形は西から東へと緩やかに傾斜しており、高低差は80cm。第２層はS－12Grで最も厚く30cmを測る。第２層の下層には第７層黒褐色土との混成土層である第６層が堆積するが、S－9Grでは第２層は削平されて失われてしまっており第６層が露出していた。

第２層掘削後、第６層上面で遺構確認作業を行ったが、遺構は見られなかったので第６層まで続けて掘削し、第６層掘削後の第７層上面で遺構確認作業を行った。図はその段階のものである。

地形は西から東に向かって傾斜しており、高低差は100cmを測る。S－10Grでは不整形の土坑１基（12号土坑）、T－10・12Grではピットを検出することができた。

遺物は特にT－10Grから集中して出土しており、T－12Gr付近からも比較的多く出土している。T－10Grでは後期の土器がまとまって出土した。T－12Grでは楕円押型文土器数点の他、珪化木剥片が数点出土した。

なお、S－12Grは第７層の状況把握のために更に深く掘削したが、遺物は全く出土しなかった。

R－14、S－13・14、T－13Gr（第193図）

調査区東側に設定したグリッドである。先のS－9～12、T－10～12Gr同様、第２層黄灰色

土の良好な堆積が見られたので掘削を行った。

掘削前の地形は西から東に傾斜しており、高低差は100cm。第2層の堆積は20～30cm。第2層掘削後の第6層上面では遺構は確認されず、また遺物の出土もほとんど無かったので引き続き第6層も掘削し、第7層上面で遺構確認作業を行った。

遺構面はやはり西から東に傾斜しており、高低差は120cmを測る。T－13Grでピットを検出したが、他に遺構は見られなかった。遺物の出土は顕著ではなかった。

第Ⅲ文化層の調査（第194図）

第9層暗黄灰色細砂層は第2層黄灰色土の下層に堆積する層である。堅く締まった砂層であり礫はほとんど含まない。

調査区西側のC－13・14、D－12～14、E－12～14、F－12・13Grでは良好な堆積が確認され、また遺物の包含を確認したため掘削を行った。調査区中央付近のN－8、O－8、P－7～9、Q－8Grでは土層堆積状況と遺物包含の有無を確認するために掘削を行い、この層中に多くの遺物が含まれることを確認した。調査区南側のO－13・P－13Gr、東側のR－14・S－9～14・T－9～14Grにはこの第9層は堆積していなかった。

C－13・14、D－12～14Gr（図版69・70、第195図）

調査区西側に設定したグリッドである。古代・中世の遺構面検出時点で、C－13・14Grは既に第9層暗黄灰色細砂層が露出していた。D－12～14Grは上層の黄灰色土掘削後に確認したものである。

掘削前の地形は西側が東側よりも20cmほど高い程度で比較的平坦な地形であった。掘削の結果、第9層の堆積は南側で50cm、北側は80cmとかなりの厚さで堆積していた。掘削完了後に遺構面の精査を行ったが、遺構は確認できなかった。掘削後の地形は南西から北東に向かって傾斜しており、比高差は100cmを測る。

遺物は全グリッドから多く出土している。土器は押型文土器が主体で、他に粘土瘤のある刺突文土器や無文土器も数点出土した。

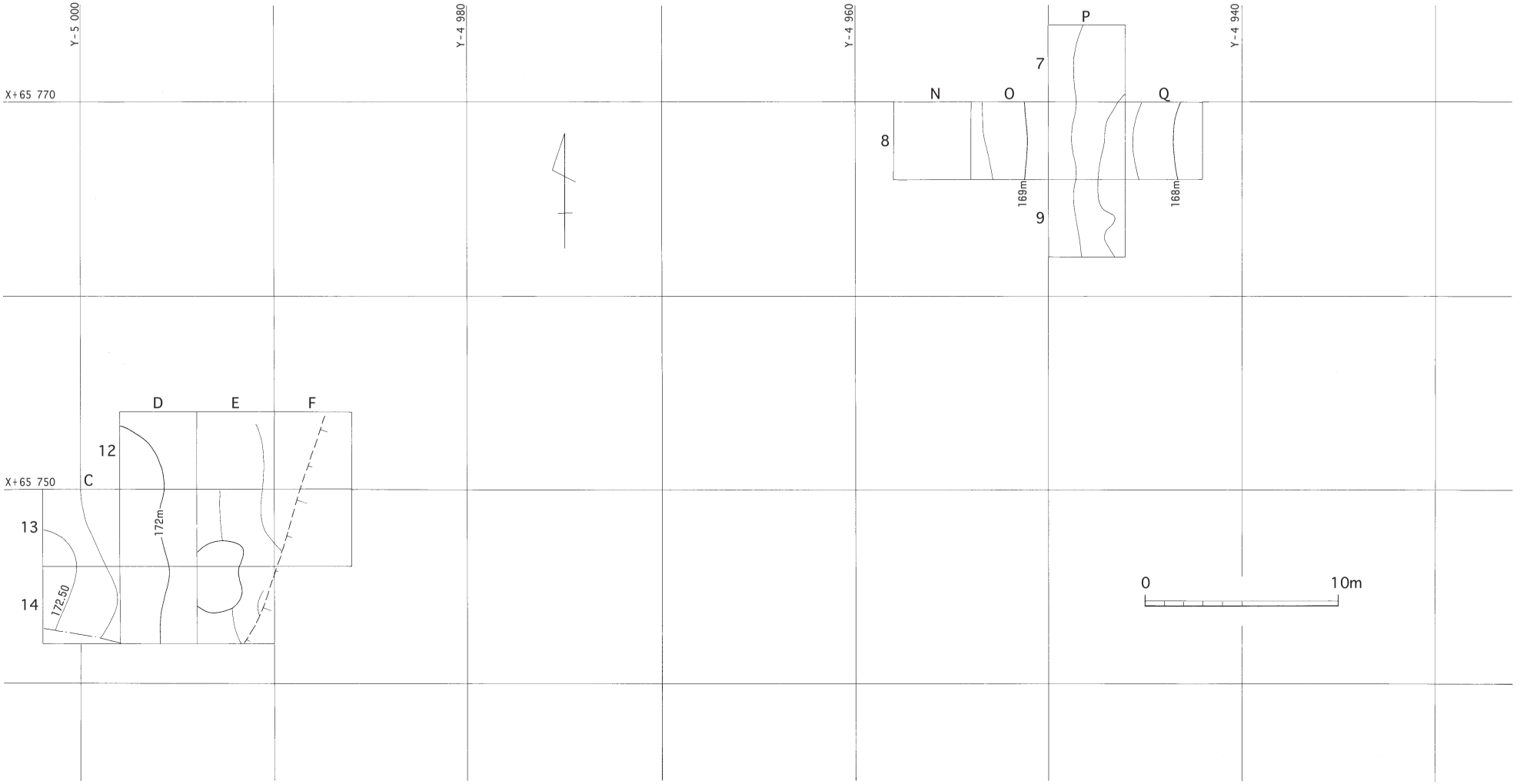
E－12～14、F－12・13Gr（図版71、第196図）

調査区西側に設定したグリッドである。上層の黄灰色土層調査終了後に掘削を行った。掘削前は西から東へと緩やかに傾斜しており高低差は50cmを測る。

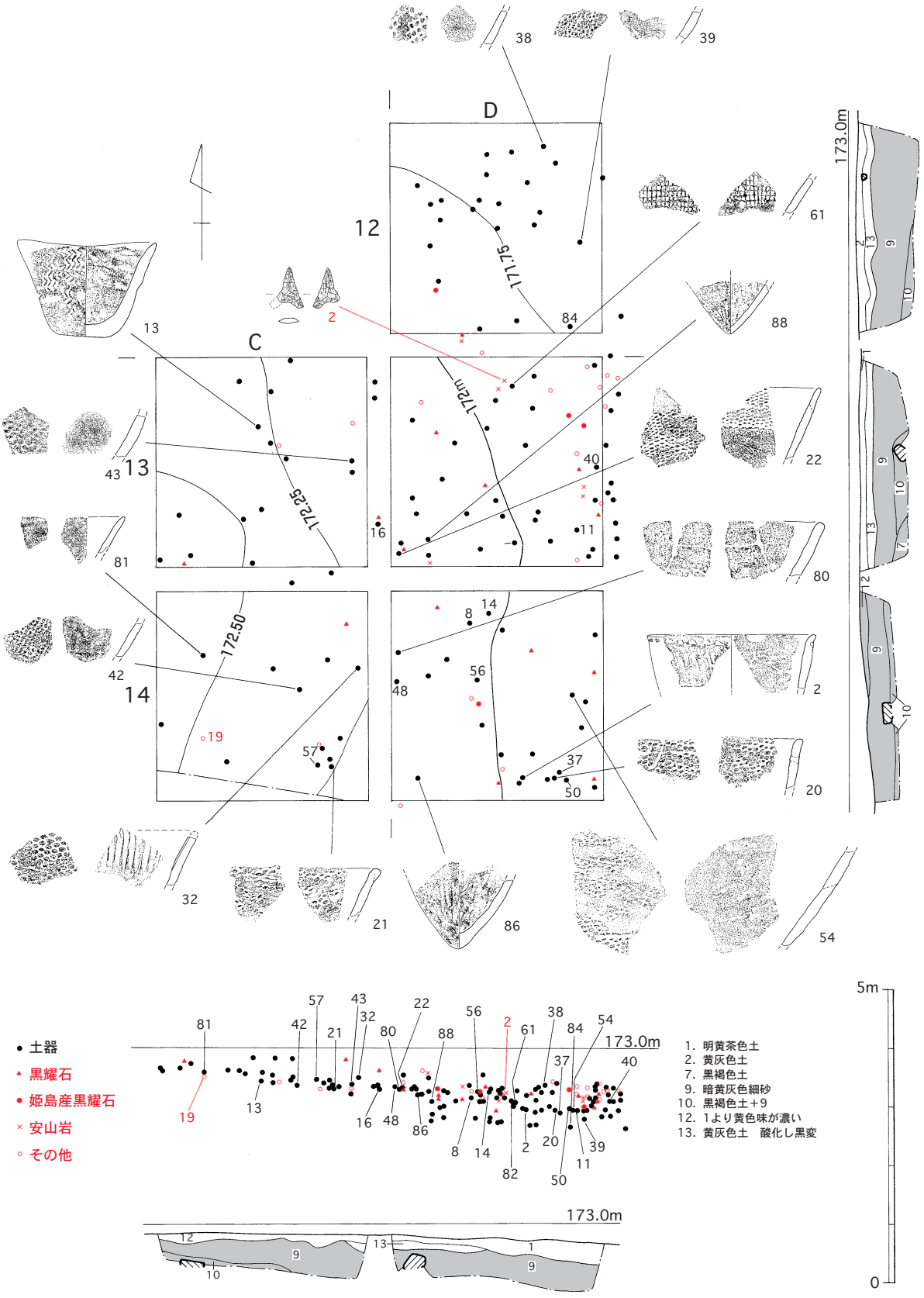
掘削の結果、北側では90cm、南側では20cmの厚さでこの層が堆積していることが確認された。また掘削後に精査を行ったが、遺構は確認されなかった。掘削後の地形はやはり西から東へ傾斜するが、高低差は50cm程度に過ぎない。旧地形が緩傾斜だったことが判る。

遺物は特にE－13Grから多く出土している。ここからは特に珪化木の剥片が多量に出土しており、石器素材獲得のために粗割作業を行った場所であることが判る。珪化木剥片23～29は他の珪化木剥片約30点とともに同一箇所から出土したものである。

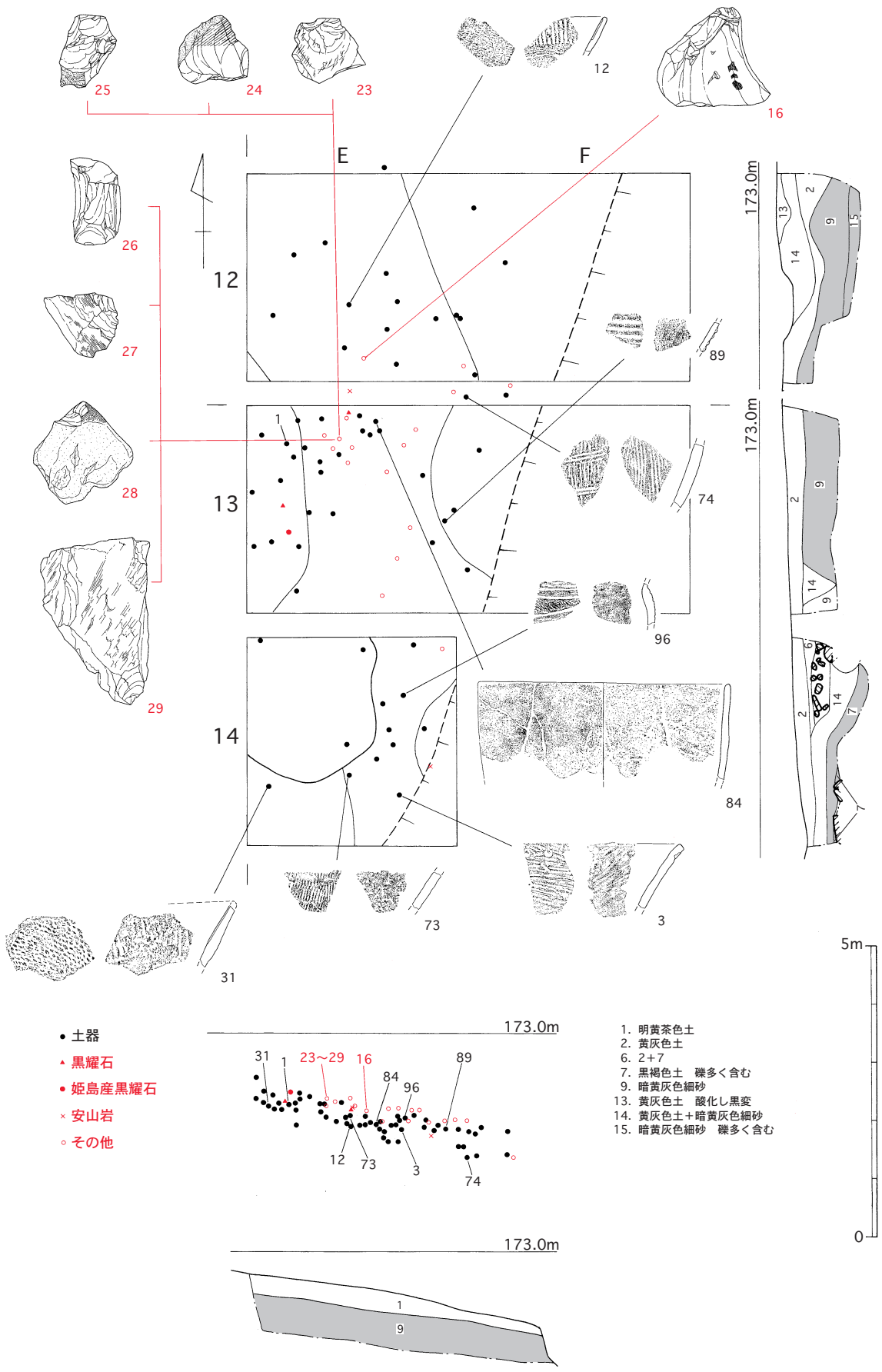
出土土器は粘土瘤のある刺突文土器をはじめ、押型文土器、轟式土器、後期の磨消縄文土器など時期差のある土器が同一層中から出土している。調査時の所見では第9層は早期の包含層として認識しており、事実他のグリッドでは混入は見られなかった。E13・14Gr付近では風倒木の影響で層



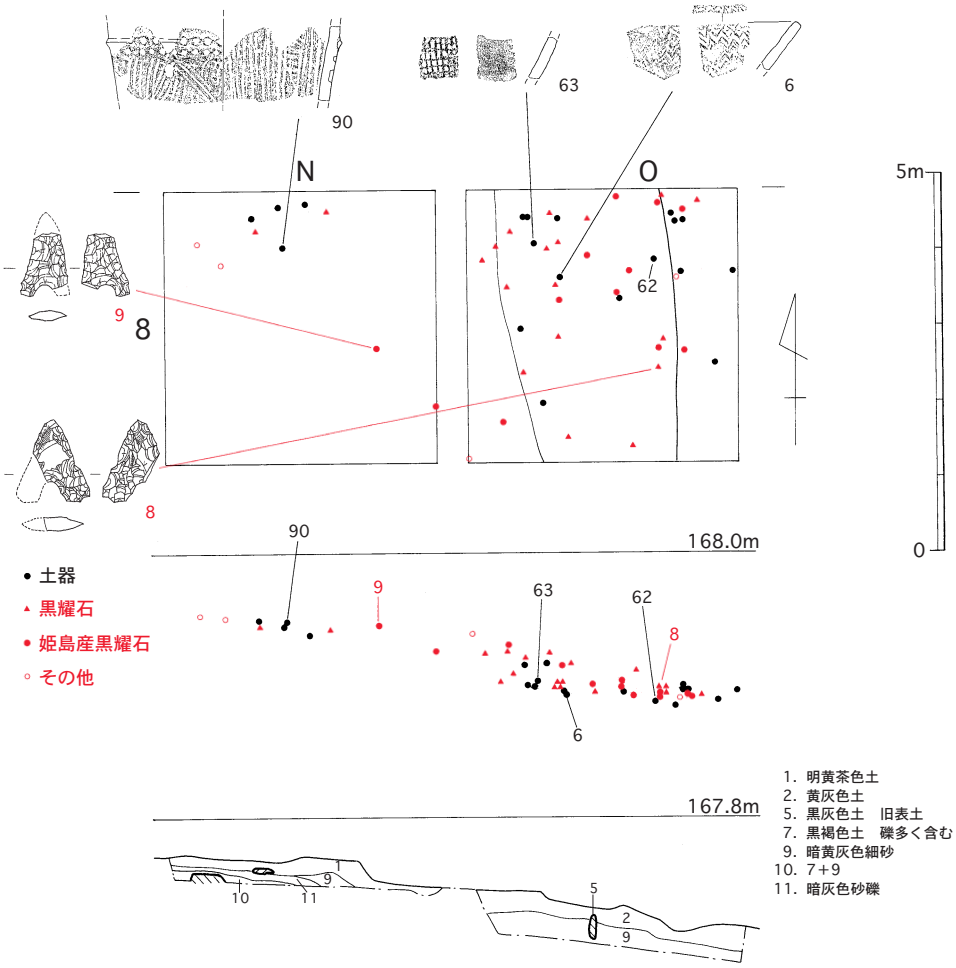
第194図　上高屋台ノ原遺跡　第Ⅲ文化層遺構配置図（1/300）



第195図　第Ⅲ文化層　C－13・14、D－12～14Gr実測図（1/100）



第196図　第Ⅲ文化層　E－12～14、F－12・13Gr実測図（1/100）



第197図　第Ⅲ文化層　N－8、O－8Gr実測図（1/100）

の上方が撹乱を受けており、その結果前期や後期の遺物が混入したのではないかと考えている。

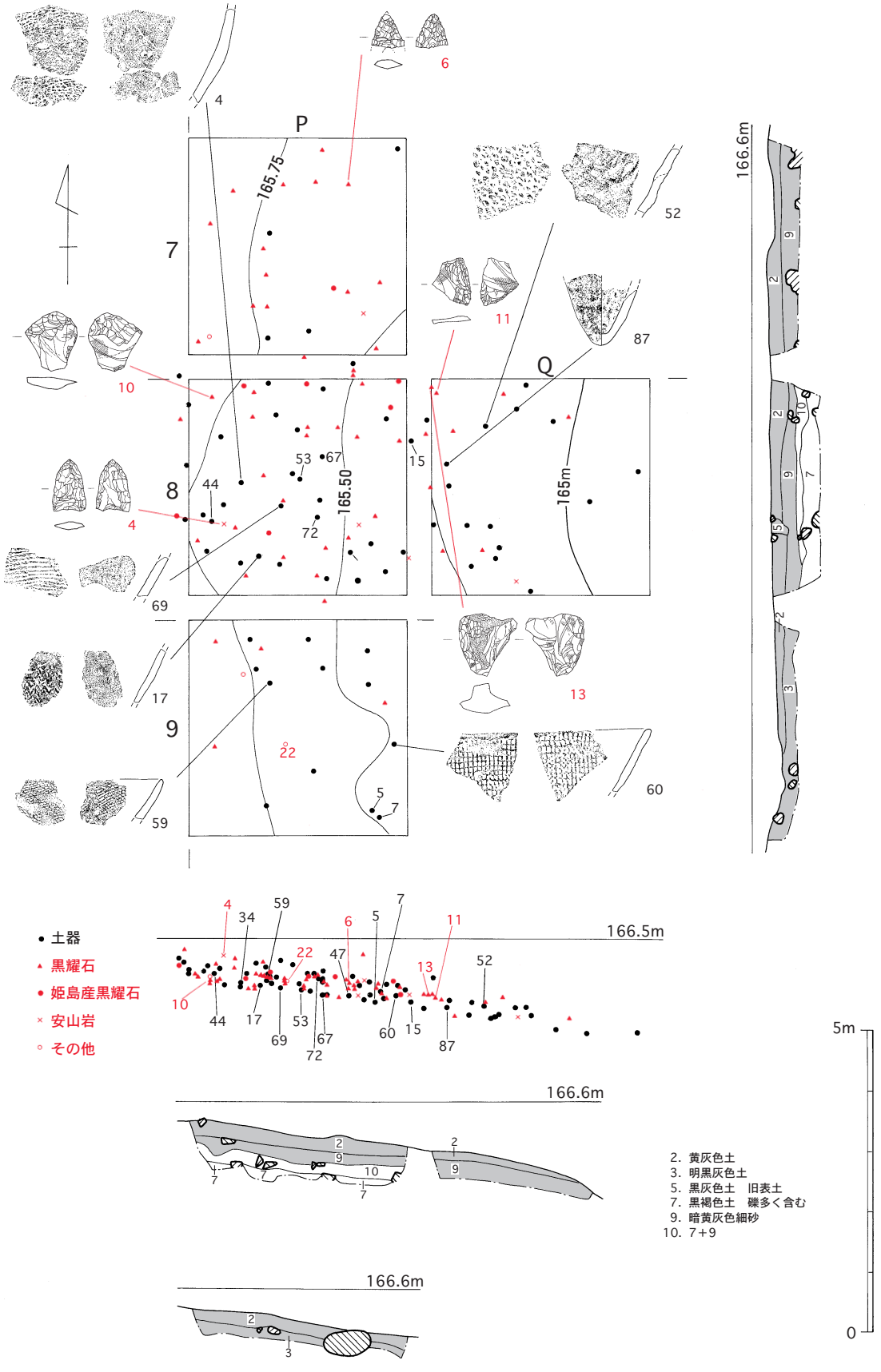
N—8、O—8Gr（第197図）

調査区の中央近くに設定したグリッドである。古代・中世遺構面検出時に第１層明黄茶色土や第２層黄灰色土が確認されたため、土層堆積状況と遺物包含の有無を確認するために掘削を行った。その結果、第１層や第２層ではほとんど遺物が出土しなかったが、その下層に堆積する第９層暗黄灰色細砂層で多くの遺物を確認した。

掘削前の状況は、N－8Grの西側は平坦、東側は西側に比べて30cm程低い。これは後世の耕作地造成によるものである。O－8Grは西から東へと緩やかに傾斜しており高低差40cmを測る。

掘削の結果、N－8Grでは第１層が15～30cmの厚さで堆積し、第９層は部分的にしか堆積していない事が判った。第９層の下層に堆積する第10層や第11層は無遺物層である。O－8Grでは第２層黄灰色土が30cmの厚さで堆積するが遺物は少ない。その下層の第９層は20～30cmの厚さで堆積し、多くの遺物が出土した。掘削後の地形は、N－8Grはほぼ平坦、O－8Grでは西から東に40cmほど傾斜している。

N－8Grから出土した90の土器や９の姫島産黒耀石製石鏃は第１層から出土したものである。北



第198図　第Ⅲ文化層　P－7～9、Q－8Gr実測図（1/100）

東側に若干まとまっている。O－8Grからは多くの遺物が出土した。6の山形文や62・63の格子目文など土器は全て押型文土器であり、石器では黒耀石剥片が多い。8は黒耀石製石鏃である。姫島産黒耀石も少数だが出土しており、安山岩はここでは出土していない。

P－7～9、Q－8Gr（図版69、第198図）

調査区の中央付近に設定したグリッドで、先のN－8・O－8Grの東側に連続する。ほぼ全域に第2層黄灰色土層が堆積していたため、土層堆積状況と遺物包含の有無を確認するための掘削を行った。その結果、第2層ではほとんど遺物が出土しなかったが、第2層の下層に堆積する第9層暗黄灰色細砂層からは多くの遺物が出土した。

掘削前の状況は、全体的に西側から東側に向かって傾斜しており、高低差は130cmを測る。掘削の結果、第2層は20cm前後の厚さで全体的に堆積しており、第9層は20～40cmの厚さでやはり全グリッドで確認され、多くの遺物を包含することが判った。掘削後の地形もやはり西から東へと傾斜しており高低差は100cmを測る。

遺物は特にP－8Grから集中的に出土した。P－8Grから17の山形文、4・44・47・53の楕円文の押型文土器、67・69・72の撚糸文土器、P－9Grから5・7の山形文、59・60の格子目文の押型文土器、Q－8Grから52の楕円押型文土器、87の尖底の底部、P－8・Q－8Gr間から15の山形文施文の押型文土器が出土した。石器は黒耀石が最も多く、姫島産黒耀石や安山岩は少ない。P－7Grから6の黒耀石製石鏃、P－8Grから4の安山岩製石鏃、10の黒耀石剥片、Q－8Grから11の黒耀石石鏃未製品、13の黒耀石剥片が出土した。なおP－8Grは第9層の下層に堆積する第7層の状況を把握するために更に深く掘削を行った。

第Ⅳ文化層の調査

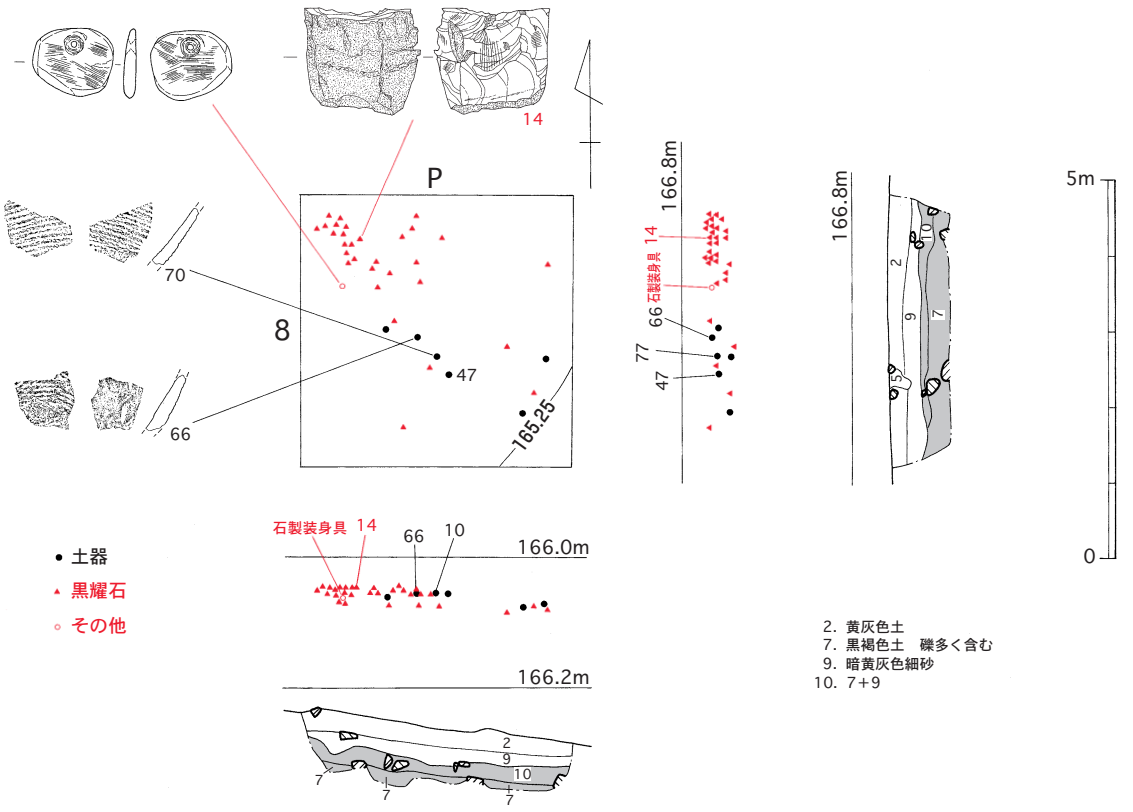
第7層黒褐色土は、第9層暗黄灰色細砂層の下層に堆積する層である。比較的堅く締まった層であり拳大～人頭大の円礫を多く含んだ層である。

調査区西側ではこの層の堆積が確認されたために一部掘削を行ったが、遺物はほとんど出土しなかった。調査区中央付近のGrのうち、P－8Grでは遺物の出土が予想されたため第7層の掘削を行い、数多くの遺物が出土した。調査区南側のO－13・P－13ではこの層の堆積は確認されず、東側のGrではこの層の堆積が確認されたため、S－12Grで掘削を行ったが遺物は出土しなかった。

P－8Gr（図版69、第199図）

調査区の中央付近に設定したグリッドである。上層の第9層暗黄灰色細砂層の調査終了後、土層堆積状況と遺物包含の有無を確認するために掘削を行った。掘削前の地形は西から東へ傾斜しており高低差は40cm。掘削の結果、第9層の下層には第9層と第7層の混成土層である第10層が堆積しており、その下層に第7層の堆積を確認した。第10層は厚さ10～20cm、第7層は厚さ10～40cm。掘削後の地形は西から東へとわずかに傾斜するが、高低差は20cm程度である。

出土遺物のうち、66・70の土器は撚糸文土器である。石器は北東部に集中して出土した。ここでは14の黒耀石石核と剥片が出土しており、石器製作の痕跡が原位置に近い状態を保っていたものと思われる。また近い位置で第211図の石製装身具も出土した。



第199図　第Ⅳ文化層　P－8Gr実測図（1/100）

検出遺構

土坑

11号土坑（図版72、第200図）

E－11Grの第２層黄灰色土層掘削後、第９層暗黄灰色細砂層上面の精査によって確認した土坑である。

平面形は楕円形を呈し長軸の方向を東西にとる。長軸170cm、短軸110cm、底面は中央が最も深く60cmを測る。壁は緩やかな立ち上がりとなる。

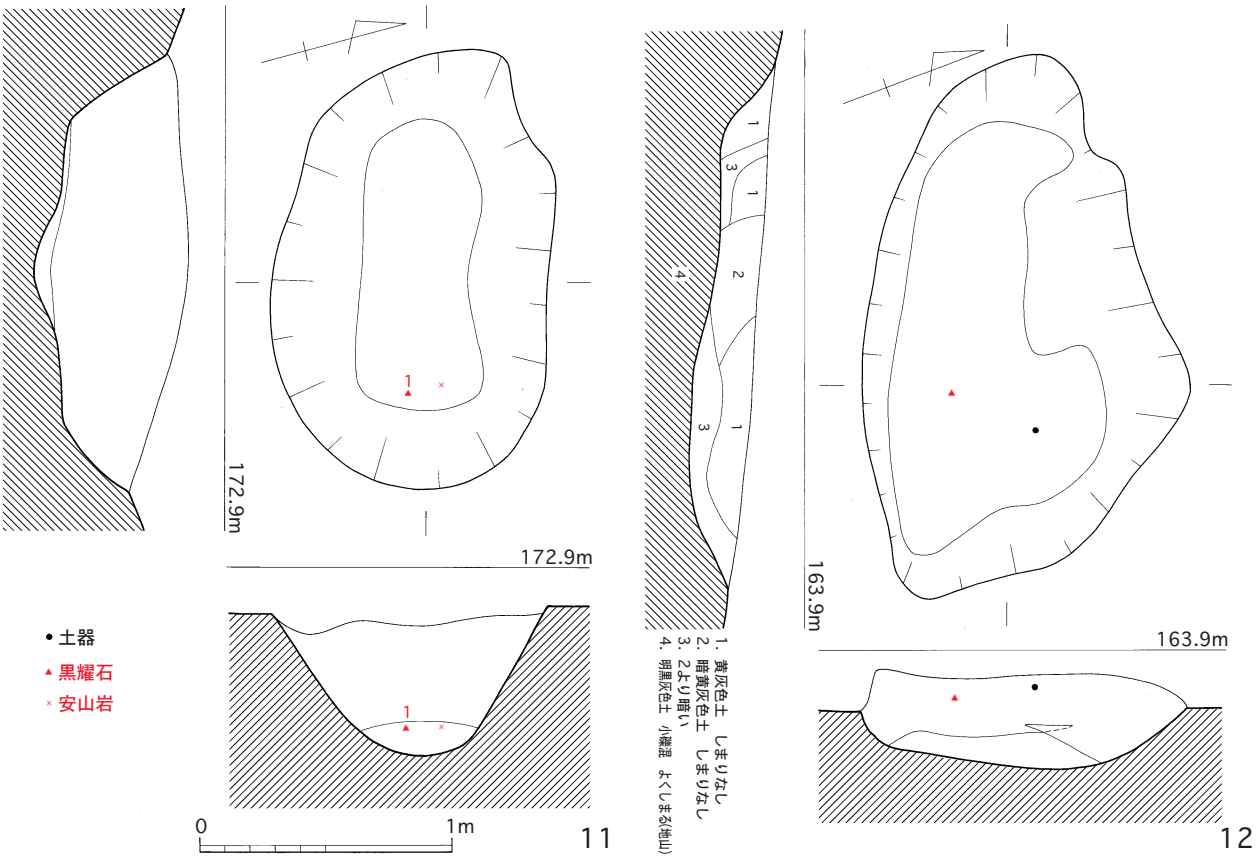
遺物は２点しか出土しなかった。２点とも底に近い位置で出土しており、うち１点は安山岩製小型石鏃である。

12号土坑（図版72、第200図）

S－10Grの第２層黄灰色土層掘削後、第６層上面の精査によって確認することができた土坑である。

平面形は不整形を呈し長軸を東西方向にとる。長軸215cm、短軸130cm、底面は中央から若干東寄りの位置が最も深く35cmを測る。壁は緩やかな立ち上がりとなる。

遺物は覆土上層から土器と黒耀石剥片が各１点出土した。



第200図　11・12号土坑実測図（1/30）

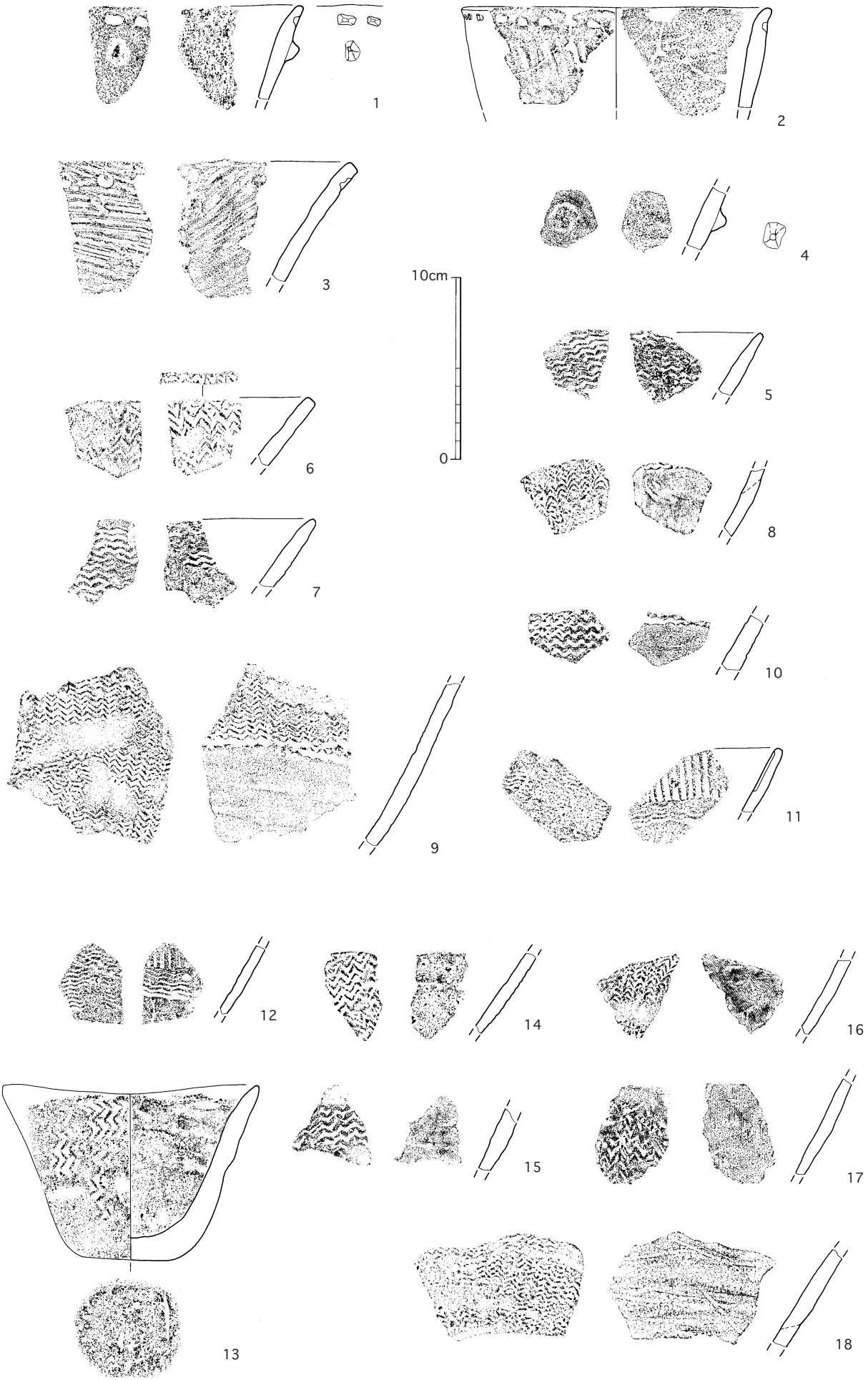
出土遺物

縄文土器（図版81・82、第201～206図）

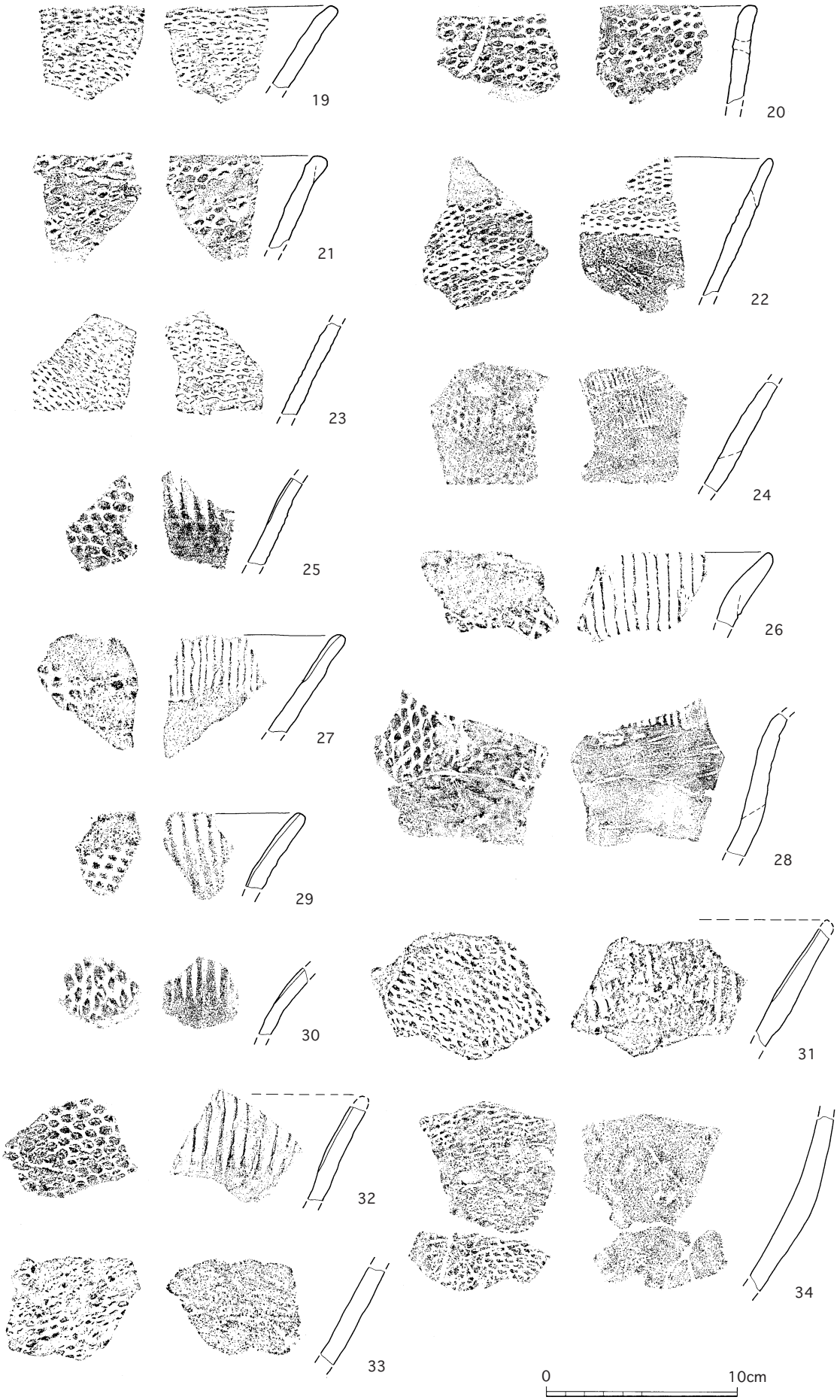
1～4は粘土瘤のある刺突文土器である。4点とも胎土に角閃石を含む。1は口縁部下の刺突文が横長の長方形を呈し、器面に対して垂直に施文される。器表の風化が著しく調整不明。胎土に角閃石を多く含む。2の刺突文は右から左へ狭い間隔で刺突される。残存部位では粘土瘤の貼付は認められない。内面は横ナデ、外面の口縁部下は縦方向のナデ調整を行っている。3は口縁部が開いた器形となる。口縁端部は面取りを行って四角く仕上げている。口縁部下の刺突文は竹管状の工具、恐らく頂部の欠けた巻貝の押圧によって施文したものと思われる。器面の調整は二枚貝条痕。4は大きめの粘土瘤を貼付した小片である。

5～63は押型文土器である。5～18は山形文施文の土器である。5～10は外面と同じ施文を口縁部内面にも施文する。6は口縁端部にも施文を行う。7は恐らく5と同一個体。8は胎土に砂粒が少ない。11・12は内面の口縁部下に原体条痕、その下部に山形文を施文する。13は完形に復元できる資料である。小型品で全体的に器壁が非常に厚く粗雑な感を受ける。底部は平底となる。体部は直線的に開いて口縁部へと至る。内面は横ナデ、外面は雑な山形文を縦位に施文する。胎土に石英・長石の他に角閃石を若干含み暗黄灰色に焼成されるが、焼けムラによって部分的に黒色を呈するところもある。C－13Gr第9層出土。16は恐らく8と同一個体。

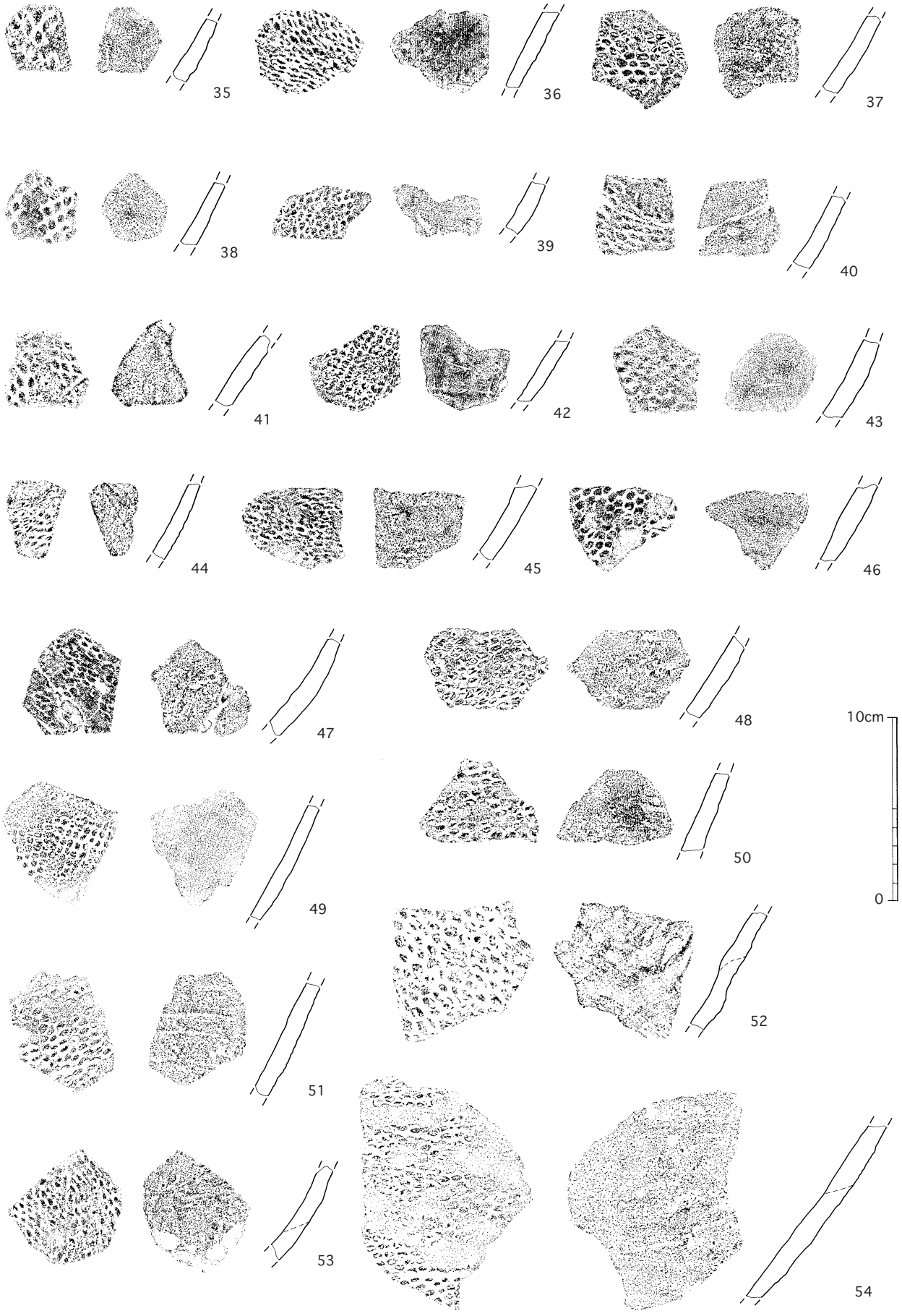
19～58は楕円文施文の押型文土器である。19～32は口縁部付近の資料であるが、19～23は内面に楕円文、24～32は原体条痕施文を行う。19や22～24は小さめの楕円文、25～27は大振



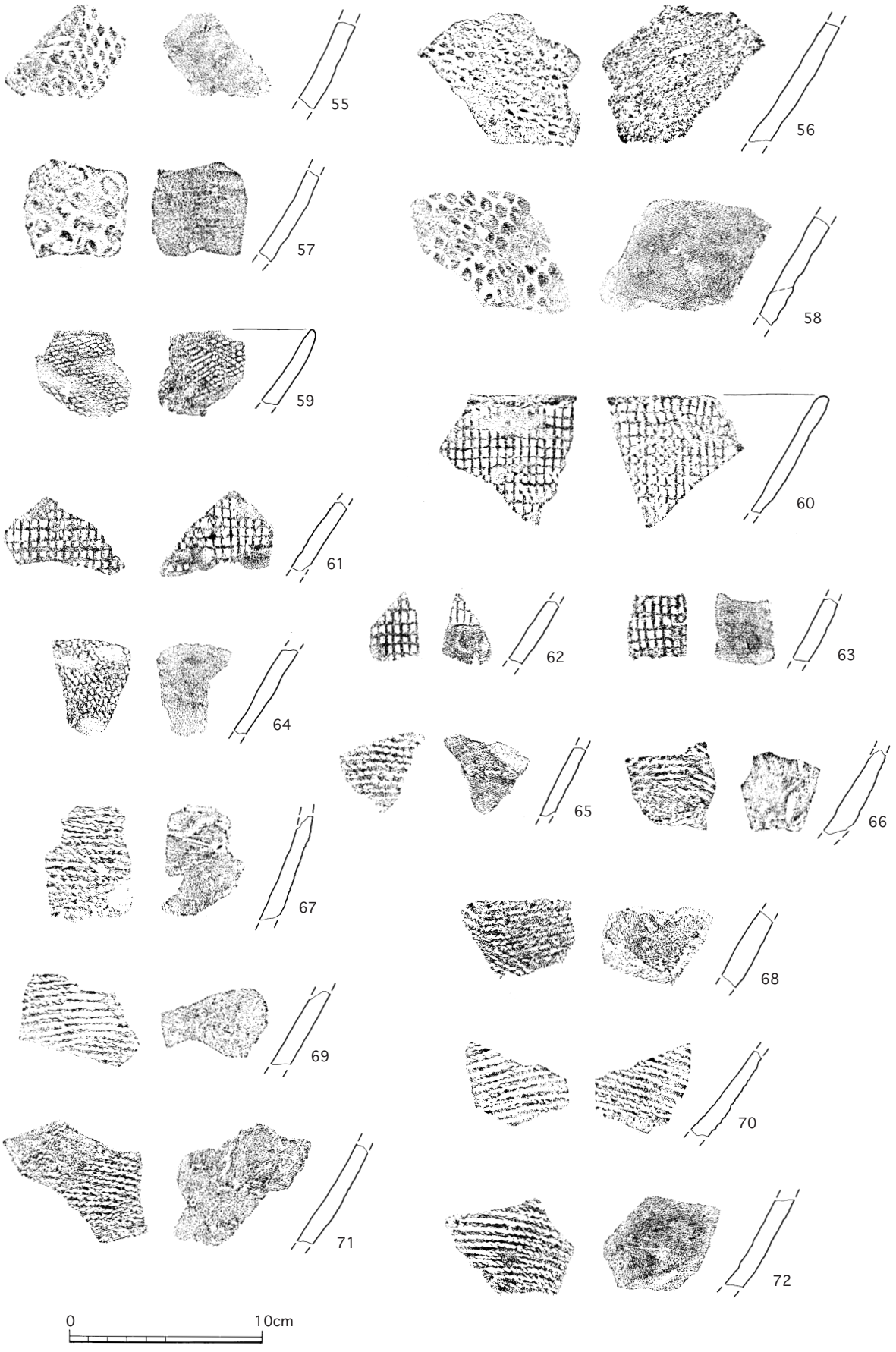
第201図　縄文土器実測図①（1/3）



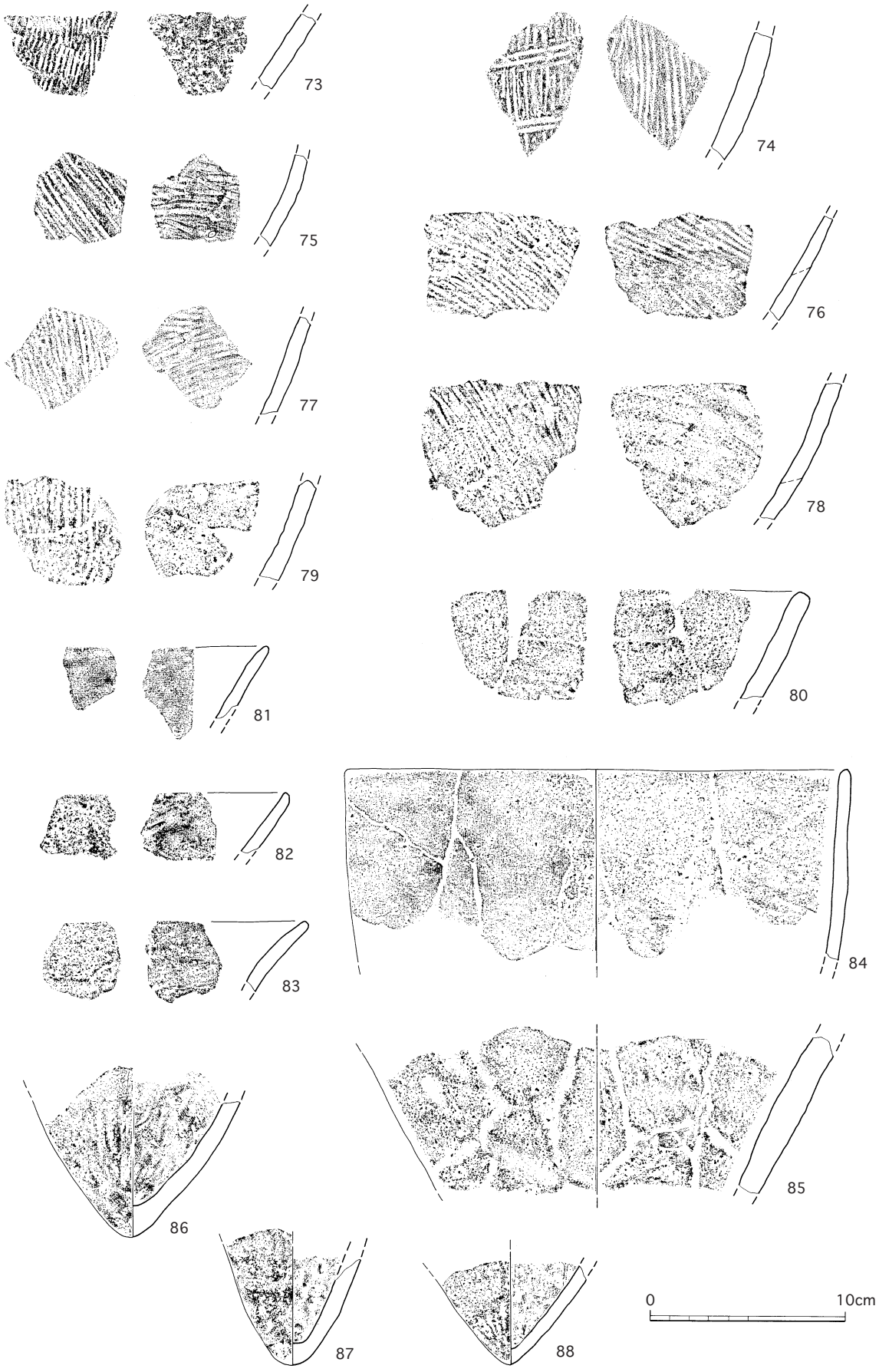
第202図　縄文土器実測図②（1/3）



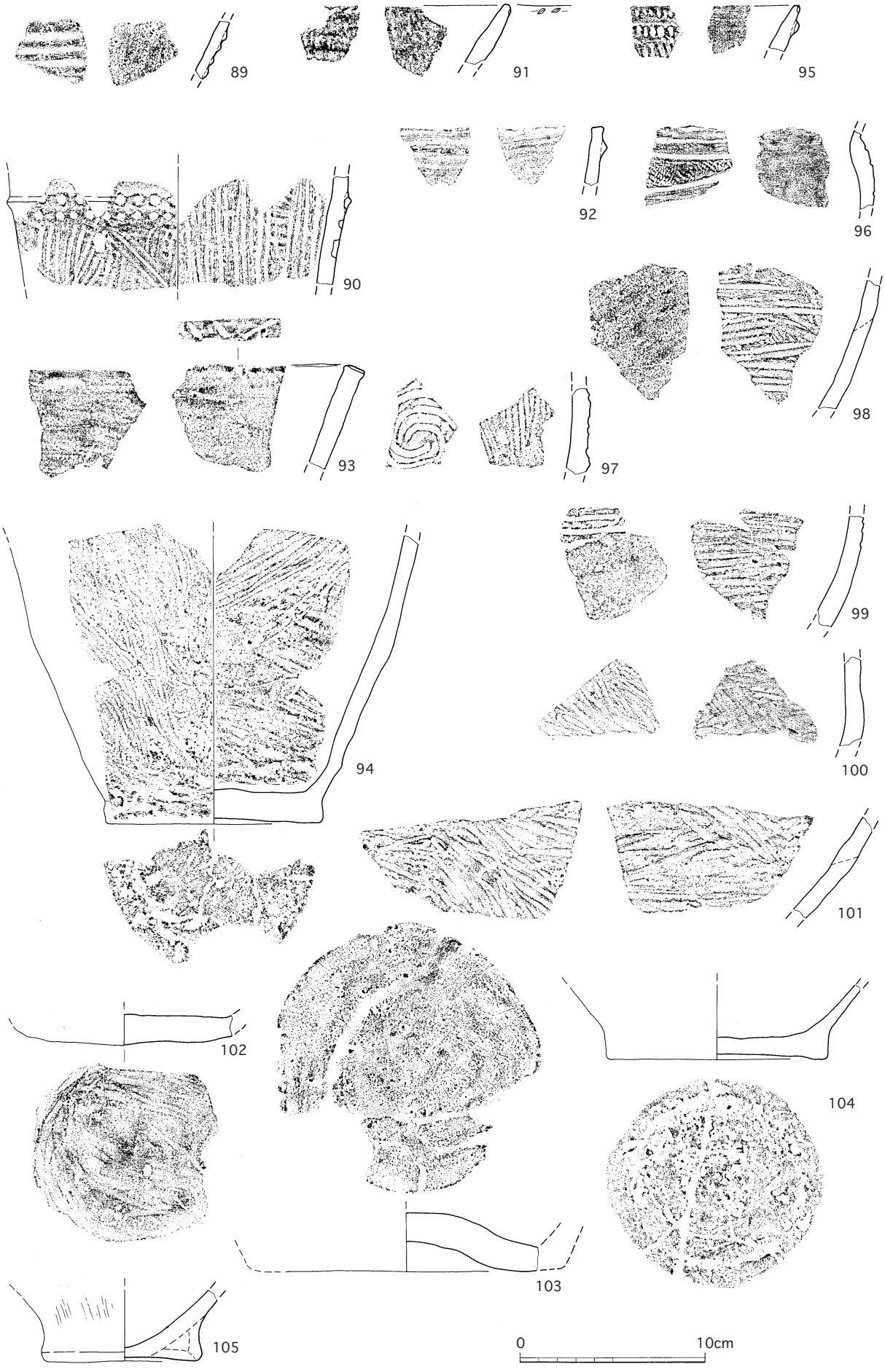
第203図　縄文土器実測図③（1/3）



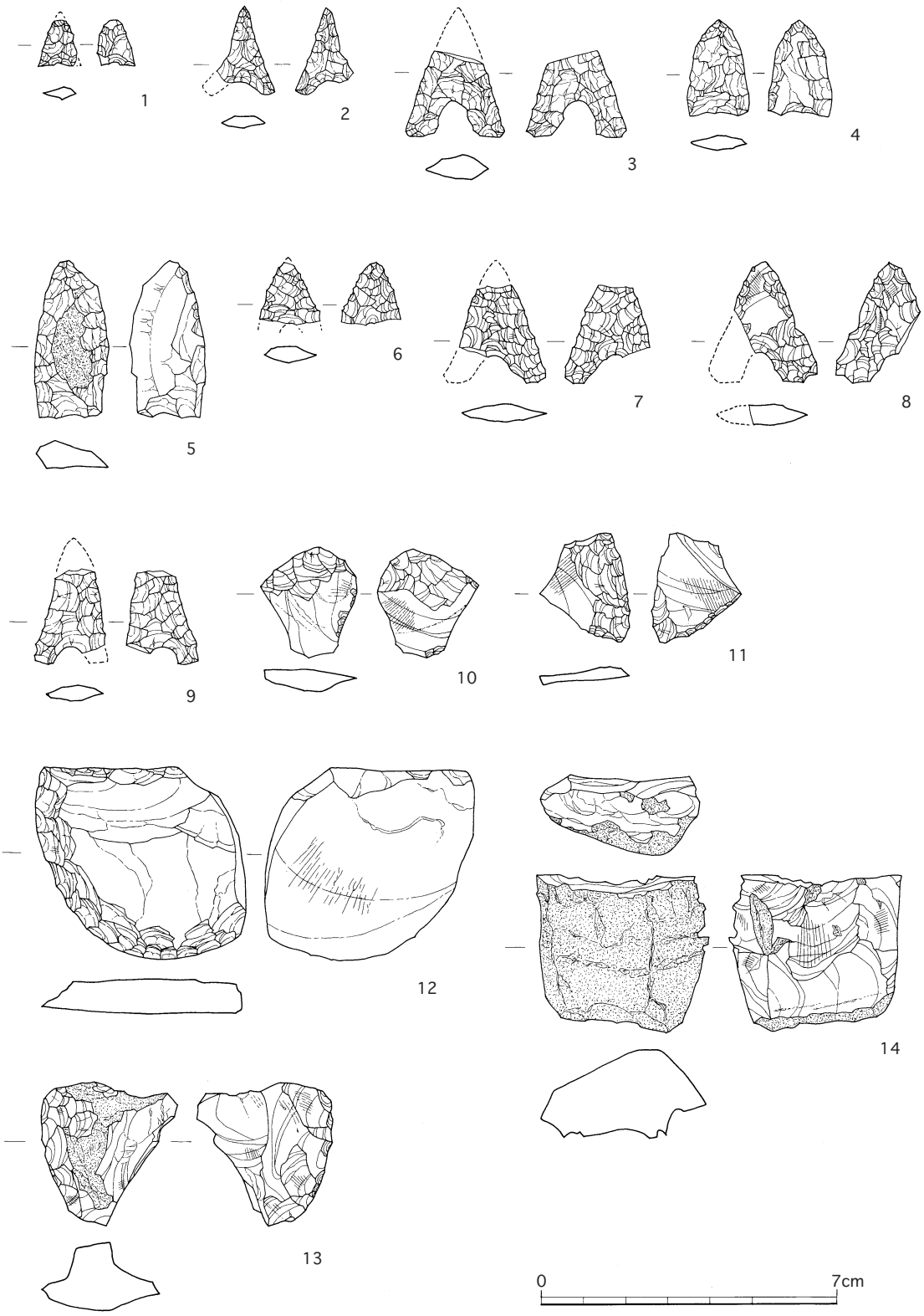
第204図　縄文土器実測図④（1/3）



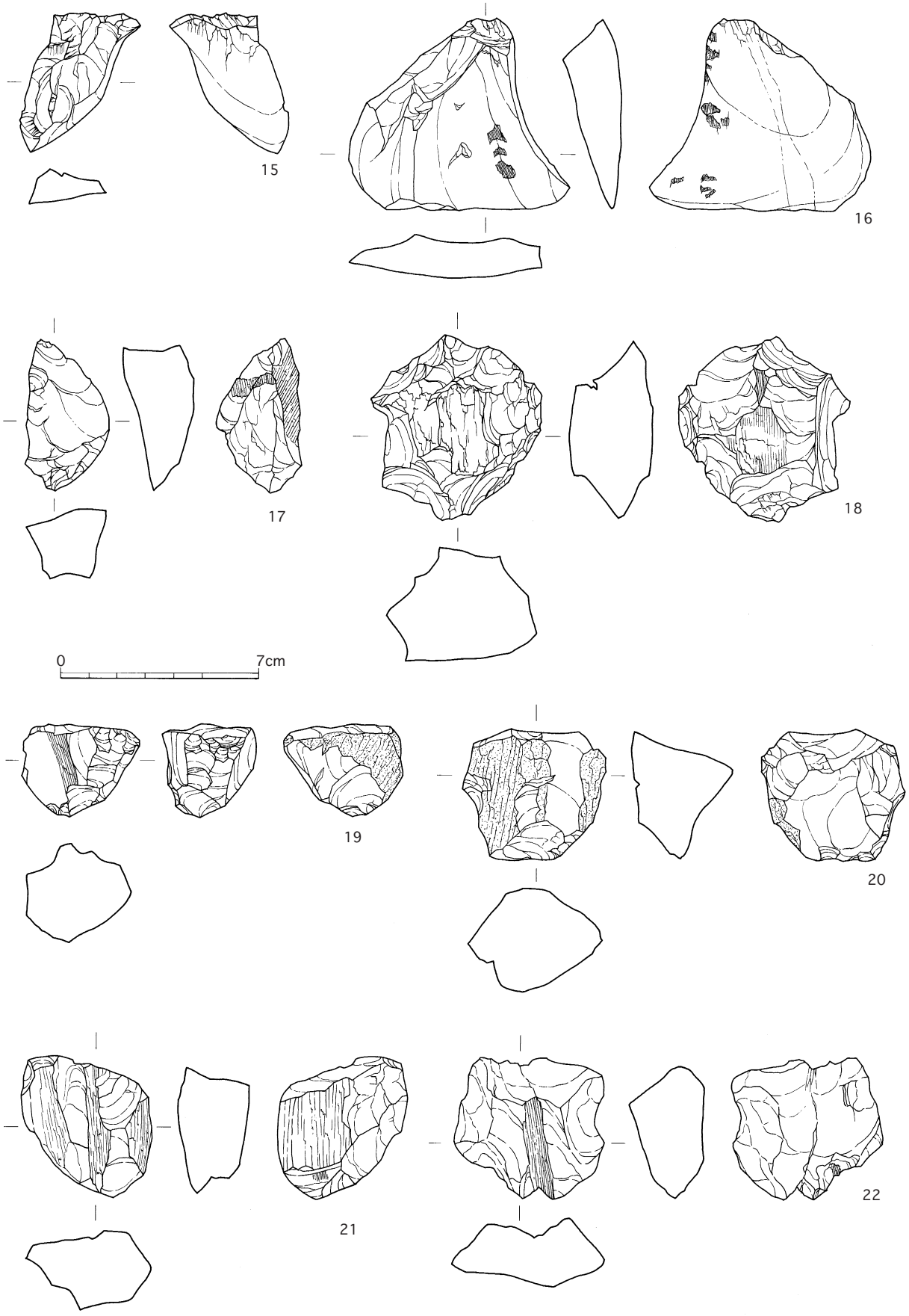
第205図　縄文土器実測図⑤（1/3）



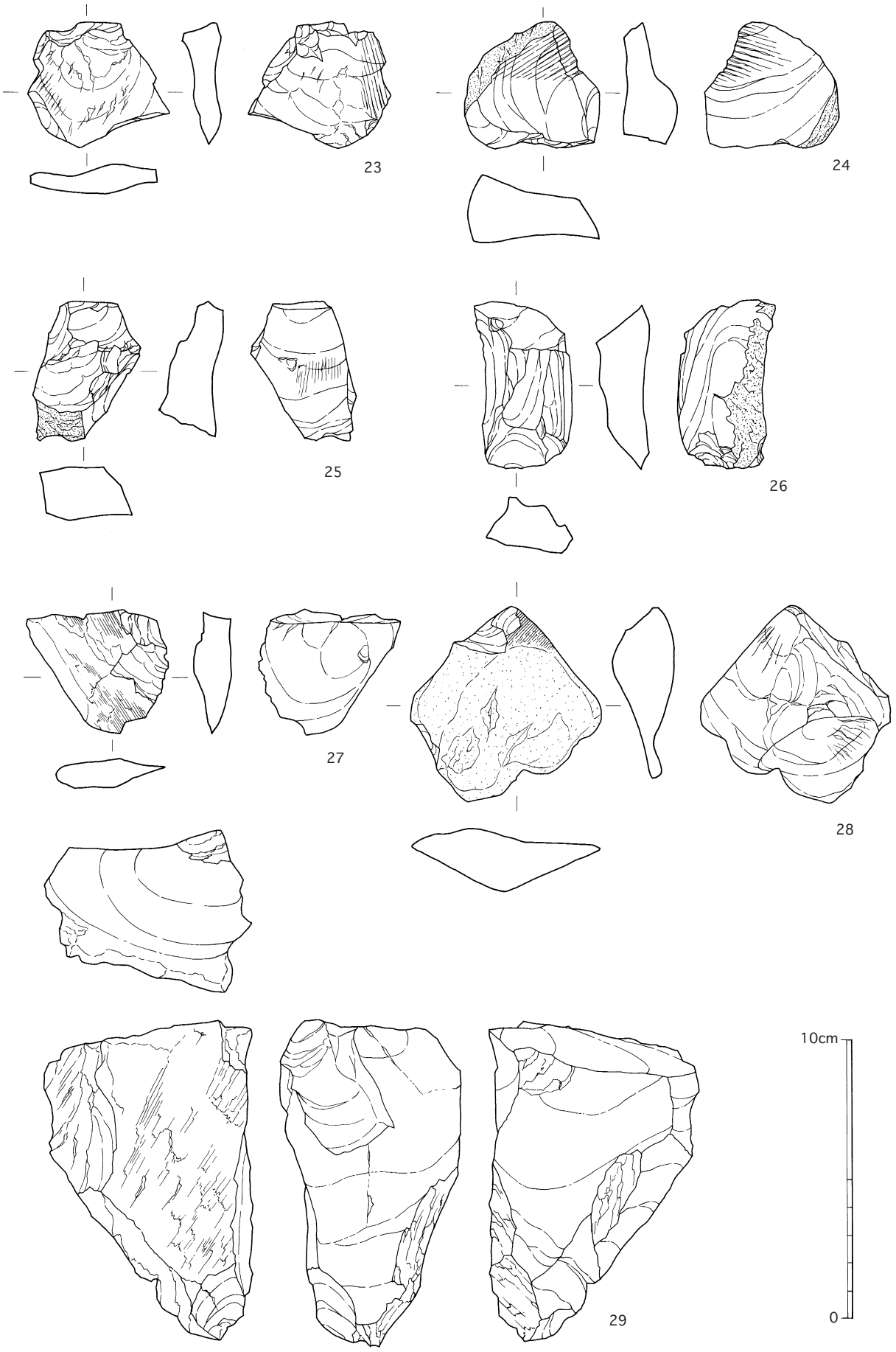
第206図　縄文土器実測図⑥（1/3）



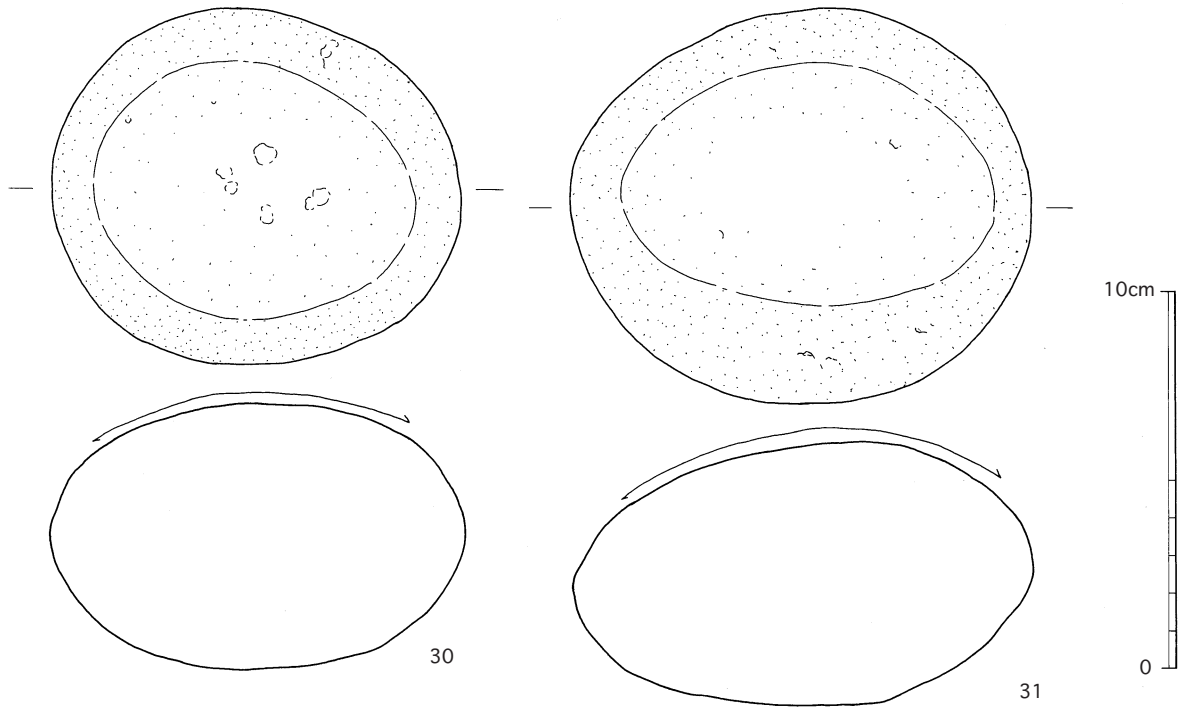
第207図　石器実測図①（2/3）



第208図　石器実測図②（1/2）



第209図　石器実測図③（1/2）



第210図　石器実測図④（1/2）

りな楕円文を施文する。20は口縁部があまり開かない器形となる。口縁部下に補修のための穿孔がある。

33～58は体部の破片資料である。胎土に角閃石を含むものや、器表に炭化物が付着するものが数点ある。57・58は大きな楕円文を施文する。

59～63は格子文施文の押型文土器である。59は斜格子、他は正格子となる。

64は縄文施文の土器である。１点のみ出土。

65～72は撚糸文施文の土器である。いずれも大振りな施文原体を使用し、強く施文されるため文様が明瞭である。焼成も良い。

73～79は条痕文を施文する土器である。施文具はいずれも二枚貝を使用する。73や79は内面ナデ調整。

80～85はナデ調整による土器である。80や84は胎土や器壁の厚さから押型文に伴うものと思われる。84の内面下方にはかすかに条痕調整が残る。

86～88は尖底の底部片で、刺突文土器もしくは押型文土器の底部である。調整は内外面ともナデ調整を行っており、86は指整形の稜線が残る。

89は隆起帯を巡らせる前期轟B式土器。90は一条の突帯を巡らせ、突帯上とその下部に２列の刺突文を巡らせるものである。内外面とも粗い二枚貝条痕調整を行う。前期であろう。

91～104は後期の土器であろう。91は口縁部が大きく開いた器形で、端部の外側に小さな刻目を施したものである。胎土に砂粒を多く含んでいる。92は口縁部が直立し、端部は水平な面をなす。口縁部下に小さな三角突帯を巡らせる。93は口縁端部に刻目を施文する土器で94と同一個体である。94は平底でスリムな器形となる。95は口縁端部と突帯上に刻目を施す。96は磨消縄文の

肩部破片。97は渦巻文の破片である。99は外面に太めの沈線が見られる。内面の調整は巻貝条痕。98は外面ナデ調整。100・101は条痕調整後にヘラミガキを行っている。

102～105は底部の資料である。102はわずかにレンズ状に膨らんだ底部となる。103は極端な上げ底、104は若干上げ底となる。

石器（図版83、第207～210図）

1～9は石鏃である。1～5は安山岩製。1は小型の三角鏃で先端部を欠損する。4は主剥離面を残す。形状は五角形に近く基部の抉りが浅い。5は調整が全体に及んでおらず、形状も不整形であるため未製品の可能性もある。6～8は黒色の黒耀石製石鏃である。3点とも漆黒色で不純物をほとんど含まない良質の黒耀石を使用する。6は基部を大きく欠損する。7・8はほぼ同じ大きさで、基部の抉りの深い三角形鏃である。9は姫島産黒耀石製の石鏃である。調整は全面に及ぶが左右が対照的ではない。

10・11は石鏃未製品か。どちらも漆黒色良質の黒耀石を使用する。10は打点側に丁寧な剥離調整を加える。11は打瘤を除去し、一側縁に丁寧な剥離調整を加えて整形を行っている。

12は安山岩製スクレイパーである。扁平な剥片の側縁に刃部加工を施したもので、剥離調整は片面のみ行う。表面の風化が著しい。

13・14は黒色黒耀石の石核である。13は漆黒色良質の黒耀石を使用し、石核に二次調整を加えて刃部として使用したようである。14は不純物が多い黒耀石を使用している。

15は黄茶色を呈した珪質岩の剥片である。当遺跡からは数点の珪質岩剥片が出土したが、製品は出土していない。

16～29は、珪化木の剥片である。珪化木の良質な部分を石器の材料とする目的で粗割を行ったようで、当遺跡からは人工的な剥離面を持つ珪化木剥片が多く出土している。大半は風化が進んで非常に脆くなっているが、中には17のように硬質を保つものや、26のように琥珀が部分的に残るものもある。

30・31は凝灰岩の円礫を使用した磨石である。擦痕はあまり顕著ではない。

石製装身具（図版83、第211図）

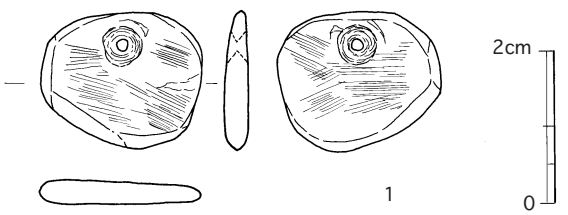
第211図1は石製装身具である。石材は硬質の頁岩もしくは安山岩を使用し黒色を呈する。形状は不整楕円形を呈し、長軸2.2cm、短軸1.8cm、厚さは3mmを測る。両面穿孔による直径1mm程度の孔がある。表面には整形時の擦痕が多く残る。

4）その他の時期の遺構と遺物

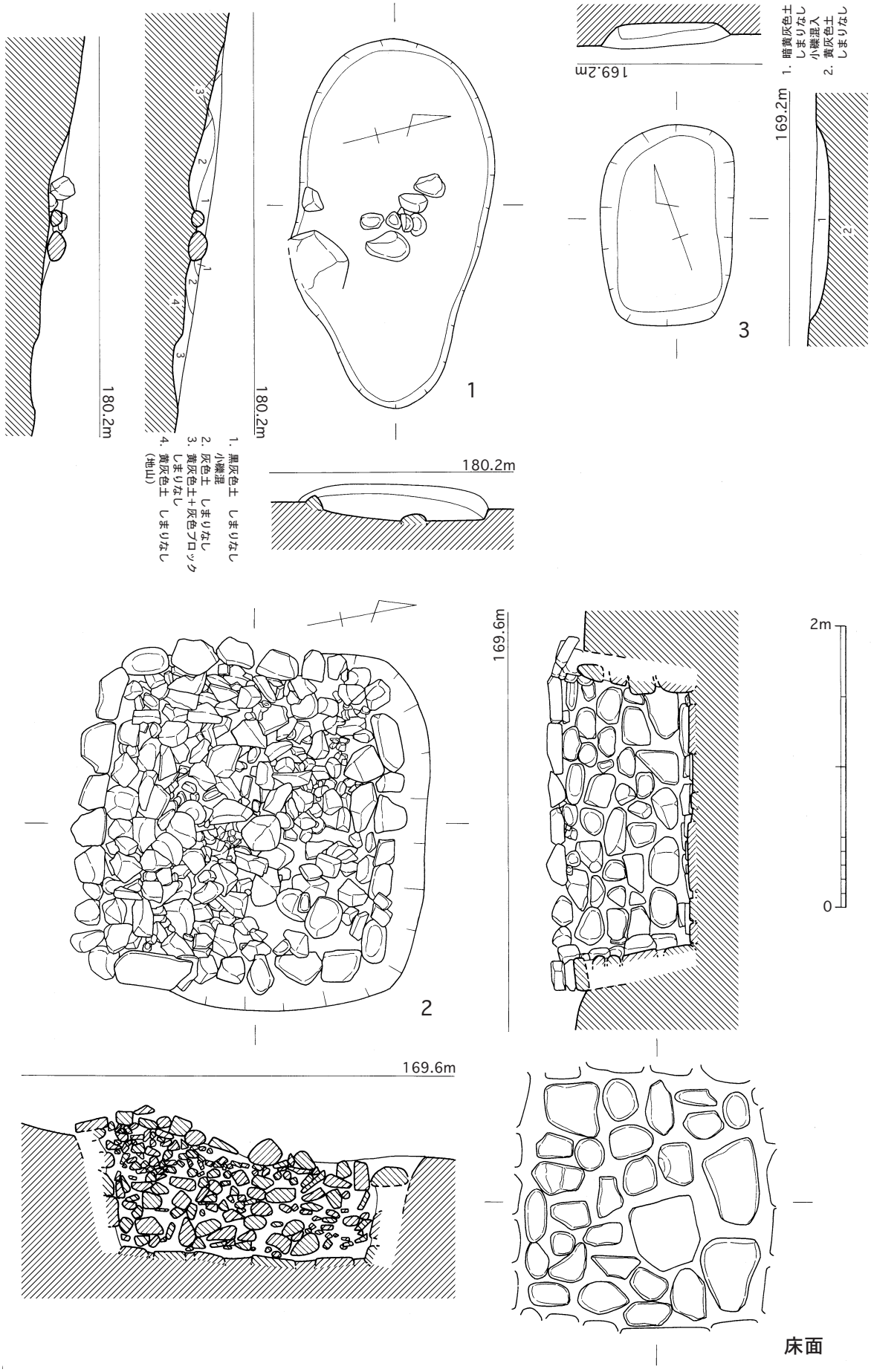
土坑

1号土坑（図版72、第212図）

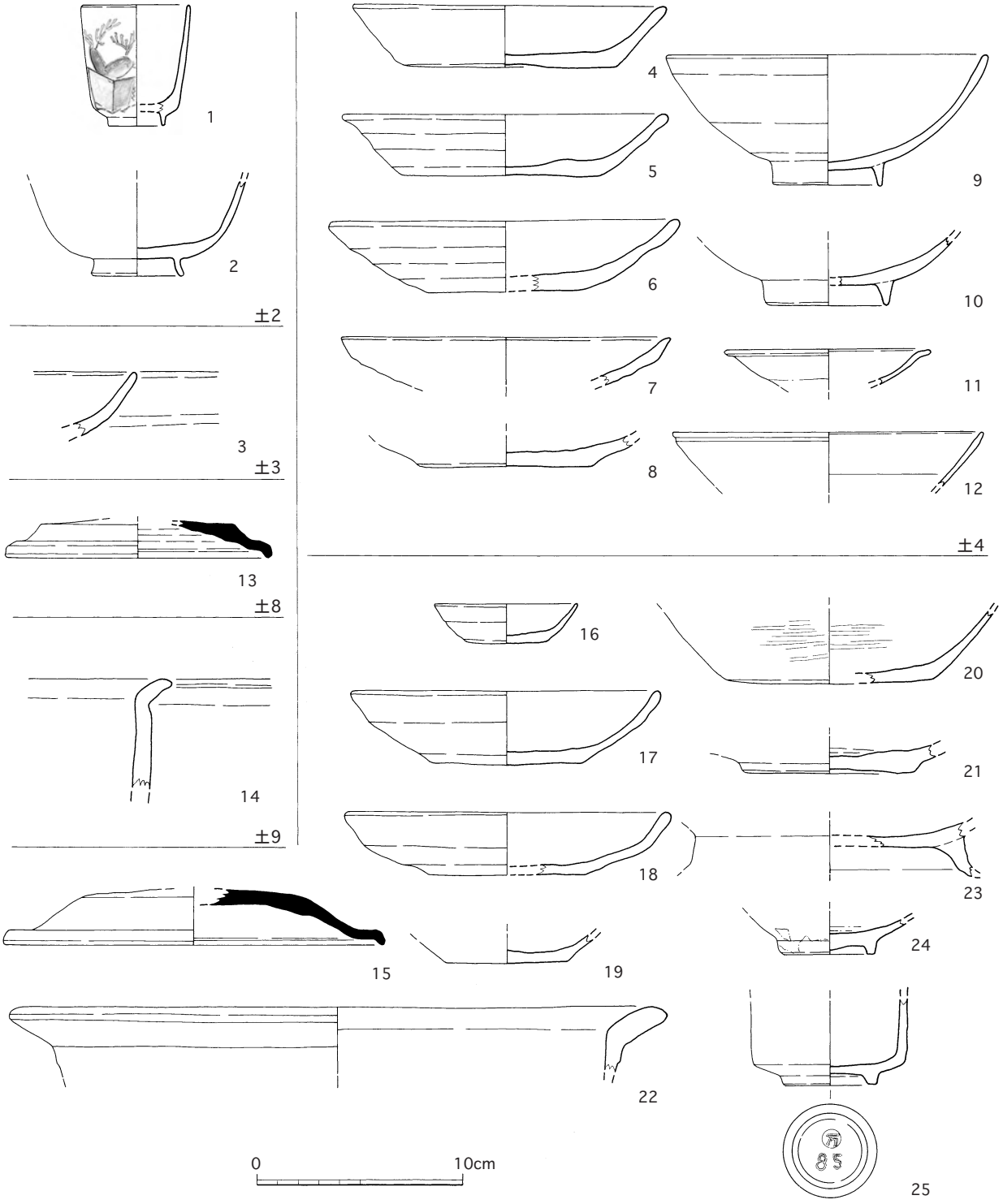
調査区西側で検出した土坑である。楕円形プランで長軸を東西方向にとり、長軸265cm、短軸135cm、深さは25cmを測る。壁の立ち上がりは緩やかで、中央に向かって緩やかに傾斜している。



第211図　石製装身具実測図（1/1）



第212図　1～3号土坑実測図（1/40）



第213図　土器・陶磁器実測図（1/3）

覆土は上層に黒灰色土、中層に灰色土、下層に灰色土ブロックの混ざった黄灰色土が堆積する。床面の中央には円礫数個がかたまって検出された。

遺物は全く出土しなかった。

２号土坑（図版73、第212図）

調査区西側で検出した石組の土坑である。遺構確認時には既に土坑内部に礫が充満した状態であったため、掘削前に一度図化作業を行い、内部の礫を除去しながら断面図を作成した。

土坑は一辺255cmの隅丸正方形を呈し、床面までの深さは90cmを測る。床面にはやや大きめの扁平な円礫が水平に敷き詰められ、隙間には粘土で目貼りを行う。側面は平坦面を持った円礫で覆われており、隙間にはやはり粘土で目貼りを行っている。最上部の礫のみは角礫を用いて縁取りを行っている。

土坑内部には大小の円礫が雑に投げ込まれたような状態であった。礫の隙間の土砂は全く締まりがない状況であった。

地元で一般的に「芋穴」と呼ばれる貯蔵施設だったのではないかと思われる。

出土遺物（図版84、第213図）

１は湯呑碗である。口縁部がほとんど開かず筒状の器形になる。外面には無色釉を塗布後に金色・灰色・水色・茶色で文様をプリントする。高台径2.8cm。

２は磁器碗である。見込みの部分が広く、直線的に開く体部となる。釉は内面に無色釉を、外面に緑灰色の釉を塗布する。内面見込みは釉を輪状に掻き取る。高台径4.4cm。

３号土坑（図版73、第212図）

調査区の西側、２号土坑の南東で検出した土坑である。隅丸長方形を呈し、南北方向に長軸をとる。長軸145cm、短軸95cm、深さ20cmを測る。壁の立ち上がりは緩やかで、床面はほぼ水平となる。覆土は暗黄灰色土の単一層で、小礫を若干含み締まりがない。

出土遺物（第213図）

３は土師器皿である。内外面横ナデ調整を行う。

４号土坑（図版74、第214図）

調査区の西側、２号土坑の東側で検出した土坑である。不整円形を呈し、長軸125cm、短軸110cm、床面は東側がやや深くなっており、深さは25cmを測る。壁は東側は急角度に、西側は緩やかに立ち上がる。覆土は上層に黒灰色土、下層に暗黄灰色土が堆積する。土坑の中央からやや東寄りの位置で土器がまとまって出土した。第215図の砥石もこれらの土器と同じ位置で出土した。

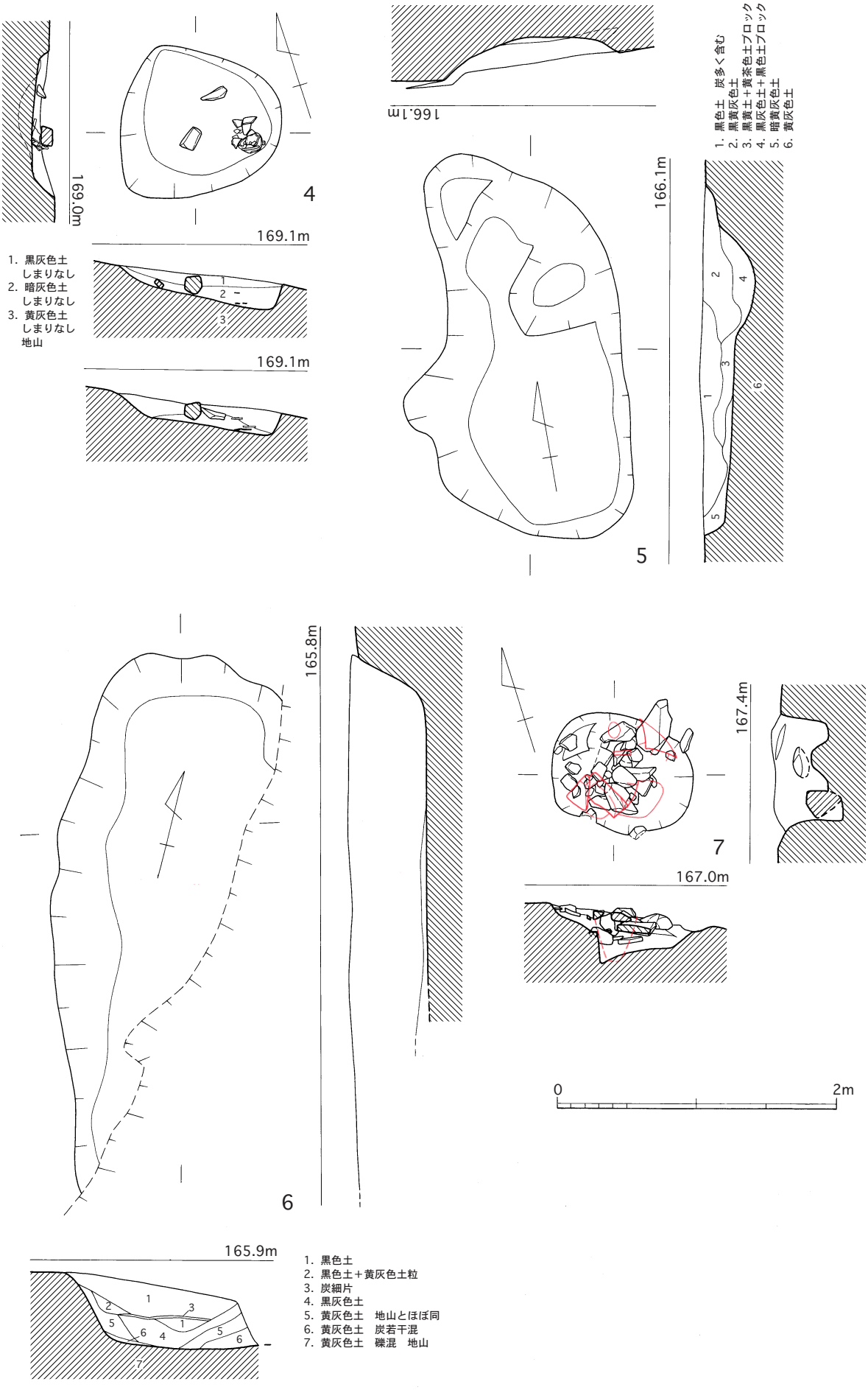
出土遺物（図版84、第213図）

４～８は土師器皿である。口径15.2～17.0cm、底径7.3～10.3cm、器高3.0cm～3.5cm。底部糸切り。

９・10は土師器椀である。９は口径15.5cm、器高6.3cm、高台径5.4cm。10は高台径6.2cm。

11・12は白磁である。11は白磁小皿。口縁部が水平に折れた器形となる。口径10.0cm。12は口縁部下に一条の沈線を巡らせる。口径15.0cm。

第215図は粘板岩製の砥石である。石材の肌理が細かく、仕上げ用の手持ち砥石として使用されたものと思われる。よく使い込まれており研ぎ減りが著しい。

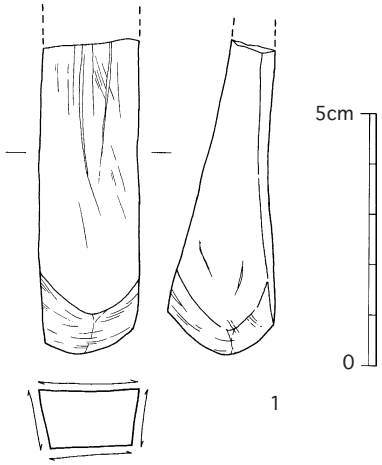


第214図　4 ～ 7 号土坑実測図（1/40）

5号土坑（図版74、第214図）

調査区の南端で検出した土坑である。不整楕円形プランで長軸を南北にとり、長軸285cm、短軸160cmを測る。床面は中央からやや北寄りの所がピット状に深くなっており深さは40cm、北端はテラス状に浅くなっており深さ10cm、他の箇所は深さ20cmを測る。壁の立ち上がりは比較的緩やかである。覆土は最上層の中央部分に炭を多量に含んだ黒色土層があり、下層に進むに従って黒色が薄れていく。

遺物は出土しなかった。



第215図　砥石実測図（2/3）

6号土坑（図版74、第214図）

調査区の南端で、5号土坑の東側に隣接した位置で検出した土坑である。東側が後世の土地開墾の際に削平を受けているが恐らく長方形プランだったと思われ、長軸を南北方向にとる。現存部分で長軸385cm、短軸170cm。床面はほぼ水平をなし、深さは55cm。壁は比較的急に立ち上がる。覆土は上層に多量の炭に由来する黒色土が堆積し、その下層には1cm程度の厚さで炭の細片が堆積している。更にその下層には上層と同じく黒色土があり、この層から床面までは徐々に黒色を減じていく。

遺物は出土しなかった。

7号土坑（図版75、第214図）

調査区北側で検出した土坑である。不整円形を呈し、長軸100cm、短軸80cmで東西方向にわずかに長い。床面は中央付近が最も深く45cmを測る。壁の立ち上がりは緩やかである。土坑の内部からは大小の角礫が数点出土した。

遺物は出土しなかった。

8号土坑（図版75、第216図）

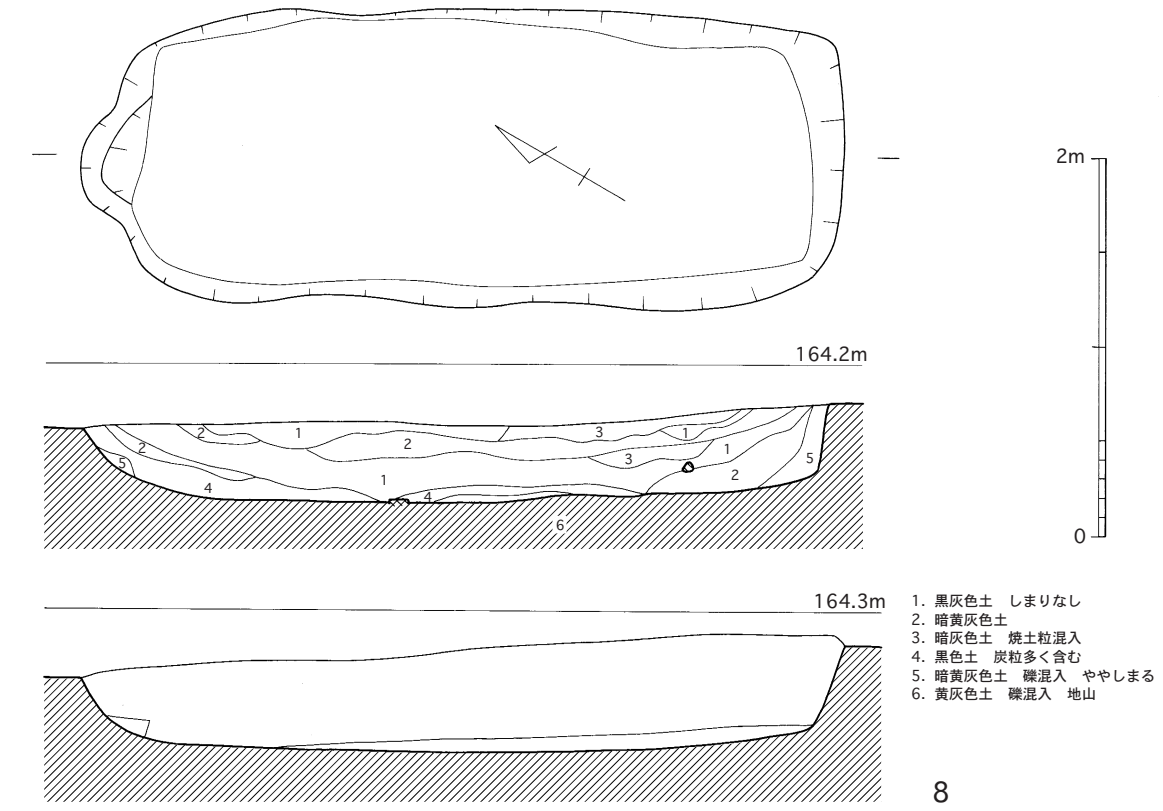
調査区南東側で検出した土坑である。比較的整った長方形を呈し、長軸を北西－南東方向にとる。長軸405cm、短軸160cm、床面はほぼ水平で深さは60cmを測る。壁は比較的急な角度で立ち上がる。覆土は第3層に焼土粒、第4層に炭の細片が多く含まれる。

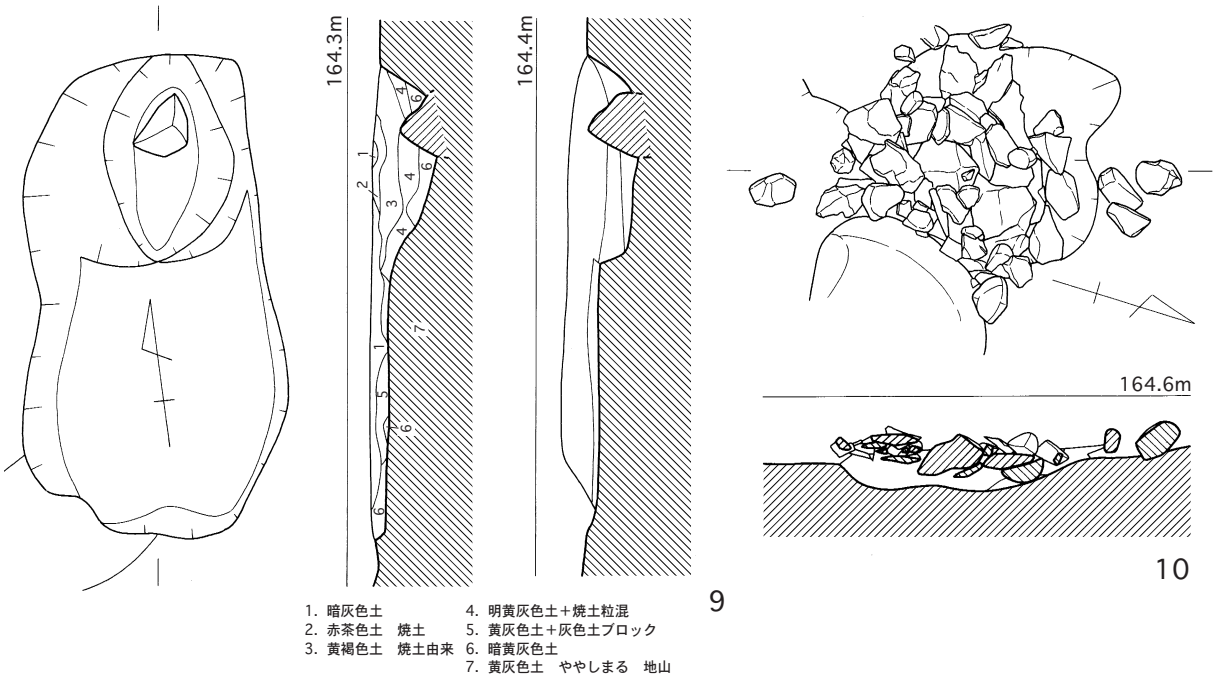
出土遺物（第213図）

13は須恵器蓋である。天井部はほぼ水平をなし、端部は丸く、短く下方を向く。径12.8cm。

9号土坑（図版75、第216図）

調査区東側、8号土坑の北側で検出した土坑である。不整長方形を呈し、長軸を南北方向にとる。長軸260cm、短軸145cm、床面は北側が深く40cm、中央から南側にかけて浅くなっており15cmを測る。北側の最深部で検出した礫は地山に含まれる自然礫である。覆土は第2層から第4層に焼土粒が含まれる。





第216図　8～10号土坑実測図（1/40）

出土遺物（第213図）

14は土師器甕である。体部は直立し、口縁部が短く外側に折れ端部は丸味を帯びる。内外面ともナデ調整を行う。

10号土坑（図版76、第216図）

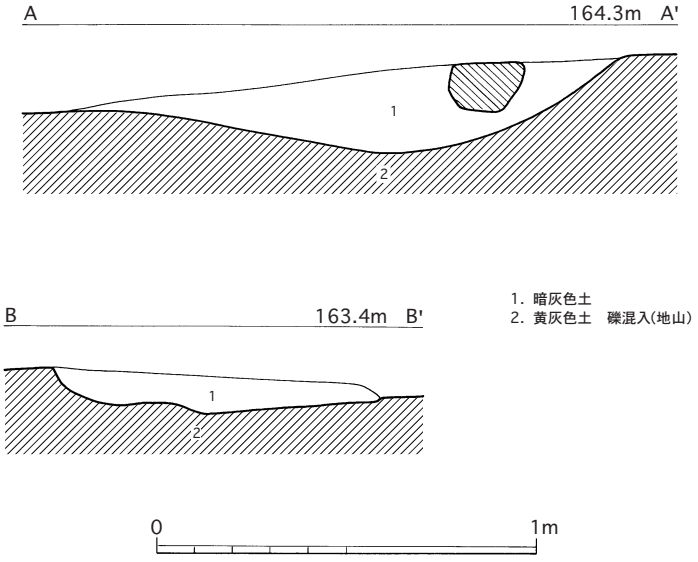
調査区東側、９号土坑の西側で検出した土坑である。不整形を呈し長軸130cm、短軸120cm、深さ20cmを測る。壁の立ち上がりは緩やかで、中央に向かってすり鉢状に傾斜する。土坑内からは多数の角礫が出土した。

遺物は出土していない。

溝

１号溝（第217図）

調査区東側で検出した溝である。北東－南西方向に直線的に伸びる溝と、西北西－東南東に直線的に伸びる溝からなるが、両者の接続部分は他の遺構が重複しているせいもあって明瞭でない。北東－南西溝は長さ16m、幅140cm、深さ25cm。壁の立ち上がりは緩やかで、溝底との区別が不明瞭である。覆土は暗灰色土の単一層。西北西－東南東溝は長さ10m、幅85cm、深さ10cm。床面は比較的平坦である。壁の立ち上がりは緩やかで溝底との区別が不明瞭である。覆土はやはり暗灰色土の単一層。



第217図　１号溝断面土層図（1/20）

遺物は出土していない。

その他出土遺物（図版84、第213図）

15は須恵器蓋である。天井部は水平に近く、口縁部は水平に開き端部が短く下方を向く。口径18.6cm。東側遺構面出土。

16は土師器小皿である。口径7.0cm、器高2.0cm、底径4.0cm。底部糸切り。ピット出土。

17～19は土師器皿である。17は口径15.0cm、器高3.6cm、底径7.3cm。底部糸切り。北側遺構面出土。18は口径16.0cm、器高3.0cm、底径7.6cm。北側遺構面出土。19は中央付近包含層出土。底径6.0cm。

20は古代の土師器坏。内外面にヘラミガキが認められる。底径10.0cm。中央付近包含層出土。21は底部が高台状に厚くなる皿。底径8.4cm。底部糸切り。ピット出土。

22は土師質土鍋である。口縁部が肥厚し、外側に屈折している。調整は内外面ナデ。ピット出土である。

23は瓦質焼成の香炉である。全面ナデ調整。ピット出土。

24は陶器碗である。釉色は黄灰色。高台部露胎。内面見込みの釉掻き取り。ピット出土。

25は型押し整形の陶器湯呑である。底部には「○に万」と「85」の陽刻がある。遺構面出土。

石敷路（図版76～80、第218～235図）

蔵持川に沿って、蔵持山や鐙畑地区へと向かう里道で確認した石敷遺構である。

第１次調査で（第218～222図）石敷を確認した長さは約50.5m、幅は２m前後である。標高は調査区西端で182.6m、東端で174.7mを測り、高低差は7.9mである。全体の清掃後、写真撮影を行った後に全体を５つに区分し、20分の１の実測図の作成を行った。

第２次調査（第223～233図）は第１次調査の成果でも報告されている石敷路の続きを検出した。第２次調査区内での全長は128.5mで、幅は1.5～3.6mと流動的である。標高は、調査区西端で212.8m、一方の調査区東端で194.8mを測り、高低差は18mである。路面の勾配は約８°で、比較的緩やかであるといえよう。平板測量とともに20分の１の実測図の作成を行ったが、かなり蛇行していることから、参道の主軸に配慮しながら全体を９分割して実測を行った。分割した地区は、山頂側よりａからｊまでの測量点によって分けられ、本書で掲載する実測図もこれに従って掲載している。

第３次調査は祓川左岸の川沿いに続く国道496号から蔵持山方面へと伸びる里道の始点から300mほど山側に向かった地点にあたり、石敷等の状態の良い約50mについて調査を行ったものである。標高は147m～157mで幅は1.6m前後である。以下、図に沿って説明を行う。

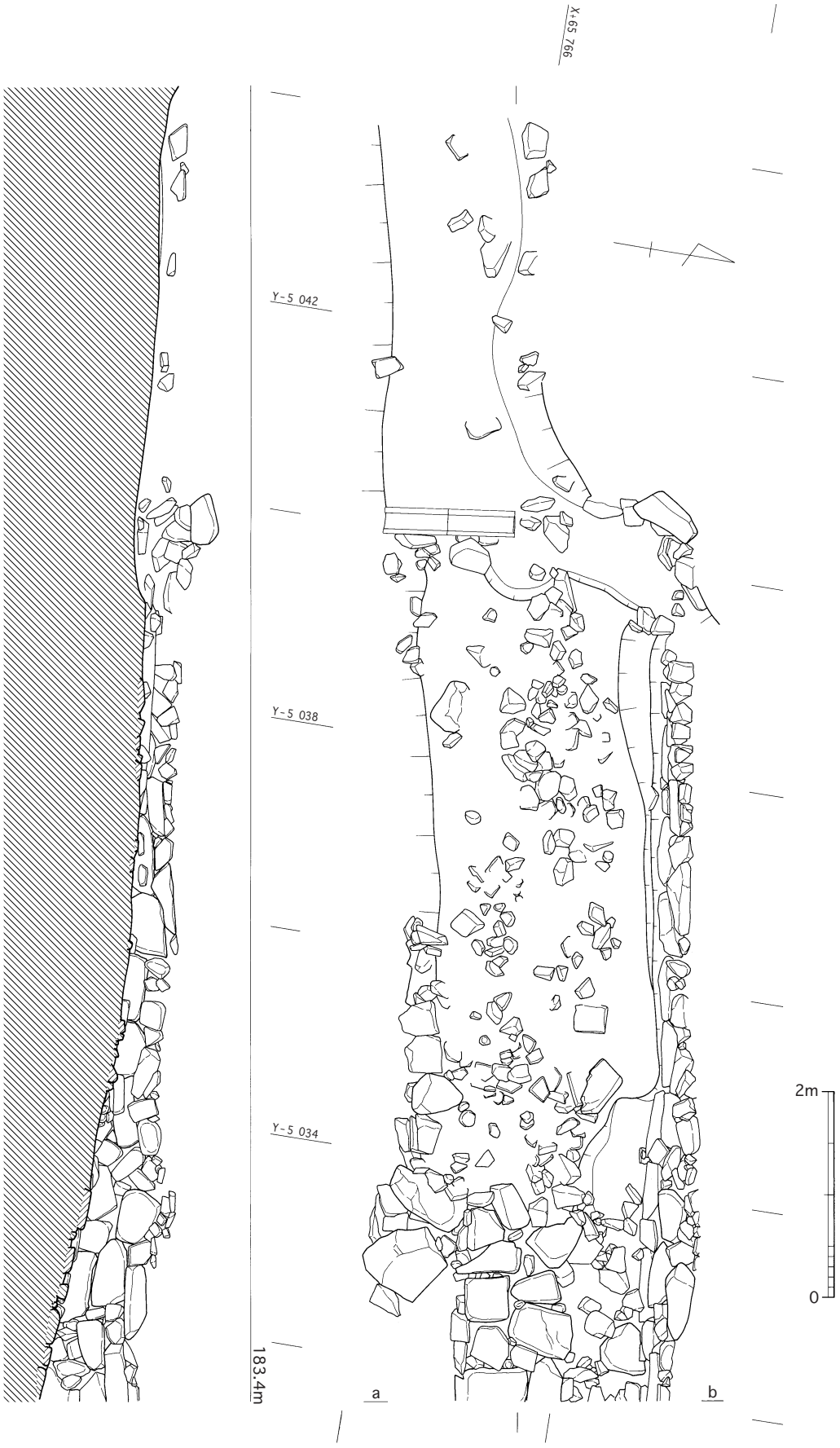
第218図は第１次調査で検出した石敷路の最も西側の箇所である。西端部で標高182.6m、中央付近で182.4m、東側で181.4mを測る。西側から中央付近は平坦で、東側は傾斜しており高低差80cmを測る。中央から西側は既に損傷が著しく、部分的に石が遺存するだけである。この付近は20cm前後の扁平な角礫を使用する。東側は比較的良い状態で石敷が残り、ここでは50～60cmの大きな平石を使用し隙間には小礫を詰め込む。

中央から東側にかけて、北側側面には高さ100cmの石垣、南側側面の一部にも低い石垣が見られる。

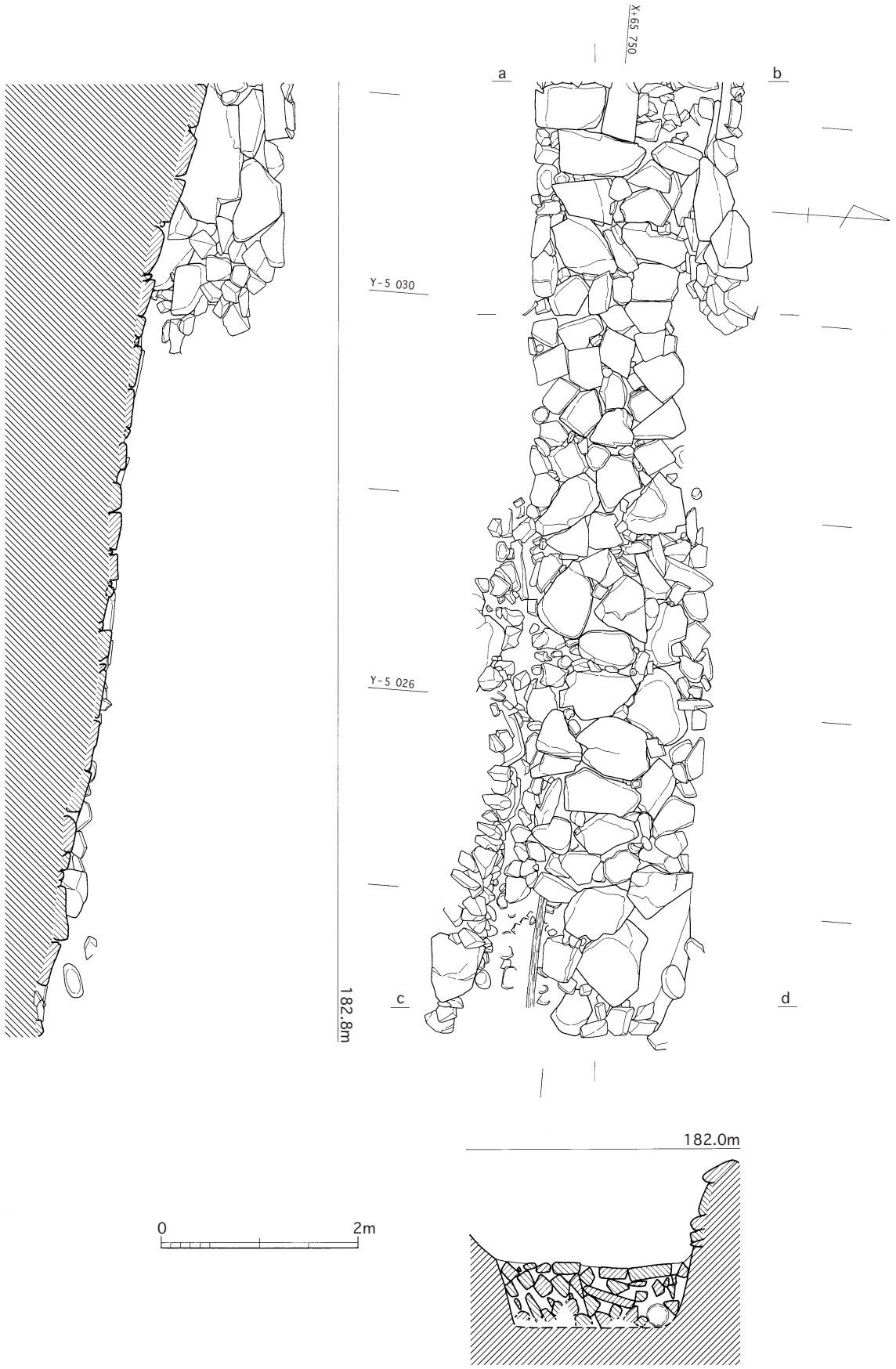
第219図は全体を通して最も良好な状態で石敷が遺存する箇所である。西端部で標高181.4m、中央付近で180.6m、東端部で179.8mを測り、高低差は160cm。東側・西側は傾斜し、中央付近のみ平坦になる。西側から中央部分までは40～100cm程の板石を使用し、中央から東側は60～100cmと大きな板石を使用して、隙間に小礫を詰め込んでいる。西側と東側では石の組み方が異なっており、石の敷き直しが行われたものと思われる。

横断面図を見ると、路面から70cmの深さで礫が雑に詰め込まれる。これは礫の隙間を雨水が流れるよう意図したものと思われる。後世の補修の際に行ったものであろうが、北側隅部には排水目的のコンクリート管が埋設されていた。

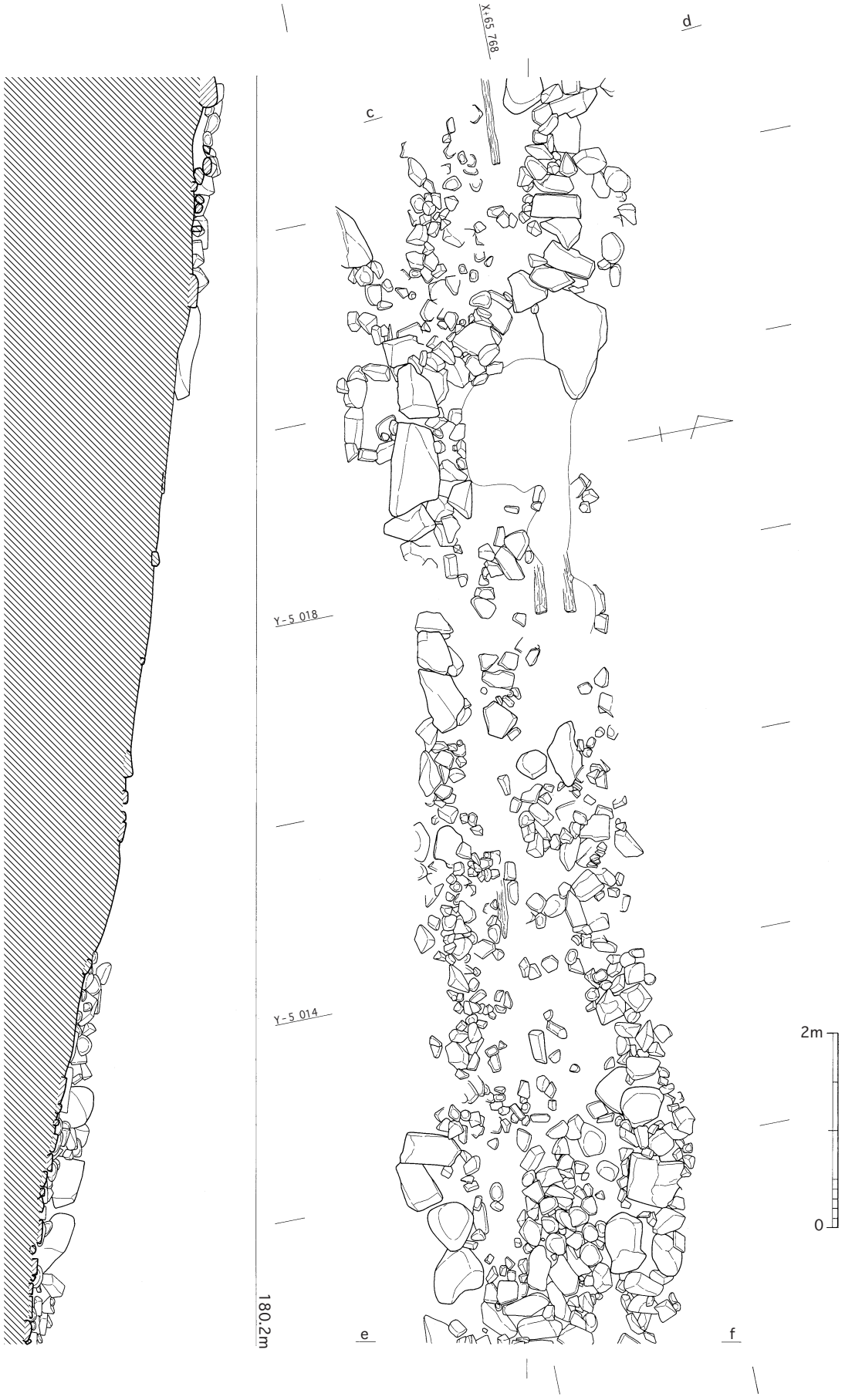
北側側面には西端のみ高さ120cmの石垣、南側側面では中央から東側にかけて小振りな礫の小口積みによる石垣が見られる。



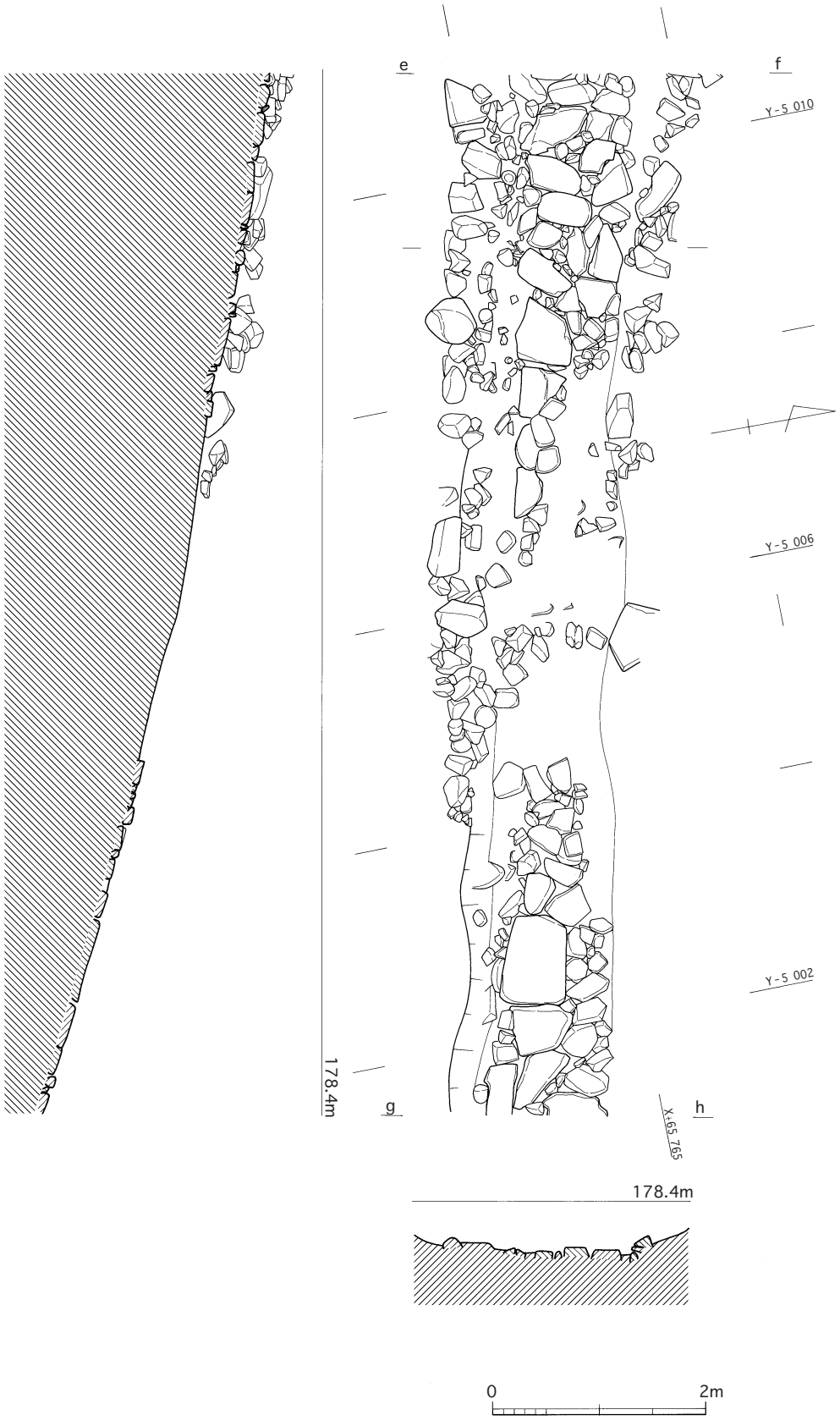
第218図　石敷路実測図①（1/60）



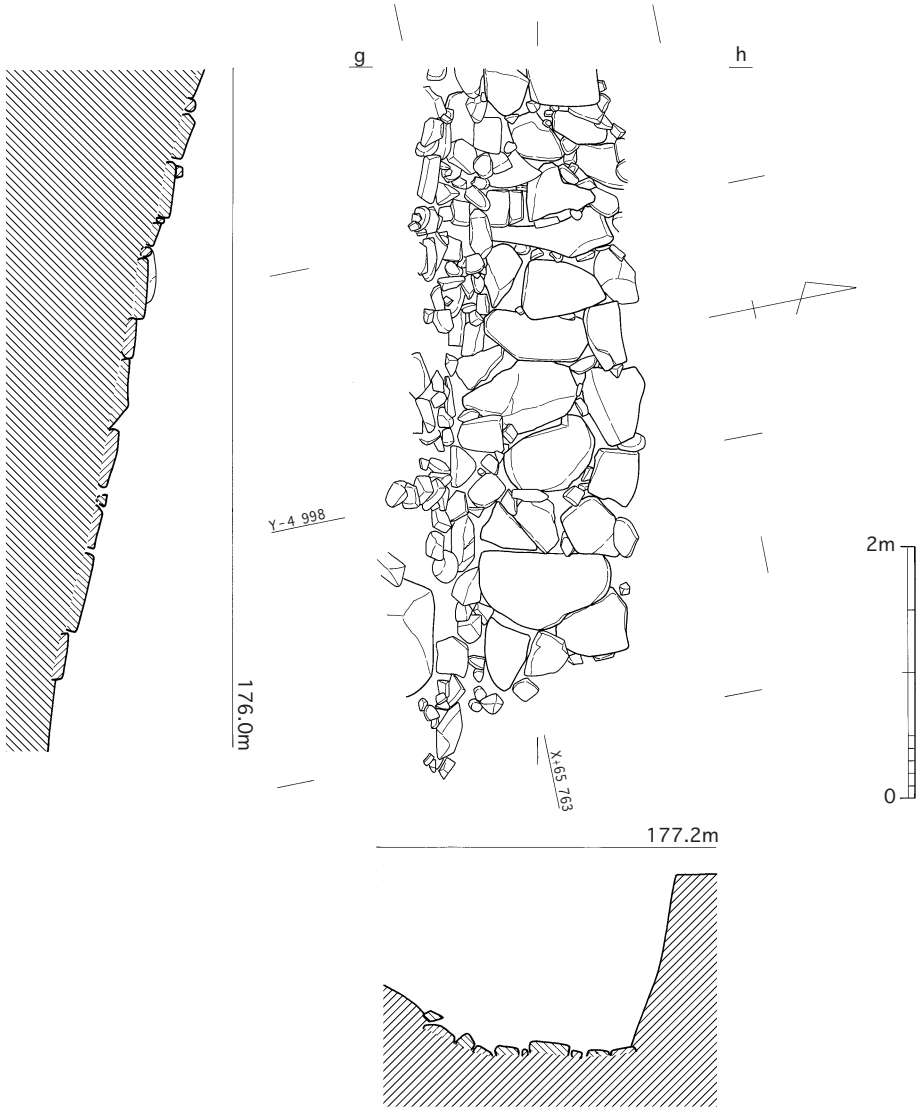
第219図　石敷路実測図②（1/60）



第220図　石敷路実測図③（1/60）



第221図　石敷路実測図④（1/60）

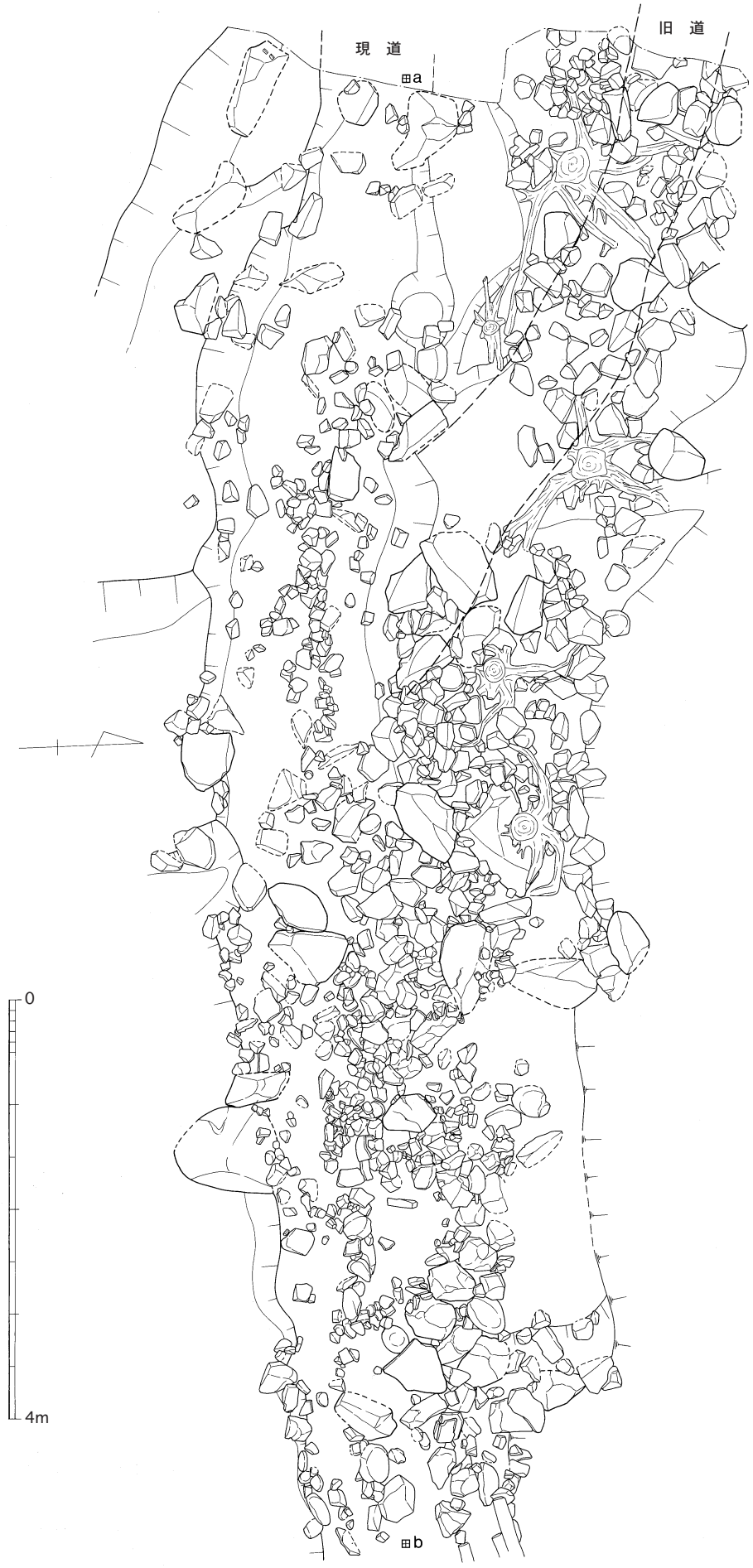


第222図　石敷路実測図⑤（1/60）

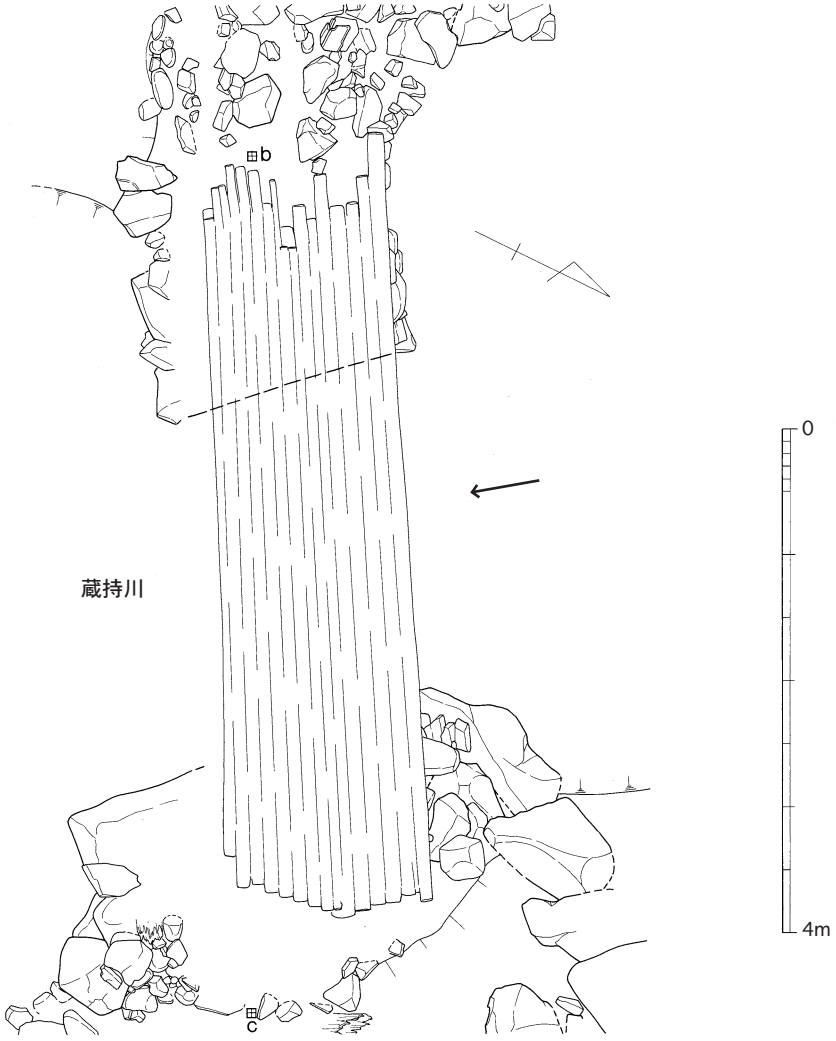
第220図は西端部で標高179.8m、中央付近で178.9m、東側で177.9mを測り、高低差は190cmを測る。全体的に西から東へと傾斜している。石敷の損傷が著しく、東端付近を除くとほとんど残っていない状態である。更に部分的にコンクリートで表面を被覆して路面の補強を行ったところもある。

第221図は西端部で標高177.9m、中央付近で177.0m、東端部で175.8mを測り、高低差は210cmを測る。もっとも急傾斜の箇所である。中央付近は石敷の損傷が著しい。西側と東側で様相が異なっており、西側は60～80cmの平石を敷いて隙間に小礫を詰め込むが、東側は西側よりも大きな平石を使用し、小礫の隙間への詰め込みはほとんど行っていない。側縁には20～40cmの礫を低い石垣状に積み上げているところが部分的に見られる。

第222図はもっとも東側の箇所である。西端部で標高175.8m、東端部で174.7mを測り高低差は110cmである。比較的遺存状況が良く、100cmを超える大きな平石を丁寧に敷き並べて平滑な路面を造成している。北側は掘削した崖面そのままの状態が露出しているが、南側は小礫を数段雑に



第223図　石敷路実測図⑥（1/60）

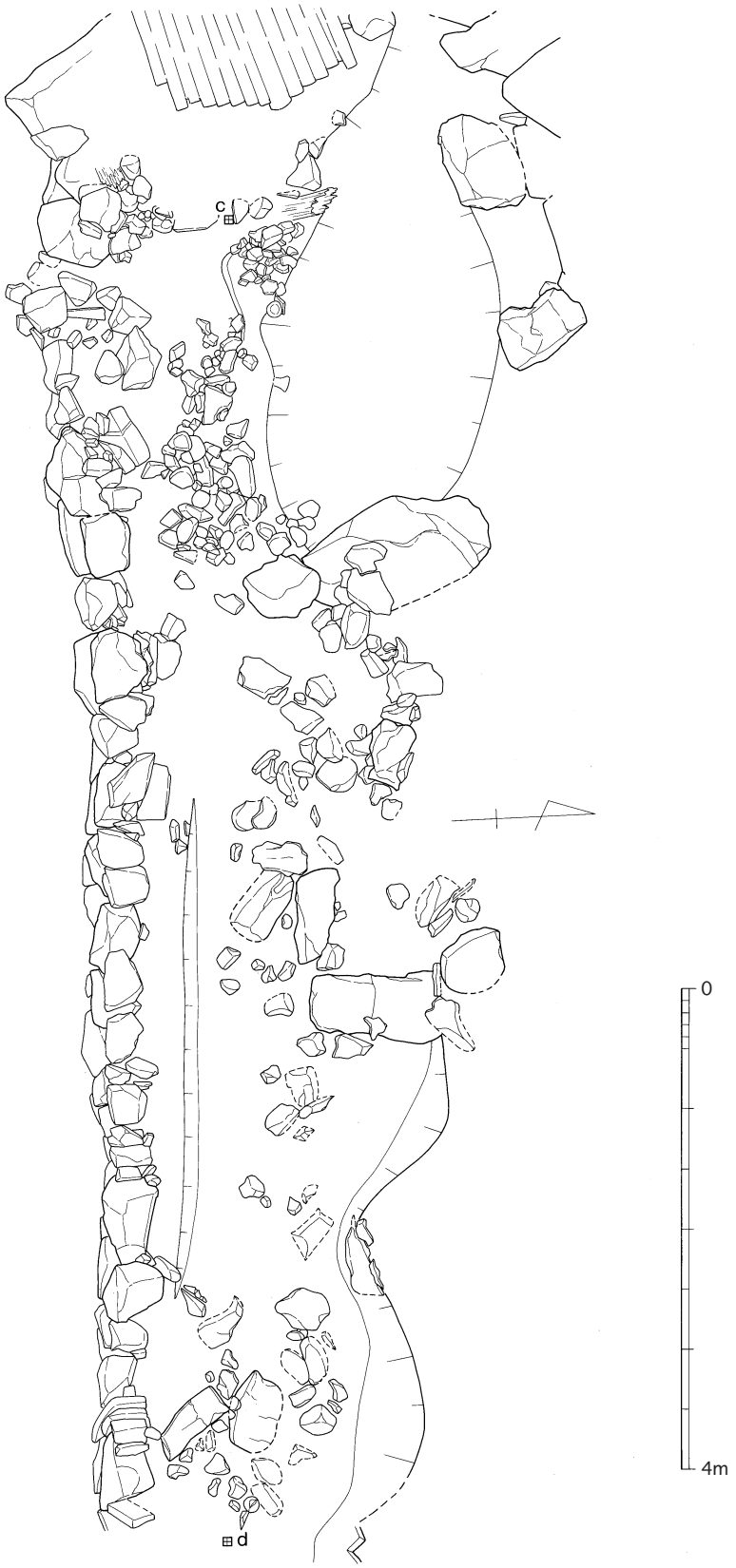


第224図　石敷路実測図⑦（1/60）

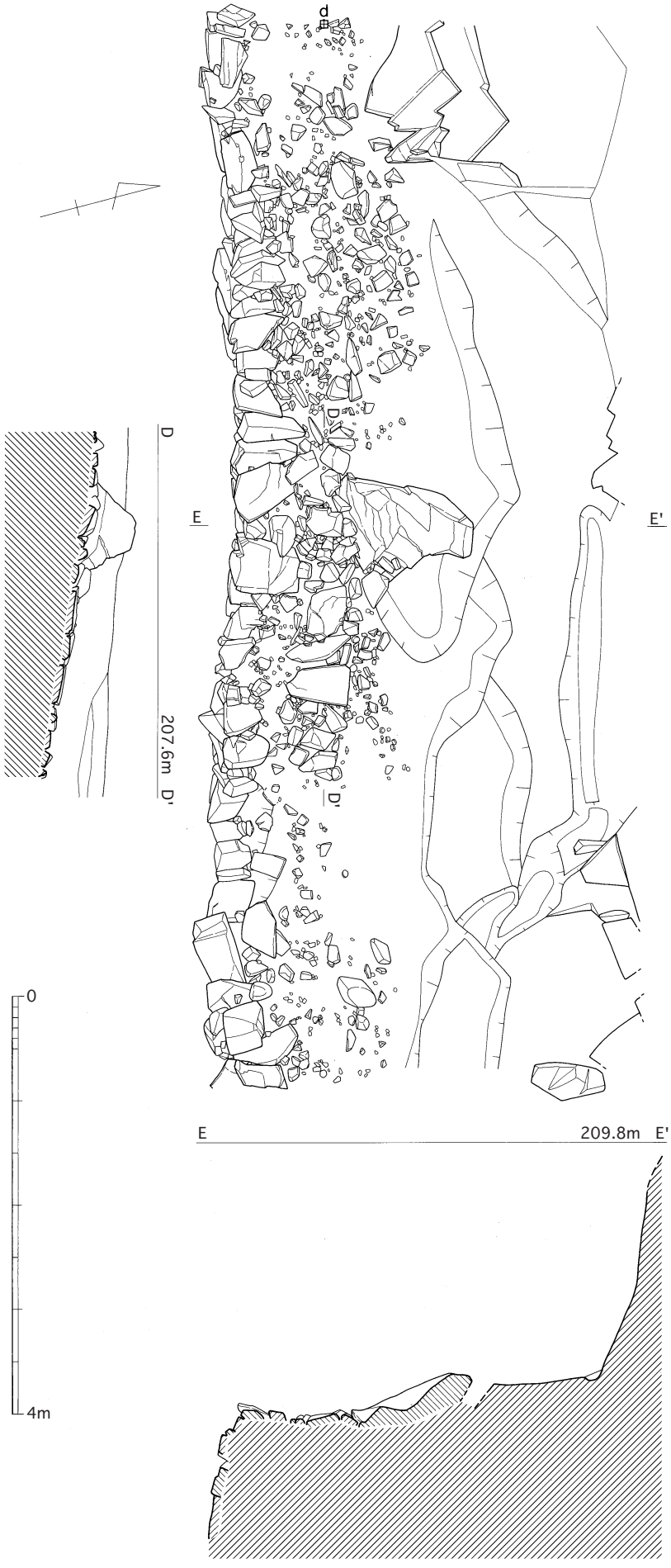
積み上げて石垣としている。

第223図はａ－ｂ間である。標高は西端で212.6m、東端で209.9mを測り、高低差は2.7mである。ただし、後述するように西側には旧道が存在し、旧道の西端は212.8mであるので、旧道を含めた高低差は2.9mである。区間長は14.0mである。この区間は第２次調査区内では最も礫が多いが、全体に本来の参道の状況を留めるものは少なく、後世になって道端に動かされた状態とみられる。西寄りでは参道がY字状に枝分かれしているが、現在もa点から数メートル西側で、蔵持山の山頂方面と鐙畑方面との分岐があり（第180図参照）、今回確認した枝分かれの位置が本来の分岐点であったことがわかる。したがって、北側は蔵持山山頂へ向かう参道の旧道、南側は本来鐙畑へ抜ける山道ということになる。全体に遺存状況は良くないが、道そのものの断面形は浅く幅広のU字状を呈する。

第224図はｂ－ｃ間である。標高は西端で209.9m、東端で208.9mを測り、高低差は1.0mである。区間長は6.4mである。この区間には蔵持川が流れ、細い丸太を20本程度渡して木橋としている。この川は、蔵持山山頂から南に少し下ったあたりに広がる坊跡群の間を抜けて流れる谷川であ



第225図　石敷路実測図⑧（1/60）



第226図　石敷路実測図⑨（1/60）

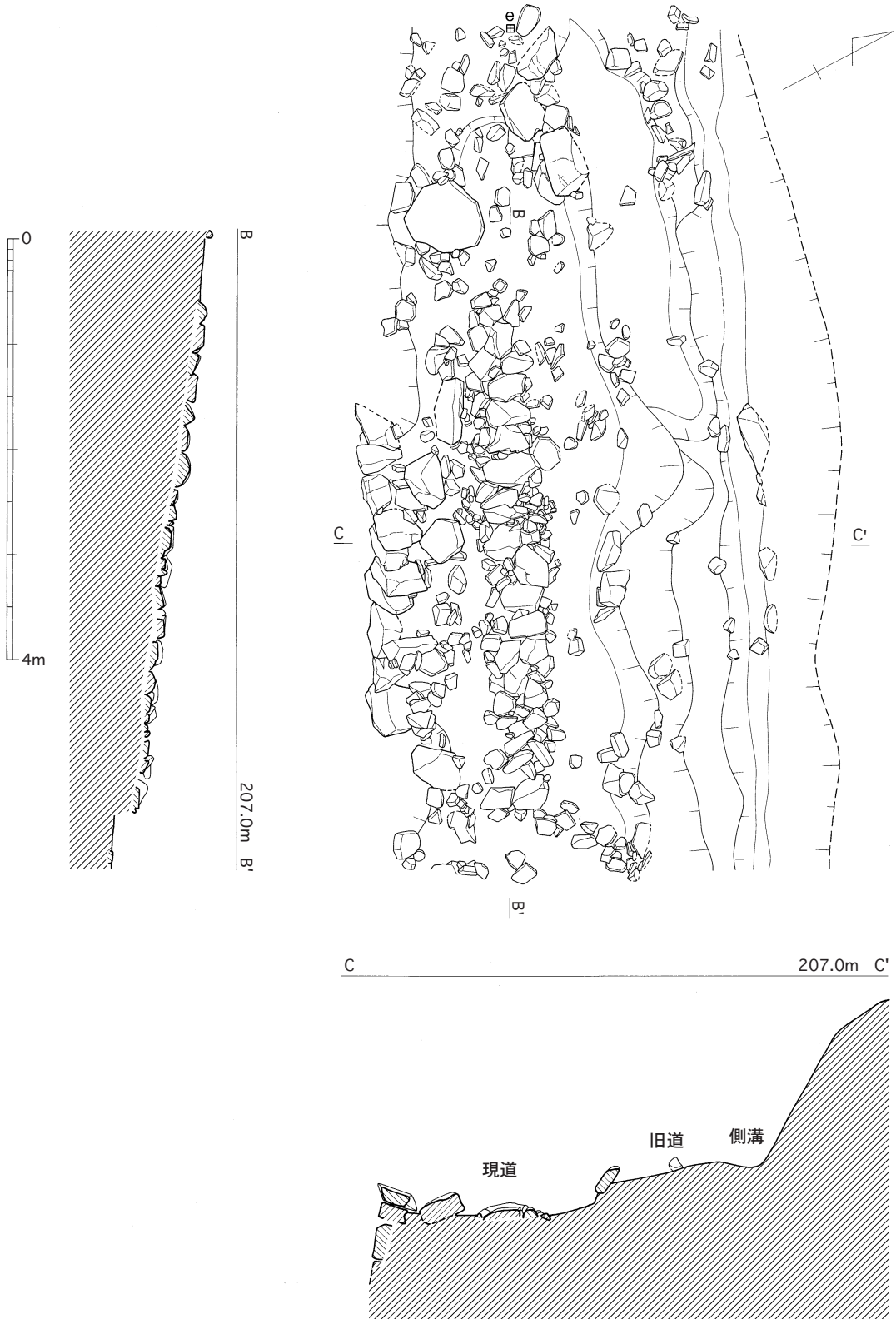
第227図　石敷路実測図⑩（1/60）

る。木橋は現代のものであるが、川の両岸に築かれた石垣はもう少し遡ると考えられる。なお、この川床には中世から近世と推定される土師器の細片が若干みられた。上流の遺跡から流されてきたものと考えられるが、微細な破片であるため採集はしていない。

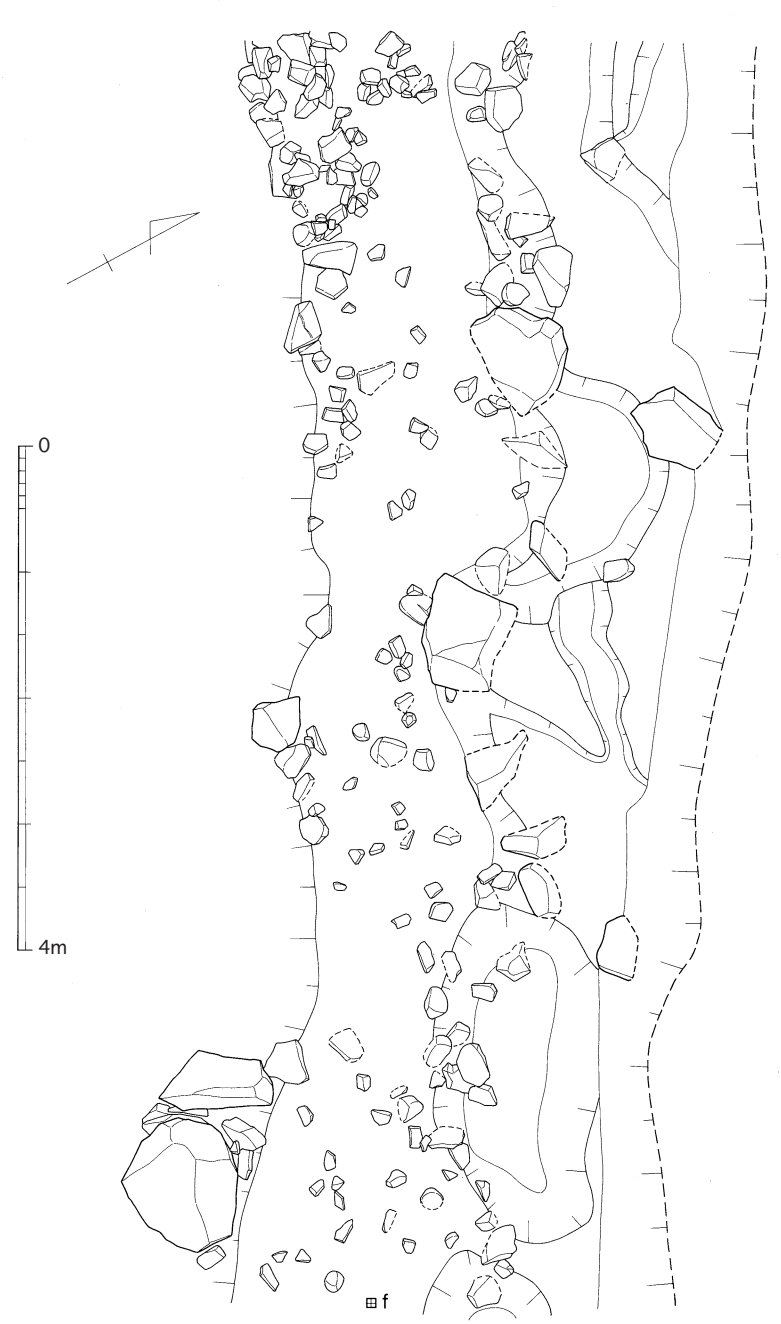
第225図はｃ－ｄ間である。標高は西端で208.9m、東端で207.7mを測り、高低差は1.2mである。区間長は11.0mである。この付近は岩盤が露出しており、参道を設けるためにかなり削岩したものとみられる。路面中央が浅くくぼむ。西側は本来の地形が蔵持川に向かって傾斜しており、これを埋めるために礫の混じった土で整地しているようで、図示した小礫群の多くは本来整地に伴う石材としても機能していたとみられる。南側は棚田になっているため高低差があるので、崩落防止のために石垣を構築している。ｃ点付近の覆土中から第235図の磁器碗が出土した。

第226図はｄ－ｅ間西半部である。標高は西端で207.7m、東端で206.3mを測り、高低差は1.4mである。区間長は10.0mで、路面幅は2.0～2.7mである。中央付近には幅60ｃm程度の石敷きが遺存しており、西寄りでも石材が散乱している。北側は現在の石敷き部分よりも30ｃm程度高くなっており、一部に側溝状の掘り込みがみられることから、斜面側に古い路面があり、現在の石敷きが新しいものと考えられる。遺物がないので両者の明確な時期は不明である。南側は石垣により画される。

第227図はｄ－ｅ間東半部である。標高は西端で206.3m、東端で205.5mを測り、高低差は0.8mである。区間長は6.0mで、路面幅はおおよそ1.9～3.0mである。本来石敷きに使用されたと考え



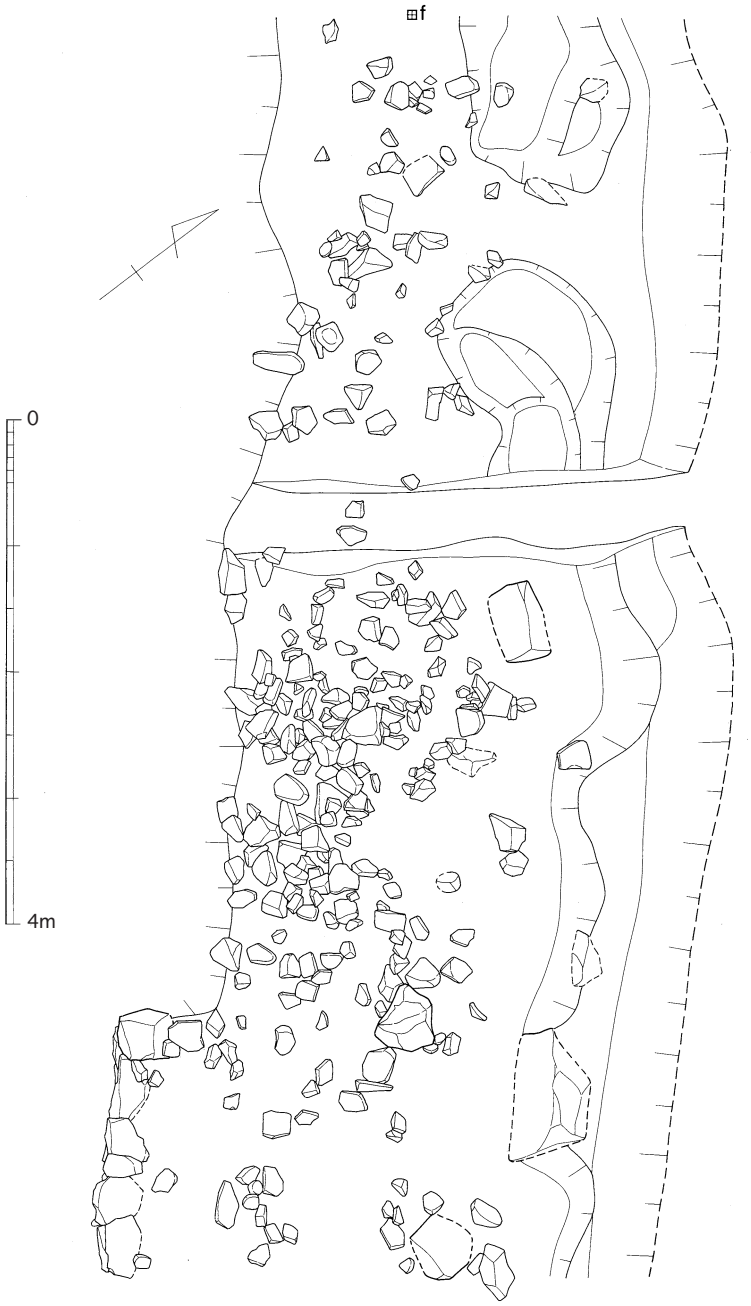
第228図　石敷路実測図⑪（1/60）



第229図　石敷路実測図⑫（1/60）

られる石材が若干散在する程度で遺存状況は良くない。ｄ－ｅ間西半部で確認した古い路面はこの付近で一度途切れている。南側は石垣が築かれている。

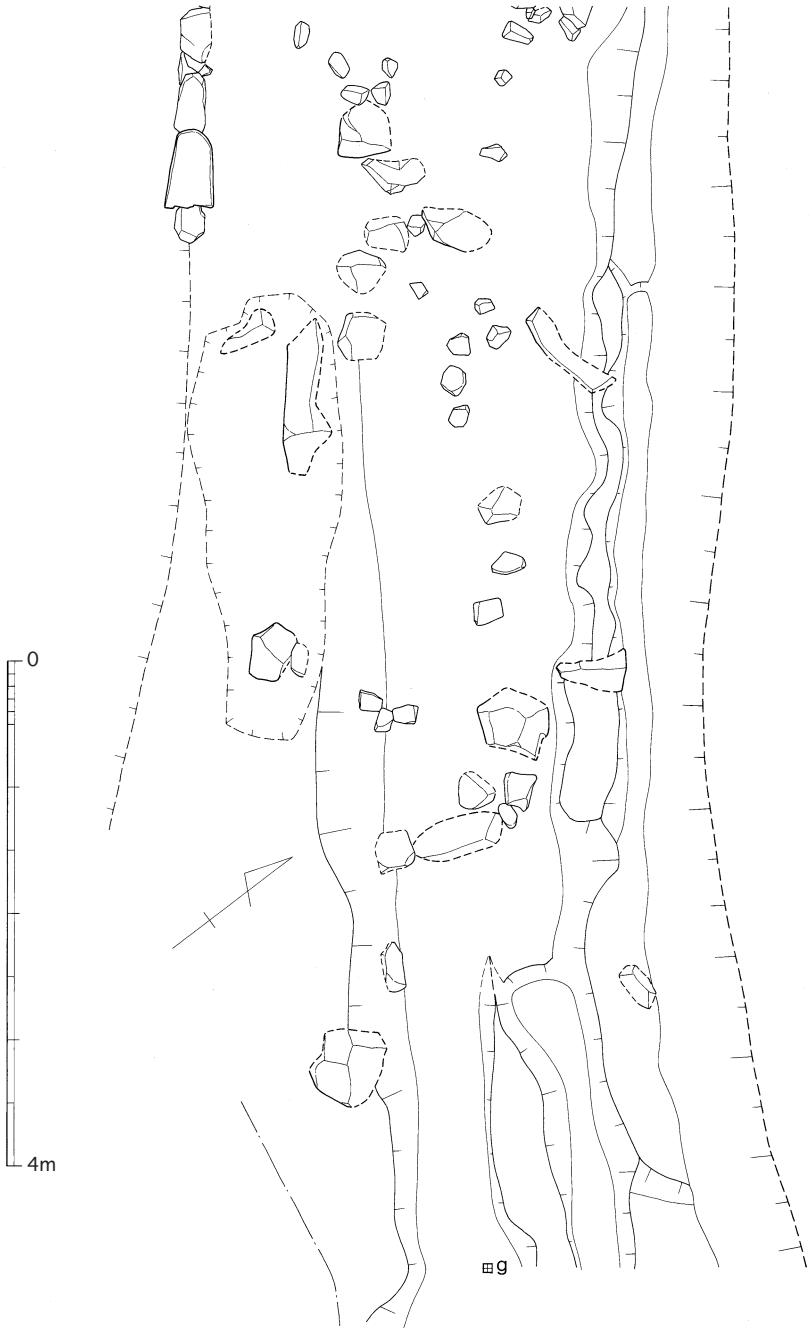
第228図はｅ－ｆ間西半部である。標高は西端で205.5m、東端で204.2mを測り、高低差は1.3mである。区間長は10.0mで、路面は1.8～2.2m程度である。長さ5.5m・幅0.6mにわたり石敷きが良好に遺存し、10～50cm大の礫が用いられている。横断面図に示したように北側（山側）が30cmほど高くなって不整形ながらも平坦面を形成しており、側溝状の掘り込みを伴っている。ｄ－ｅ間で確認した旧道の続きであろう。南側は石垣が築かれている。



第230図　石敷路実測図⑬（1/60）

第229図はｅ－ｆ間東半部である。標高は西端で204.2m、東端で203.2mを測り、高低差は1.0mである。区間長は6.0mで、路面幅は1.5m程度と狭くなり、旧道はこの区間の中程で途切れる。路面は遺存状況が悪く、石材は散見されるが石敷きそのものは失われている。

第230図はｆ－ｇ間西半部である。標高は西端で203.2m、東端で202.2mを測り、高低差は1.0mである。区間長は10.0mで、路面幅は1.5～3.6mと下るにつれて広くなる。10～30ｃｍ大の礫が散乱しているが、本来の石敷きの状態は失われている。南側の一部には石垣が遺存するが、大半



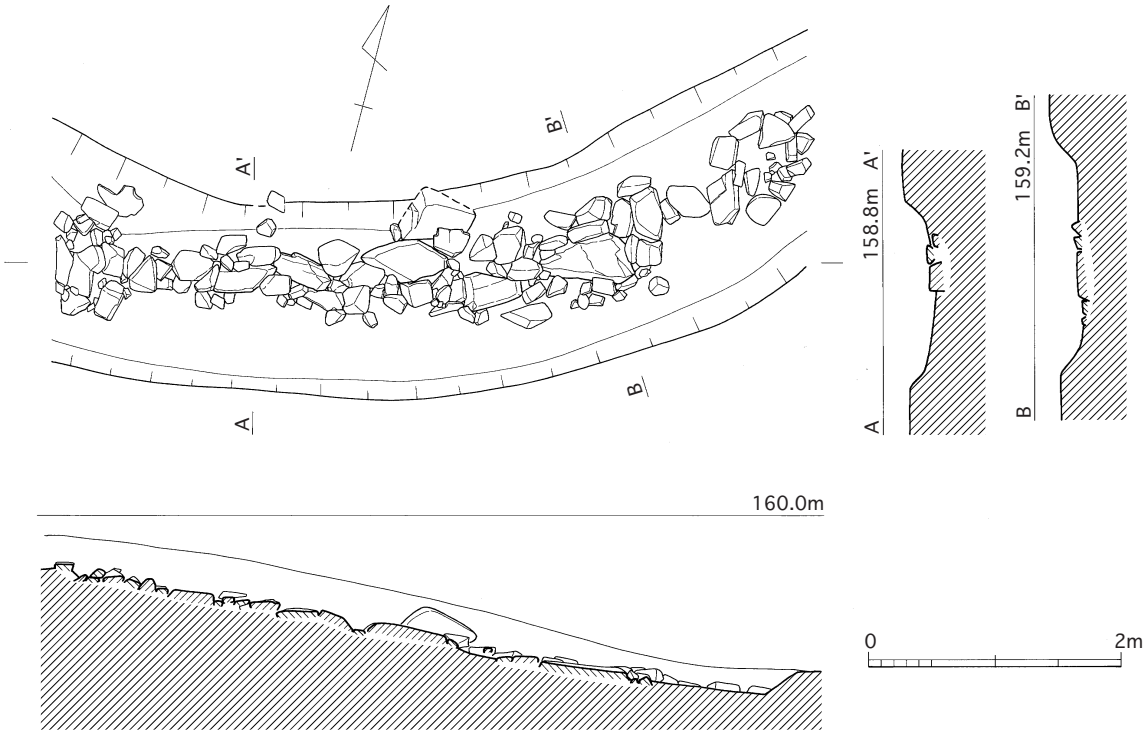
第231図　石敷路実測図⑭（1/60）

はすでに大きく崩落している。

第231図はｆ－ｇ間東半部である。標高は西端で202.2ｍ、東端で201.6ｍを測り、高低差は0.6ｍである。区間長は10.0ｍで、路面幅は3.5～3.0ｍである。路面に石材はほとんどなく、図示している石材の半数ほどは岩盤が露出したものである。なお、北側の一部に側溝状の掘り込みが確認でき、旧道の痕跡がわずかに窺える。また、東側では路底面が二条の溝状に分岐しており、つづくｇ－ｈ間の状況からも北側が旧道、南側が現道の掘り込みと考えられる。

第232図　石敷路実測図⑮（1/60）

第233図　石敷路実測図⑯（1/60）



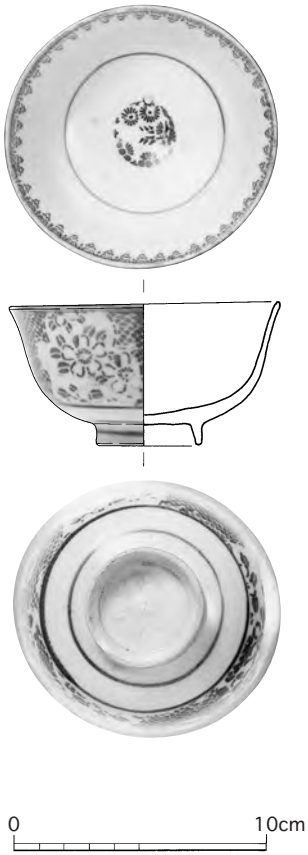
第234図　石敷路実測図⑰（1/60）

第232図はｇ－ｈ間である。標高は、西半部の東端で201.6m、西端で200.0mを測り、東半部では西端で200.0m、東端で198.4mを測り、この区間での高低差の合計は3.2m、区間長は21.0mである。石敷きの痕跡はほとんどみられず、西半部に集中する石材がわずかに名残をとどめるに過ぎない。ただし、東半部を横断する小川の縁には40～100ｃｍ大の石材が並べられており、参道に伴う構築物の１つとみられる。ｇ－ｈ間からはじまった旧道の掘り込みは東半部の中程まで続いている。なお、西半部の南側にみられる小さな石垣は現代の墓地に伴うもので、参道とは無関係である。

第233図はｈ－ｉ間とｉ－ｊ間である。以下、それぞれについて概述する。

ｈ－ｉ間は　標高が西端で198.4m、東端で196.3mを測り、高低差は2.1mである。区間長は13.0m、路面幅は2.1～2.6m程度で、旧道の痕跡は全くなく、現在もそのまま利用されているとみられる。石材はほとんどみられず、図示したものは岩盤が大半である。

ｉ－ｊ間は、標高が西端で196.3m、東端で194.8mを測り、高低差は1.5mである。区間長は9.0mである。全体に遺存状況は悪いが、東寄りに長さ2.3m、幅1.0m程度で石敷きが遺存しており、10～60ｃｍ大の石材が用いられている。この区間も旧道をそのまま利用している。



第235図　石敷路出土磁器実測図（1/3）

第234図は第３次調査で検出した石敷路である。図示した箇所は石敷の状態が比較的良い部分について個別図の作成を行ったものである。道幅は1.6mで、その中央部に花崗岩の長方形石材を縦方向に数石並べ、隙間を小さな川原石で埋めている。石敷の幅は40cm～80cmあり、中央部が平坦面となるように築かれている。

出土遺物（第235図）

出土遺物は全て第２次調査出土である。平板測量を実施する際に、陶磁器片を数点採集した。その他、石敷路脇の棚田や流路内に土師器の細片が若干散布しているのを発見したが、１cm前後の極小片で２次的に流れ込んだものでもあったため、採集はしていない。

第235図に掲載したのは、幕末～明治にかけての磁器碗の完形品である。内外に施された文様はいずれもスタンプによるもので、色調はコバルト色を呈する。全体にかかる釉は若干青味のある透明釉で、畳付きのみ露胎である。頂上部側にかかる木橋付近で出土した。

この他、図示していないが、堆積土中から染付の徳利片が数点出土した。上述の碗とほぼ同時期の所産とみられる。

５）小結

上高屋台ノ原遺跡では、縄文時代と古代、中世の三時期に大別される遺構・遺物が確認された。縄文時代は第Ⅱ～第Ⅳの３つの文化層からなる包含層が確認され、早期を主体とする時期の遺物が多く出土した。グリッド調査によって出土した遺物は、土器が439点、石器が製品・剥片等もあわせて265点を数える。

最も時期が遡る土器として、柏原式土器と称される刺突文・瘤文土器が挙げられる。点数は４点と少ないが、刺突文の形状や間隔で二種類に大別される。このうち押引き状の刺突文を狭い間隔で配置する１や２については先述の上伊良原榎遺跡ではあまり見られなかったものであり、特に２には現状で粘土瘤が認められず、器表の調整にはナデを行うなど異なる要素が多い。福岡市の柏原F遺跡や大原Ｄ遺跡群15－３区出土例と近いように思われる。

上高屋台ノ原遺跡で最も多く出土した土器は押型文土器である。施文する文様には山形文、楕円文、格子目文の三者があり、他に点数は少ないが縄文、撚糸文、条痕文、無文の各土器が供伴する。山形文は緻密な幅で横位に施文する文様が多いが、ほぼ完形で出土した13の小型品は幅広の山形文を縦位に施文する。この個体は器壁が厚く、底部が丸底に近い平底になるなど他と異なる点が多い土器である。口縁部内面の施文は山形文と原体条痕の両者がある。楕円押型文は楕円の粒の大きさが５mm程度のものから１cmを超えるものまであるが、大きめの楕円文を施文する個体は数が少ない。施文方向は横位、縦位、斜位があり小さめの楕円文は横位で施文する割合が比較的高いといえる。内面の施文は楕円文と原体条痕の両者が見られる。格子目文には正位と斜位があるが点数は少ない。どちらも口縁部内面は外面と同じ施文を行う。撚糸文土器は少なくとも２個体あり、どちらも一目で撚糸文と判るほど強く明瞭な施文を行っている。色調は明るい茶色を呈し焼成も良好である。口縁部の破片は無いが、内面に外面と同じ文様を施文する個体があることから、基本的には押型文と同じ原理に基づいて施文されたのではないかと思われる。出土した層位も押型文より下層にある第Ⅳ文化層から一部出土したことから押型文土器に遡る時期を考えたが、施文原理や胎土、焼成が押型文土器と似通っている点から両者は供伴する時期にあるも

のと思われる。

これらの押型文土器の時期については、楕円文の大きさや内面の文様から一部が稲荷山式にまで遡る可能性も考えられるが、おおよそ早水台式から田村式に比定されるものである。第201図13の平底に近い山形文施文の土器や、大きめの楕円文を施文する土器などは田村式の範疇に含まれる。

石器で特徴的なのが、E－13Grを中心に出土した珪化木の剥片である。ほぼ同じ大きさで集中して見つかっていることから、この場所で作業を行ったことは間違いない。出土した剥片は石器の石材としては使用に耐えない軟弱な質のものばかりなので、恐らくは固く琥珀化した部分を採取する目的で剥離を繰り返したものと思われる。また第Ⅳ文化層P－8Grからは黒曜石石核と供伴して多数のチップが出土しており、石器製作の痕跡が原位置に近い状態を保っていたことが判る。同じグリッドからは頁岩もしくは安山岩を使用した石製装飾品が出土したが、縄文時代早期のものであり稀少性の高さが特筆される。

古代の遺構には５・６・８・９号土坑がある。内部から多量の炭が出土したことから炭焼きのための土坑と思われる。中世の土坑も数基あり、遺物がまとまって出土した４号土坑の遺物出土状況を見ると廃棄したような印象を受けるが、他の同時期の関連遺構がないので詳細は判らない。

山岳信仰の山である蔵持山へと続く里道では石敷路を検出したが、出土遺物に恵まれず敷設の時期は不明である。石の組み方から少なくとも近世以降のものであり、数度の補修を行って戦後まで使用され続けたものと思われる。里道沿いには戦後しばらくまで集落が営まれていたという話を古老に聞く。現在は既に跡形すら残らないが、蔵持山への参詣路としての重要性や視的効果はもとより住民の日々の生活路としての利便性からも石敷路の敷設が行われ、その後も長期にわたる維持補修が継続されたものであろう。

第９表　上高屋台ノ原遺跡　グリッド別出土遺物点数一覧表

第Ⅱ文化層

Gr名	土器		黒耀石		姫島産黒耀石		安山岩		珪質岩等		凝灰岩等		石器類合計	合計
	出土数	図化数	出土数	図化数	出土数	図化数	出土数	図化数	出土数	図化数	出土数	図化数		
D−13	5		1		1	1	1						3	8
D−14	11	3					1		4				5	16
E−11	6		1		3		2	1	3				9	15
E−12	22	2	2		4				2		1	1	9	31
E−13	15	1	1		3				3	1			7	22
E−14	15	2	2				2		1				5	20
I−13	2	1											0	2
N−8	4	1	1		2	1			2				5	9
O−8	14	3	19	1	8				1				28	42
O−13	1						2						2	3
P−7	5		17	1	2		1		1				21	26
P−8	32	9	22	1	5		2	1					29	61
P−9	12	4	4						1				5	17
P−13	2		2				3						5	7
Q−8	15	2	9	2			1						10	25
R−14	2						1						1	3
S−9	4												0	4
S−10	4		3		1				1	1			5	9
S−11	7	1											0	7
S−12	10	1					1		4				5	15
S−13	8	2			1								1	9
S−14	4	2	1		1								2	6
T−10	28	9	1		1		1						3	31
T−11	6		1		1		1		1	1			4	10
T−12	12	4	2	1	1				3	2			6	18
T−13	6	1	2	1					1				3	9
合計	252	48	91	7	34	2	19	2	28	5	1	1	173	425

第Ⅲ文化層

Gr名	土器		黒耀石		姫島産黒耀石		安山岩		珪質岩等		凝灰岩等		石器類合計	合計
	出土数	図化数	出土数	図化数	出土数	図化数	出土数	図化数	出土数	図化数	出土数	図化数		
C−13	17	3	2						2				4	21
C−14	14	5	1						2	1			3	17
D−12	23	2			1		1						2	25
D−13	40	8	5		2		5	1	11				23	63
D−14	23	12	5		1				3				9	32
E−12	18	2					1		4				5	23
E−13	28	3	2		1				11	7			14	42
E−14	13	4					1		1				2	15
合計	176	39	15	0	5	0	8	1	34	8	0	0	62	238

第Ⅳ文化層

Gr名	土器		黒耀石		姫島産黒耀石		安山岩		珪質岩等		凝灰岩等		石器類合計	合計
	出土数	図化数	出土数	図化数	出土数	図化数	出土数	図化数	出土数	図化数	出土数	図化数		
P−8	6	2	30	2									30	36
S−12	5												0	5
合計	11	2	30	2									30	41

総計	439	89	136	9	39	2	27	3	62	13	1	1	265	704

第10表　上高屋台ノ原遺跡出土縄文土器観察表

掲載図	掲載番号	出土場所	層位	整理番号	種類	調整		色調		胎土(砂粒)	備考
						外	内	外	内		
第201図	1	E−13Gr	第Ⅲ文化層	32	柏原式(刺突文・瘤文)	−	−	褐色	褐色	石英・長石・角閃石	
	2	D−14Gr	第Ⅲ文化層	40	柏原式(刺突文・瘤文)	ナデ	ナデ	茶褐色	茶褐色	石英・長石・角閃石(多い)	
	3	E−14Gr	第Ⅲ文化層	49	柏原式(刺突文・瘤文)	二枚貝条痕	二枚貝条痕	灰褐色	灰褐色	石英・長石	
	4	D−14Gr	第Ⅲ文化層	62	柏原式(刺突文・瘤文)	ナデ	ナデ	茶褐色	茶褐色	石英・長石・角閃石	
	5	P−9Gr	第Ⅲ文化層	54	押型文(山形)	押型文(山形)	押型文(山形)	茶褐色	茶褐色	石英・長石	
	6	O−8Gr	第Ⅲ文化層	33	押型文(山形)	押型文(山形)	押型文(山形)	暗褐色	暗褐色	石英・長石	口縁端部施文
	7	P−9Gr	第Ⅲ文化層	48	押型文(山形)	押型文(山形)	押型文(山形)	茶褐色	茶褐色	石英・長石	5と同一個体
	8	D−14Gr	第Ⅲ文化層	67	押型文(山形)	押型文(山形)	ナデ	灰褐色	灰褐色	石英・長石　砂粒少ない	
	9	ピット(P50)		107	押型文(山形)	押型文(山形)	押型文(山形)・ナデ	茶灰色	茶灰色	石英・長石・角閃石	
	10	S−14Gr	第Ⅱ文化層	105	押型文(山形)	押型文(山形)	押型文(山形)・ナデ	灰褐色	灰褐色	石英・長石	
	11	E−12Gr	第Ⅲ文化層	70	押型文(山形)	押型文(山形)	押型文(山形)・原体条痕	褐色	褐色	石英・長石	
	12	D−13Gr	第Ⅲ文化層	52	押型文(山形)	押型文(山形)	押型文(山形)・原体条痕	灰褐色	灰褐色	石英・長石・角閃石	
	13	C−13Gr	第Ⅲ文化層	45	押型文(山形)	押型文(山形)	ナデ	暗黄灰色	暗黄灰色	石英・長石・角閃石	
	14	D−14Gr	第Ⅲ文化層	41	押型文(山形)	押型文(山形)	ナデ	暗褐色	暗褐色	石英・長石	
	15	P−8Gr	第Ⅲ文化層	96	押型文(山形)	押型文(山形)	ナデ	黄褐色	暗褐色	石英・長石	
	16	C−13Gr	第Ⅲ文化層	108	押型文(山形)	押型文(山形)	ナデ	暗黄灰色	暗黄灰色	石英・長石　砂粒少ない	炭化物付着　8と同一固体
	17	P−8Gr	第Ⅲ文化層	60	押型文(山形)	押型文(山形)	ナデ	茶色	褐色	石英・長石・角閃石	
	18	P−9Gr	第Ⅲ文化層	34	押型文(山形)	押型文(山形)	ナデ	黒褐色	黄褐色	石英・長石	
第202図	19	T−12Gr	第Ⅱ文化層	75	押型文(楕円)	押型文(楕円)	押型文(楕円)	暗褐色	暗褐色	石英・長石	
	20	D−14Gr	第Ⅲ文化層	87	押型文(楕円)	押型文(楕円)	押型文(楕円)	黄灰褐色	黄灰褐色	石英・長石・角閃石	補修孔あり
	21	C−14Gr	第Ⅲ文化層	95	押型文(楕円)	押型文(楕円)	押型文(楕円)	茶灰色	茶灰色	石英・長石	
	22	D−13Gr	第Ⅲ文化層	90	押型文(楕円)	押型文(楕円)	押型文(楕円)　ナデ	黄灰褐色	黄灰褐色	石英・長石	
	23	T−12Gr	第Ⅱ文化層	71	押型文(楕円)	押型文(楕円)	押型文(楕円)	暗褐色	暗褐色	石英・長石	
	24	P−8Gr	第Ⅲ文化層	117	押型文(楕円)	押型文(楕円)	原体条痕　ナデ	暗黄灰色	茶灰色	石英・長石	
	25	E−14Gr	第Ⅲ文化層	93	押型文(楕円)	押型文(楕円)	原体条痕　ナデ	暗褐色	暗褐色	石英・長石	
	26	T−13Gr	第Ⅱ文化層	69	押型文(楕円)	押型文(楕円)	原体条痕	褐色	褐色	石英・長石	
	27	T−10Gr	第Ⅱ文化層	81	押型文(楕円)	押型文(楕円)	原体条痕　ナデ	茶褐色	茶褐色	石英・長石	
	28	S−13Gr	第Ⅱ文化層	110	押型文(楕円)	押型文(楕円)	原体条痕　ナデ	黄灰色	黄灰色	石英・長石　砂粒少ない	炭化物付着
	29	T−12Gr	第Ⅱ文化層	78	押型文(楕円)	押型文(楕円)	原体条痕　ナデ	黄褐色	黄褐色	石英・長石	風化著しい
	30	ピット(P37)		112	押型文(楕円)	押型文(楕円)	原体条痕　ナデ	暗灰色	黄灰色	石英・長石・角閃石	
	31	E−14Gr	第Ⅲ文化層	74	押型文(楕円)	押型文(楕円)	原体条痕	茶色	茶褐色	石英・長石	
	32	C−14Gr	第Ⅲ文化層	89	押型文(楕円)	押型文(楕円)	原体条痕	暗褐色	暗褐色	石英・長石	炭化物付着
	33	C−14Gr	第Ⅲ文化層	80	押型文(楕円)	押型文(楕円)	ナデ	黄灰色	黄灰色	粗砂やや多い　石英・長石・角閃石	炭化物付着
	34	P−8Gr	第Ⅲ文化層	65	押型文(楕円)	押型文(楕円)	ナデ	黄灰褐色	黄灰褐色	石英・長石・角閃石	
第203図	35	S−14Gr	第Ⅱ文化層	116	押型文(楕円)	押型文(楕円)	ナデ	暗黄灰色	暗黄灰色	石英・長石・角閃石	
	36	T−12Gr	第Ⅱ文化層	51	押型文(楕円)	押型文(楕円)	ナデ	黄灰色	黒色	石英・長石	
	37	D−14Gr	第Ⅲ文化層	61	押型文(楕円)	押型文(楕円)	ナデ	黄褐色	黄褐色	石英・長石・角閃石	
	38	D−12Gr	第Ⅲ文化層	119	押型文(楕円)	押型文(楕円)	ナデ	暗黄灰色	暗黄灰色	石英・長石・角閃石	
	39	D−12Gr	第Ⅲ文化層	111	押型文(楕円)	押型文(楕円)	ナデ	暗黄灰色	暗黄灰色	石英・長石・角閃石	
	40	D−13Gr	第Ⅲ文化層	122	押型文(楕円)	押型文(楕円)	ナデ	茶褐色	黒褐色	石英・長石	
	41	試掘5Tr		134	押型文(楕円)	押型文(楕円)	ナデ	黄灰色	黄灰色	石英・長石	
	42	C−14Gr	第Ⅲ文化層	91	押型文(楕円)	押型文(楕円)	ナデ	黄灰褐色	黄灰褐色	石英・長石　砂粒少ない	
	43	C−13Gr	第Ⅲ文化層	115	押型文(楕円)	押型文(楕円)	ナデ	暗黄灰色	暗黄灰色	石英・長石	
	44	P−8Gr	第Ⅲ文化層	35	押型文(楕円)	押型文(楕円)	ナデ	黄褐色	黄褐色	石英・長石・角閃石	
	45	P−8Gr	第Ⅳ文化層	56	押型文(楕円)	押型文(楕円)	ナデ	黄灰色	黄灰色	石英・長石・角閃石	炭化物付着
	46	T−10Gr	第Ⅱ文化層	50	押型文(楕円)	押型文(楕円)	ナデ	黄褐色	黄褐色	石英・長石・角閃石	
	47	P−8Gr	第Ⅲ文化層	58	押型文(楕円)	押型文(楕円)	ナデ	黄灰色	黄灰色	石英・長石・角閃石	炭化物付着
	48	D−14Gr	第Ⅲ文化層	100	押型文(楕円)	押型文(楕円)	ナデ	灰褐色	灰褐色	石英・長石・角閃石	
	49	E−14Gr	第Ⅱ文化層	118	押型文(楕円)	押型文(楕円)	ナデ	茶灰色	灰褐色	石英・長石　砂粒少ない	
	50	D−14Gr	第Ⅲ文化層	88	押型文(楕円)	押型文(楕円)	ナデ	灰褐色	灰褐色	石英・長石	
	51	E−14Gr	第Ⅱ文化層	121	押型文(楕円)	押型文(楕円)	ナデ	黄灰色	黄灰色	石英・長石・角閃石	
	52	Q−8Gr	第Ⅲ文化層	77	押型文(楕円)	押型文(楕円)	ナデ	黄褐色	黄褐色	石英・長石	
	53	P−8Gr	第Ⅲ文化層	104	押型文(楕円)	押型文(楕円)	ナデ	黄灰色	黄灰褐色	石英・長石・角閃石	
	54	D−14Gr	第Ⅲ文化層	102	押型文(楕円)	押型文(楕円)	ナデ	黄灰褐色	黄灰褐色	石英・長石・角閃石	炭化物付着
第204図	55	S−13Gr	第Ⅱ文化層	106	押型文(楕円)	押型文(楕円)	ナデ	黄灰色	黄茶色	石英・長石・角閃石	
	56	C−14Gr	第Ⅲ文化層	73	押型文(楕円)	押型文(楕円)	ナデ	黄灰色	黄灰色	石英・長石	炭化物付着
	57	C−14Gr	第Ⅲ文化層	83	押型文(楕円)	押型文(楕円)	ナデ	黄灰褐色	黄灰褐色	石英・長石	
	58	D−14Gr	第Ⅱ文化層	113	押型文(楕円)	押型文(楕円)	ナデ	黄灰色	黒褐色	石英・長石	
	59	P−9Gr	第Ⅲ文化層	46	押型文(格子)	押型文(格子)	押型文(格子)	灰褐色	灰褐色	石英・長石・角閃石	斜格子
	60	P−9Gr	第Ⅲ文化層	31	押型文(格子)	押型文(格子)	押型文(格子)	黄褐色	黄褐色	石英・長石	
	61	D−13Gr	第Ⅲ文化層	47	押型文(格子)	押型文(格子)	押型文(格子)	褐色	黄灰色	石英・長石・角閃石	
	62	O−8Gr	第Ⅲ文化層	63	押型文(格子)	押型文(格子)	押型文(格子)　ナデ	黒褐色	黒褐色	石英・長石　砂粒少ない	
	63	O−8Gr	第Ⅲ文化層	64	押型文(格子)	押型文(格子)	ナデ	暗褐色	暗褐色	石英・長石・角閃石	
	64	Q−8Gr	第Ⅲ文化層	109	押型文(縄文)	押型文(縄文)	ナデ	茶褐色	暗褐色	石英・長石・角閃石	
	65	P−8Gr	第Ⅲ文化層	59	撚糸文	撚糸文	ナデ	茶色	褐色	石英・長石　砂粒少ない	
	66	P−8Gr	第Ⅳ文化層	38	撚糸文	撚糸文	ナデ	茶色	暗褐色	石英・長石	65と同一個体?
	67	P−8Gr	第Ⅲ文化層	85	撚糸文	撚糸文	ナデ	明茶灰色	暗褐色	石英・長石　砂粒少ない	65と同一個体?
	68	D−14Gr	第Ⅱ文化層	92	撚糸文	撚糸文	ナデ	茶灰色	黒褐色	石英・長石・角閃石(多い)	
	69	P−8Gr	第Ⅲ文化層	72	撚糸文	撚糸文	ナデ	茶色	茶色	石英・長石	
	70	P−8Gr	第Ⅳ文化層	36	撚糸文	撚糸文	撚糸文	茶色	茶色	石英・長石	
	71	D−14Gr	第Ⅱ文化層	97	撚糸文	撚糸文	ナデ	茶灰色	黒褐色	石英・長石・角閃石	
	72	P−8Gr	第Ⅲ文化層	57	撚糸文	撚糸文	ナデ	茶色	褐色	石英・長石　砂粒少ない	65と同一個体
第205図	73	E−14Gr	第Ⅲ文化層	53	条痕文	二枚貝条痕	ナデ	黄灰色	黄灰色	石英・長石・角閃石　砂粒少ない	
	74	E−12Gr	第Ⅲ文化層	114	条痕文	二枚貝条痕	二枚貝条痕	茶褐色	茶褐色	石英・長石	
	75	T−10Gr	第Ⅱ文化層	66	条痕文	二枚貝条痕	二枚貝条痕	灰褐色	灰褐色	石英・長石	
	76	T−10Gr	第Ⅱ文化層	84	条痕文	二枚貝条痕	二枚貝条痕	暗黄褐色	暗黄褐色	石英・長石	
	77	T−10Gr	第Ⅱ文化層	103	条痕文	二枚貝条痕	二枚貝条痕	灰褐色	灰褐色	石英・長石	
	78	S−11Gr	第Ⅱ文化層	79	条痕文	二枚貝条痕	二枚貝条痕	黄灰褐色	黄灰褐色	石英・長石	
	79	D−14Gr	第Ⅲ文化層	129	条痕文	二枚貝条痕	ナデ	暗黄灰色	暗黄灰色	石英・長石・角閃石	
	80	D−14Gr	第Ⅲ文化層	129	無文	ナデ	ナデ	暗黄灰色	暗黄灰色	石英・長石・角閃石	79と同一個体
	81	C−14Gr	第Ⅲ文化層	123	無文	ナデ	ナデ	黒灰色	黒灰色	石英・長石	
	82	D−13Gr	第Ⅲ文化層	68	無文	ナデ	ナデ	暗褐色	暗褐色	石英・長石	炭化物付着
	83	試掘11Tr		133	無文	ナデ	ナデ	黄灰色	黄灰色	石英・長石	
	84	E−13Gr	第Ⅲ文化層	127	無文	ナデ	ナデ	黒褐色	黒褐色	石英・長石	炭化物付着
	85	D−13Gr	第Ⅲ文化層	126	無文	ナデ	ナデ	茶灰色	茶灰色	石英・長石	
	86	D−14Gr	第Ⅲ文化層	42	底部(尖底)	ナデ(指痕)	ナデ	黄灰色	黄灰色	石英・長石	
	87	Q−8Gr	第Ⅲ文化層	44	底部(尖底)	ナデ	ナデ	茶灰色	茶灰色	石英・長石	
	88	D−13Gr	第Ⅲ文化層	43	底部(尖底)	ナデ	ナデ	黄灰色	黄灰色	石英・長石・角閃石	
第206図	89	E−13Gr	第Ⅲ文化層	94	轟B	ナデ(隆起帯)	ナデ	暗褐色	暗褐色	石英・長石　砂粒多い	風化著しい
	90	N−8Gr	第Ⅲ文化層	99	突帯(後期?)	二枚貝条痕・刺突文	二枚貝条痕	暗褐色	暗褐色	石英・長石	炭化物付着
	91	T−10Gr	第Ⅱ文化層	39	轟B?	ナデ・刻目	ナデ	灰褐色	灰褐色	石英・長石	
	92	E−13Gr	第Ⅱ文化層	120	轟B?	ナデ	ナデ	茶褐色	茶褐色	石英・長石　砂粒少ない	
	93	試掘7Tr		131	無文(後期)	ナデ・刻目	ナデ	茶灰色	茶灰色	石英・長石	
	94	試掘7Tr		132	無文(後期)	二枚貝条痕	二枚貝条痕	茶灰色	茶灰色	石英・長石	93と同一個体
	95	E−12Gr	第Ⅱ文化層	55	刻目(後期?)	二枚貝条痕・刻目	二枚貝条痕	黒色	黒色	石英・長石	
	96	E−14Gr	第Ⅲ文化層	101	磨消縄文	縄文・凹線文	ナデ	灰褐色	黄灰色	石英・長石	
	97	E−12Gr	第Ⅱ文化層	37	凹線文(後期)	凹線文・ナデ	二枚貝条痕	茶褐色	茶褐色	石英・長石	
	98	D−12Gr	第Ⅲ文化層	86	条痕文	ナデ	二枚貝条痕	暗褐色	暗褐色	石英・長石・角閃石	
	99	試掘4Tr		135	凹線文	凹線文・ナデ	巻貝条痕	茶色	茶色	石英・長石	
	100	T−10Gr	第Ⅱ文化層	98	無文	ヘラミガキ	二枚貝条痕	茶灰色	茶灰色	石英・長石・角閃石	
	101	T−10Gr	第Ⅱ文化層	76	無文	ヘラミガキ	ヘラミガキ	茶色	茶色	石英・長石	
	102	S−12Gr	第Ⅱ文化層	82	底部(平底)	ヘラミガキ	ナデ・指痕	茶色	茶色	石英・長石	
	103	D−13Gr	第Ⅲ文化層	130	底部(平底)	ナデ	ナデ	茶色	暗黄灰色	石英・長石・角閃石	
	104	T−10Gr	第Ⅱ文化層	125	底部(平底)	ナデ	二枚貝条痕	黄灰色	黄灰色	石英・長石	
	105	I−13Gr	第Ⅱ文化層	124	底部(平底)	二枚貝条痕	ナデ	黄灰色	黄灰色	石英・長石	

第11表　上高屋台ノ原遺跡出土石器観察表

掲載図	掲載番号	出土場所	文化層	整理番号	石材	種類	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	備考
第207図	1	E−11Gr	第Ⅱ文化層	12	安山岩	石鏃	13	10	3	0.2	
	2	D−13Gr	第Ⅲ文化層	13	安山岩	石鏃	20	14	2	0.4	
	3	試掘7Tr		11	安山岩	石鏃	23	23	5	2.0	
	4	P−8Gr	第Ⅲ文化層	10	安山岩	石鏃	23	15	3	1.2	
	5	T−13Gr	第Ⅱ文化層	9	安山岩	石鏃	34	17	7	4.1	
	6	P−7Gr	第Ⅲ文化層	3	黒曜石	石鏃	15	14	4	0.7	
	7	T−12Gr	第Ⅱ文化層	2	黒曜石	石鏃	23	20	5	1.6	
	8	O−8Gr	第Ⅲ文化層	1	黒曜石	石鏃	28	20	5	2.0	
	9	N−8Gr	第Ⅲ文化層	14	姫島	石鏃	22	17	3	1.1	
	10	P−8Gr	第Ⅲ文化層	5	姫島	石鏃未製品?	26	24	5	2.4	
	11	Q−8Gr	第Ⅲ文化層	4	姫島	石鏃未製品?	26	21	5	1.8	
	12	T−10Gr	第Ⅱ文化層	16	安山岩	スクレイパー	46	50	9	25.1	
	13	Q−8Gr	第Ⅲ文化層	6	黒曜石	石核	34	32	16	35.0	二次加工
	14	P−8Gr	第Ⅳ文化層	7	不純物の多い黒曜石	石核	37	41	21	10.5	
第208図	15	E−13Gr	第Ⅱ文化層	15	珪質岩	剥片	50	42	13	20.7	
	16	E−12Gr	第Ⅲ文化層	20	珪化木	剥片	68	78	21	41.7	
	17	T−12Gr	第Ⅱ文化層	25	珪化木	剥片	53	30	24	27.2	
	18	T−12Gr	第Ⅱ文化層	24	珪化木	剥片	65	61	40	92.1	
	19	C−14Gr	第Ⅲ文化層	23	珪化木	剥片	42	32	34	25.2	
	20	T−11Gr	第Ⅱ文化層	21	珪化木	剥片	46	51	37	32.1	
	21	S−10Gr	第Ⅱ文化層	30	珪化木	剥片	49	46	28	30.0	
	22	P−9Gr	第Ⅲ文化層	29	珪化木	剥片	50	53	26	43.0	
第209図	23	E−13Gr	第Ⅲ文化層	31	珪化木	剥片	45	52	14	15.4	
	24	E−13Gr	第Ⅲ文化層	26	珪化木	剥片	46	48	24	32.5	
	25	E−13Gr	第Ⅲ文化層	27	珪化木	剥片	50	38	19	21.9	
	26	E−13Gr	第Ⅲ文化層	22	珪化木	剥片	60	35	20	25.6	
	27	E−13Gr	第Ⅲ文化層	33	珪化木	剥片	44	52	14	11.9	
	28	E−13Gr	第Ⅲ文化層	32	珪化木	剥片	70	68	23	43.5	
	29	D−14Gr	第Ⅱ文化層	19	珪化木	石核	117	65	58	373.0	
第210図	30	E−12Gr	第Ⅱ文化層	18	凝灰岩	磨石	108	95	70	853.2	
	31	北側遺構面		17	凝灰岩	磨石	122	105	70	996.4	
第211図		P−8Gr	第Ⅳ文化層	8	頁岩	有孔円盤	22	18	3	1.6	装身具

Ⅳ　自然科学系の分析

1　上伊良原榎遺跡における自然科学分析

株式会社 古環境研究所

1）自然科学分析の概要

上伊良原榎遺跡の発掘調査では、縄文時代早期初頭とされる柏原式土器の包含層から住居跡や土坑などが検出された。そこで、これらの遺構の年代を把握する目的で放射性炭素年代測定を行い、当時の植生や環境を推定する目的で植物珪酸体分析を行った。また、遺構から出土した炭化材について樹種同定を行った。さらに、鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah）と見られる火山灰（テフラ）を混在した土層について、火山灰の特性を把握し給源を確認する目的で火山灰分析を行った。調査対象となった地点は、M23Gr西壁、Ｌ24Gr南壁、Ｆ20Gr４号竪穴住居跡、Ｈ20Gr50号土坑の４地点である。

2）放射性炭素年代測定

1．はじめに

放射性炭素年代測定は、呼吸作用や食物摂取などにより生物体内に取り込まれた放射性炭素（^{14}Ｃ）の濃度が、放射性崩壊により時間とともに減少することを利用した年代測定法である。過去の大気中の^{14}Ｃ濃度は一定ではなく、年代値の算出に影響を及ぼしていることから、年輪年代学の成果などを利用した較正曲線により^{14}Ｃ年代から暦年代に換算する必要がある。

2．試料と方法

試料名	地点・層準	種類	前処理	測定法
№1	Ｆ20Gr住４，２層下部	炭化物	超音波洗浄，酸-ｱﾙｶﾘ-酸洗浄	AMS
№2	Ｆ20Gr住４，３層	堆積物	湿式篩分，酸洗浄	AMS
№3	Ｌ24Gr南壁，炭化物混層	炭化材	超音波洗浄，酸-ｱﾙｶﾘ-酸洗浄	AMS

AMS：加速器質量分析法（Accelerator Mass Spectrometry）

3．測定結果

表１に放射性炭素年代測定結果および暦年較正結果を示し、図１に暦年較正結果（較正曲線）を示す。

（１）δ^{13}Ｃ測定値

試料の測定^{14}Ｃ/^{12}Ｃ比を補正するための炭素安定同位体比（^{13}Ｃ/^{12}Ｃ）。この値は標準物質（PDB）の同位体比からの千分偏差（‰）で表す。試料のδ^{13}Ｃ値を-25(‰)に標準化することで同位体分別効果を補正する。

（２）^{14}Ｃ年代測定値

試料の$^{14}C/^{12}C$比から、現在（AD1950年基点）から何年前かを計算した値。BPはBefore Physics（Present）の略。^{14}Cの半減期は5,730年であるが、国際的慣例によりLibbyの5,568年を用いた。

（3）暦年代（Calendar Age）

過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中^{14}C濃度の変動および^{14}Cの半減期の違いを較正することで、より実際の年代値に近づけることができる。暦年較正には、年代既知の樹木年輪の詳細な^{14}C測定値およびサンゴのU/Th（ウラン/トリウム）年代と^{14}C年代の比較により作成された較正曲線を使用した（較正曲線データはIntCal04，較正プログラムはOxCal3.1）。

暦年代は、^{14}C年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅で示し、OxCal3.1の確率法により1σ（シグマ）（68.2%確率）と2σ（95.4%確率）で示した。較正曲線が不安定な年代では複数の1σ・2σ値が表記される場合もある。（）内の%表示は、その範囲内に暦年代が入る確率を示す。グラフ中の縦軸上の曲線は^{14}C年代の確率分布、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

4．所見

加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定の結果、№1の炭化物では11280±35年BP（2σの暦年代でBC 11300～11140年）、№2の堆積物では9895±35年BP（BC 9450～9270年）、№3の炭化材では4115±25年BP（BC 2870～2800，2760～2570年）の年代値が得られた。

文献

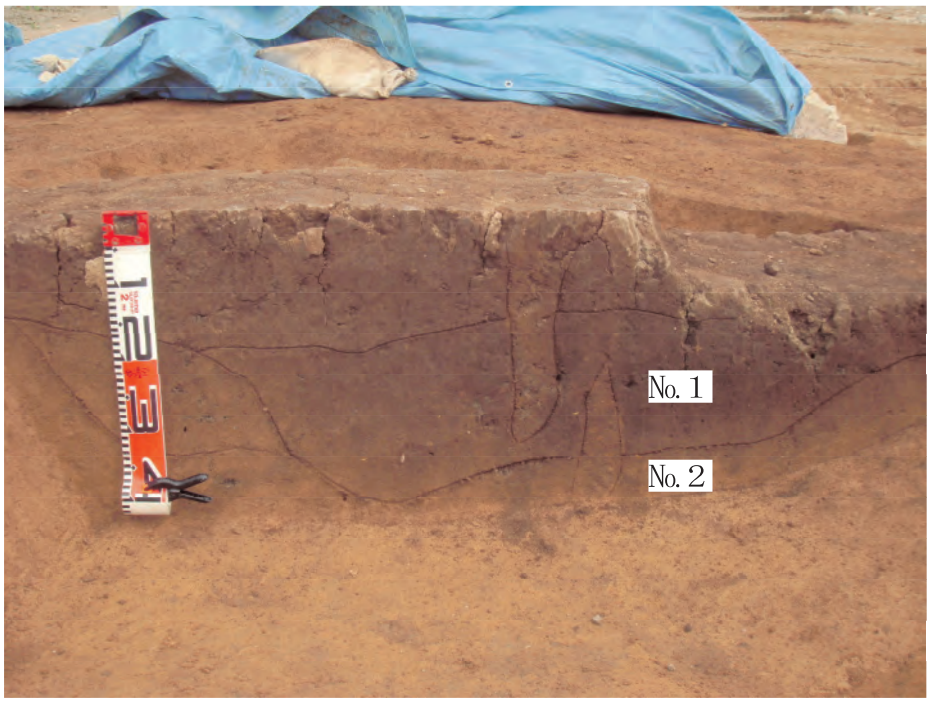
Bronk Ramsey C. (1995)Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy,The OxCal Program,Radiocarbon, 37(2), p.425-430.

Bronk Ramsey C. （2001）Development of the Radiocarbon Program OxCal, Radiocarbon, 43 (2A), 355-363.

Paula J Reimer et al., (2004) IntCal 04 Terrestrial radiocarbon age calibration, 26-0 ka BP. Radiocarbon 46,p.1029-1058.

尾嵜大真（2005）INTCAL98からIntCal04へ．学術創成研究費 弥生農耕の起源と東アジア№3 －炭素年代測定による高精度編年体系の構築－，p.14-15.

中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎．日本先史時代の14C年代, p.3-20.



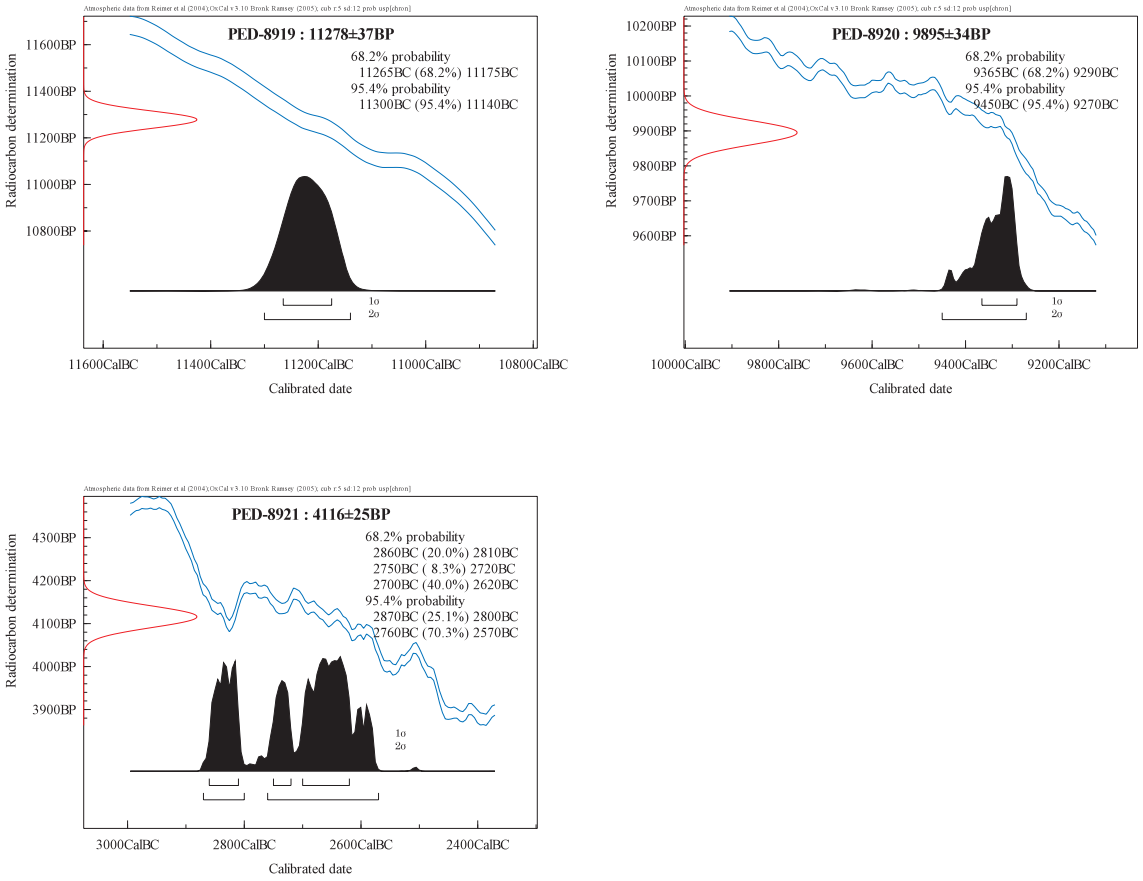
F-20Gr　4 号竪穴住居跡

L-24Gr南壁

年代測定試料の採取箇所

第12表　放射性炭素年代測定結果

試料名	測定番号	$\delta^{13}C$ (‰)	^{14}C年代 (年BP)	暦年代	
				1σ(68.2%確率)	2σ(95.4%確率)
1	PED-8919	-27.46±0.18	11280±35	11265BC(68.2%)11175BC	11300BC(95.4%)11140BC
2	PED-8920	-18.17±0.17	9895±35	9365BC(68.2%)9290BC	9450BC(95.4%)9270BC
3	PED-8921	-29.19±0.20	4115±25	2860BC(20.0%)2810BC 2750BC(8.3%)2720BC 2700BC(40.0%)2620BC	2870BC(25.1%)2800BC 2760BC(70.3%)2570BC



第236図　暦年較正結果

3）火山灰（テフラ）分析

1．試料

分析試料は、M24Gr東壁（M23Gr西壁に隣接）の10層および同層に含まれるテフラブロックから採取された計2点である（写真参照）。

2．前処理

湿式用の篩（2～4 ϕ）を用いて、水洗しながら各粒径ごとに篩分けをした。2～3 ϕ（0.250～0.125㎜）と3～4 ϕ（0.125～0.063㎜）の粒子について超音波洗浄を行い、その火山灰粒子を分析対象とした。

3．分析方法

（1）重軽鉱物組成

テトラブロムエタン（比重：2.96）を用いて重液分離し、重鉱物と火山ガラスを含む軽鉱物のフラクションに区分した。分離後、重鉱物に含まれる磁性鉱物を磁石で取り除き、磁性鉱物と残った重鉱物をそれぞれ秤量した。残った重鉱物粒子についてレーキサイドセメントで封入してプレパラートを作成し、100倍の偏光顕微鏡下で150個に達するまで重鉱物の鑑定を行った。

（2）火山ガラスの形態分類

火山ガラスの形態分類の計測は、100倍の偏光顕微鏡下でカウント数が200個以上に達するまで行った。火山ガラスの形態分類は、吉川（1976）や町田・新井（1978）の分類があるが、ここでは気泡（bubble）の大きさ、ガラスの厚さや気泡の形状などを指標に基づいて定めた遠藤・鈴木（1980）の分類基準に従った。以下にその基準を示す。

A型：気泡の曲率半径が大きく火山ガラスの壁が薄い平板状の火山ガラス

A’型：気泡と気泡の接合部が気泡の壁の平板上にXやY字状の稜を持つ火山ガラス

B型：平板状であるが、火山ガラスの壁が異常に厚く屋根瓦状、カマボコ状やフレーク状の火山ガラス

C型：A、A’型に比べて小さな曲率を持つ火山ガラスで透明なガラスの壁に幾つかの気泡が集まってできた火山ガラス

D型：C型とほぼ同じ曲率で、その気泡が管状に細長く引き伸ばされ、透明な火山ガラスに数本の平行した稜を持つ火山ガラス

E型：D型よりも管が細長く繊維を束ねた形状を示す火山ガラス

F型：最も曲率半径が小さく、不定形の多数の気泡を持った軽石状の火山ガラス

（3）火山ガラスと斑晶鉱物の屈折率測定

テフラに含まれる火山ガラス（n1）と斜方輝石（γ）について、温度変化型屈折率測定装置（古澤地質社製，MAIOT2000）を用いて屈折率測定を行った。火山ガラスについては3～4 ϕ（0.125～0.063㎜）の粒子、斜方輝石についてはハンドピッキングで取り出した2～3 ϕ（0.250～0.125㎜）の粒子を押しつぶして割った粒子を測定に用いた。

火山ガラスの屈折率測定法において、水和されている完新世テフラの火山ガラスは、400℃で12時間加熱することにより、より正確に簡便に測定できる（中村，2002）。ただし、脱水した火山ガ

ラスの屈折率は、脱水しないガラスよりも屈折率が0.010～0.015程度低くなるため、比較するためのテフラ毎のデータベースの構築が望まれる。本報告では両者の屈折率測定を行った。

４．分析結果

（１）試料１

軽鉱物89.7%、重鉱物7.2%、磁性鉱物3.1%で構成されており、重鉱物のうち斜方輝石が55.9%、単斜輝石が27.0%である。軽鉱物中の69.3%は火山ガラスで、A型およびA’型のバブルウォールタイプが62.5%、D型が5.9%であり、茶色の火山ガラスを含むのが特徴的である。火山ガラスの屈折率（n1）は1.5082－1.5152、脱水処理した火山ガラスの屈折率（n1）は1.4960－1.4994、斜方輝石（γ）は1.7089－1.7159の範囲を示す。

（２）試料２

軽鉱物63.0%、重鉱物29.0%、磁性鉱物8.0%で構成されており、重鉱物のうち斜方輝石が43.7%、単斜輝石が30.5%である。軽鉱物中の70.3%は火山ガラスで、A型およびA’型のバブルウォールタイプが58.8%、D型が8.7%であり、茶色の火山ガラスを含むのが特徴的である。火山ガラスの屈折率（n1）は1.5088－1.5131、脱水処理した火山ガラスの屈折率（n1）は1.4951－1.4991、斜方輝石（γ）は1.7083－1.7163の範囲を示す。

５．考察

火山灰分析の結果、試料１については、１）大半がバブルウォール型火山ガラスで構成され、茶色の火山ガラスを含む、２）斑晶鉱物として斜方輝石と単斜輝石を含む、３）火山ガラスおよび斜方輝石の屈折率は鬼界アカホヤ火山灰（K－Ah）の測定値と調和的で、脱水した火山ガラスの屈折率はその値より0.010～0.015程度低いことなどから、この火山灰は約7,300年前に鬼界カルデラから噴出した鬼界アカホヤ火山灰（K－Ah：町田・新井，1978，1992）に由来すると考えられる。試料２は、普通角閃石が含まれること以外は試料１とほぼ同一の岩石学的諸特性を示すことから、鬼界アカホヤ火山灰を含む二次堆積物と考えられる。

鬼界アカホヤ火山灰の年代は、従来は放射性炭素年代測定結果から約6,300年前とされていたが、近年の研究の進展により、実際の年代（暦年代）は約7,300年前と推定されている（町田・新井，2003）。

文献

遠藤邦彦・鈴木正章（1980）立川・武蔵野ローム層の層序と火山ガラス濃集層．考古学と自然科学，№13，p.19-30.

町田　洋・新井房夫（1978）南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラ－アカホヤ火山灰．第四紀研究、17，p.143-163.

町田　洋・新井房夫（1992）火山灰アトラス．東大出版会，276p.

町田　洋・新井房夫（2003）新編火山灰アトラス－日本列島とその周辺－．東京大学出版会，p.58-63.

中村有吾・片山美紀・平川一臣（2002）水和の影響を除去した北海道の完新世テフラガラスの屈折率．第四紀研究，41，p.11-22.

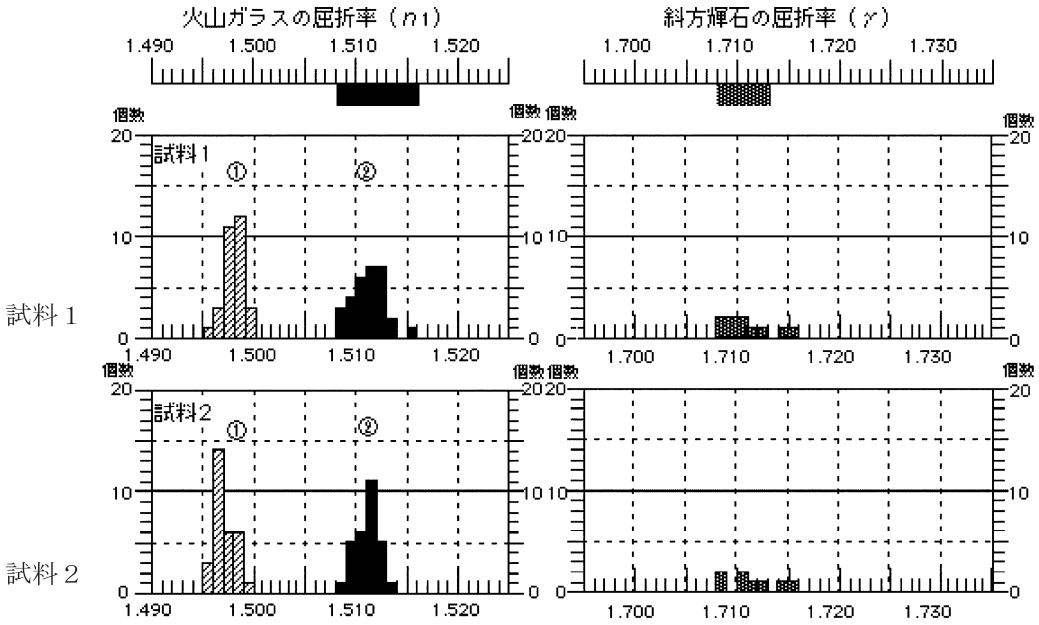
吉川周作（1976）大阪層群火山灰層について．地質学雑誌，82，p.497-515.

テフラ試料採取箇所（M-24Gr東壁）

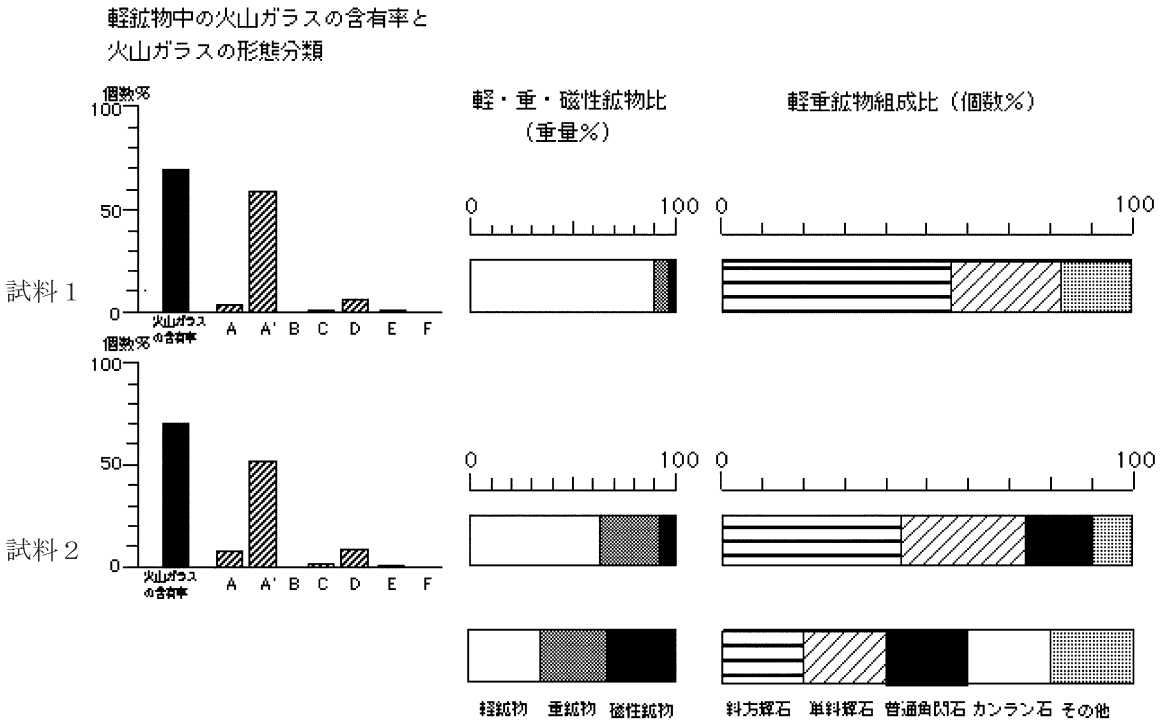
第13表　上伊良原遺榎遺跡におけるテフラ分析結果一覧表

サンプル名		試料1	試料2
試料重量(g)		0.101	0.110
軽鉱物(g)		0.087	0.063
重鉱物(g)		0.007	0.029
磁性鉱物(g)		0.003	0.008
回収重量合計(g)		0.097	0.100
重鉱物組成（個）	斜方輝石	85	73
	単斜輝石	41	51
	普通角閃石	0	26
	カンラン石	0	1
	不明及その他	26	16
	合　　計	152	167
火山ガラス(個)		150	149
非火山ガラス(個)		66	72
火山ガラス形態分類(個)	A型	7	17
	A'型	128	113
	B型	0	0
	C型	1	2
	D型	13	13
	E型	1	3
	F型	0	1

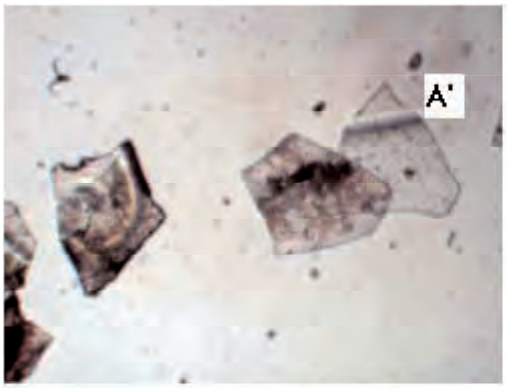
サンプル名		試料1	試料2
重液分離後の回収率(重量%)		96.04	90.91
軽鉱物の含有率(重量%)		89.69	63.00
重鉱物の含有率(重量%)		7.22	29.00
磁性鉱物の含有率(重量%)		3.09	8.00
合　　計		100.00	100.00
重鉱物組成（個数%）	斜方輝石	55.92	43.71
	単斜輝石	26.97	30.54
	普通角閃石	0.00	15.57
	カンラン石	0.00	0.60
	不明及その他	17.11	9.58
	合　　計	100.00	100.00
火山ガラスの形態分類（個数%）	A型	3.24	7.69
	A'型	59.26	51.13
	B型	0.00	0.00
	C型	0.46	0.90
	D型	5.86	8.72
	E型	0.46	1.36
	F型	0.00	0.45
火山ガラス含有率(個数%)		69.28	70.26
火山ガラスの屈折率(n1)		1.5082-1.5152	1.5088-1.5131
火山ガラスの屈折率(n1)(脱水)		1.4960-1.4994	1.4954-1.4991
斜方輝石の屈折率(γ)		1.7089-1.7159	1.7083-1.7163



①のヒストグラム：400°C 12時間脱水処理した火山ガラス
②のヒストグラム：未処理の火山ガラス
＊最上部は町田・新井（1992）のK-Ahの屈折率の範囲を示してある。

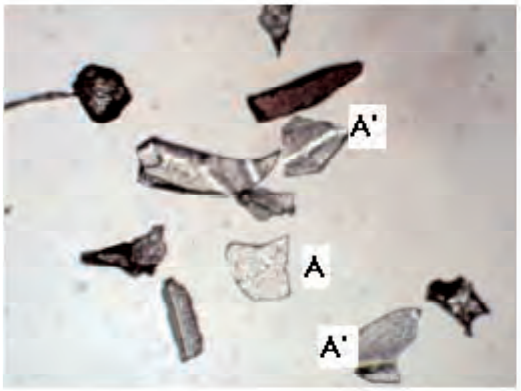


第237図　テフラの岩石学的諸特性



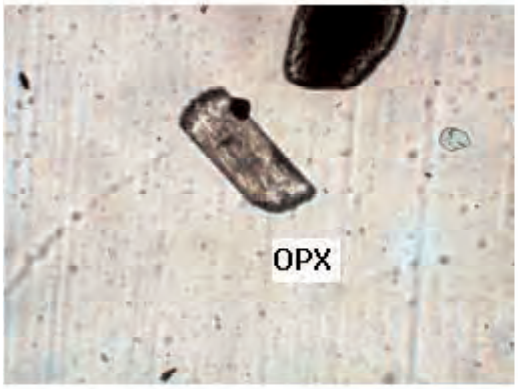
1

2

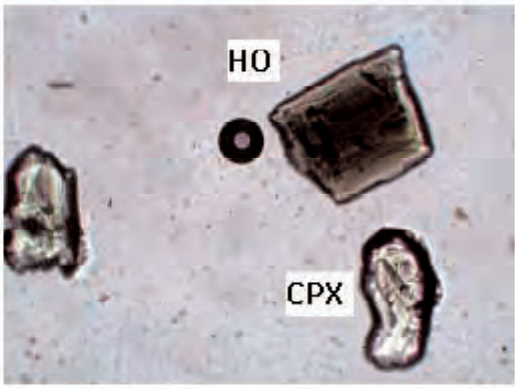


3

4



5



6

1，2，4は試料1
3，5，6は試料2
4:茶色火山ガラス，OPX:斜面輝石，CPX:単斜輝石，HO:普通角閃石

テフラの顕微鏡写真

4）樹種同定

1．はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質の特徴から樹種の同定が可能である。木材は花粉などの微化石と比較して移動性が小さいことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

2．試料

試料は、Ｌ24Gr南壁の炭化物混層から採取された炭化材３点である。

3．方法

試料を割折して新鮮な横断面（木口と同義）、放射断面（柾目と同義）、接線断面（板目と同義）の基本三断面の切片を作製し、落射顕微鏡によって50～1000倍で観察した。同定は、解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

4．結果

第14表に結果を示し、主要な分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定根拠となった特徴を記す。

コナラ属アカガシ亜属　Quercus subgen. Cyclobalanopsis　ブナ科　図版１・２・３

横断面：中型から大型の道管が１～数列幅で年輪界に関係なく放射方向に配列する放射孔材である。道管は単独で複合しない。放射断面：道管の穿孔は単穿孔で放射組織は平伏細胞からなる。接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

5．所見

樹種同定の結果、Ｌ24Gr南壁の炭化物混層から採取された３点の炭化材は、いずれもコナラ属アカガシ亜属と同定された。コナラ属アカガシ亜属は、一般にカシと総称されるが、アカガシ、イチイガシ、アラカシ、シラカシなど多くの種があり、温帯下部の暖温帯の照葉樹林を形成する主要高木で、高さ30m、径1.5m以上に達する。イチイガシは自然度が高いが、アラカシは二次林性でもある。当時の遺跡周辺もしくは近隣の地域で採取可能な樹種であったと考えられる。

文献

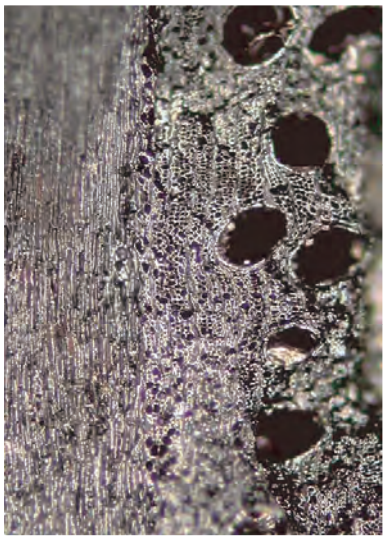
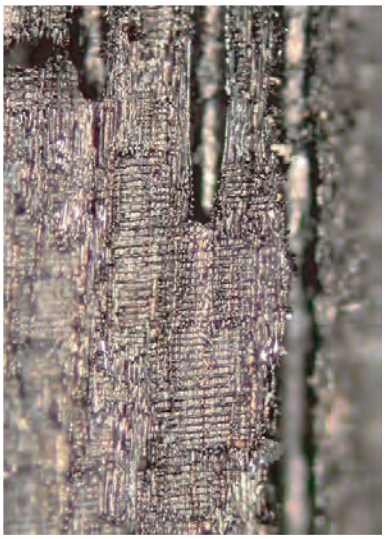
島地 謙・佐伯 浩・原田 浩・塩倉高義・石田茂雄・重松頼生・須藤彰司（1985）木材の構造．文永堂出版，290p.

島地 謙・伊東隆夫（1988）日本の遺跡出土木製品総覧．雄山閣，296p.

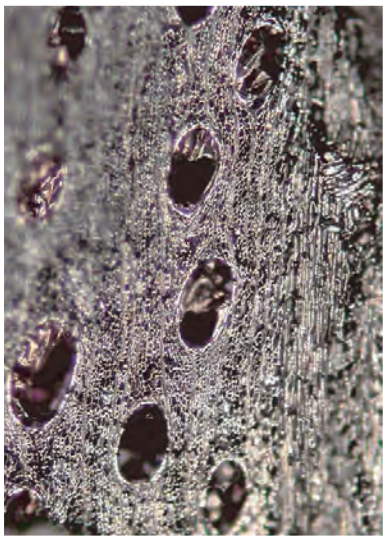
山田昌久（1993）日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成．植生史研究特別１号．植生史研究会，242p.

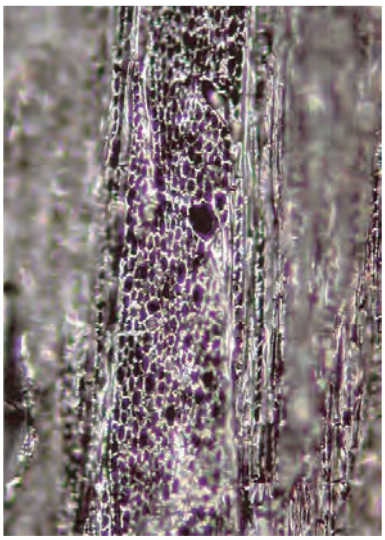
第14表　上伊良原榎遺跡L－24Gr南壁における樹種同定結果

試料	結果（学名／和名）	
炭化材①	Quercus subgen.Cyclobalanopsis	コナラ属アカガシ亜属
炭化材②	Quercus subgen.Cyclobalanopsis	コナラ属アカガシ亜属
炭化材③	Quercus subgen.Cyclobalanopsis	コナラ属アカガシ亜属

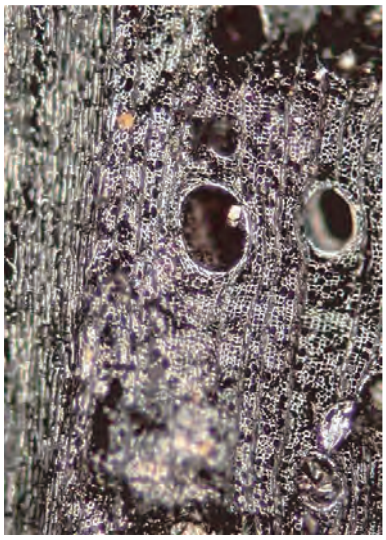
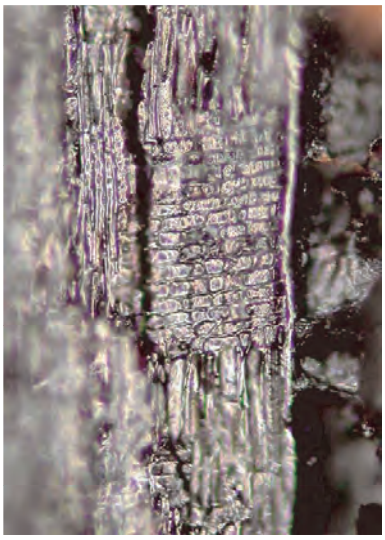
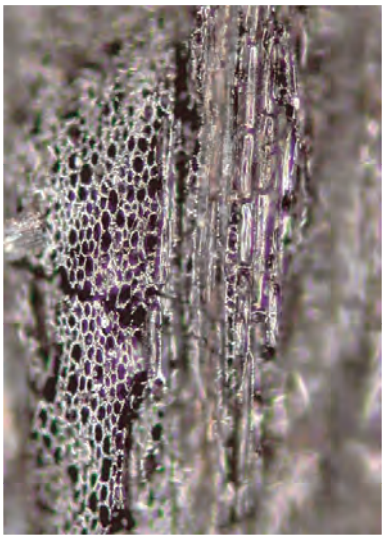



横断面 ——— :0.4mm　放射断面 ——— :0.4mm　接線断面 ——— :0.4mm
1.炭化材①　コナラ属アカガシ亜属





横断面 ——— :0.5mm　放射断面 ——— :0.2mm　接線断面 ——— :0.2mm
2.炭化材②　コナラ属アカガシ亜属

横断面 ——— :0.5mm　放射断面 ——— :0.2mm　接線断面 ——— :0.2mm
3.炭化材③　コナラ属アカガシ亜属

上伊良原榎遺跡の炭化材

5）植物珪酸体分析

1．はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内に珪酸（SiO_2）が蓄積したもので、植物が枯れたあともガラス質の微化石（プラント・オパール）となって土壌中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山，2000）。

2．試料

分析試料は、M23Gr西壁、F20Gr 4 号竪穴住居跡、H20Gr50号土坑の 3 地点から採取された計20点である。試料採取箇所を分析結果の模式柱状図に示す。

3．分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、ガラスビーズ法（藤原，1976）を用いて、次の手順で行った。

1）試料を105℃で24時間乾燥（絶乾）
2）試料約 1 gに対し直径約40μmのガラスビーズを約0.02g添加（電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量）
3）電気炉灰化法（550℃・ 6 時間）による脱有機物処理
4）超音波水中照射（300W・42KHz・10分間）による分散
5）沈底法による20μm以下の微粒子除去
6）封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成
7）検鏡・計数

同定は、400倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体を対象として行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート 1 枚分の精査に相当する。試料 1 gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料 1 g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重（1.0と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体 1 個あたりの植物体乾重、単位：10^{-5}g）をかけて、単位面積で層厚 1 cmあたりの植物体生産量を算出した。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる。イネの換算係数は2.94（種実重は1.03）、ヨシ属（ヨシ）は6.31、ススキ属（ススキ）は1.24、ネザサ節は0.48、チマキザサ節・チシマザサ節は0.75、ミヤコザサ節は0.30である（杉山，2000）。タケ亜科については、植物体生産量の推定値から各分類群の比率を求めた。

4．分析結果

（1）分類群

検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表 1 および図 1 に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

〔イネ科〕

イネ、キビ族型、ヨシ属、ススキ属型（おもにススキ属）、ウシクサ族A（チガヤ属など）、ウ

シクサ族Ｂ（大型）

〔イネ科ータケ亜科〕

ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節）、チマキザサ節型（ササ属チマキザサ節・チシマザサ節など）、ミヤコザサ節型（ササ属ミヤコザサ節など）、未分類等

〔イネ科ーその他〕

表皮毛起源、棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来）、未分類等

〔樹木〕

クスノキ科、アワブキ科、その他

（２）植物珪酸体の検出状況

１）M23Gr西壁

下位の28層（試料10）では、ミヤコザサ節型が比較的多く検出され、キビ族型、ヨシ属、ウシクサ族Ａなども認められた。27層（試料９）から12層（試料３、４）にかけても、おおむね同様の結果であるが、チマキザサ節型、樹木（その他）などが出現している。樹木は一般に植物珪酸体の生産量が低いことから、少量が検出された場合でもかなり過大に評価する必要がある（杉山，1999）。なお、すべての樹種で植物珪酸体が形成されるわけではなく、落葉樹では形成されないものも多い（近藤・佐瀬、1986）。10層（試料１、２）では、ネザサ節型や樹木のアワブキ科が出現し、チマキザサ節型は見られなくなっている。おもな分類群の推定生産量によると、おおむねミヤコザサ節型が優勢であり、部分的にヨシ属も多くなっている。

２）Ｆ20Gr４号竪穴住居跡

３層（試料５）とその下層（試料６）では、ミヤコザサ節型が比較的多く検出され、樹木（その他）も認められた。２層（試料３、４）では、ミヤコザサ節型が増加し、キビ族型、ヨシ属、ススキ属型、ウシクサ族Ａなどが出現している。１層（試料１、２）では、イネが検出された。イネの密度は700～1,400個/gと比較的低い値であり、稲作跡の検証や探査を行う場合の判断基準としている5,000個/gを下回っている。

３）Ｈ20Gr50号土坑

遺構埋土（試料１～３）では、ミヤコザサ節型が比較的多く検出され、ヨシ属、ススキ属型、ウシクサ族Ａ、および樹木（照葉樹）のクスノキ科なども認められた。

５．植物珪酸体分析から推定される植生と環境

縄文時代早期初頭とされる遺物包含層の堆積当時は、ササ属（おもにミヤコザサ節）を主体としてススキ属やチガヤ属、キビ族なども見られるイネ科植生であり、周辺にはヨシ属などが生育する湿地的なところも分布していたと考えられる。また、遺跡周辺には何らかの樹木が生育していたと推定される。

ササ属は常緑であることから、大半の植物が落葉または枯死する秋から冬にかけてはシカ類などの草食動物の重要な食物となっている（高槻，1992）。遺跡周辺にこれらのササ類が豊富に存在

したことは、当時の動物相を考えるうえでも重要と考えられる。

Ｈ20Ｇr50号土坑の埋土では、少量ながらクスノキ科が検出された。当時は遺跡周辺にクスノキ科などの照葉樹林が分布していた可能性が示唆されるが、他の地点では照葉樹起源が認められないことから確定的なことは言えない。花粉分析の結果によると、九州における照葉樹林の発達開始時期は、南部九州では約8,500年前、北部九州では約8,000年前と推定されている（畑中・野井・岩内，1998）。今後、周辺地域で同様の検討を行うことにより、照葉樹林の存在や分布拡大の様相が解明されるものと期待される。

鬼界アカホヤ火山灰（K-Ａh，約7,300年前）混層の堆積当時も、ササ属（おもにミヤコザサ節）を主体としたイネ科植生が継続されていたと考えられるが、この時期には温暖な気候の指標とされるメダケ属（ネザサ節）なども見られるようになったと推定される。

Ｆ20Ｇr４号竪穴住居跡の１層では、少量ながらイネが検出された。同層の深度は現表土から比較的浅いことから、後代の耕作などによる攪乱の影響と考えられる。

文献

近藤錬三・佐瀬隆（1986）植物珪酸体，その特性と応用．第四紀研究，25：p.31-63.

杉山真二（1999）植物珪酸体分析からみた九州南部の照葉樹林発達史．第四紀研究．38(2)，p.109-123.

杉山真二（2000）植物珪酸体（プラント・オパール）．考古学と植物学．同成社，p.189-213.

高槻成紀（1992）北に生きるシカたち－シカ、ササそして雪をめぐる生態学－．どうぶつ社.

畑中健一・野井英明・岩内明子（1998）九州地方の植生史．図説日本列島植生史．朝倉書店，p.151-161.

藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究（1）－数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法－．考古学と自然科学，9，p.15-29.

M-23Gr西壁

F-20Gr　4 号竪穴住居跡

H-20Gr　50号土坑

植物珪酸体分析の試料採取箇所

第15表　上伊良原榎遺跡における植物珪酸体分析結果

検出密度（単位：×100個/g）

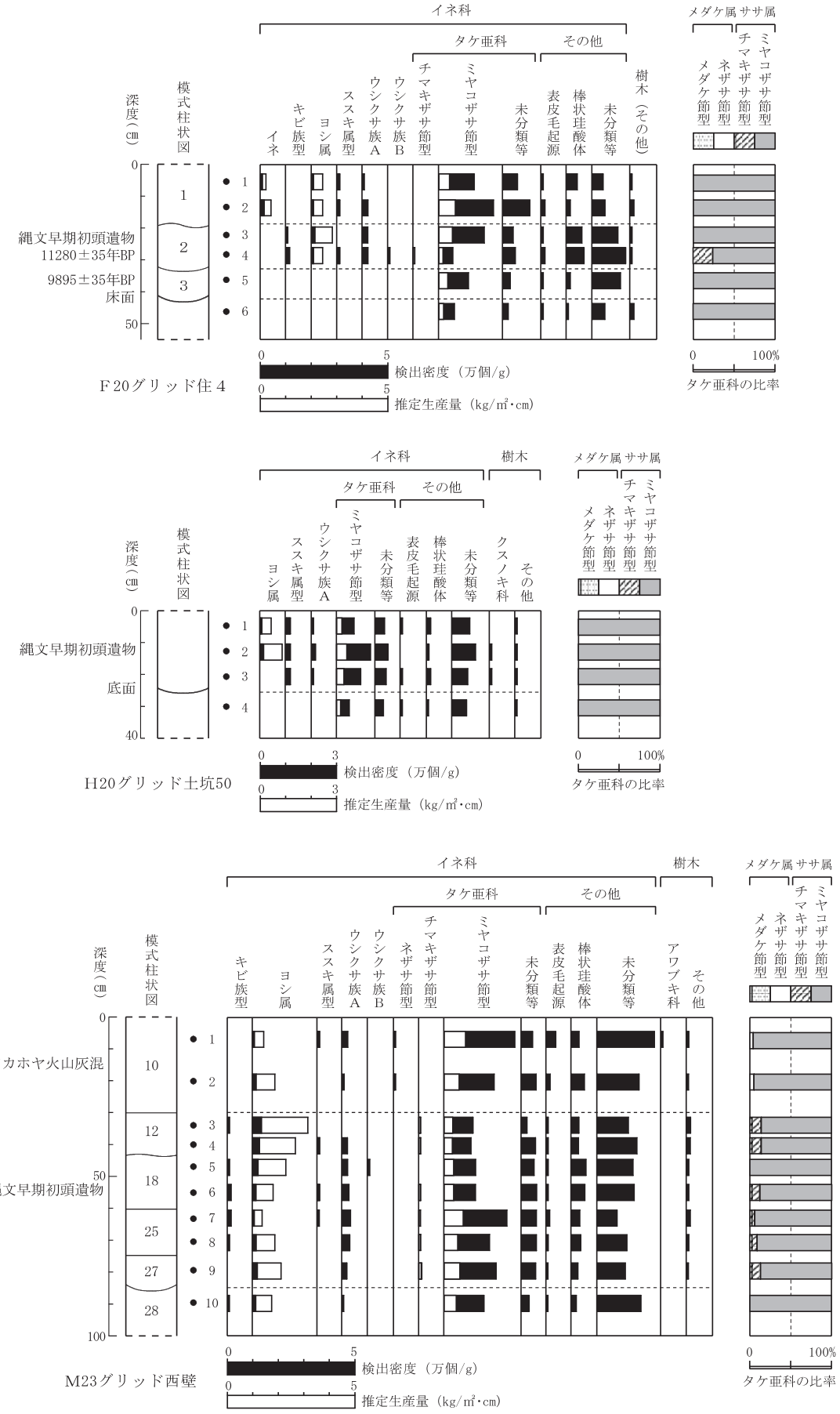
分類群	学名	地点・試料	M23グリッド西壁										F20グリッド住４						H20グリッド土坑50			
			1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	1	2	3	4	5	6	1	2	3	4
イネ科	Gramineae																					
イネ	*Oryza sativa*												7	14								
キビ族型	Paniceae type				7		7	13	13	7		6			7	14						
ヨシ属	*Phragmites*		7	14	35	27	21	13	6	14	18	12	7	7	13	7			7	14		
ススキ属型	*Miscanthus* type		7			7		7	6				7	7		7			7	7	7	
ウシクサ族A	Andropogoneae A type		22	7		20	21	26	32	29	18	6	7	21	20	21			7	14	7	
ウシクサ族B	Andropogoneae B type						7									7						
タケ亜科	Bambusoideae																					
ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. Nezasa		7	7																		
チマキザサ節型	*Sasa* sect. Sasa etc.				7	7		7	6	7	12					7						
ミヤコザサ節型	*Sasa* sect. Crassinodi		280	198	114	107	125	124	249	180	206	158	140	217	180	55	117	61	69	134	95	50
未分類等	Others		43	57	21	54	49	59	58	58	55	29	56	105	40	48	28	20	35	49	41	31
その他のイネ科	Others																					
表皮毛起源	Husk hair origin		36	14	7	7	7	7	13	7	6	6	7	14	7	14	7	7	7		7	6
棒状珪酸体	Rod-shaped		29	50	28	27	56	52	32	36	24	18	42	14	60	68	14	7	14	7	14	6
未分類等	Others		223	163	121	154	139	144	77	115	109	170	42	49	100	130	110	48	69	92	61	56
樹木起源	Arboreal																					
クスノキ科	Lauraceae																			7	7	
アワブキ科	Sabiaceae		7																			
その他	Others		7	7	14	13	7	7	13	7	6		7	14	7	7		14	7	7	7	6
植物珪酸体総数	Total		668	517	355	423	438	458	505	461	455	404	322	461	434	383	276	157	222	332	244	157

おもな分類群の推定生産量（単位：kg/㎡･cm）：試料の仮比重を1.0と仮定して算出

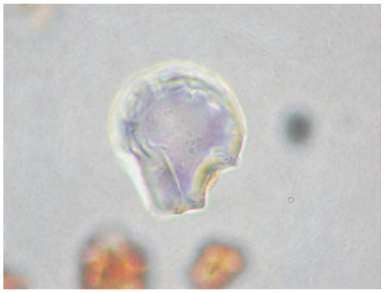
イネ	*Oryza sativa*												0.21	0.41								
ヨシ属	*Phragmites*		0.45	0.89	2.24	1.70	1.32	0.83	0.40	0.91	1.15	0.74	0.44	0.44	0.84	0.43			0.44	0.89		
ススキ属型	*Miscanthus* type		0.09			0.08		0.08	0.08				0.09	0.09		0.08			0.09	0.09	0.08	
ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. Nezasa		0.03	0.03																		
チマキザサ節型	*Sasa* sect. Sasa etc.				0.05	0.05		0.05	0.05	0.05	0.09					0.05						
ミヤコザサ節型	*Sasa* sect. Crassinodi		0.84	0.59	0.34	0.32	0.38	0.37	0.75	0.54	0.62	0.47	0.42	0.65	0.54	0.16	0.35	0.18	0.21	0.40	0.28	0.15

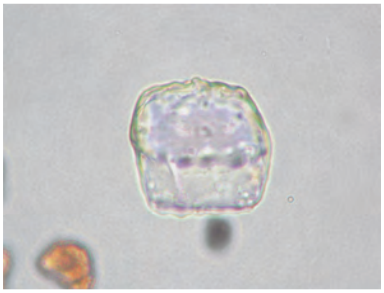
タケ亜科の比率（%）

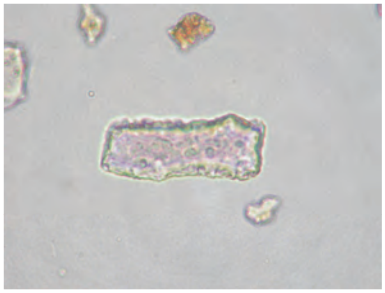
ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. Nezasa		4	5																		
チマキザサ節型	*Sasa* sect. Sasa etc.				14	14		12	6	9	13					24						
ミヤコザサ節型	*Sasa* sect. Crassinodi		96	95	86	86	100	88	94	91	87	100	100	100	100	76	100	100	100	100	100	100

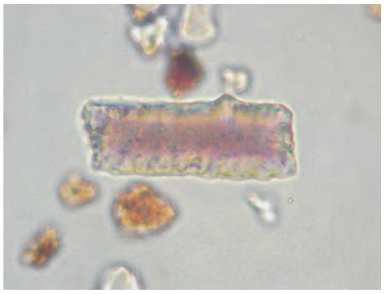


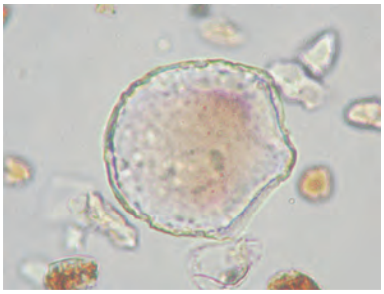
第238図　上伊良原榎遺跡における植物珪酸体分析結果

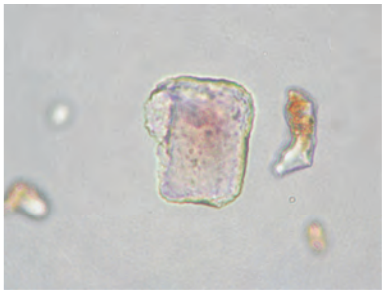

イネ

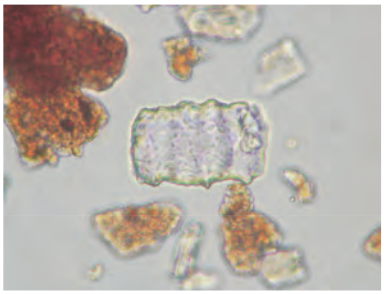

イネ（側面）

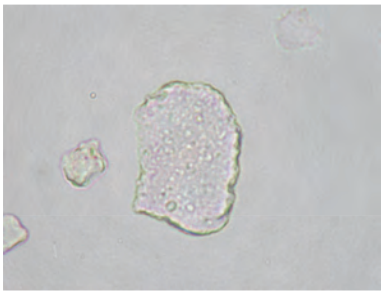

キビ族型

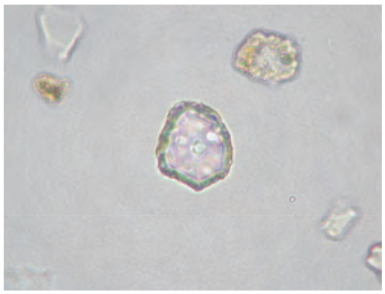

キビ族型

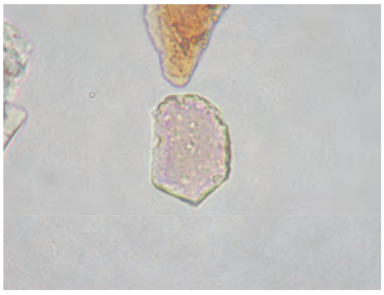

ヨシ属

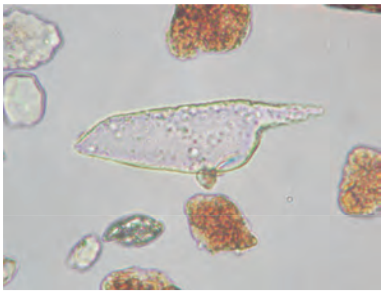

ススキ属型

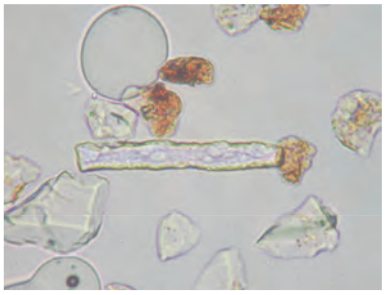

ネザサ節型

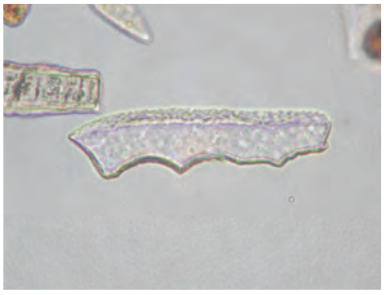

チマキザサ節型

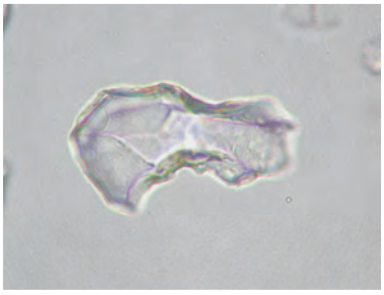

ミヤコザサ節型

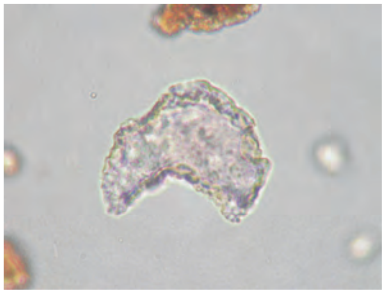

ミヤコザサ節型


表皮毛起源


棒状珪酸体


クスノキ科


ブナ科（シイ属）？


アワブキ科

50 μm

上伊良原榎遺跡の植物珪酸体（プラント・オパール）

Ⅴ　おわりに

本報告書では、平成19年度に発掘調査を実施した上伊良原榎遺跡、上高屋台ノ原遺跡と、平成20年度に調査を実施した上高屋台ノ原遺跡第２次調査、平成21年度に調査を実施した上高屋台ノ原遺跡第３次調査の内容をまとめて『伊良原Ⅱ』として報告を行った。

上伊良原榎遺跡では縄文時代早期と中世の二つの時期における大きな成果があった。

縄文時代早期では、「柏原式土器」と呼ばれる刺突文土器が数多く出土したことが大きな特徴である。これまで豊前地域ではほとんど出土例がなかっただけに、この土器のもつ価値は高い。また竪穴住居跡をはじめ、同時期の遺構に恵まれたことは非常に重要な成果となった。これらによって、豊後地域や筑前地域など他地域の刺突文土器との比較検討が可能になったことは特筆に値する。またこの突帯文土器の時期に後続する時期のものとして押型文土器があるが、本遺跡をはじめ、後述する上高屋台ノ原遺跡でもまとまって出土している。同一地域での地域的様相を把握する上においてこれらの存在は今後も重要な役割を果たすものと思われる。

中世期においては特に墓の存在が顕著であった。副葬品の差異から類推される被葬者像は従来の伊良原地区の中世観を大きく変えるものとなった。当地区の歴史的背景には彦山や蔵持山などの山岳宗教と宇都宮氏を中心とした在地勢力の存在が複雑に関与したことは疑うべくもないが、その影響を考古資料から読み解くことは今後の課題であり、今回の発掘調査がこれに寄与する役割は大きい。

上高屋台ノ原遺跡では、特に縄文時代早期の押型文土器の出土が顕著であった。上述したように上伊良原榎遺跡との比較検討、または周辺地域との比較資料として重要な資料を提供する結果となった。

里道の石敷路については足掛け３年の調査となった。現在は稀に見る登山者以外にここを訪れる人もなく、石敷路の存在を知る人すらもはや皆無に等しいが、発掘調査によって得られた知見は往事の姿を彷彿とさせ、霊山蔵持山へと参詣する人々の思いが石畳に込められたものであった。時代からすればそれほど古くない構造物とはいえ、地域の重要な遺産として記録保存できたことは大きな成果となった。

伊良原ダムの発掘調査は今後も当分の間継続する予定である。既に遺跡の存在が判明している地点も少なくないが、まだ大半は遺跡の有無が確認されずに残されたままである。今後の発掘調査の進展によって次々と新たな情報が得られることは想像に難くなく、こうした新知見が研究者のみならず伊良原地区の住民をはじめ、数多くの人々に、郷土の文化として理解され親しまれることを望んで止まない。

図　版

1 上伊良原榎遺跡上空から下流域を望む（南から）

2 上伊良原榎遺跡上空から東側を望む（西から）

図版2

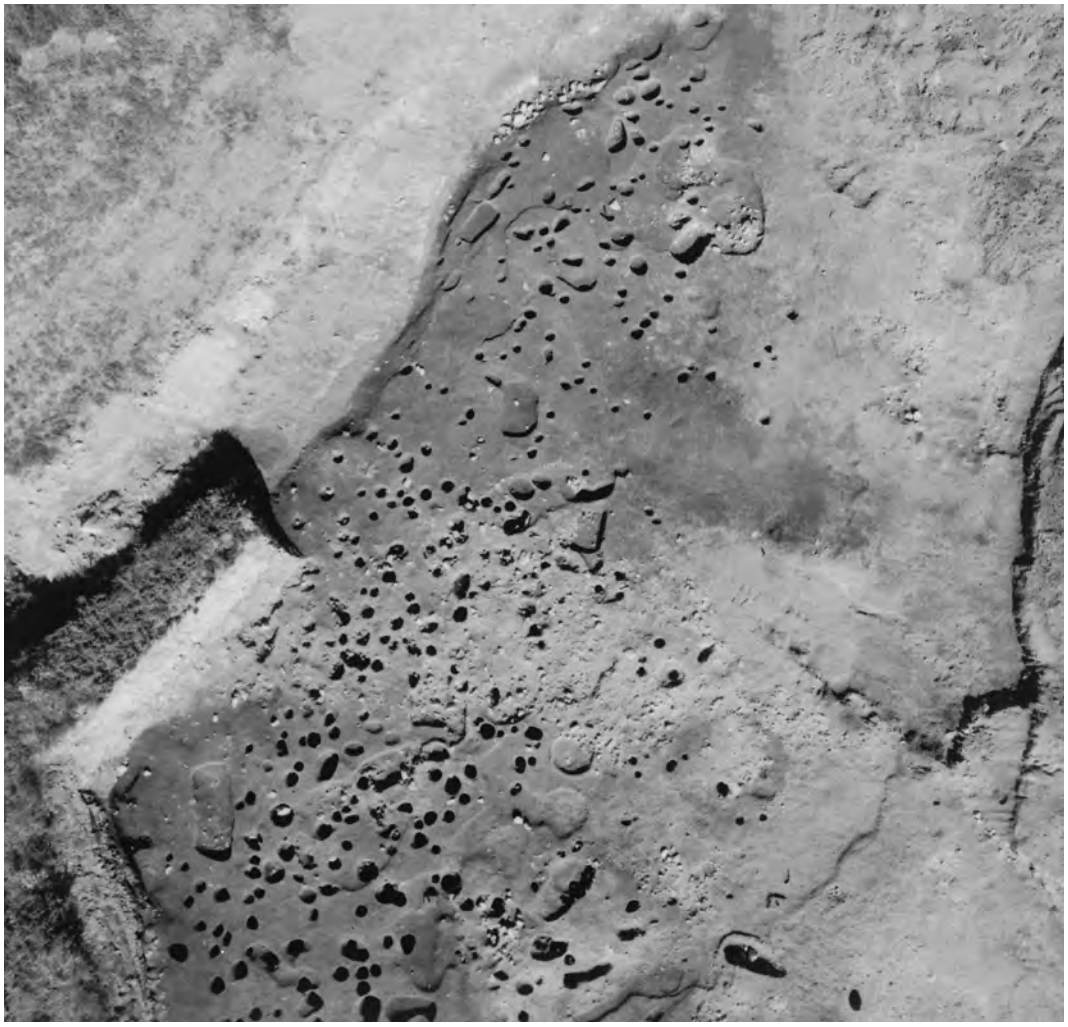
1　上伊良原中村地区
　全景（南から）

2　Ⅰ区全景（南から）

1　Ⅰ区全景（北から）

2　Ⅰ区第Ⅰ文化層全景
（上空から）

図版4



1　Ⅱ区西側第Ⅰ文化層
全景（南から）

2　Ⅰ区グリッド全景
（南から）

1　Ⅰ区北側グリッド
　全景（南から）

2　Ⅰ区東側グリッド
　全景（西から）

図版6

1 Ⅲ区グリッド全景
（上空から）

2 Ⅲ区北側グリッド
全景（北から）

1 Ⅲ区西側グリッド
全景（東から）

2 Ⅲ区南側グリッド
全景（北から）

1　Ⅱ区全景（上空から）

2　Ⅱ区東側グリッド
全景（西から）

1 調査前全景（東から）

2 調査前全景（東から）

3 調査前全景（北から）

図版10

1 表土掘削風景（南から）

2 Ⅰ区南東壁際土層（西から）

3 Ⅰ区南壁際土層（北から）

1　Ⅱ区西壁際土層（東から）

2　Ⅱ区西壁際土層（東から）

3　Ⅰ区北東壁際土層（西から）

図版12

1　N－12Gr東壁土層（西から）

2　Ⅰ区東側第Ⅱ文化層（西から）

3　X－4Gr北壁土層（南から）

1　F－20Gr東壁土層（西から）

2　G－18Gr北壁土層（南から）

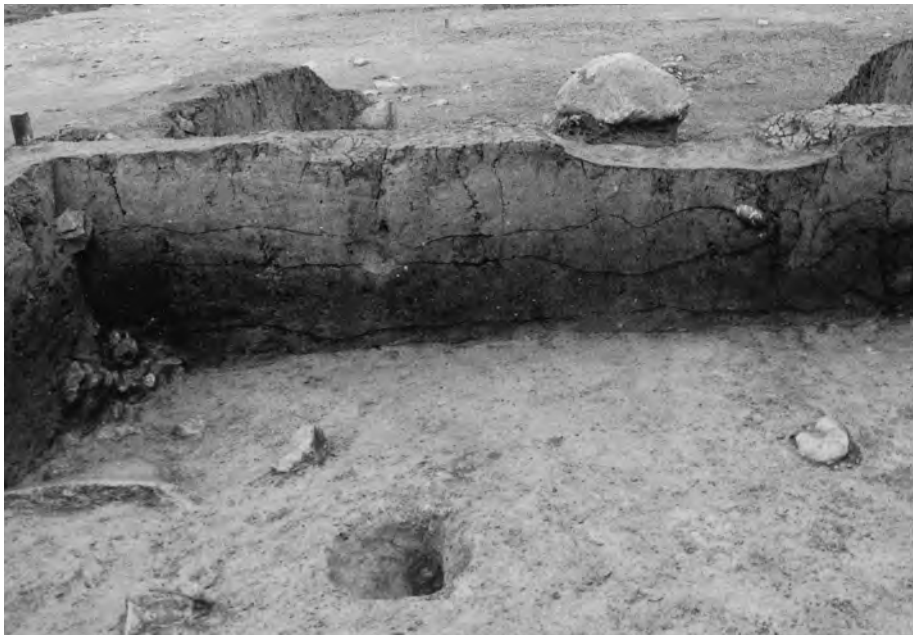
3　H－20Gr西壁土層（東から）

図版14

1 Ⅰ－21Gr北壁土層（南から）

2 Ｌ－24Gr南壁土層（北から）

3 Ｍ－24Gr北壁土層（南から）



1　N－22Gr西壁土層（東から）

2　N－23Gr北壁土層（南から）

3　N－24Gr北壁土層（南から）

図版16

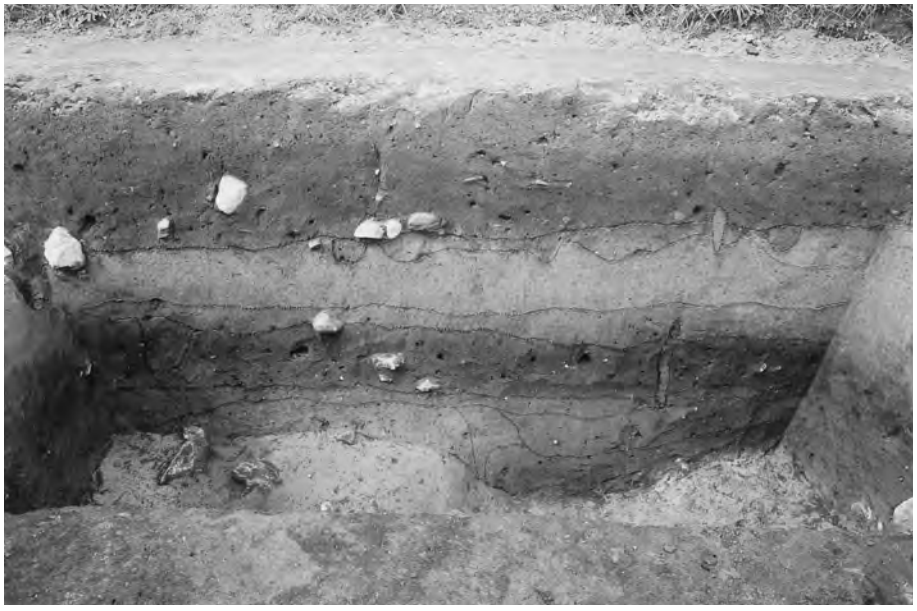
1　P－23Gr西壁土層（東から）

2　N－18Gr西壁土層（東から）

3　P－17Gr西壁土層（東から）

1　AW－13Gr西壁土層（東から）

2　AX－14Gr西壁土層（東から）



3　AX－18Gr西壁土層（東から）

図版18

1 BA－15Gr西壁土層（東から）

2 BA－15Gr西壁土層（東から）

3 調査区外トレンチ土層（東から）

1　O－12Gr №9 土器出土状況
（東から）

2　AA－6Gr石匙出土状況（西から）

3　N－22Grナイフ形石器出土状況
（東から）

図版20

1　1号竪穴住居跡（南から）

2　1号竪穴住居跡（完掘後）
（南から）

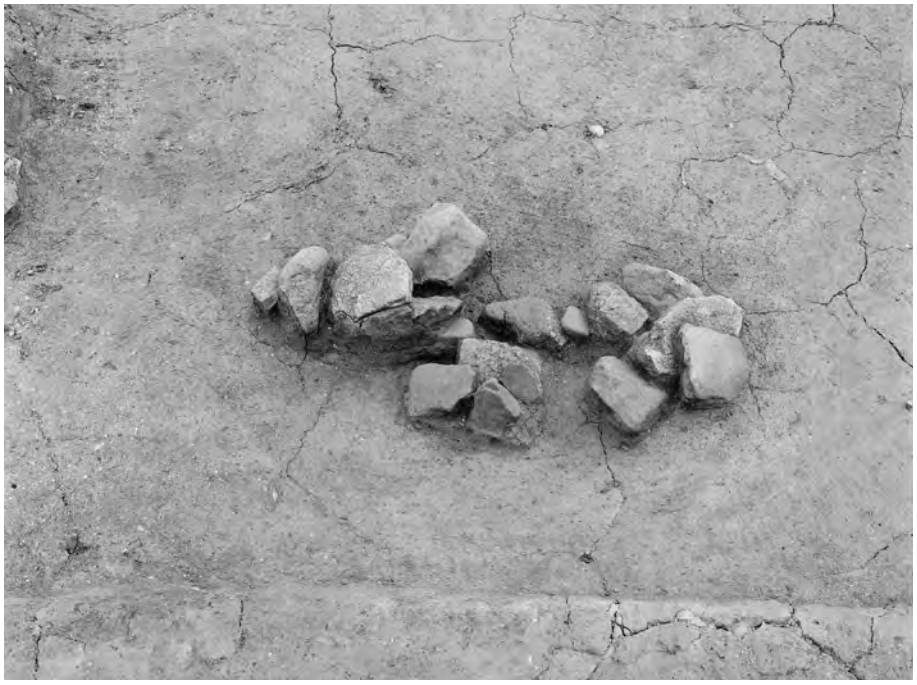
3　2号竪穴住居跡（南から）

1　2号竪穴住居跡（南東から）

2　3号竪穴住居跡（西から）

3　4号竪穴住居跡（東から）

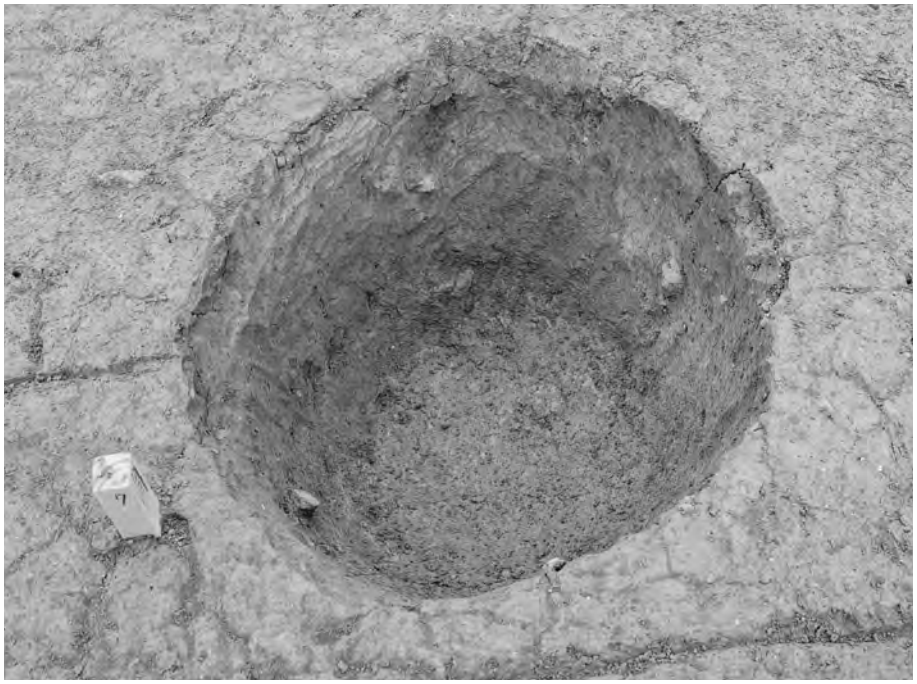
図版22



1　1号集石（西から）

2　2号集石（東から）

3　32号土坑（西から）



1　33 号土坑（南から）

2　34 号土坑（西から）

3　35 号土坑（南から）

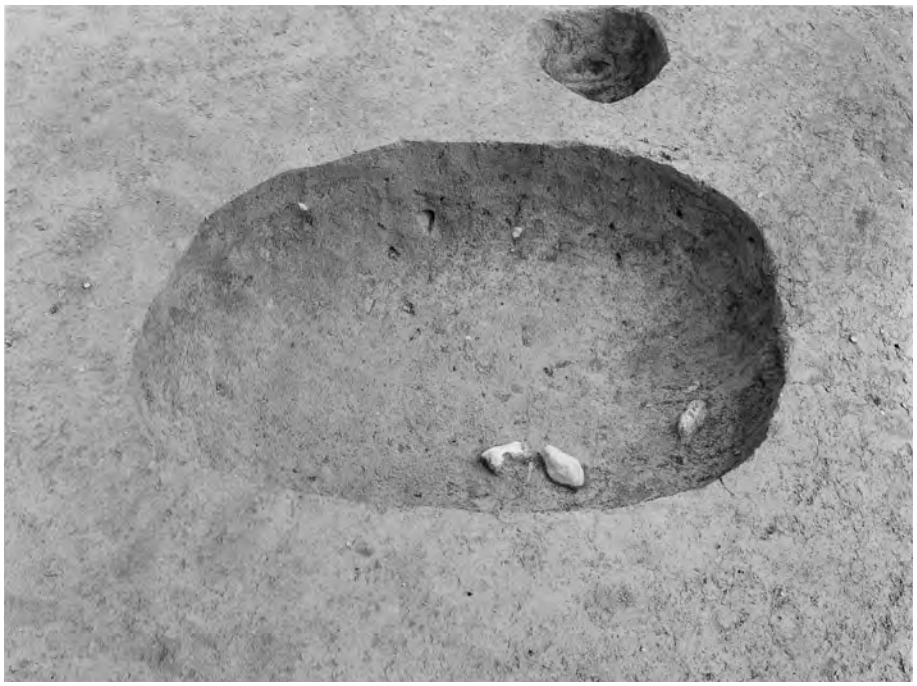
1　36 号土坑（南東から）

2　37 号土坑（西から）

3　42 号土坑（南東から）

1　43 号土坑（北から）

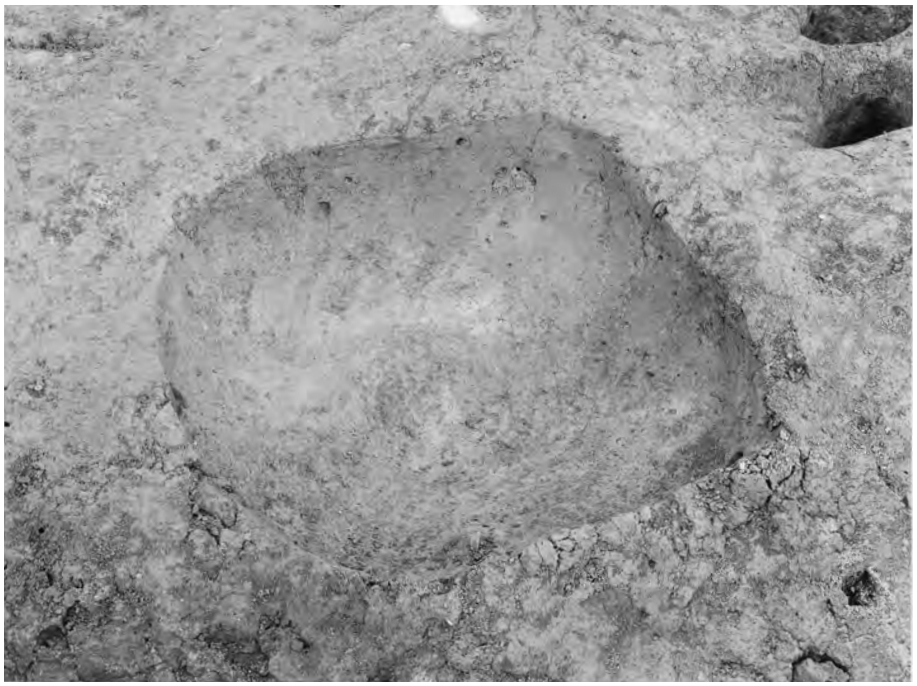
2　44 号土坑（西から）



3　45 号土坑（北から）

1　46 号土坑（東から）

2　47 号土坑（東から）



3　48 号土坑（西から）

1　49 号土坑（西から）

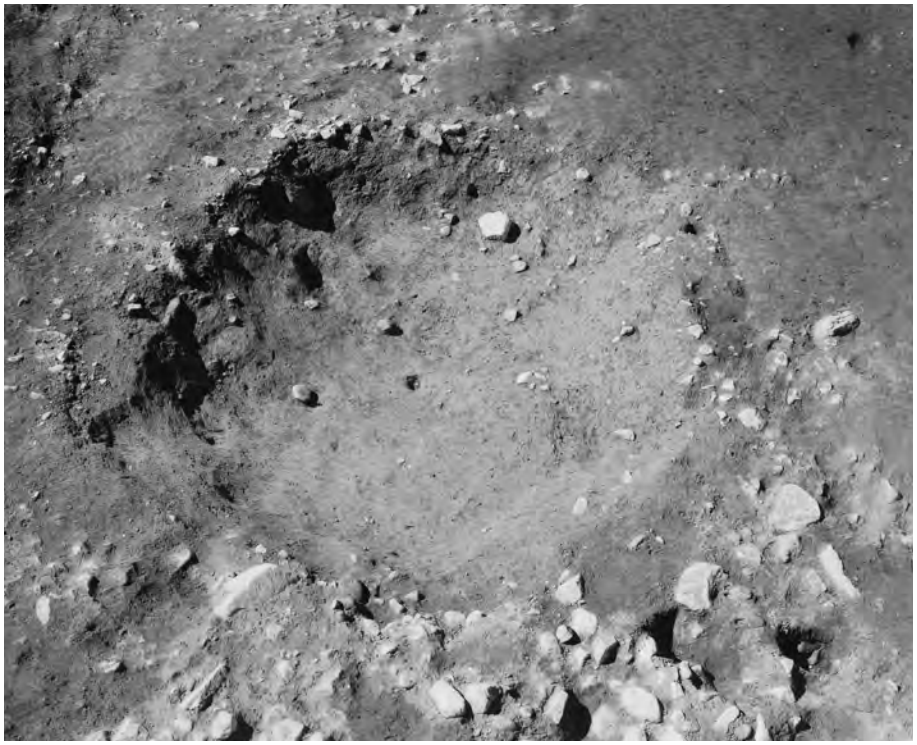
2　50 号土坑（西から）

3　51 号土坑（東から）

図版28

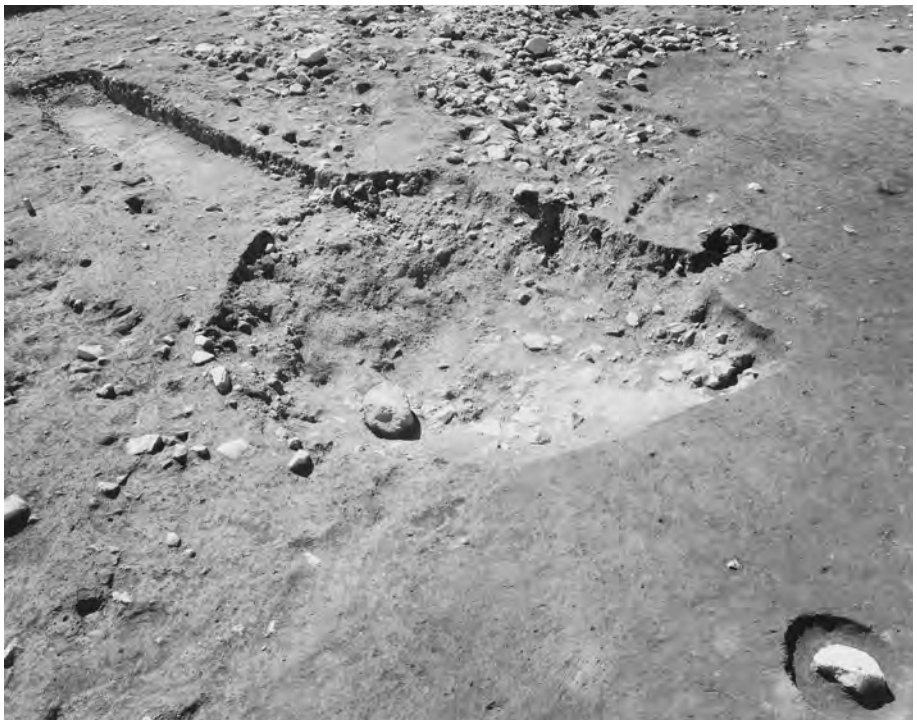
1　53 号土坑（北から）

2　57 号土坑土層（南から）



3　57 号土坑（北から）

1　58 号土坑土層（西から）



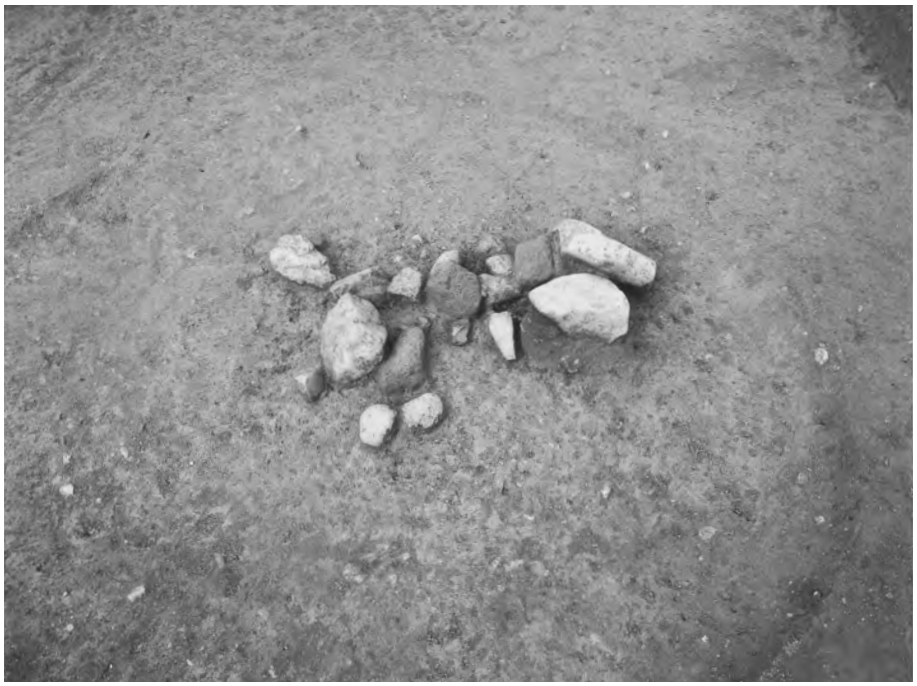
2　58 号土坑（北から）

3　59 号土坑（東から）

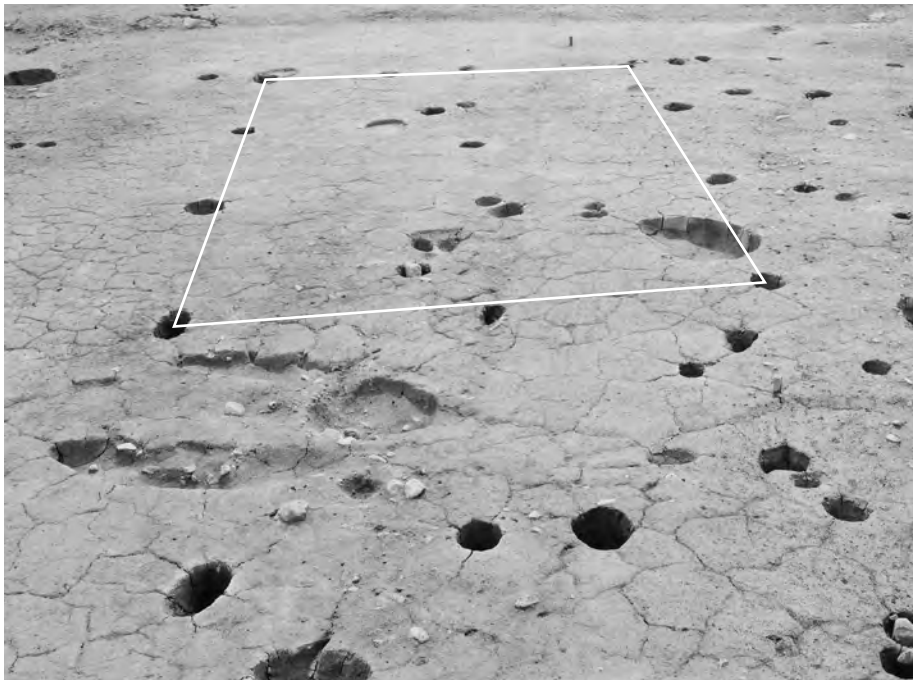
図版30

1　76 号土坑半截（東から）

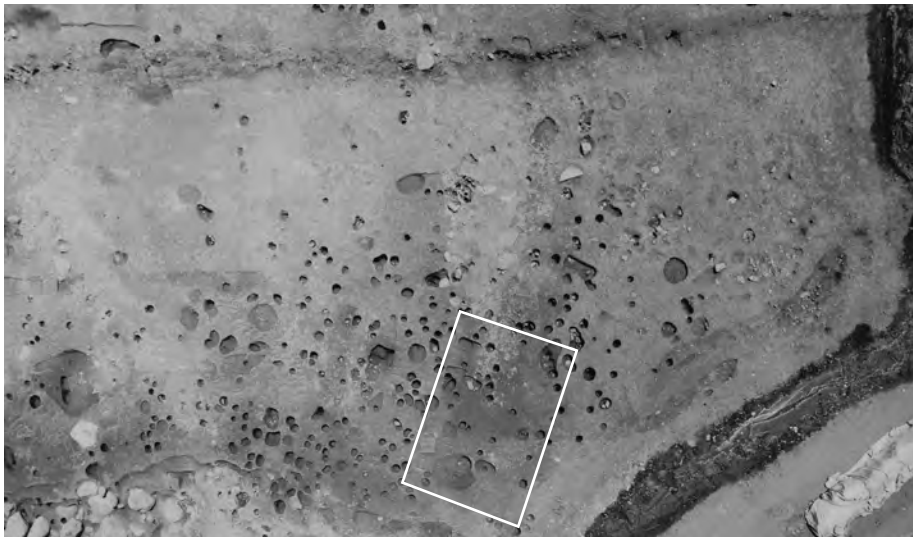
2　76 号土坑（東から）



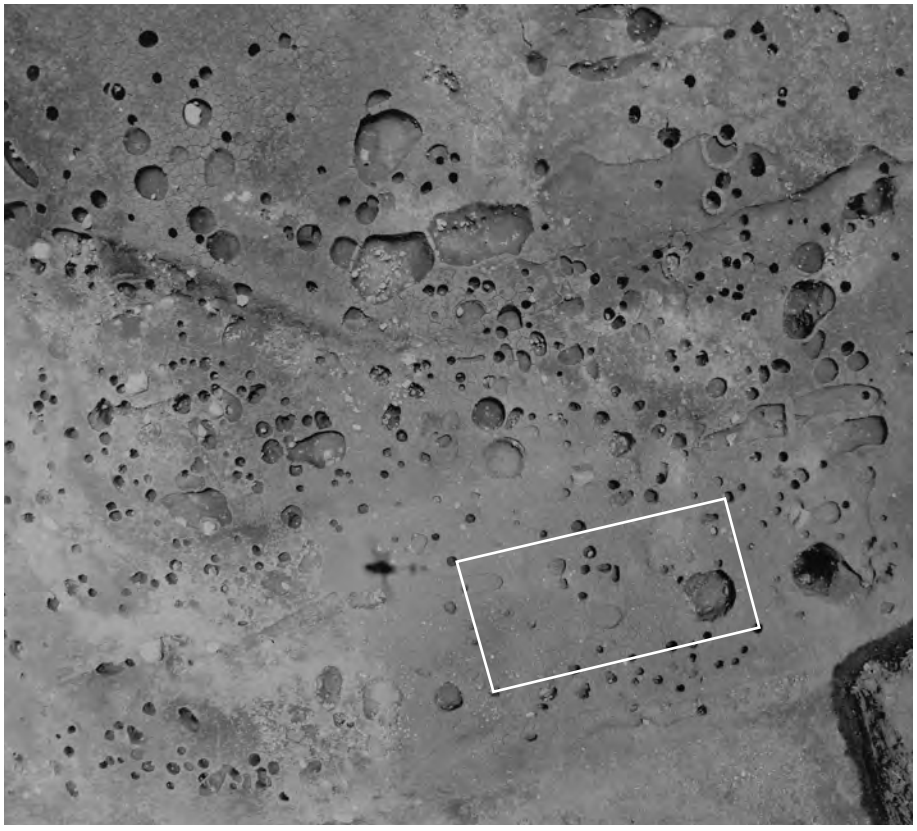
3　76 号土坑集石（東から）



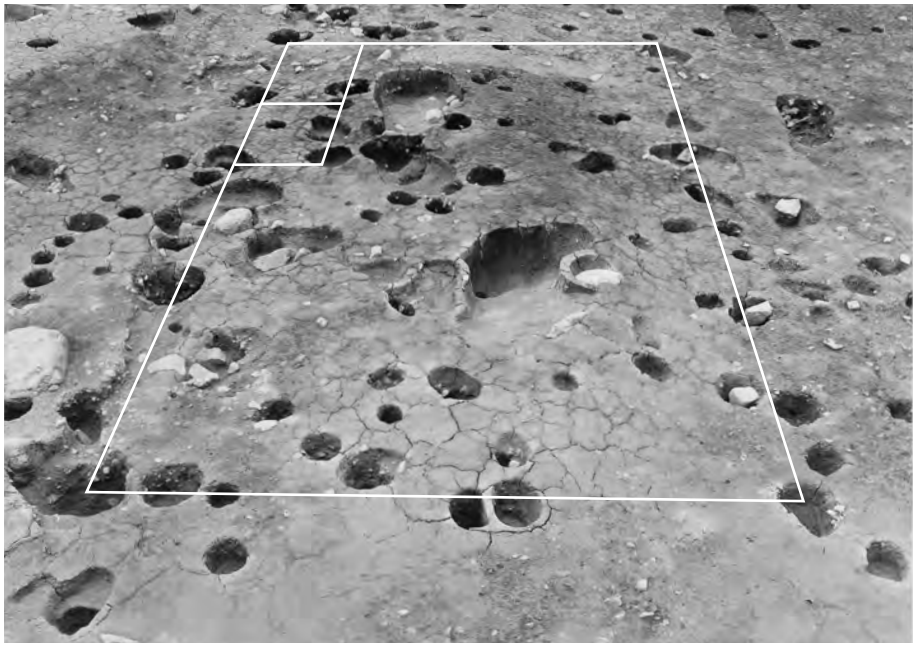
1　1号掘立柱建物跡（西から）



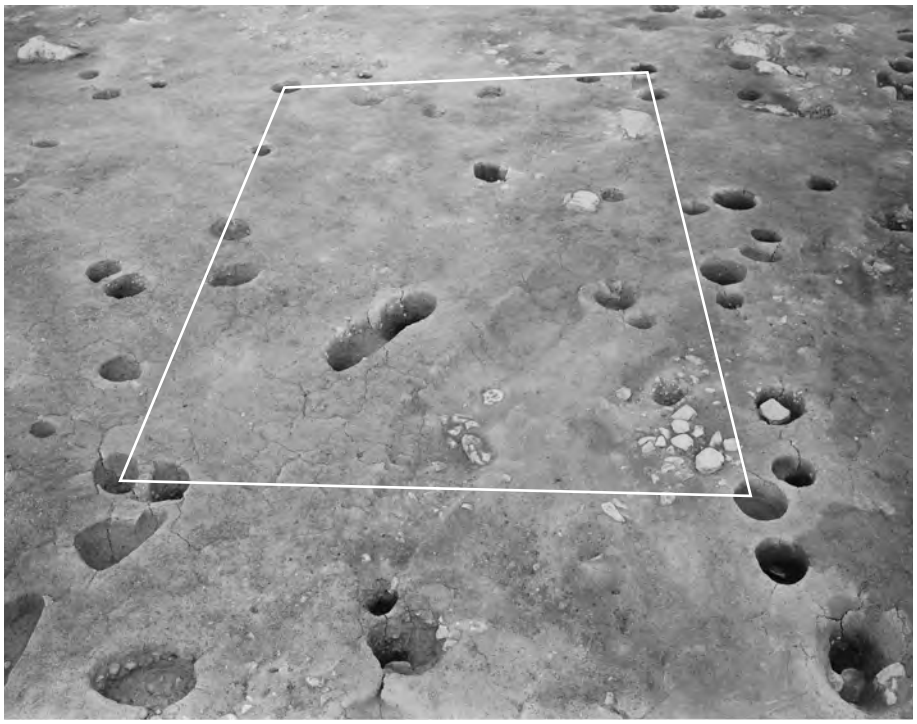
2　2号掘立柱建物跡（上空から）



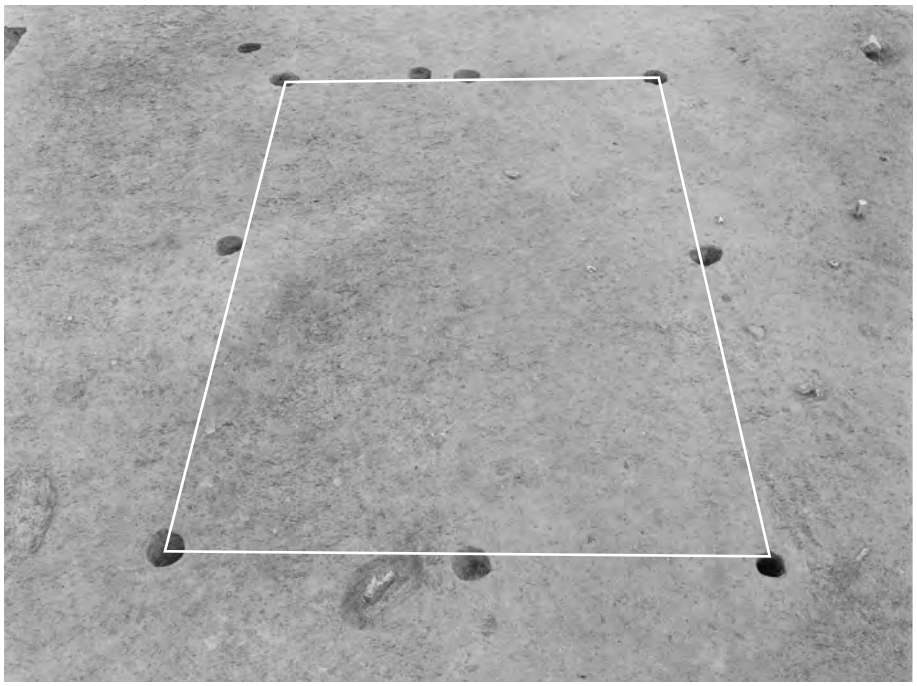
3　3号掘立柱建物跡（上空から）



1　4 号掘立柱建物跡（北から）



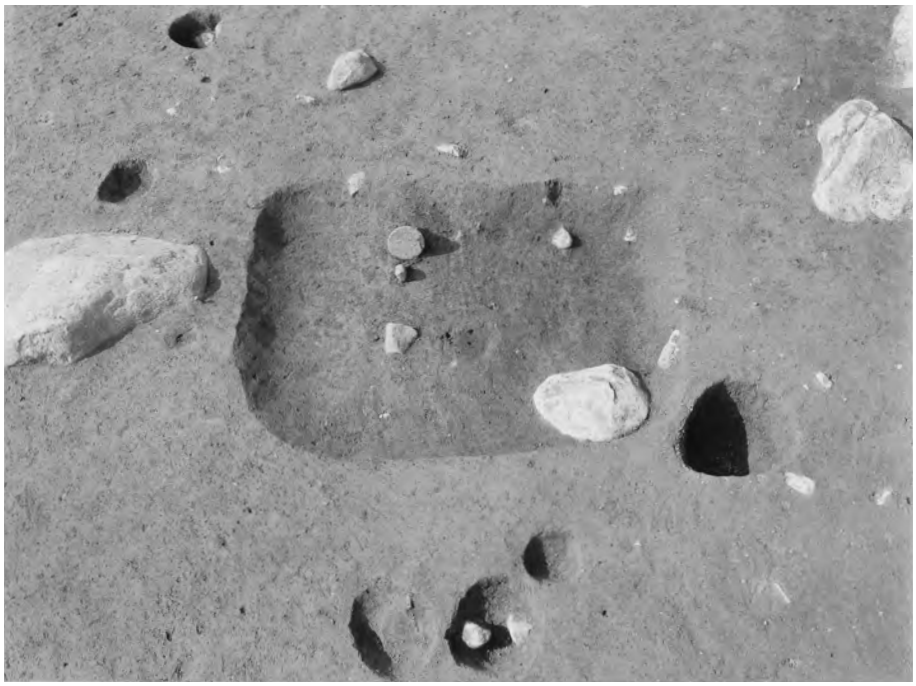
2　5 号掘立柱建物跡（西から）



3　6 号掘立柱建物跡（北から）

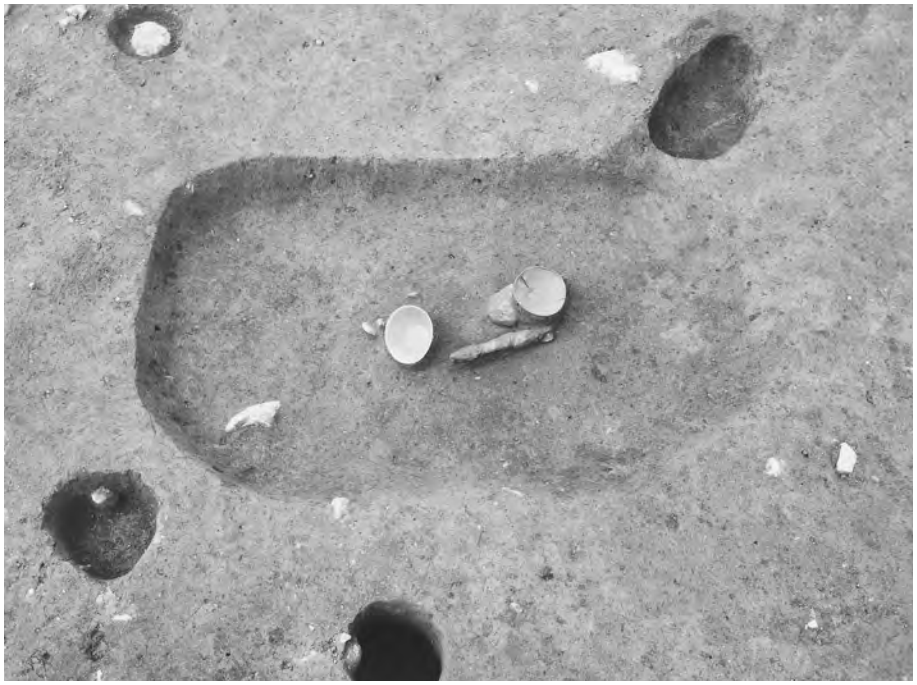
1　15 号土坑（西から）

2　26 号土坑（西から）



3　31 号土坑（南から）

1　62 号土坑（東から）

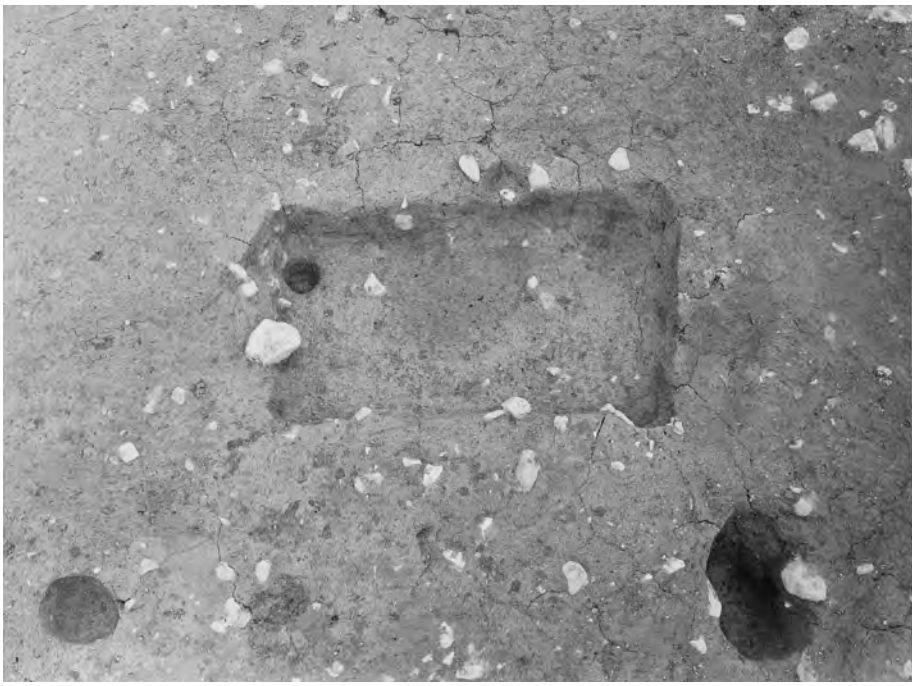


2　64 号土坑（東から）

3　65 号土坑（東から）

1　66 号土坑（南東から）

2　1 号土坑（西から）



3　2 号土坑（西から）

1　3号土坑（南から）

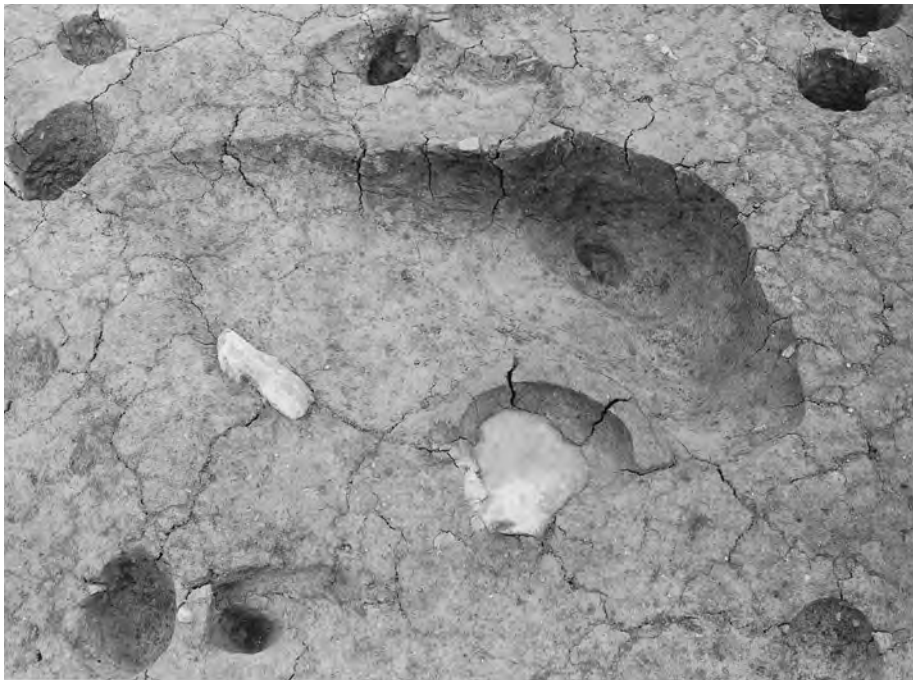
2　4・5号土坑（西から）

3　6号土坑（西から）

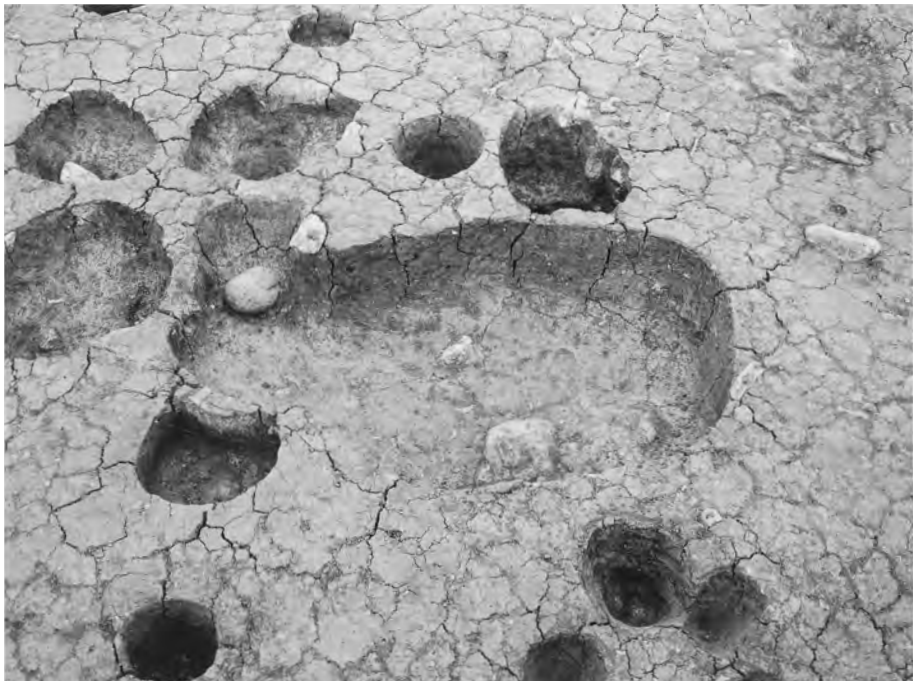
1　7号土坑（東から）

2　8号土坑（北から）

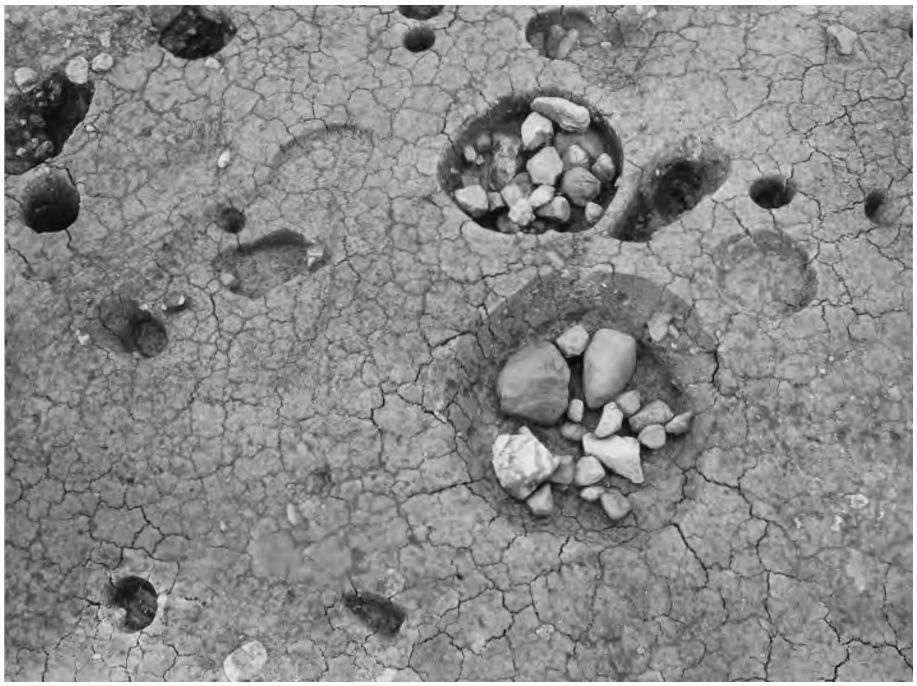
3　9号土坑（北から）



1　10 号土坑（西から）



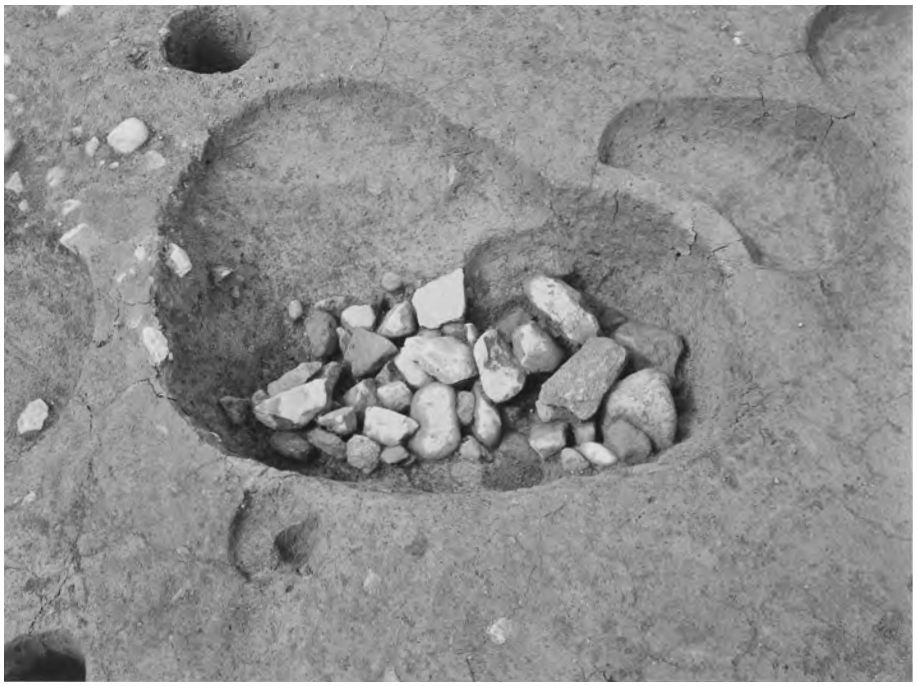
2　11 号土坑（西から）



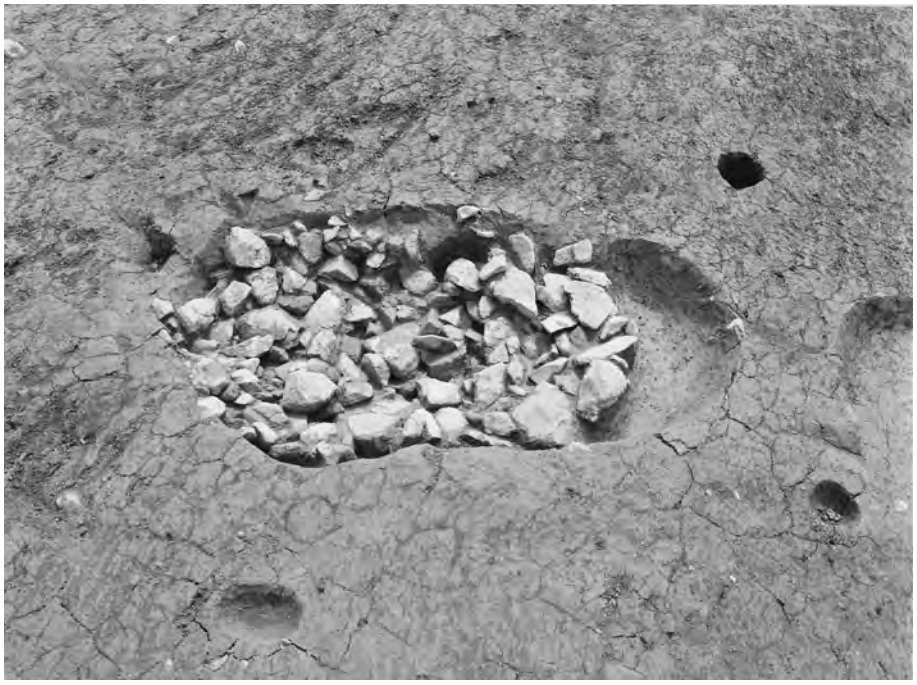
3　12・13・14 号土坑（西から）

1　16 号土坑（東から）

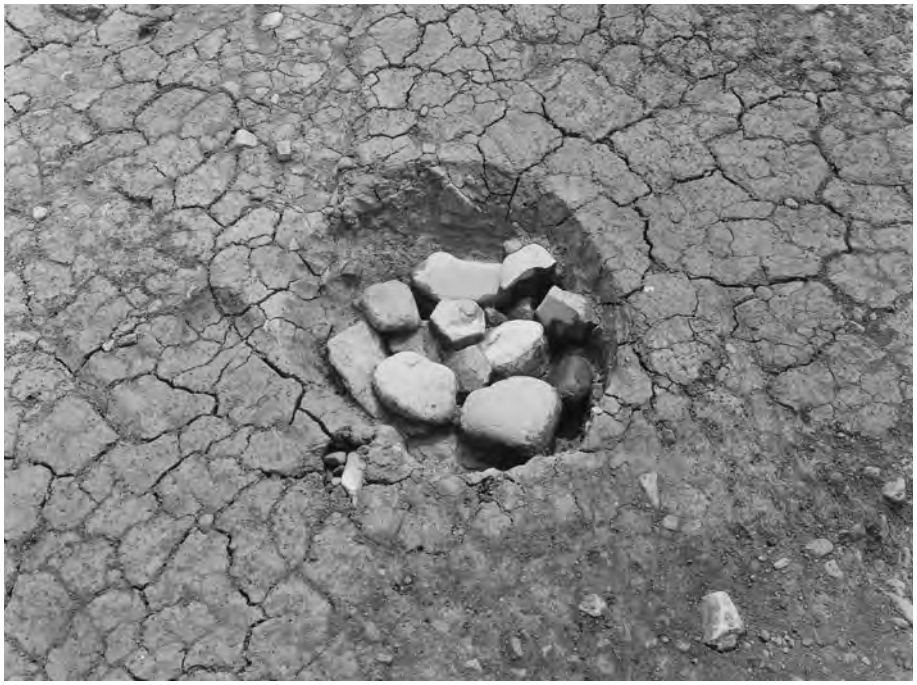
2　17 号土坑（北から）



3　18 号土坑（北から）

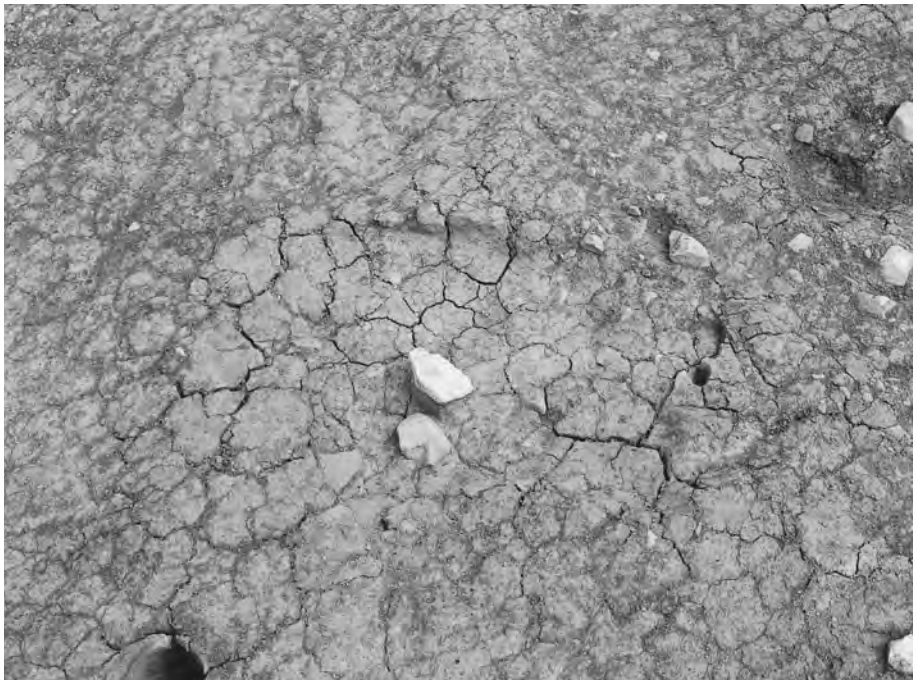


1　19 号土坑（北から）



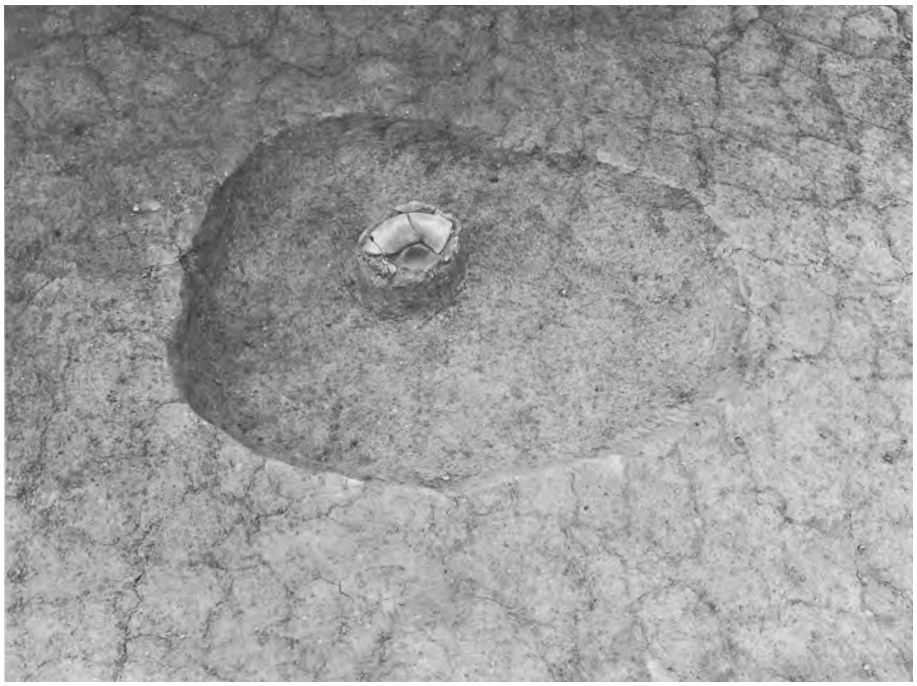
2　20 号土坑（西から）

3　21 号土坑（北から）

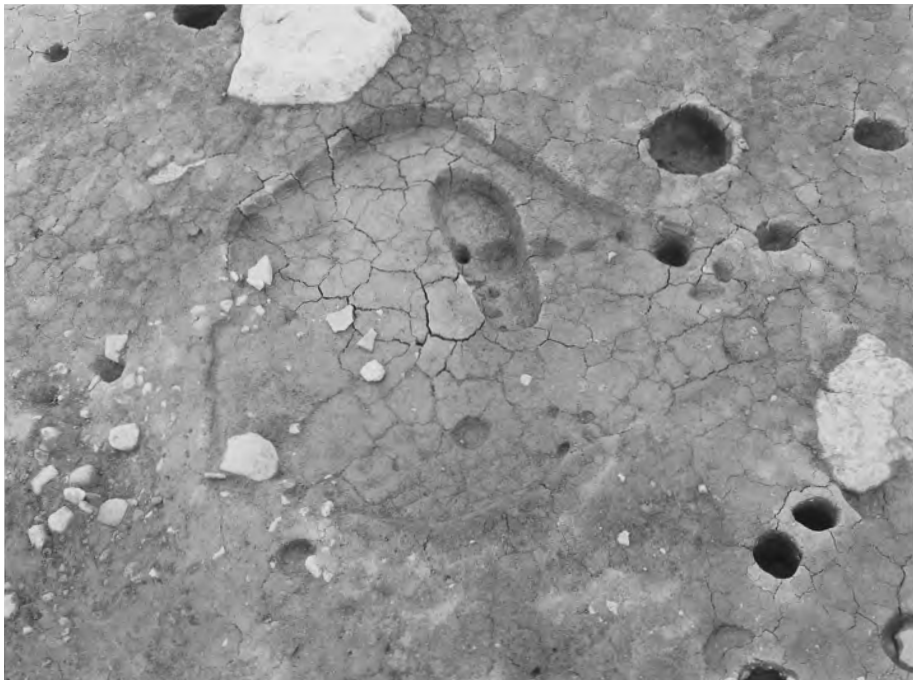


1　22 号土坑（南から）

2　23 号土坑（南から）

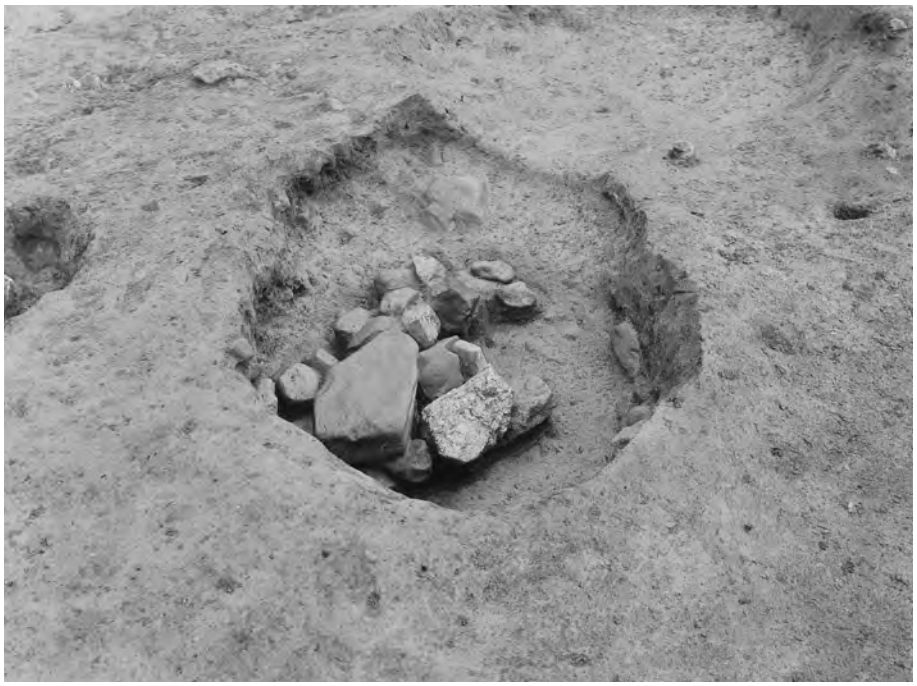


3　24 号土坑（南東から）



1　25 号土坑（東から）

2　29 号土坑（西から）



3　30 号土坑（東から）

1　38・41 号土坑（北から）

2　38・41 号土坑（西から）

3　39・40 号土坑（西から）

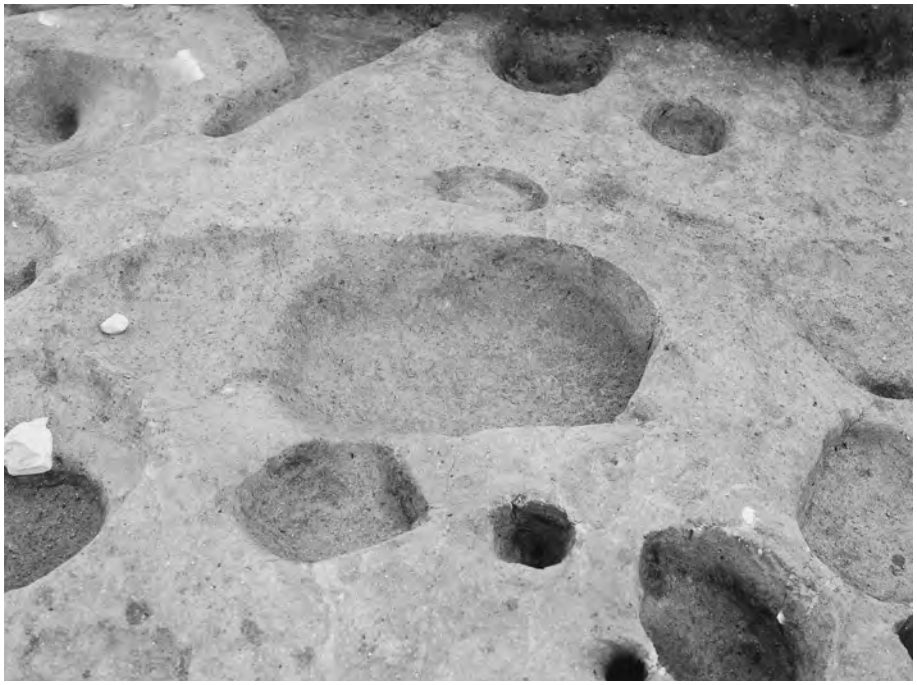
図版44

1　52 号土坑（西から）

2　54 号土坑（西から）

3　55 号土坑（西から）

1　56 号土坑（西から）

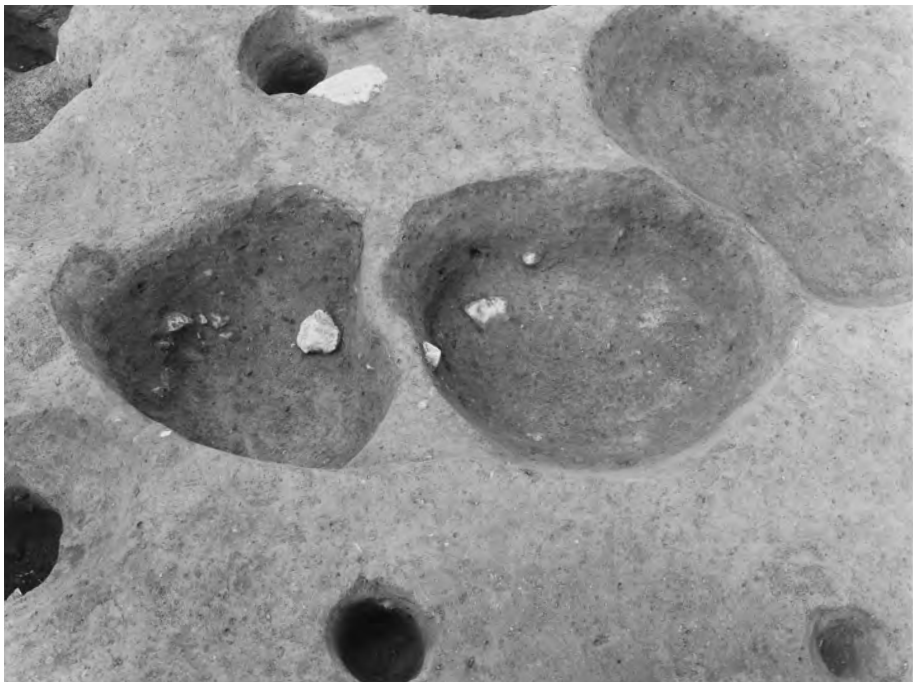


2　60 号土坑（東から）

3　61 号土坑（西から）

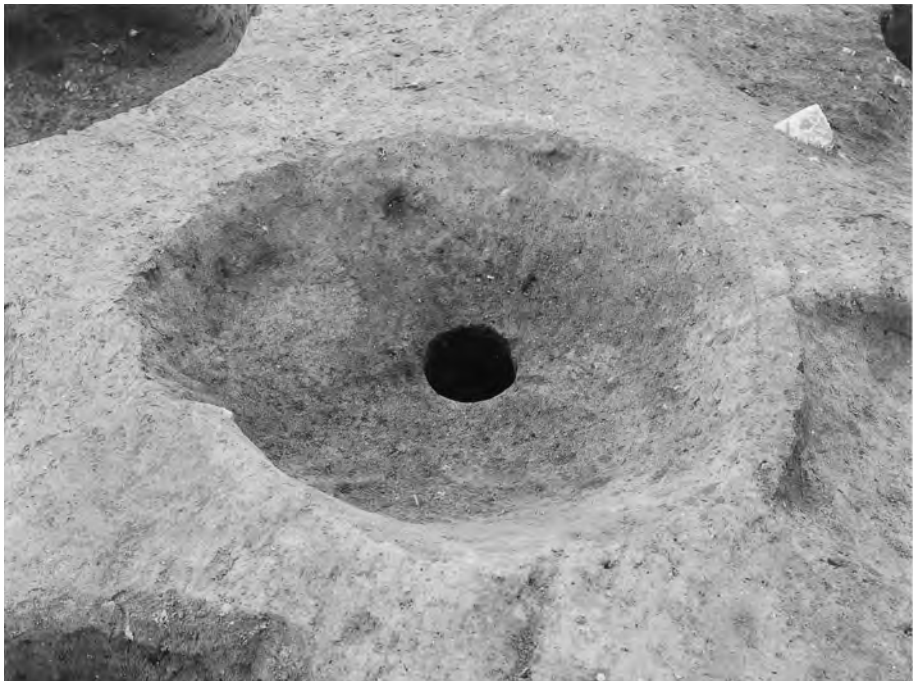
1　63 号土坑（東から）

2　67 号土坑（東から）



3　68・74 号土坑（南東から）

1　69 号土坑（北から）



2　70 号土坑（東から）

3　71 号土坑（西から）

1　72・73 号土坑（東から）

2　75 号土坑（西から）

3　3 号集石（北西から）

1　3号集石（北西から）

2　3号集石遺物出土状況（北東から）

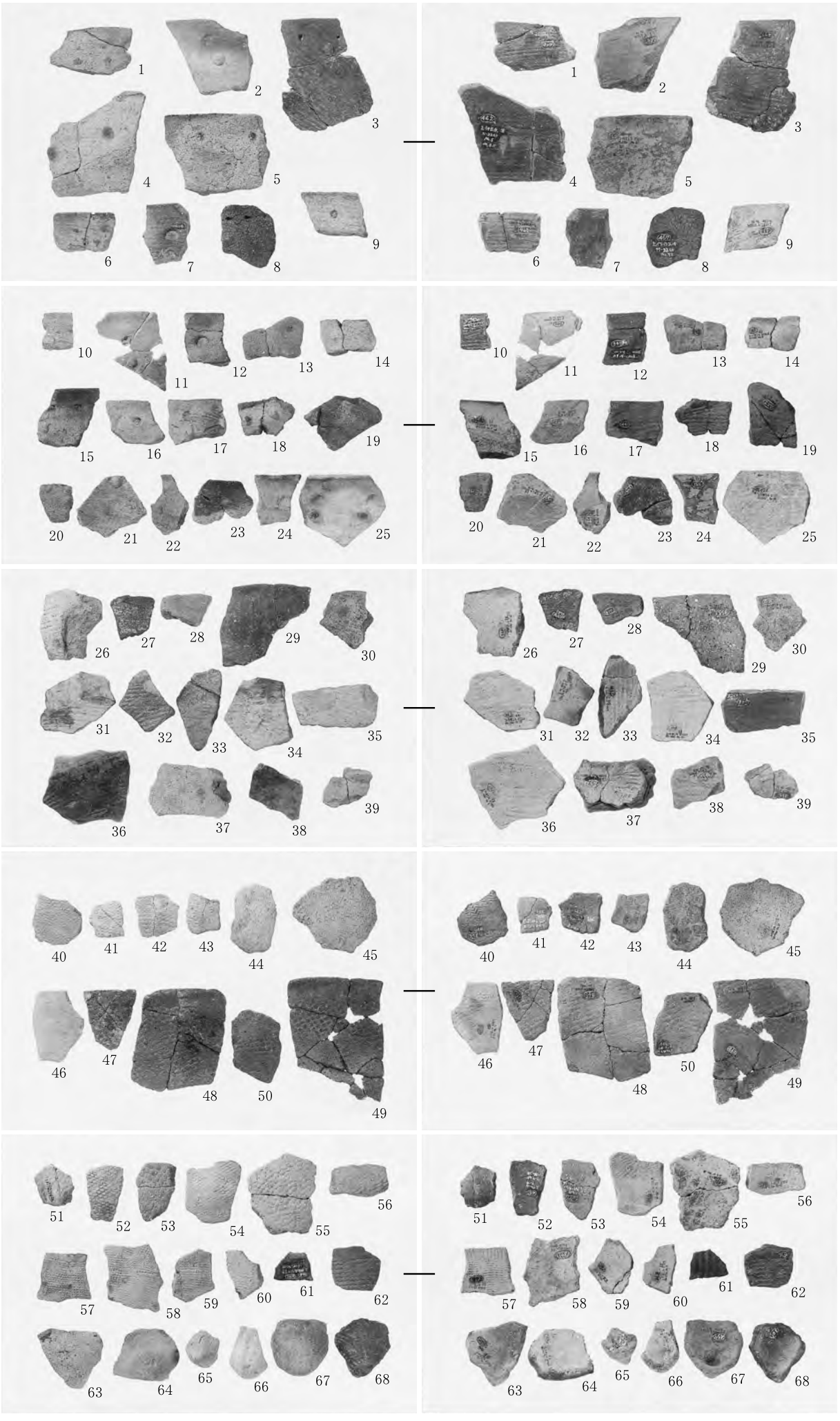
3　石列（南から）

図版50

1 P361・362（南から）

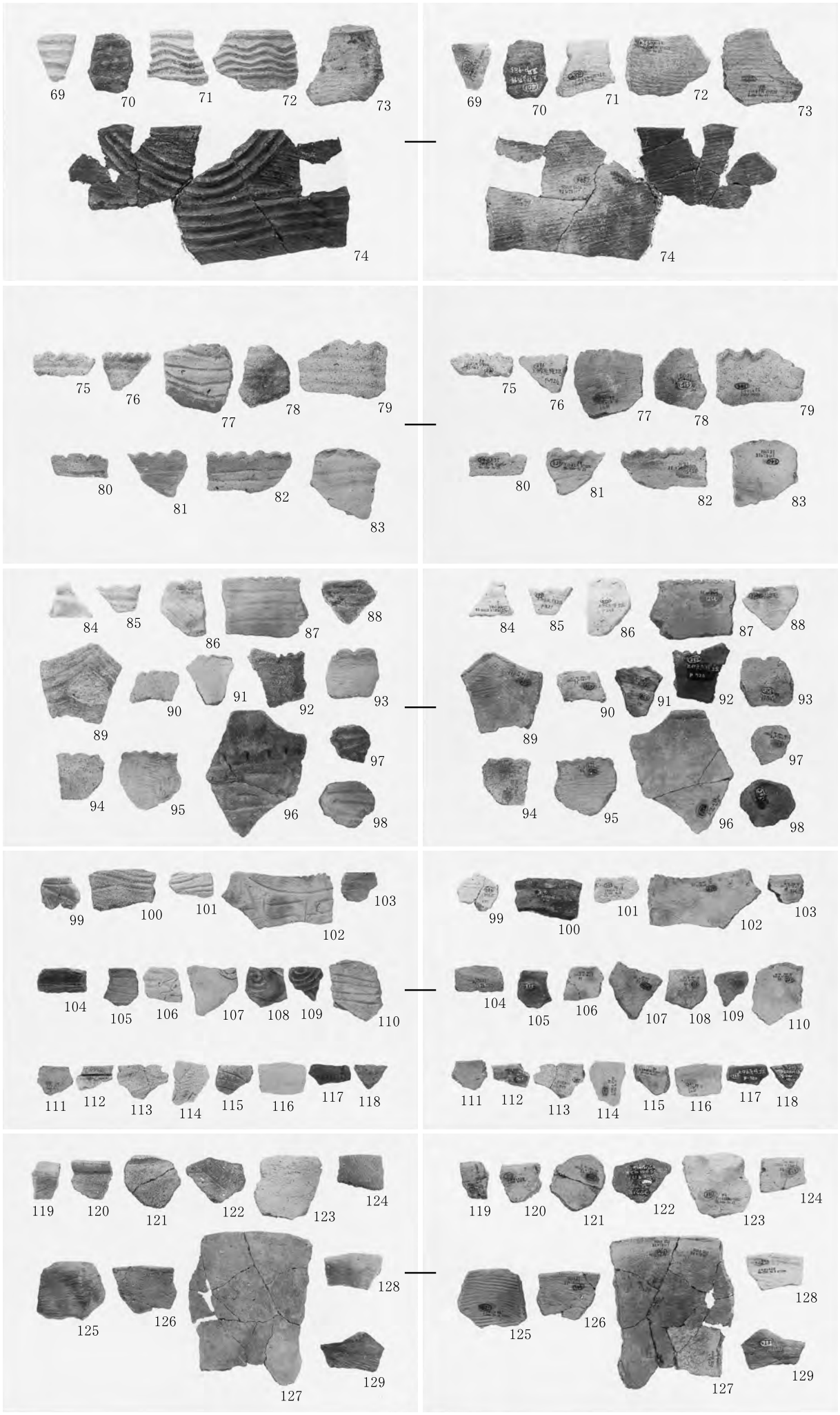
2 P875（北から）

3 焼土（北から）

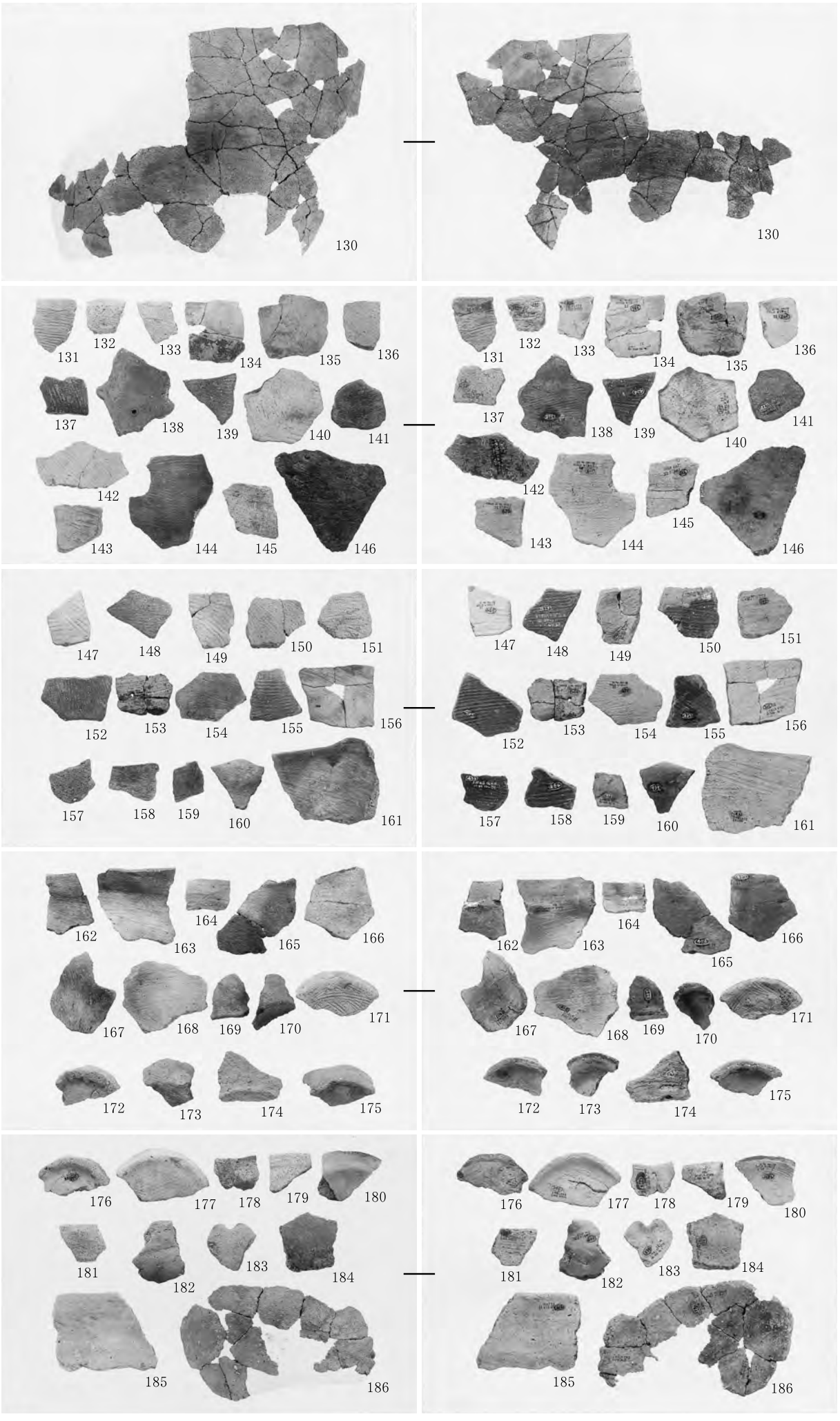


縄文土器①

図版52

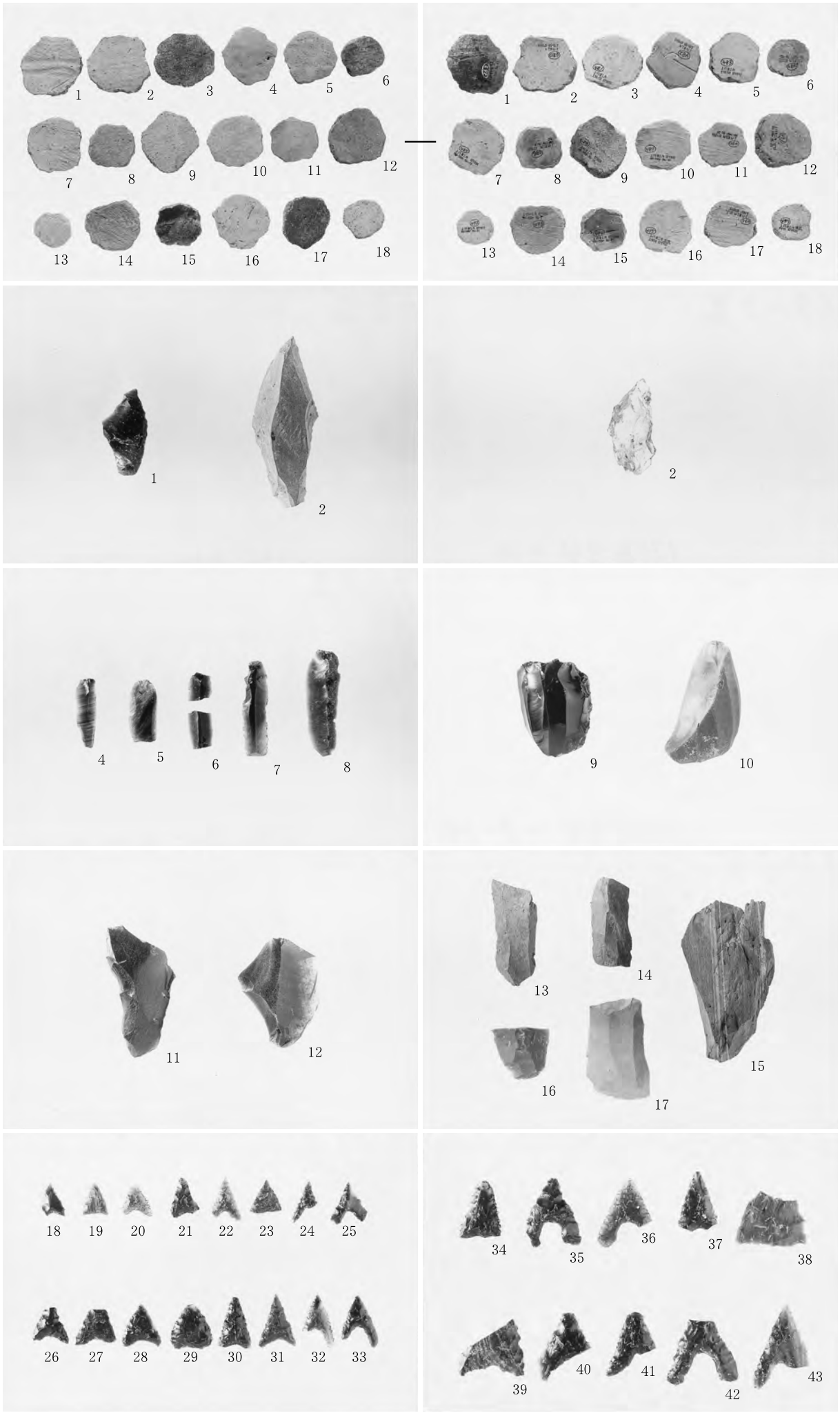

69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129

縄文土器②

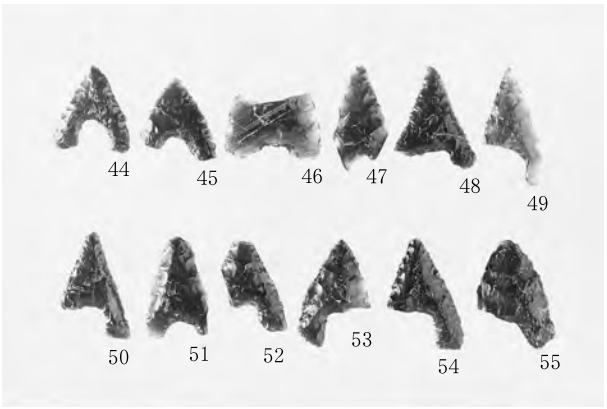

130
130
131
132
133
134
135
136
137
138
139
140
141
142
143
144
145
146
131
132
133
134
135
136
137
138
139
140
141
142
143
144
145
146
147
148
149
150
151
152
153
154
155
156
157
158
159
160
161
147
148
149
150
151
152
153
154
155
156
157
158
159
160
161
162
163
164
165
166
167
168
169
170
171
172
173
174
175
162
163
164
165
166
167
168
169
170
171
172
173
174
175
176
177
178
179
180
181
182
183
184
185
186
176
177
178
179
180
181
182
183
184
185
186

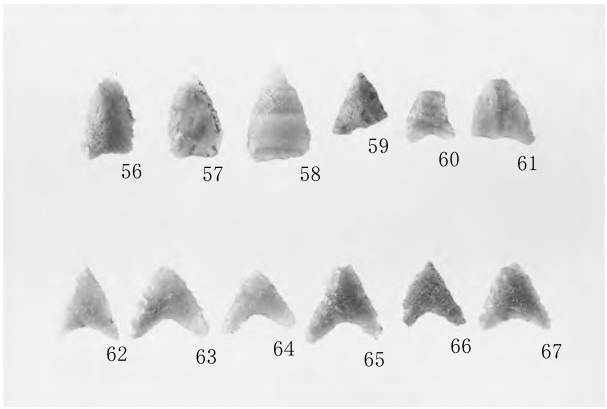
縄文土器③

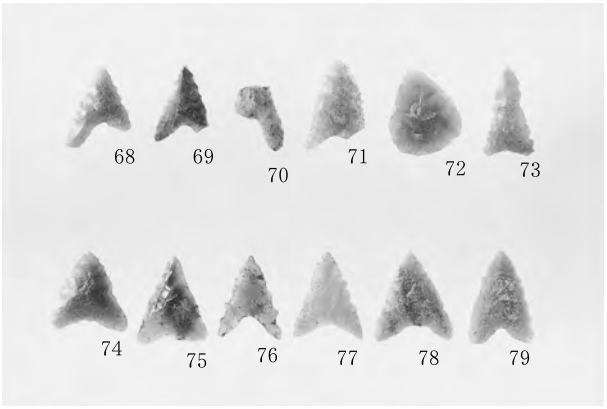
図版54

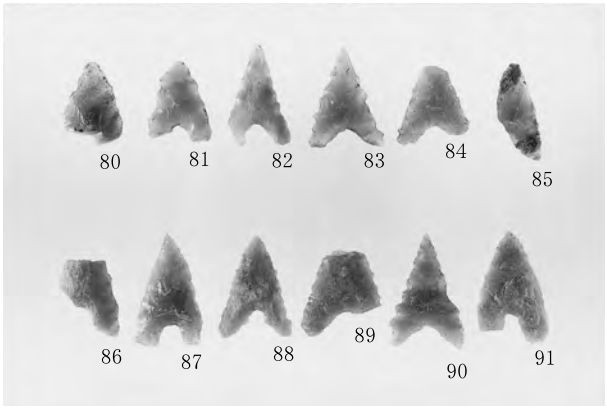

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
1
2
2
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43

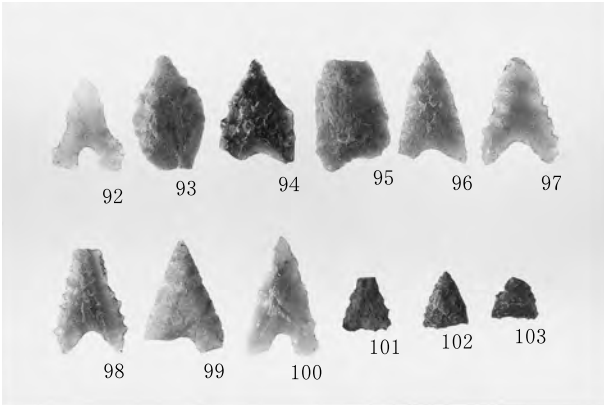
土製品・石器①

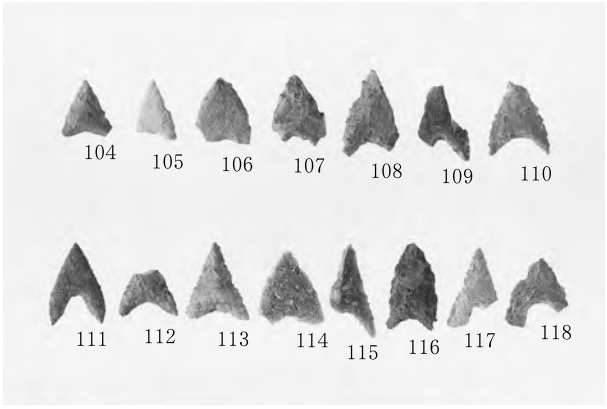

44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55

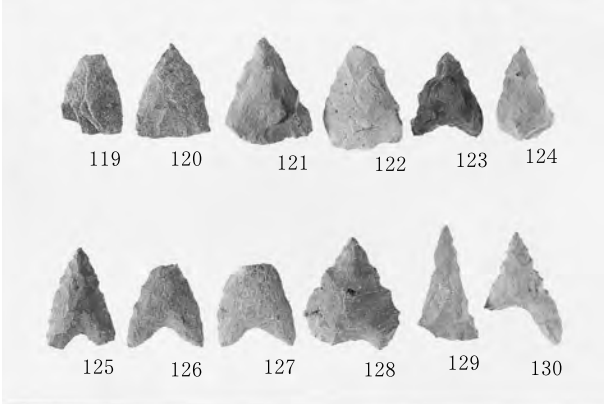

56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67

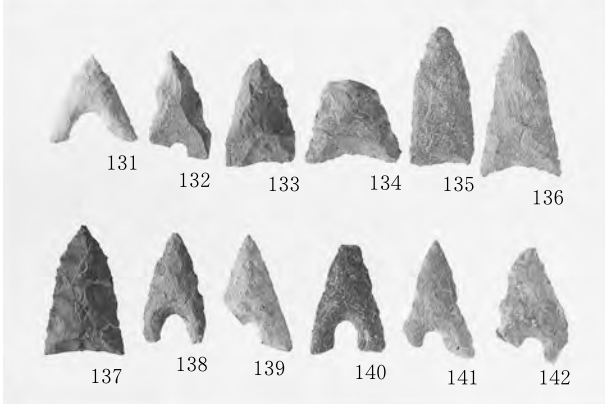

68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79


80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91

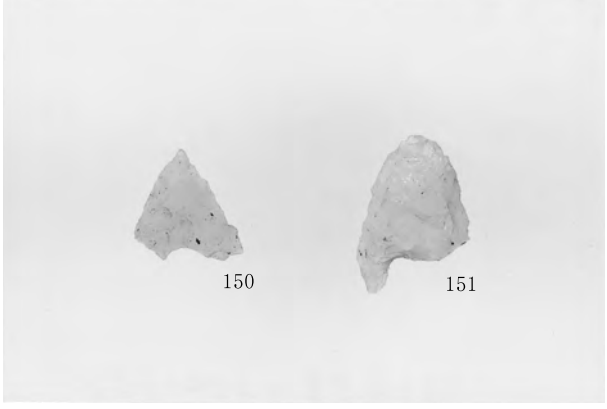

92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103


104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118


119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
130

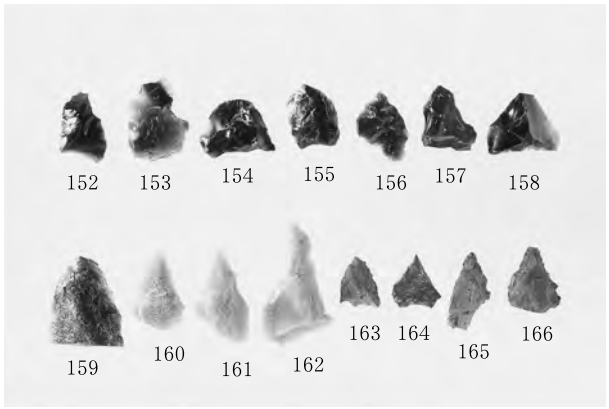

131
132
133
134
135
136
137
138
139
140
141
142

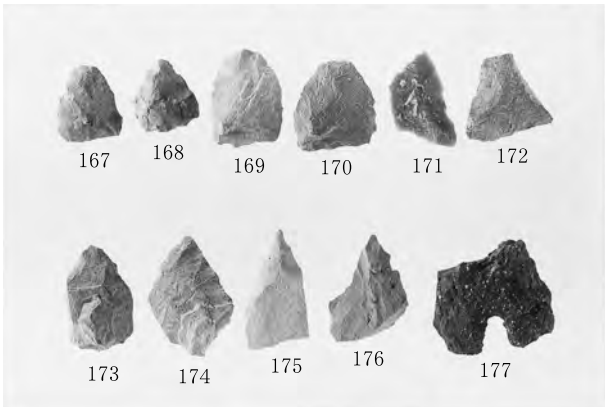
143
144
145
146
147
148
149

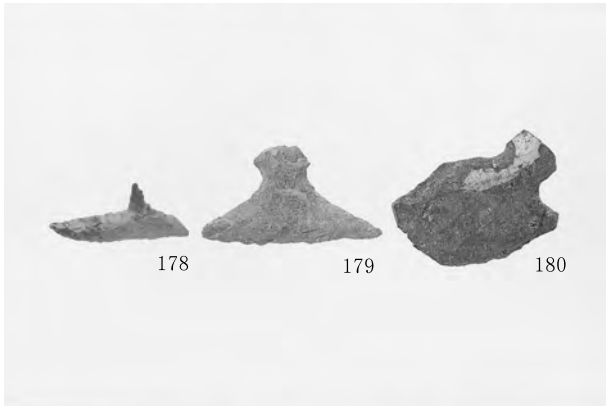

150
151

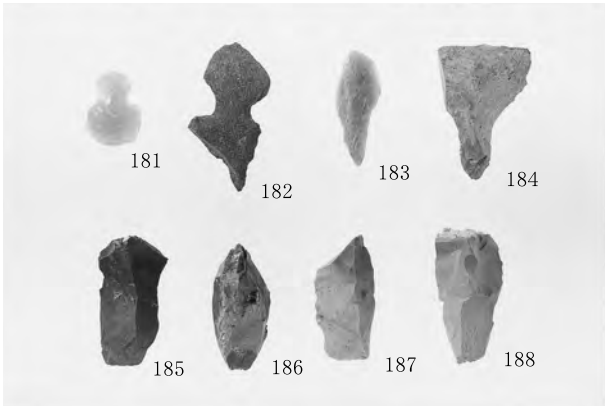
石器②

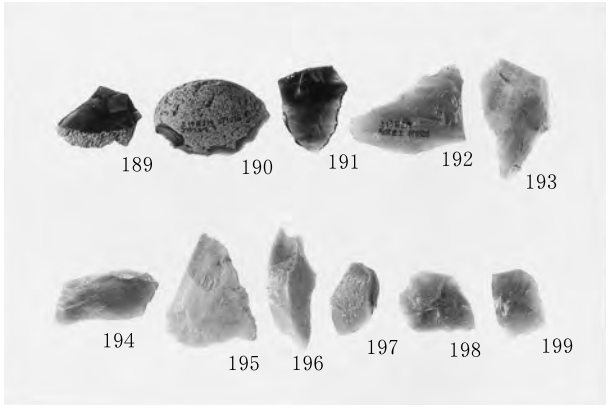
図版56

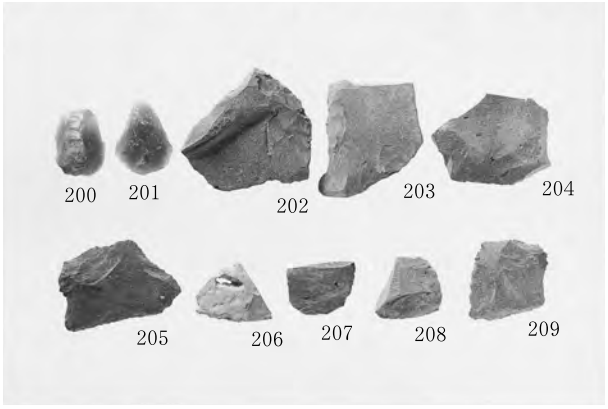

152
153
154
155
156
157
158
159
160
161
162
163
164
165
166

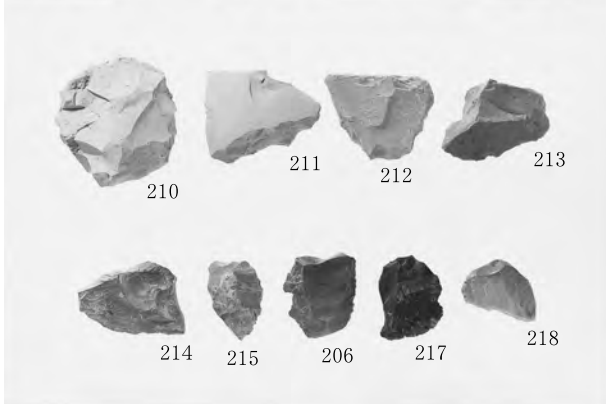

167
168
169
170
171
172
173
174
175
176
177


178
179
180


181
182
183
184
185
186
187
188

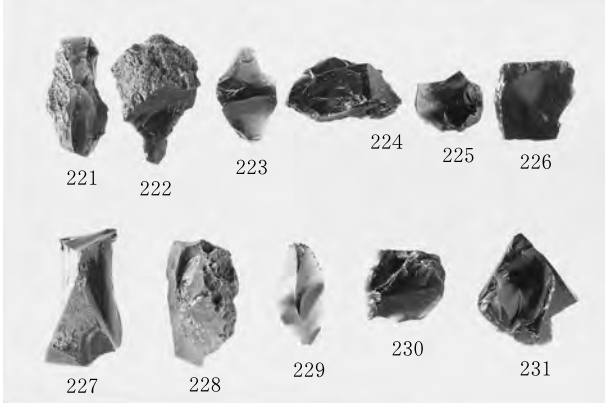

189
190
191
192
193
194
195
196
197
198
199


200
201
202
203
204
205
206
207
208
209

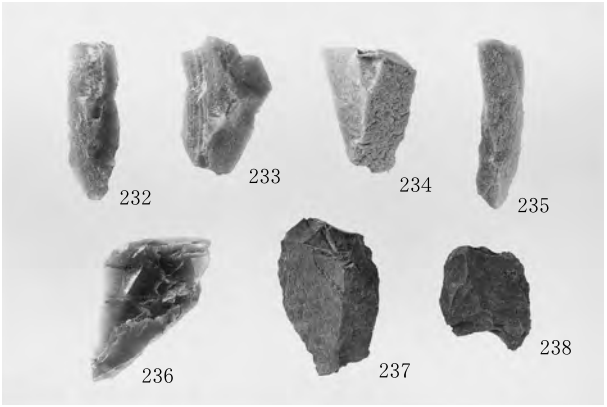

210
211
212
213
214
215
206
217
218

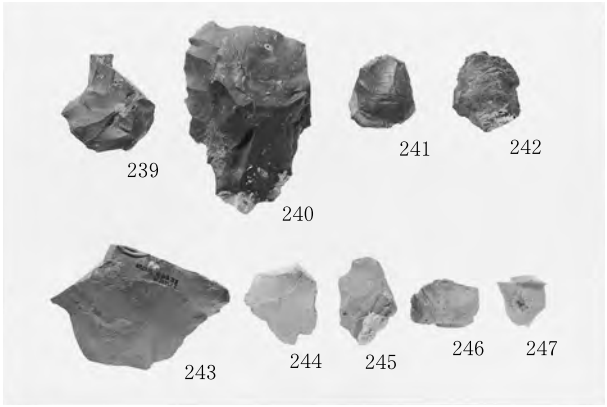
219

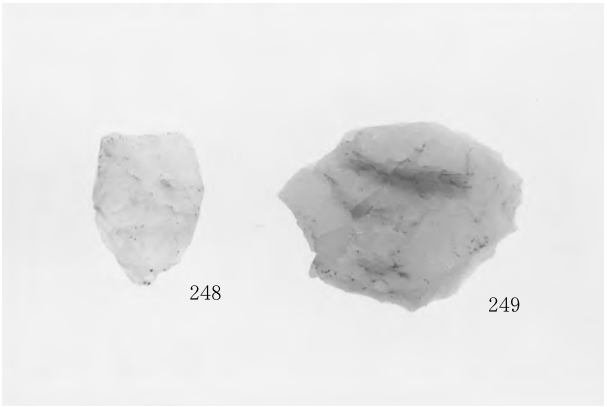
220

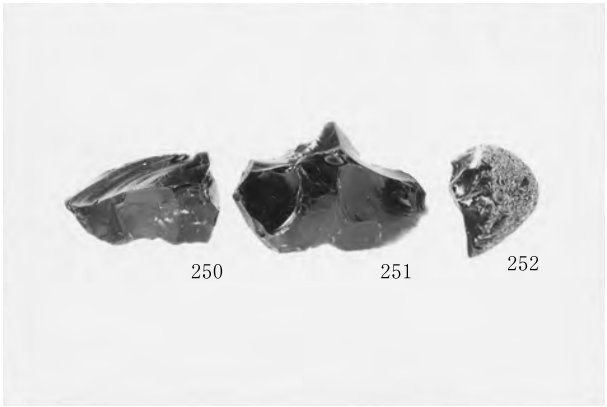

221
222
223
224
225
226
227
228
229
230
231

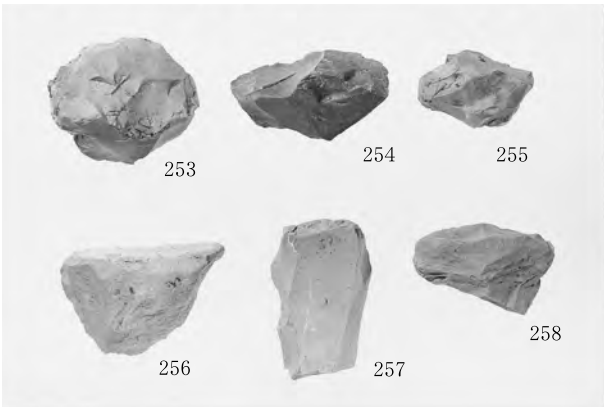
石器③

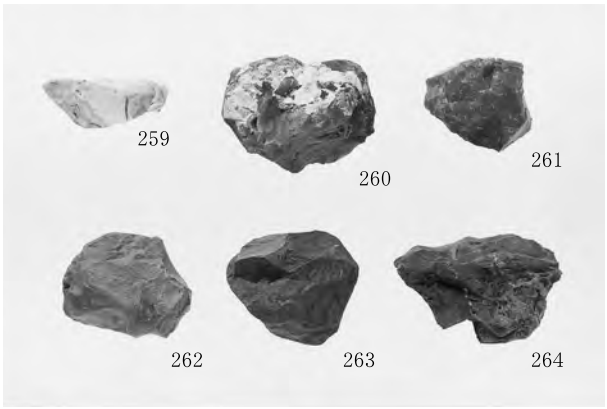

232
233
234
235
236
237
238

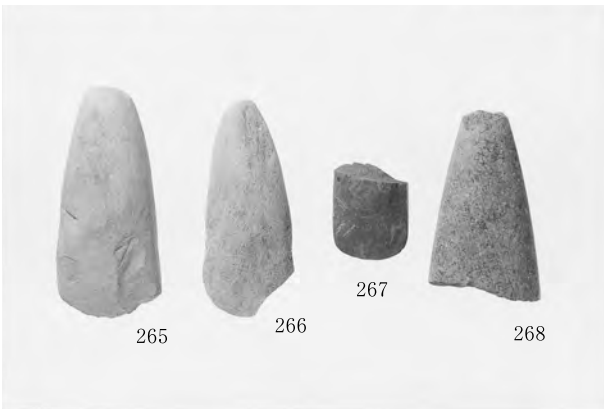

239
240
241
242
243
244
245
246
247


248
249

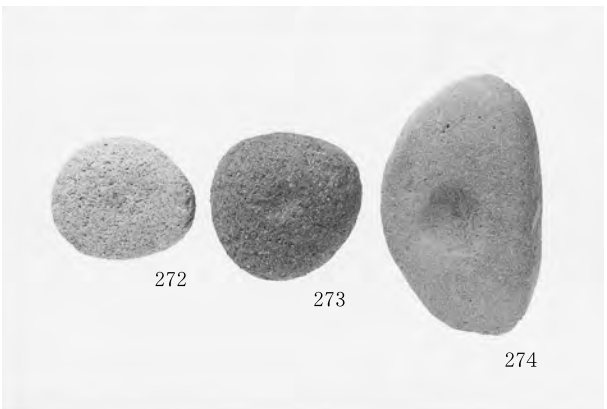

250
251
252


253
254
255
256
257
258


259
260
261
262
263
264


265
266
267
268

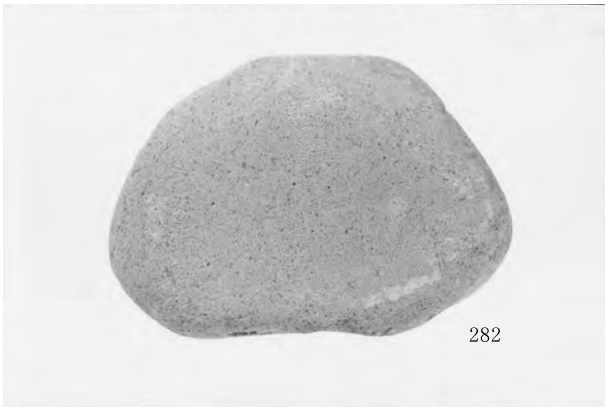
269
270
271

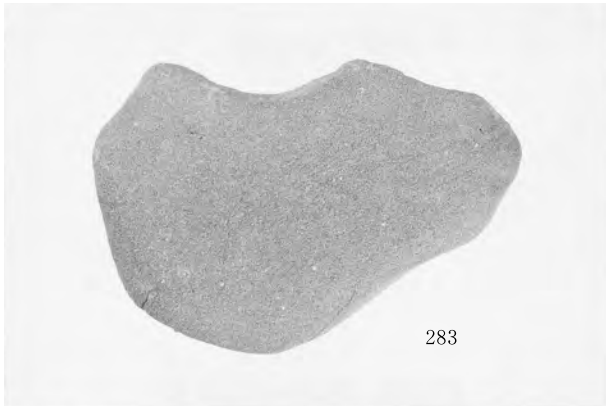

272
273
274

275
276
277
278
279
281

図版58

280


282


283

284

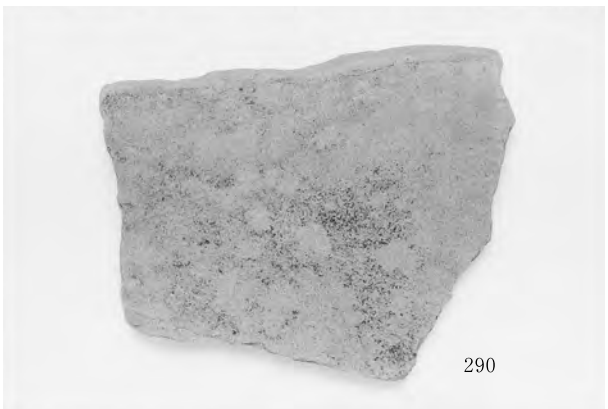
285

286

287

288

289


290

石器⑤

3

4

5

6

9

10

11

12

13

14

15

19

20

21

土坑出土土器

図版60

22

40

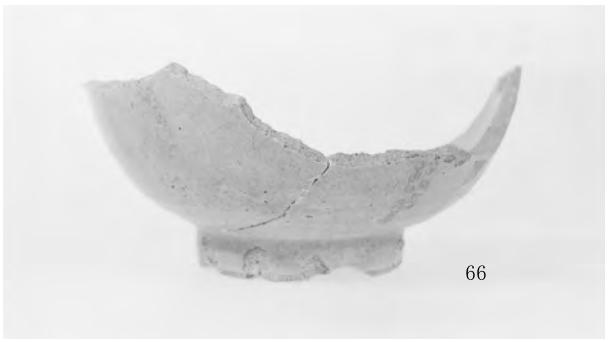
45

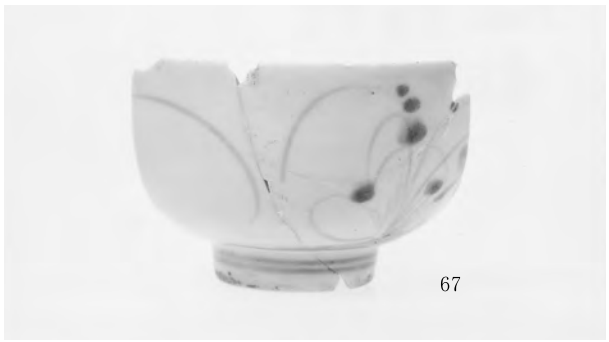
49

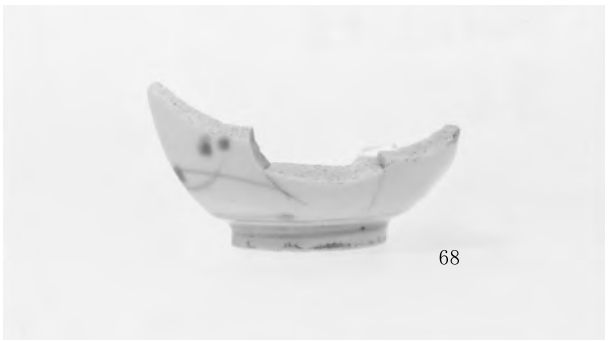
56

61

65


66


67


68

69

70

土坑・溝・3 号集石出土土器

76

79

82

88

94

99

100

101

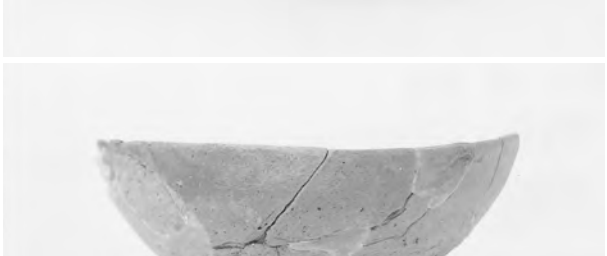
103

22

22

106

136


139

3 号集石・ピット出土土器

図版62

140

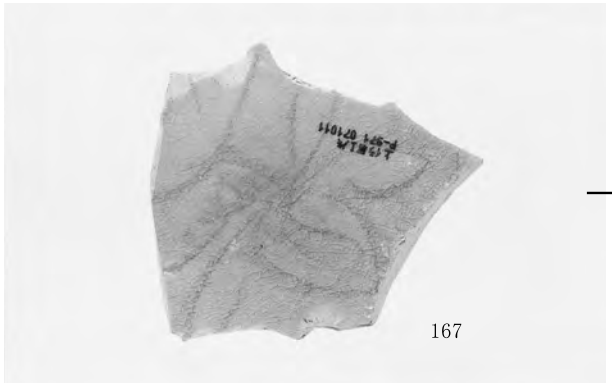
175

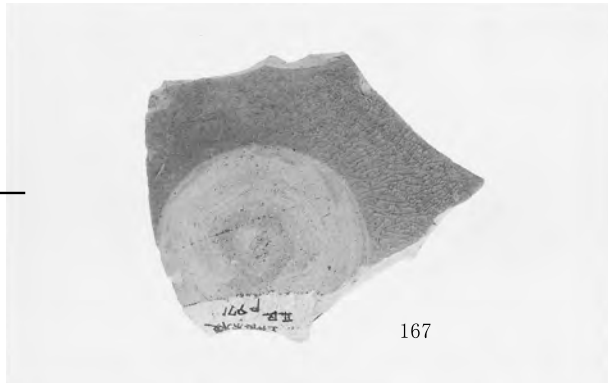
162

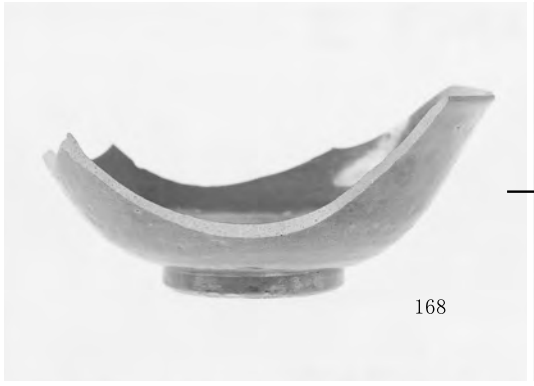
162

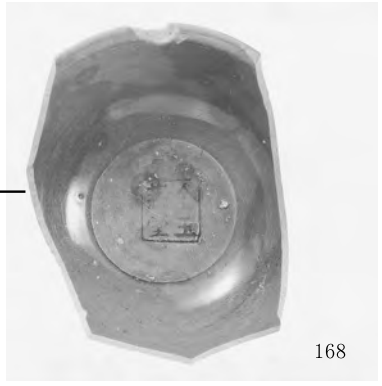
166

166


167


167


168


168

168

186

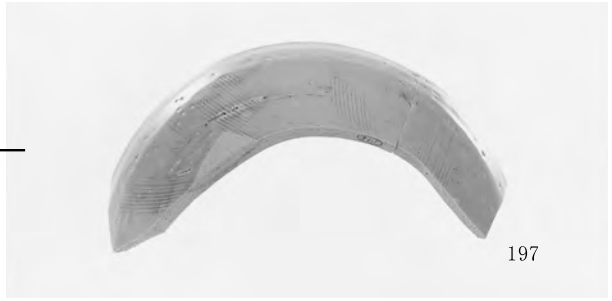
203

ピット・遺構面・包含層出土土器

197

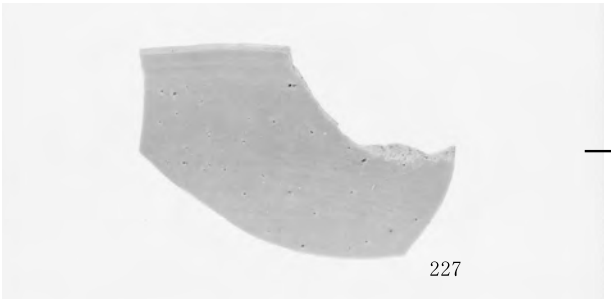
211

197

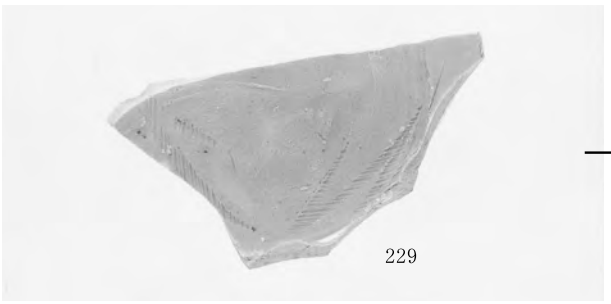

197

212

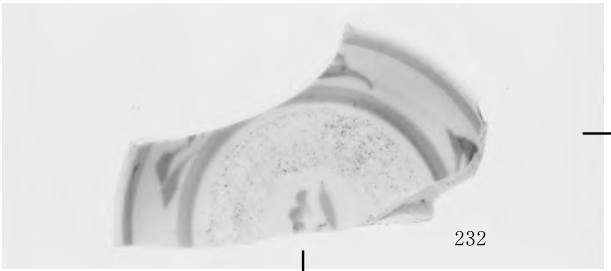
225


227

227


229

229

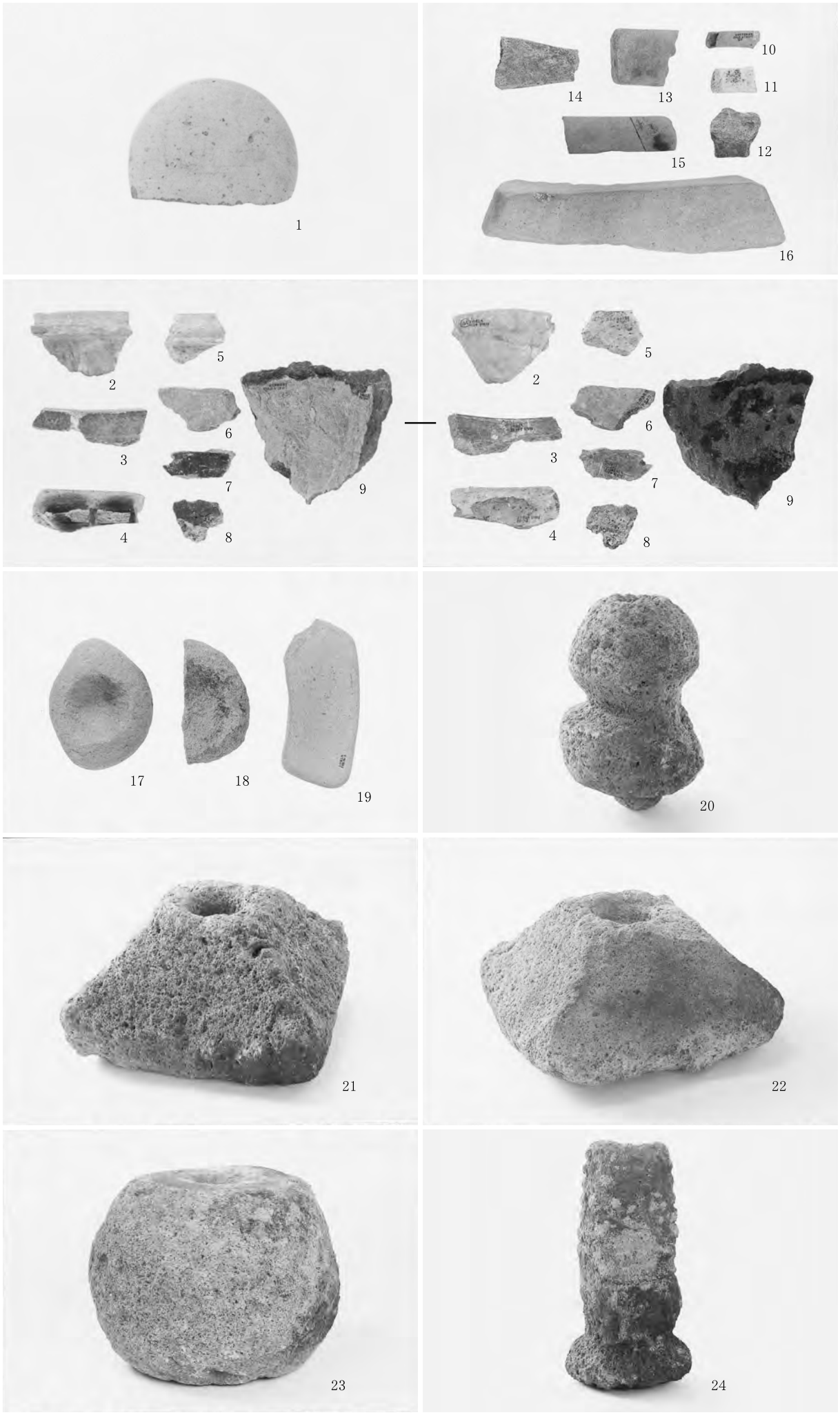

232

232

232

遺構面・包含層出土土器・土錘

図版64



石製品①

25

25

26

26

27

28

28

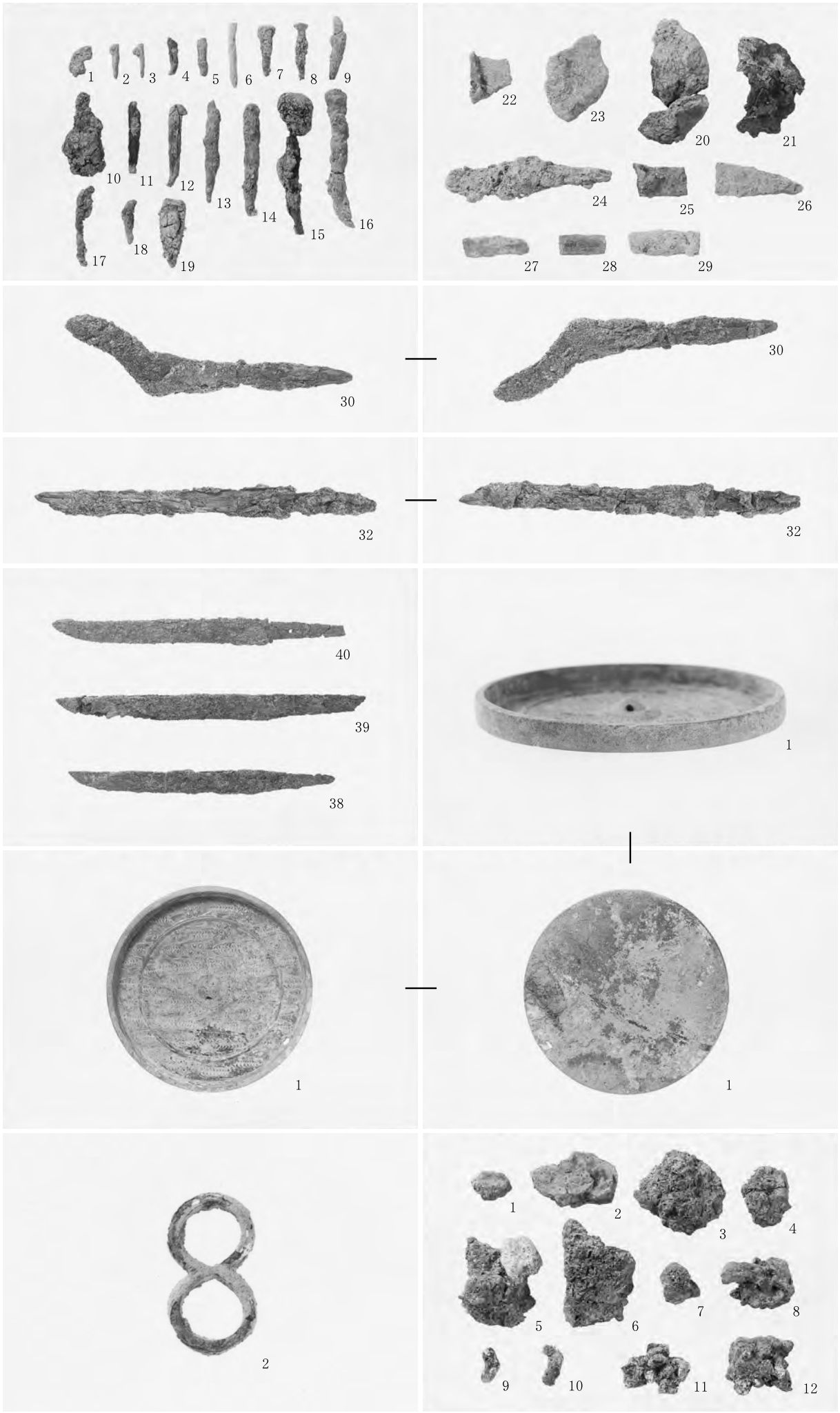
28

29

29

石製品②

図版66



鉄製品・銅製品・鉄滓

1 上高屋台ノ原遺跡
遠景（東から）

2 上高屋台ノ原遺跡から
祓川下流を望む
（南から）

1 第1次調査区全景
（東から）

2 東半部グリッド全景
（北から）

1　D－13Gr西壁土層（東から）

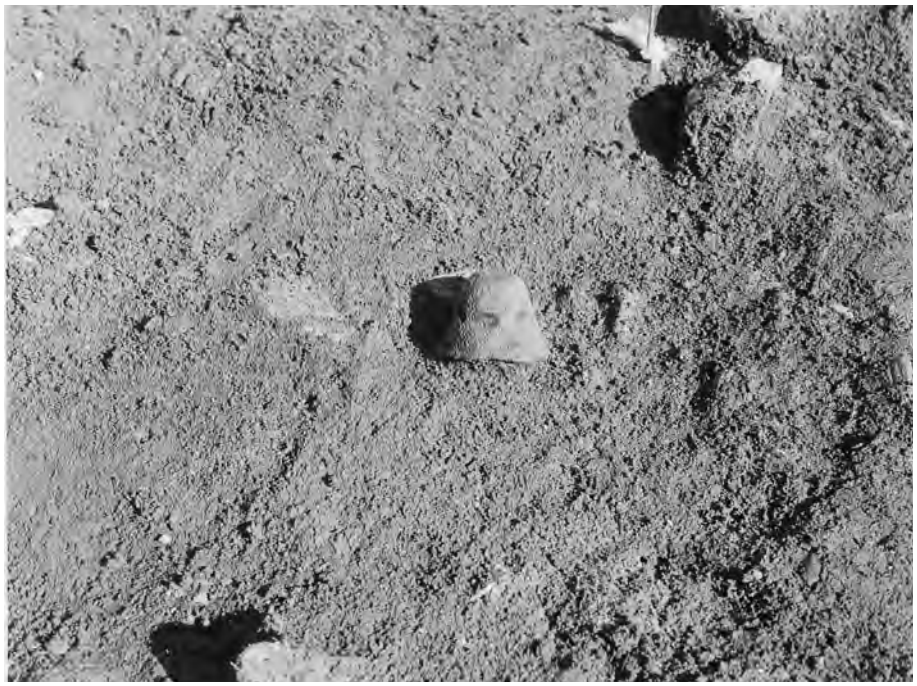
2　O－8、P－7～9Gr（北から）

3　P－8Gr西壁土層（東から）

図版70

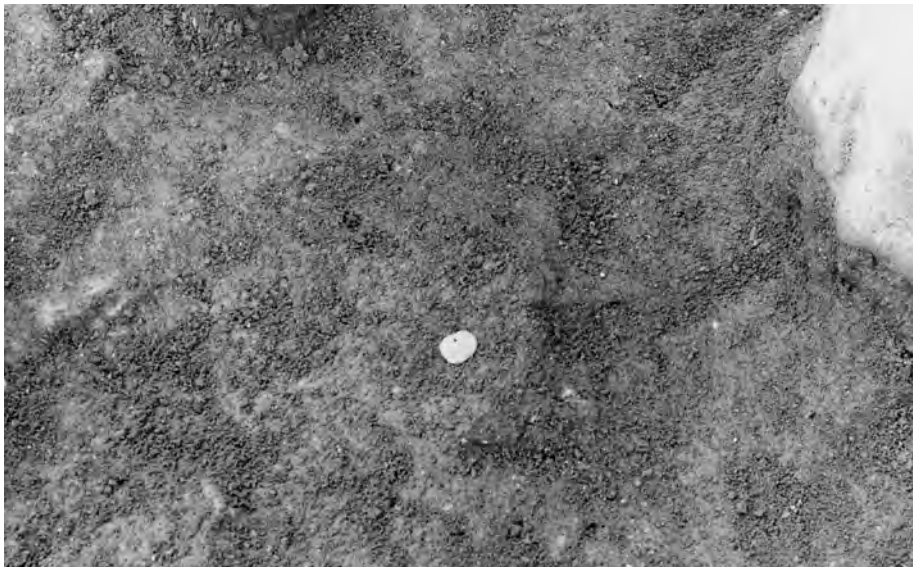
1 S－9～12、T－9～12Gr
（北から）

2 S－12Gr西壁土層（東から）



3 C－13Gr遺物出土状況（西から）

1　E－13Gr遺物出土状況（西から）



2　P－8Gr遺物出土状況（東から）

3　T－10Gr遺物出土状況（東から）

1　11 号土坑（北から）

2　12 号土坑（南西から）

3　1 号土坑（北から）

1　2号土坑（掘削前）（東から）

2　2号土坑（掘削後）（東から）

3　3号土坑（東から）

図版74

1　4号土坑（南から）

2　5号土坑（西から）

3　6号土坑（東から）

1　7号土坑（西から）

2　8号土坑（西から）

3　9号土坑（東から）

1　10 号土坑（北から）

2　第 1 次調査石敷路中央付近
（西から）

3　第 1 次調査石敷路東端
（東から）

1　第２次調査石敷路遠景
（南東から）

2　第２次調査石敷路と
石垣（南から）

図版78

1 第２次調査石敷路①（東から）

2 第２次調査石敷路②（東から）

3 第２次調査石敷路③（東から）

1 第２次調査石敷路④（東から）

2 現道と旧道の分岐点（東から）

3 第２次調査石敷路⑤（西から）

図版80

1 第3次調査石敷路中央付近
（東から）

2 第3次調査石敷路中央付近
（東から）

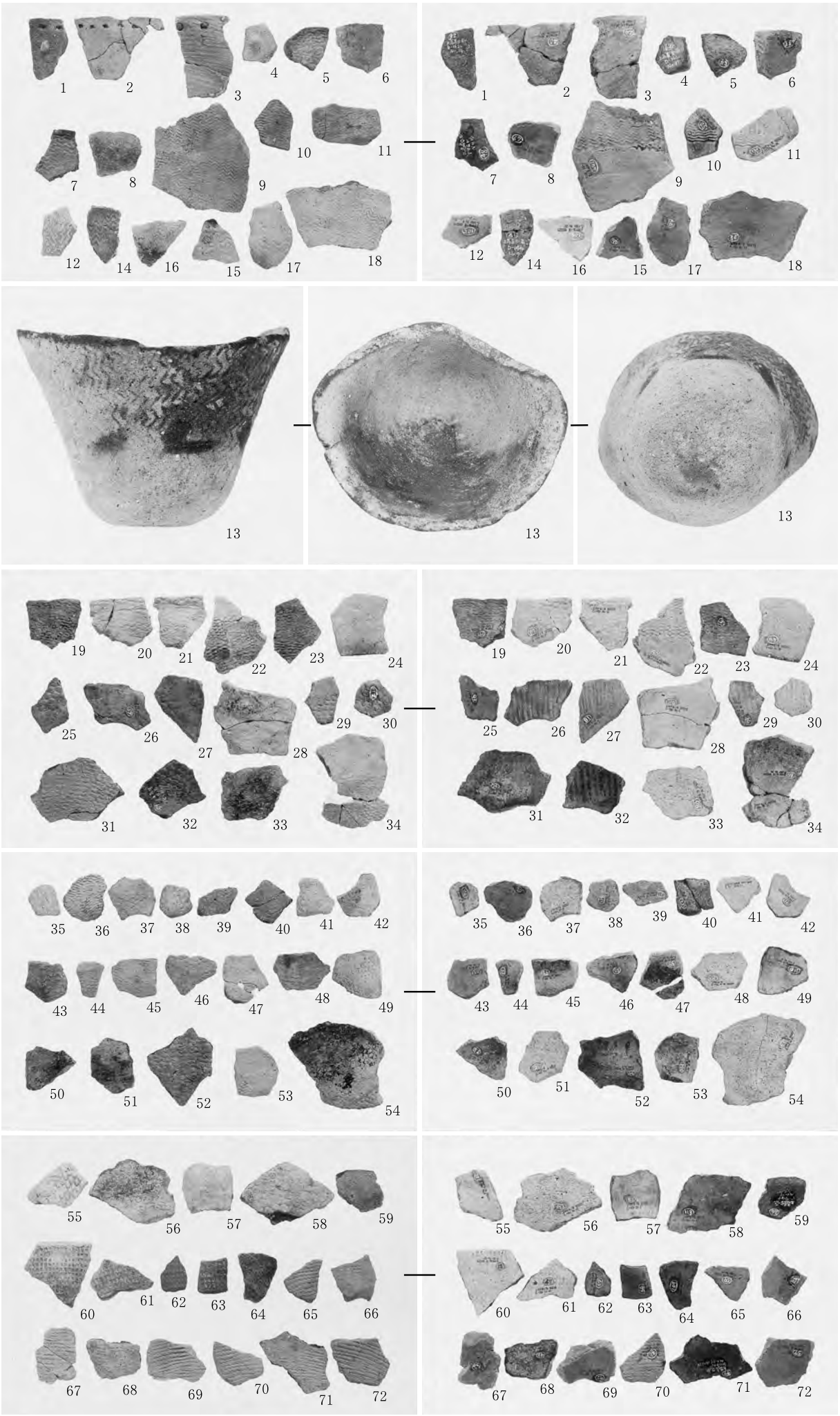
3 第3次調査石敷路西側（西から）

1 第 3 次調査石敷路南側（南から）

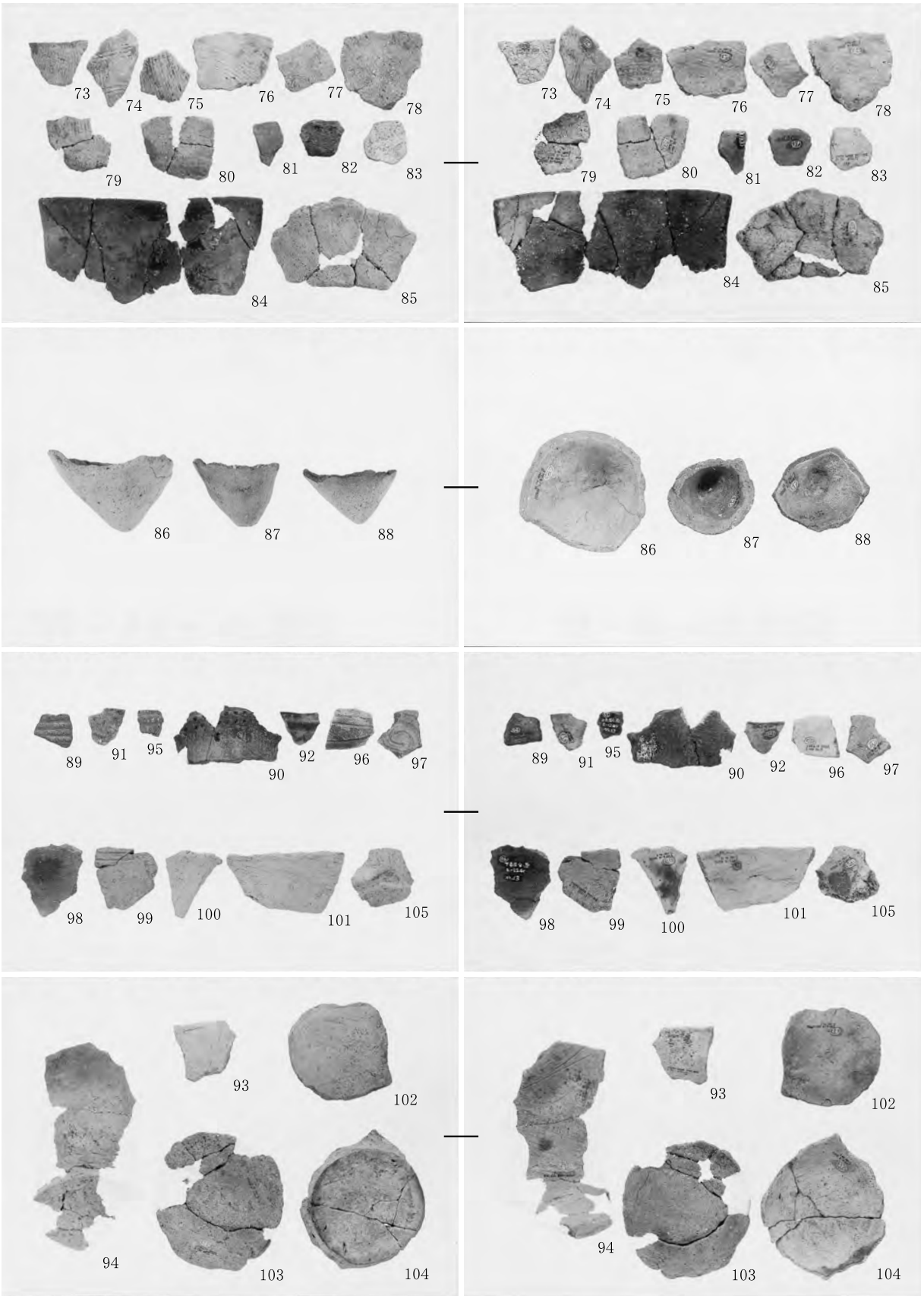
2 第 3 次調査石敷路 A-A' 付近
（南から）

3 第 3 次調査石敷路 B-B' 付近
（東から）

図版82

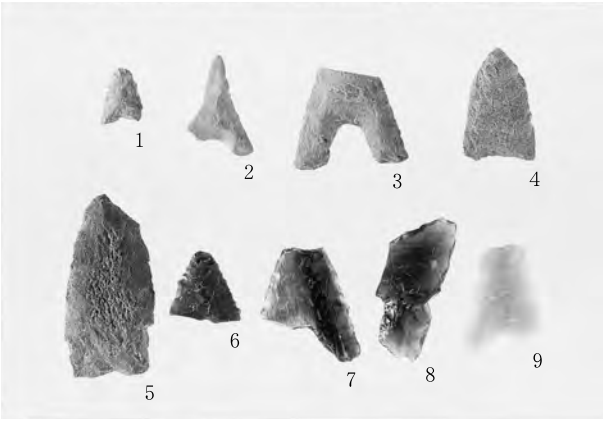


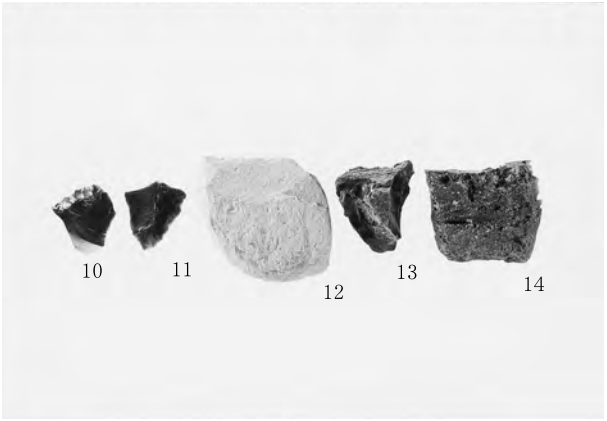
縄文土器①

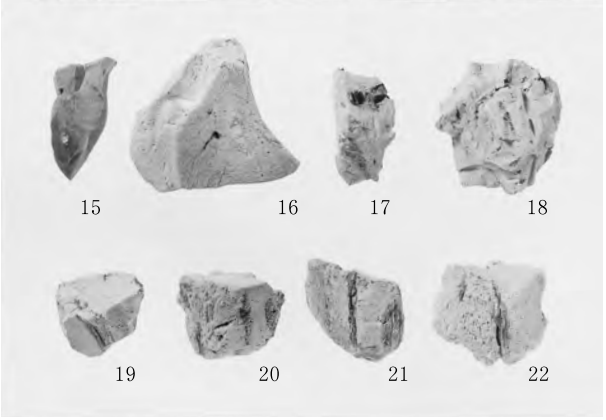

73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
91
95
90
92
96
97
98
99
100
101
105
93
102
94
103
104

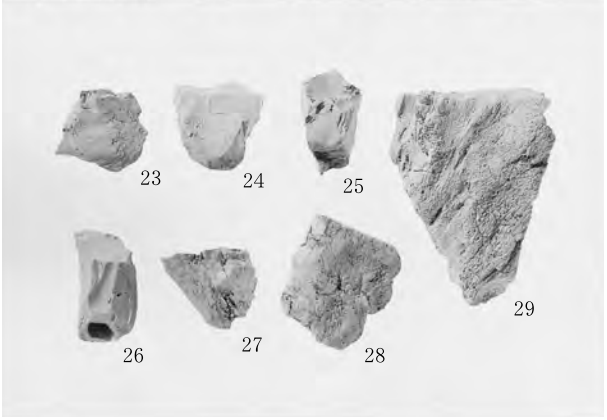
縄文土器②

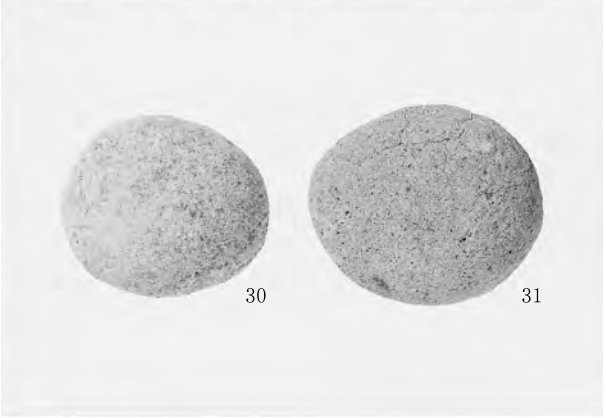
図版84

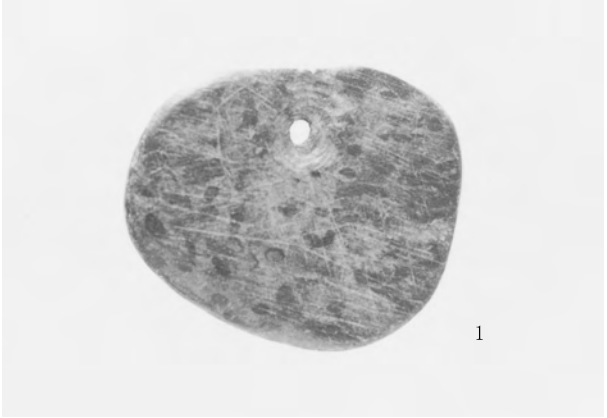


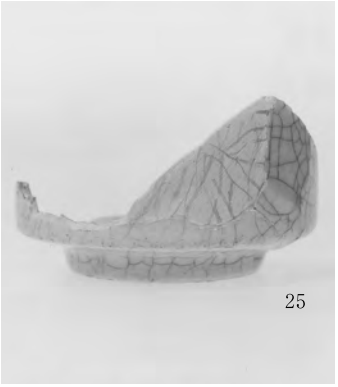


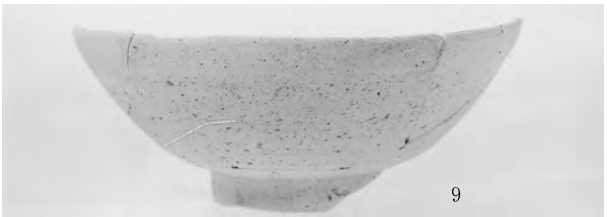












石器・陶磁器・土師器

報　告　書　抄　録

ふりがな	いらはら　に
書名	伊良原　Ⅱ
副書名	伊良原ダム関係埋蔵文化財調査報告−2−
巻次	
シリーズ名	福岡県文化財調査報告書
シリーズ番号	第229集
編著者名	吉田東明・下原幸裕
編集機関	福岡県教育委員会
所在地	〒812-8575 福岡市博多区東公園７番７号
発行年月日	2011年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
かみいらはらえのきいせき	ふくおかけんみやこぐんみやこまち さいがわかみいらはら			33° 33′ 47″	130° 57′ 12″	2007.04.11 〜 2007.10.31	14,076	県営 伊良原 ダム建設
上伊良原榎遺跡	福岡県京都郡みやこ町犀川 上伊良原118、125、128、175、185、186、187、188、190、191、192、195							
かみたかやだいのはるいせき	ふくおかけんみやこぐんみやこまち さいがわかみたかや・しもいらはら			33° 35′ 34″	130° 56′ 50″	2007.12.17 〜 2008.02.29	3,490	
上高屋台ノ原遺跡	福岡県京都郡みやこ町犀川 上高屋1−1・3・4、010−1、 下伊良原963			33° 35′ 35″	130° 56′ 44″	2008.06.12 〜 2008.07.30	190	
				33° 35′ 41″	130° 56′ 54″	2009.11.05 〜 2009.11.19	75	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
上伊良原榎遺跡	集落跡	縄文時代 中世	竪穴住居跡・ 土坑・包含層・ 掘立柱建物跡・ 墓・土坑・溝	縄文土器・石器 土師器・陶磁器・鉄小刀	縄文早期土器・ 竪穴住居跡・ 弓削刀子
上高屋台ノ原遺跡	集落跡・道	縄文時代 古代・中世 近世以降	包含層 土坑 石敷路	縄文土器・石器 須恵器・土師器 土師質土器・陶器 陶磁器	押型文土器・ 石製装身具 蔵持山参道跡ほか

要　約

上伊良原榎遺跡では、縄文時代早期の包含層を中心に押型文土器が多数の石器とともにまとまって出土し、とくに柏原式土器の出土は注目される。上層からは前期や後期の遺物も出土した。また、中世前半を中心とする時期の屋敷地と墓等も確認できた。

上高屋台ノ原遺跡では、第1次調査で縄文時代早期の包含層から押型文土器などが出土した。古代・中世の土坑も検出したが性格は捉え難い。また、第1次調査区の中央には修験の山、蔵持山へ向かう参道が遺存し、第2次調査では山頂側の続き、第3次調査では別の入山口と推定される石敷路を確認した。ただし、いずれも後世の補修・改変を受ける。

福岡県行政資料	
分類番号 ＪＨ	所属コード 2133051
登録年度 22	登録番号 1

伊良原□　下巻

福岡県文化財調査報告書　第229集

平成23年3月31日

発　行　福岡県教育委員会
福岡市博多区東公園７－７

印　刷　石橋印刷株式会社
福岡市博多区東比恵3－21－10